

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第104集

# 御殿川流域遺跡群Ⅳ

平成7・8年度一級河川御殿川小規模河川改修工事に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

つるはみひろ た なか てみだれ  
鶴喰広田・中手乱遺跡



1998

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

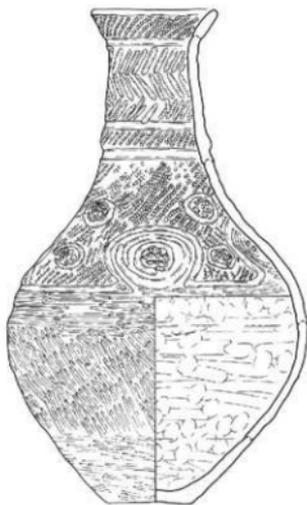
静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第104集

# 御殿川流域遺跡群Ⅳ

平成7・8年度一級河川御殿川小規模河川改修工事に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

つるはみひろ た なか てみだれ  
鶴喰広田・中手乱遺跡



1998

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

## 序

平成2年度に開始された当研究所による御殿川流域遺跡群の発掘調査は、平成9年度で一連区間の調査が一部を残しほぼ終了した。今回は、平成7・8年度に行われた発掘調査の成果について報告するものである。

調査の結果、御殿川右岸の鶴喰広田遺跡からは、弥生時代中期から近世の河川跡が、左岸の中手乱遺跡からは、河川跡から縄文時代晩期から古墳時代後期にわたる時期の遺物が検出され、当地域の歴史を語る上で非常に貴重な成果が得られており注目される。鶴喰広田遺跡から出土した古墳時代前期の銅鏝は、当時の政権が、各地首長との政治的関係の表徴として創出、配布した儀器的な威信財のひとつと考えられることから、当地域に畿内と結びつきをもつ集団が存在していたことの証左となるものである。一方、中手乱遺跡から出土した縄文時代晩期～弥生中期の土器群は、当地域における土器資料の不足を補う貴重な資料となるものである。また、弥生中期前葉の壺形土器の中から出土したシカの角を加工した「鹿角製短剣」は、県内では初めて出土したもので、縄文時代に系譜が求められる短剣としては最も新しい一群と考えられるもので、土器の中に収められていたという事実はまた興味深い問題を提起している。

調査及び本書の作成に当たっては、静岡県沼津土木事務所・静岡県教育委員会・三島市教育委員会をはじめとした関係各位に深い理解と協力をいただいた。ここに関係各位に深謝の意を表すとともに、発掘調査及び資料整理に従事された多くの方々の苦勞に感謝する。

1998年3月

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所  
所 長 齋 藤 忠

## 例 言

1. 本書は、三島市鶴喰<sup>つるはか</sup>地先及び、中地<sup>なかつち</sup>先に所在する御殿川流域遺跡群の発掘調査報告書である。平成2年度の調査から御殿川流域における発掘調査遺跡箇所は広範囲になるので、従前からこれらを総称して、御殿川流域遺跡群として扱ってきた。今回も御殿川流域遺跡群のうちの一つとして扱うこととした。
2. 調査は、平成7・8年度一級河川御殿川小規模河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として、静岡県沼津土木事務所<sup>土木事務所</sup>の委託を受け、静岡県教育委員会文化課の指導のもとに、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。
3. 資料整理及び報告書作成作業は、平成9年4月1日から開始し、平成10年3月31日まで実施した。
4. 調査の体制は次の通りである。  
平成7年度（現地発掘調査）  
所長 齋藤 忠、副所長 池谷和三、常務理事 三田村昌昭、調査研究部長 小崎章男、調査研究次長 栗野克巳、調査研究四課長 橋本敬之、主任調査研究員 杉浦幸男 後藤正人  
  
平成8年度（現地発掘調査）  
所長 齋藤 忠、副所長 池谷和三、常務理事 三田村昌昭、調査研究部長 石垣英夫、調査研究次長 栗野克巳、調査研究二課長 佐野五十二、調査研究員 後藤正人 岩本 貴  
  
平成9年度（整理作業・報告書作成）  
所長 齋藤 忠、副所長 池谷和三、常務理事 三田村昌昭、調査研究部長 石垣英夫、調査研究次長 栗野克巳、調査研究二課長 佐野五十二、調査研究員 岩本 貴
5. 本書の執筆は、岩本 貴が当たった。
6. 本書の、遺構写真撮影は、杉浦幸男、後藤正人、岩本 貴が、遺物写真撮影は、岩本 貴が行った。
7. 発掘調査資料は、すべて財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が保管している。
8. 本書の編集は、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所があたった。
9. 陶磁器・漆器の図化作業は、株式会社シン技術コンサルに委託した。  
動物遺体の同定は、早稲田大学教育学部講師金子浩呂氏に依頼し、その結果を第9表として作成し

ていただいた。

10. 発掘調査及び報告書の作成に当たっては、次の方々から御教示や御協力を賜った。  
(五十音順・敬称略)  
市原壽文、長田 実、田辺昭三、春成秀爾

## 凡 例

本書の記述・表示については、以下の基準を設け、統一を図った。

1. 調査区は、国土方眼にあわせて遺跡群全体にわたる10×10mグリッドを設けた。グリッドは、多年度にわたる調査事情を考慮し、平成6年度調査時のグリッドを生かして、北西優位で、調査区の西からA・B・C・・・、北から1・2・3・・・というようにアルファベットと数字を組み合わせて表記した。基点となるA-1グリッドはX=-99,650.00、Y=+39,280.00である。
2. 出土遺物は、10m方眼のグリッド毎に通し番号を付して取り上げた。
4. 本文中での挿図については、次の例のように扱った。  
・本文中の「21-13」は、挿図版第21図13番の資料を示す。
5. 図面の縮尺はそれぞれの図に明記した。なお、写真図版の縮尺率はすべて任意である。
6. 遺物実測図に使用したスクリーントーンの指示



土器：赤彩、石器：使用痕



スス・炭化物



欠損破断面

# 目 次

序  
例言  
凡例

第I章	発掘調査の経緯	1
第II章	遺跡の環境	1
第1節	地理的環境	1
第2節	歴史的環境	1
第III章	調査方法と経過	4
第1節	調査の方法	4
第2節	調査の経過	4
第IV章	調査の成果	9
第1節	遺構	9
1	鶴喰広田遺跡	9
2	中手乱遺跡	18
第2節	出土遺物	23
1	鶴喰広田遺跡	23
2	中手乱遺跡	48
第V章	まとめ	111
第1節	流路の変遷について	111
第2節	縄文晩期から弥生中期の土器について	113
第3節	片口について	115
第4節	石器について	124
第5節	鹿角製短剣について	125

## 挿 図 目 次

第1図	遺跡の位置	3
第2図	鶴喰広田・中手乱遺跡土層柱状図	5
第3図	調査区位置図	7
第4図	グリッド配置図	8
第5図	鶴喰広田1・2区平・断面図	10
第6図	鶴喰広田1・2区遺物散布図（弥生時代）	11
第7図	鶴喰広田1・2区遺物散布図（古墳時代）	12
第8図	鶴喰広田1・2区遺物散布図（近世）	13

第9图	鶴喰広田1区杭列平・断面図	14
第10图	鶴喰広田2区杭列平・断面図	15
第11图	鶴喰広田3区平・断面図	16
第12图	鶴喰広田3区遺物散布図(近世)	17
第13图	鶴喰広田3区竈出土状況図	17
第14图	中手乱1~3区平・断面図	18
第15图	中手乱1~3区遺物散布図(弥生時代)	20
第16图	中手乱1~3区遺物散布図(古墳時代)	21
第17图	中手乱1~3区遺物散布図(近世)	22
第18图	中手乱1~3区遺物散布図(石器・木製品)	22
第19图	鶴喰広田1・2区出土土器実測図	24
第20图	鶴喰広田1・2区出土土器実測図	25
第21图	鶴喰広田1・2区出土土器実測図	27
第22图	鶴喰広田1・2区出土土器実測図	28
第23图	鶴喰広田1・2区出土土器実測図	29
第24图	鶴喰広田出土陶磁器実測図	32
第25图	鶴喰広田出土陶磁器実測図	33
第26图	鶴喰広田出土陶製品実測図	34
第27图	鶴喰広田出土漆器実測図	35
第28图	鶴喰広田出土漆器実測図	36
第29图	鶴喰広田出土漆器実測図	37
第30图	鶴喰広田出土木製品実測図	38
第31图	鶴喰広田出土木製品実測図	39
第32图	鶴喰広田出土木製品実測図	40
第33图	鶴喰広田出土木製品実測図	41
第34图	鶴喰広田出土木製品実測図	42
第35图	鶴喰広田出土木製品実測図	43
第36图	鶴喰広田出土石器実測図	44
第37图	鶴喰広田出土金属器実測図	45
第38图	鶴喰広田出土金属器実測図	46
第39图	鶴喰広田出土金属器実測図	47
第40图	中手乱出土土器実測図	49
第41图	中手乱出土土器実測図	50
第42图	中手乱出土土器実測図	52
第43图	中手乱出土土器実測図	53
第44图	中手乱出土土器実測図	54
第45图	中手乱出土土器実測図	56
第46图	中手乱出土土器実測図	57
第47图	中手乱出土土器実測図	58
第48图	中手乱出土土器実測図	60
第49图	中手乱出土土器実測図	61

第50図	中手乱出土土器実測図	62
第51図	中手乱出土土器実測図	64
第52図	中手乱出土土器実測図	65
第53図	中手乱出土土器実測図	67
第54図	中手乱出土土器実測図	68
第55図	中手乱出土土器実測図	70
第56図	中手乱出土土器実測図	71
第57図	中手乱出土土器実測図	72
第58図	中手乱出土土器実測図	73
第59図	中手乱出土土器実測図	74
第60図	中手乱出土土器実測図	76
第61図	中手乱出土土器実測図	77
第62図	中手乱出土土器実測図	78
第63図	中手乱出土土器実測図	79
第64図	中手乱出土土製品等実測図	80
第65図	中手乱出土木製品実測図	87
第66図	中手乱出土木製品実測図	88
第67図	中手乱出土木製品実測図	89
第68図	中手乱出土木製品実測図	90
第69図	中手乱出土木製品実測図	91
第70図	中手乱出土木製品実測図	92
第71図	中手乱出土木製品実測図	93
第72図	中手乱出土石器実測図	94
第73図	中手乱出土石器実測図	95
第74図	中手乱出土石器実測図	96
第75図	中手乱出土石器実測図	97
第76図	中手乱出土石器実測図	98
第77図	中手乱出土石器実測図	99
第78図	中手乱出土石器実測図	100
第79図	中手乱出土石製模造品・金属器実測図	100
第80図	中手乱出土鹿角製品実測図	101
第81図	動物遺体実測図	103
第82図	動物遺体実測図	104
第83図	動物遺体実測図	105
第84図	動物遺体実測図	106
第85図	御殿川流域遺跡群包含層出土及び表採土器実測図（平成2～7年度）	107
第86図	御殿川流域遺跡群包含層出土及び表採土器実測図（平成2～7年度）	108
第87図	御殿川流域遺跡群表採石器実測図（平成2～7年度）	109
第88図	御殿川流域遺跡群周辺における流路の変遷	111
第89図	中手乱遺跡出土土器と類似例	114
第90図	片口の部分名称	115

第91図	片口の形態分類図	116
第92図	片口実測図集成	117
第93図	片口実測図集成	118
第94図	片口実測図集成	119
第95図	片口実測図集成	120
第96図	片口の分布	121
第97図	片口の法量比較	122
第98図	鹿角製短剣の取納状況(模式図)	125
第99図	鹿角製短剣実測図及び鹿角の利用部位(模式図)	125
第100図	鹿角製短剣の類別	126

## 挿表目次

第1表	周辺遺跡一覧	2
第2表	調査の概要	4
第3表	鶴喰広田出土土器一覧表	30
第4表	鶴喰広田出土陶磁器一覧表	31
第5表	鶴喰広田出土漆器一覧表	32
第6表	鶴喰広田出土木製品一覧表	37
第7表	中手乱出土土器他一覧表	81
第8表	中手乱出土木製品一覧表	86
第9表	御殿川流域遺跡群出土動物遺体一覧表	102
第10表	木製片口集成表	115
第11表	片口の法量比較(1)	122
第12表	石器の出土比率	124
第13表	石獣の法量比較	124

## 図版目次

図版1	鶴喰広田1・2区河川跡全景
図版2	鶴喰広田木製品出土状況
図版3	鶴喰広田弥生土器・銅鐵等出土状況
図版4	鶴喰広田3区杭列・木製品等出土状況
図版5	鶴喰広田3区木製品・和鏡出土状況
図版6	中手乱遺跡河川跡全景
図版7	中手乱土器出土状況
図版8	中手乱土器等出土状況
図版9	中手乱土器等出土状況
図版10	中手乱木製品出土状況
図版11	鶴喰広田遺跡出土土器
図版12	鶴喰広田遺跡出土土器
図版13	鶴喰広田遺跡出土土器

- 圖版14 鶴喰広田遺跡出土土器  
圖版15 鶴喰広田遺跡出土土器  
圖版16 鶴喰広田遺跡出土土器・土製品・木製品  
圖版17 鶴喰広田遺跡出土陶磁器  
圖版18 鶴喰広田遺跡出土陶磁器  
圖版19 鶴喰広田遺跡出土陶磁器  
圖版20 鶴喰広田遺跡出土陶磁器  
圖版21 鶴喰広田遺跡出土陶磁器・漆器  
圖版22 鶴喰広田遺跡出土漆器  
圖版23 鶴喰広田遺跡出土漆器  
圖版24 鶴喰広田遺跡出土木製品  
圖版25 鶴喰広田遺跡出土木製品  
圖版26 鶴喰広田遺跡出土木製品  
圖版27 鶴喰広田遺跡出土木製品  
圖版28 鶴喰広田遺跡出土木製品  
圖版29 鶴喰広田遺跡出土石製品  
圖版30 鶴喰広田遺跡出土金屬器  
圖版31 鶴喰広田遺跡出土金屬器  
圖版32 中手乱遺跡出土土器  
圖版33 中手乱遺跡出土土器  
圖版34 中手乱遺跡出土土器  
圖版35 中手乱遺跡出土土器  
圖版36 中手乱遺跡出土土器  
圖版37 中手乱遺跡出土土器  
圖版38 中手乱遺跡出土土器  
圖版39 中手乱遺跡出土土器  
圖版40 中手乱遺跡出土土器  
圖版41 中手乱遺跡出土土器  
圖版42 中手乱遺跡出土土器  
圖版43 中手乱遺跡出土土器  
圖版44 中手乱遺跡出土土器  
圖版45 中手乱遺跡出土土器  
圖版46 中手乱遺跡出土土器  
圖版47 中手乱遺跡出土土器  
圖版48 中手乱遺跡出土土器  
圖版49 中手乱遺跡出土土器  
圖版50 中手乱遺跡出土土器  
圖版51 中手乱遺跡出土土器  
圖版52 中手乱遺跡出土土器  
圖版53 中手乱遺跡出土土製品・木製品  
圖版54 中手乱遺跡出土木製品

- 図版55 中手乱遺跡出土木製品  
図版56 中手乱遺跡出土木製品  
図版57 中手乱遺跡出土木製品・石器  
図版58 中手乱遺跡出土木製品  
図版59 中手乱遺跡出土石器  
図版60 中手乱遺跡出土石器  
図版61 中手乱遺跡出土石器  
図版62 中手乱遺跡出土石器・金属器・骨角器  
図版63 御殿川流域遺跡群包含層・表採出土器  
図版64 御殿川流域遺跡群出土動物遺体  
図版65 御殿川流域遺跡群出土動物遺体  
図版66 御殿川流域遺跡群出土動物遺体

## 第Ⅰ章 発掘調査の経緯

三島市街地に位置する菰池を源とする御殿川は、近年の開発、市街化に伴う急激な出水に対し、河川の排水能力が限界に達し、流域一帯に浸水被害をもたらすことがたびたびあった。その要因は、上記の理由以外に御殿川が屈曲の著しい流程であることに加え、狩野川・大場川の背水影響を直に受けることが考えられていた。このため、御殿川の流域面積確保と排水能力の向上を主な目的として河川改修工事が漸次実施されている。

静岡県沼津土木事務所は、今回の改修工事対象地となった三島市鶴喰地先及び中地先について、埋蔵文化財所在の照会文書を三島市教育委員会経由で静岡県教育委員会文化課に提出した。これを受けた県教育委員会文化課は、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所に調査を依頼することとした。そこで、静岡県沼津土木事務所、静岡県教育委員会文化課、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所の三者は、遺跡の取り扱いに関する協議を行い、今回の河川改修対象地が遺跡地図との照合によって鶴喰広田遺跡及び中手乱遺跡に一部該当する可能性の高いことを確認し、対象地において発掘調査を実施することに合意した。

調査は、事前に行われた確認調査の成果をもとに、平成7年10月～平成8年3月と平成8年4月～6月に鶴喰広田遺跡を、雨季の増水期をさけて平成8年10月～平成9年3月に中手乱遺跡の調査を実施した。

## 第Ⅱ章 遺跡の環境

### 第1節 地理的環境

御殿川流域遺跡群は、三島市街地から南東に約3kmの御殿川流域に位置する。御殿川は、三島市街地中央に位置する菰池・白滝公園の湧水を源とする流程約6kmの河川であり、下流で大場川に合流する。当遺跡群の立地する出方平野北部は、通称三島扇状地（三島・沼津平野）とも呼ばれる河成堆積物によって形成されている。その形成は、約18000年前の「狩野の谷」と呼ばれる古狩野川と旧黄瀬川の開析によって始まる。「狩野の谷」はその後約14000年前の新期富士火山の活動開始に伴い、玄武岩質の溶岩によって次第に埋められて行った。また約8000年前から進んだ縄文海進によって一部埋められることなく残った谷は内湾化し、「旧期古狩野湾」と呼ばれる内湾部を形成する。そして海退期には富士火山の降下堆積物、狩野川、黄瀬川の河成堆積物によって次第に陸化され、約2800年前に黄瀬川扇状地泥流堆積物が谷を覆うことによって今日の三島扇状地が形成されている。当遺跡群は、この扇状地を流れる御殿川流域の後背湿地及び微高地上に立地する。

### 第2節 歴史的環境

御殿川流域には西大久保・奈良橋向遺跡（9）、青木遺跡（10）、金沢遺跡（14）、鶴喰遺跡（15）、御殿川流域遺跡群（1）、中島上舞台（16）・下舞台遺跡（17）などの遺跡が点在している。主な遺構としては、微高地上には住居跡や方形周溝墓、低湿地では水田跡や旧河道などが検出されており、遺跡ごとに特徴的な景観を示している。本節では当遺跡群周辺の歴史的環境について御殿川流域の遺跡を事例にあげて概観する。

西大久保・奈良橋向遺跡では弥生時代後期～古墳時代前期初頭と古墳時代中期の住居跡及び水田跡

が検出された。御殿川下流域に位置する中島上舞台・下舞台遺跡と同時期に営まれた住居跡も存在することから、これに対応する御殿川上流域の集落として特筆されよう。また、生活域と生産域の関連が明らかになったことも注目される。

青木遺跡では弥生時代後期から古墳時代前期初頭の方形周溝墓、土器棺等が検出され、墓域としての評価がなされている。古墳前期初頭に比定されるタタキ調整を施す甕の出土は、葦山町山木遺跡出土のタタキ甕と同様に伊豆地方の土器様相を考えると注目される。

金沢遺跡では古墳～平安時代の住居跡が多数検出され、該期に主要な集落域を形成していたことが想定される。古墳時代後期の住居跡から一括出土した土器群は、駿河東部、伊豆の土器編年の基準資料とされている。

鶴喰遺跡では弥生時代中期後葉の方形周溝墓、古墳時代後期の住居跡などが検出されている。方形周溝墓からは、良好な器種組成を示す土器とともに石包丁が出土しており注目される。

御殿川流域遺跡群では弥生～近世の旧河道が検出され、これに伴う護岸杭列も出土している。調査対象が透水層にも及んでいるため、土器だけでなく木製品も良好な状態で出土している。当遺跡群で検出された旧河道は、土層の堆積状況や出土遺物等からその変遷を追うことが可能であり、周辺の微高地上に立地する金沢遺跡、鶴喰遺跡、中島上・下舞台遺跡などと合わせて各時代の景観に迫ることが可能になりつつある。遺跡周辺では風字硯が出土したと伝えられており注目される。

中島上舞台・下舞台遺跡では、弥生中期の方形周溝墓や弥生後期～平安時代の住居跡などが出土している。各時代の遺構・遺物は、伊豆地方の一級基礎資料として事例研究には欠くことのできないものである。

御殿川流域からは外れるが、大場川左岸の向山丘陵の位置する道下遺跡（13）では、奈良時代と考えられる瓦窯跡が検出されている。石組みによる窯構造や特異な手法をもつ平瓦は、県内はもとより全国的にも珍しく、その製作集団や瓦の供給先が注目される。

番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	御殿川流域遺跡群	6	市ヶ原廃寺	11	宅町田遺跡	16	中島上舞台遺跡	21	反畑遺跡
2	天神原廃寺	7	上才塚遺跡	12	御殿川遺跡	17	中島下舞台遺跡		
3	塔の森廃寺	8	六ノ栗廃寺	13	道下遺跡	18	法師園遺跡		
4	三島大社境内遺跡	9	奈良橋向遺跡	14	金沢遺跡	19	蘭田院遺跡		
5	伊豆国分寺跡	10	青木遺跡	15	鶴喰遺跡	20	如米遺跡		

第1表 周辺遺跡一覧

#### 参考・引用文献

- 三島市教育委員会 1983 「中島下舞台遺跡」  
 三島市教育委員会 1984 「鶴喰遺跡」  
 三島市教育委員会 1993 「金沢遺跡」  
 三島市教育委員会 1996 「西大久保・奈良橋向遺跡」  
 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1993 「御殿川流域遺跡群Ⅰ」  
 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1994 「御殿川流域遺跡群Ⅱ」  
 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1995 「御殿川流域遺跡群Ⅲ」  
 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1996 「道下遺跡」



第1図 遺跡の位置 (縮尺=1/25,000)

## 第三章 調査の方法と経過

### 第1節 調査の方法

#### 基本土層について

今回の調査では、調査区の上層堆積及び、遺物の包含状況を把握することを目的として、事前に調査区を網羅する形で2m四方の試掘坑（以下、T Pとする）を掘削した。その結果、基本土層を以下のように理解し調査を進めた。なお、この基本土層の認識は、従前の理解（研究所：1993）ともほぼ一致するものであった。

**第Ⅰ層**・・・表土層及び盛土層である。鶴喰広田4区のT P 13では一部に近現代の河川改修に伴うと考えられる砂礫を主体とする盛土を1m以上盛り上げた二次堆積が確認され、弥生土器、土師器等の遺物の混入が認められた。遺物はいずれも磨滅が著しい細片であったことから同化は困難なものであった。

**第Ⅱ層**・・・黒色砂層である。鶴喰広田・中手乱遺跡で認められる中近世の遺物を包含する旧河川の堆積土層である。Ⅱ層は、中手乱遺跡では2区のT P 7～T P 9・部と3区北端の一部に堆積するのみであった。この状況から中近世の河川の範囲をほぼ特定することができた。

**第Ⅲ層**・・・黒色砂礫層で、Ⅱ層と同様、旧河川の堆積層である。鶴喰広田遺跡1・2区及び中手乱遺跡では主要な土層である。鶴喰広田遺跡3区では認められない。主に弥生時代中期から古墳時代後期の遺物が出土している。

**第Ⅳ層**・・・黒灰色硬質砂層である。地元では「マサ」と称され、地質学的には黄瀬川扇状地泥流堆積物と呼ばれているものに相当する。無遺物層である。

### 第2節 調査の経過

今回の調査は、御殿川右岸の鶴喰広田遺跡と左岸の中手乱遺跡に大きく分けられる。鶴喰広田遺跡は、平成7年10月から平成8年3月に上流側の1・2区、平成8年4月から同年6月にわたって下流側の3区の調査を、そして、中手乱遺跡は、雨季を避けて同年10月から平成9年3月まで調査を実施した（第2表）。いずれの調査区も河川に接していることから、湧水が激しかったため、調査区周囲には排水溝及び、集水井を設定し、水中ポンプによって排水処理を行いながら調査を進めた。

調査遺跡	現地調査期間	調査面積（表面積）	備考
中島西原田遺跡	平成2年9月～平成3年3月	4069㎡	御殿川流域遺跡群Ⅰ・Ⅱ
八反畑前田遺跡	平成3年4月～平成4年3月	13421㎡	
梅名大曲田遺跡	平成4年4月～平成5年3月	800㎡	
鶴喰前田遺跡	平成6年10月～平成7年3月	1055㎡	御殿川流域遺跡群Ⅲ
鶴喰広田遺跡1・2区	平成7年10月～平成8年3月	1292㎡	本報告
＃ 3区	平成8年4月～平成8年6月	866㎡	本報告
中手乱遺跡	平成8年10月～平成9年3月	1984㎡	本報告

第2表 調査の概要



## 鶴喰広田遺跡

### 1・2区

1・2区は、範囲確認調査を行った結果、全ての試掘坑から遺物の出土が認められた。上流部のT P 1～T P 5に該当する部分を、調査区中央のくびれ部分を境として南半を1区、北半を2区とした。地鎮祭を執り行った後、重機によって表土除去を行い、測量杭を設定した。調査の結果、調査区西端で微高地状の高まりが確認され、これを攻撃点とする北東側から南東に流れを変える流路を検出した。流路覆土からは、弥生時代から近世の遺物が出土している。調査は、平成8年3月中旬でほぼ終了し、同月下旬までに調査区の埋め戻し、養生を完了した。

### 3区

3区については、試掘坑を掘削した結果、T P 10では地表下40cm程で砂礫層（IV層）が検出されたため、旧河道に関連する範囲のみを調査対象とした（第2図）。重機によって表土除去を行った後、測量杭を設定した上で調査を開始した。調査の結果、西から東に流れる流路の一端（右岸）を一条検出した。流路覆土からは、近世の遺物が出土している。なお、調査が終了した時点で調査区周囲の壁面に存在した古井戸が突如噴出したため、止水工事を行った上で直ちに埋め戻し、養生を行った。

### 4区

4区は、調査区が狭長で、かつ近現代の河川改修に伴う盛土が1m以上堆積していたため、安全管理上、平面調査は困難と判断し、土層確認調査に切り替えることとした。盛土及びⅢ層からは弥生時代後期から古墳時代中期の土器片が出土している。出土遺物は、磨滅が著しく図化できるものは皆無であった。調査は、3区と並行して行い、調査終了後埋め戻し、養生を行った。

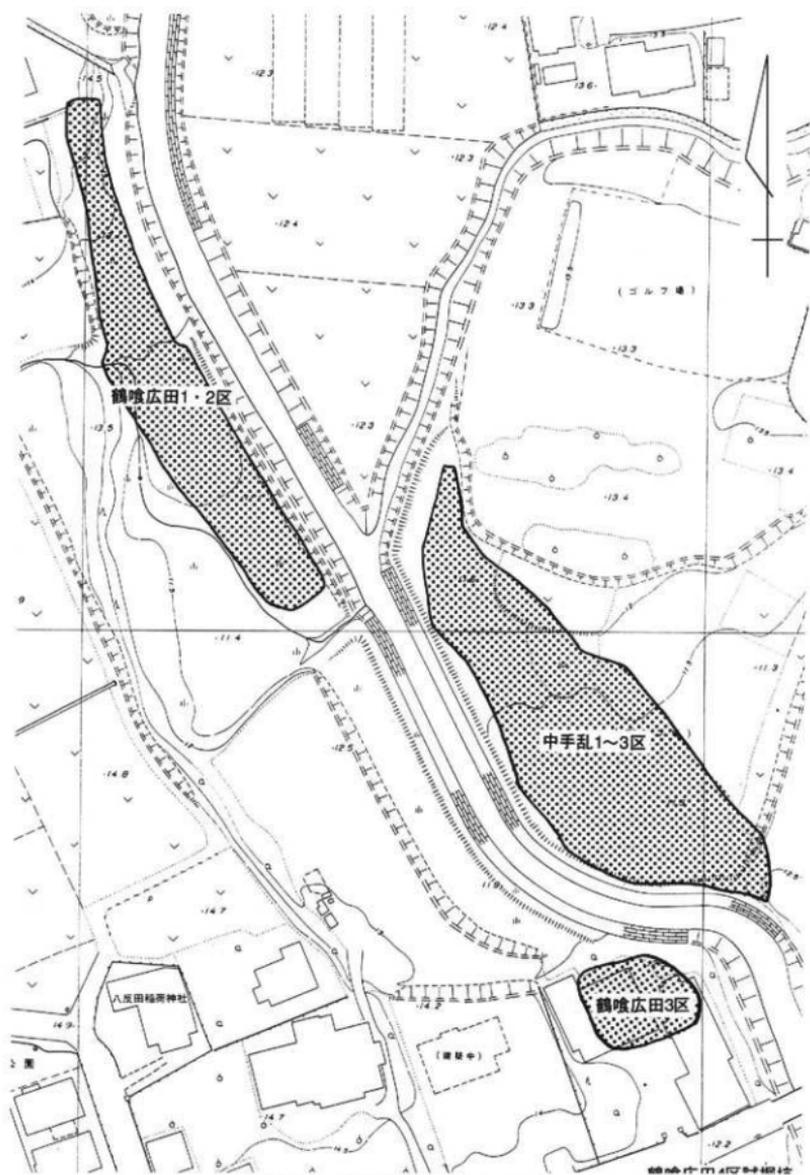
## 中手乱遺跡

中手乱遺跡においては、確認調査の結果、全ての試掘坑から遺物が出土した（T P 6～9）。調査区南側に道路が敷設されているが、河川敷の幅が狭く、重機等の搬入出や、調査に伴う排土処理が困難であったため、調査区北側に仮橋を設置し搬路とし、調査が終了している右岸側の鶴喰広田2区を排土置場とした。

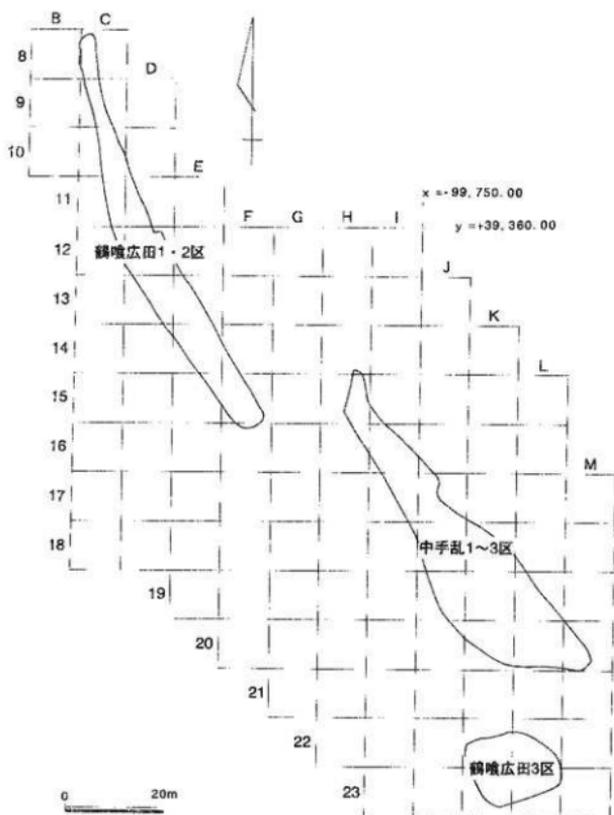
安全管理として、調査区の周囲には安全フェンスを巡らした上でバックホーによって表土除去を行い、測量杭を設定した。測量グリッドは平成6年度からの連続性も考慮に入れ、鶴喰前田、鶴喰広田1・2区と共通のものを使用した（第4図）。調査区は、排水溝を境として南から1～3区と呼ぶこととした。

調査の結果、1・2区を中心に弥生～古墳時代の流路を、2区の一部と3区において近世の流路を検出した。1・2区では覆土から完形に近い土器が多量に出土した。

調査は、平成9年3月中旬でほぼ終了し、同月下旬までに調査区の埋め戻し、養生を完了した。



第3図 調査区位置図 (縮尺=1/800)



第4図 グリッド配置図

参考・引用文献

- 三島市教育委員会 1983 「中島下舞台遺跡」
- 三島市教育委員会 1984 「鶴喰遺跡」
- 三島市教育委員会 1993 「金沢遺跡」
- 三島市教育委員会 1996 「西人久保・奈良橋向遺跡」
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1993 「御殿川流域遺跡群Ⅰ」
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1994 「御殿川流域遺跡群Ⅱ」
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1995 「御殿川流域遺跡群Ⅲ」
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1997 「道下遺跡」

# 第Ⅳ章 調査の成果

## 第1節 遺構

調査区は、現在の御殿川の兩岸にあることにも起因して、検出された遺構は、旧河道とこれに伴う杭列のみであった。しかしながら、覆土や包含遺物の種別によって旧河道が一定の幅の中を何度も流れを変えていたことも確認できた。

以下、調査区をおって流路の検出状況を示す。なお、今回は河川改修に伴う調査のため、調査区が現河川の兩岸に細長く設定されており、河川跡のごく一部だけを調査したという資料的制約から、流路の把握に際しては、一部に認められる流路の起伏と上層堆積、遺物の包含状況によって推定した。

### 1 鶴喰広田遺跡

#### 1・2区（第5図）

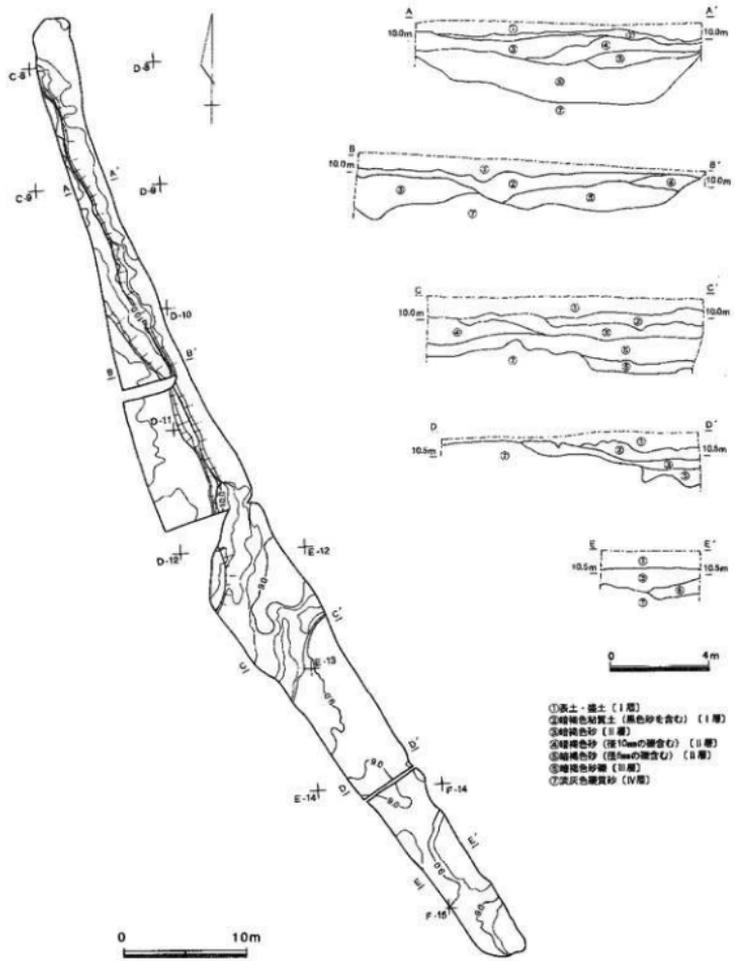
##### 旧河道

1・2区では、流路及び微高地が検出された。この流路ではⅡ層・Ⅲ層の堆積が顕著に確認され、覆土中より弥生～古墳時代、及び中・近世の遺物が出土した。遺物の主体は、弥生中期から古墳後期及び近世にあり、出土層位からもほぼ前者がⅢ層の堆積中、後者がⅡ層の堆積中の遺物であると推測できるが、Ⅱ層では前代の遺物が混在しており、層位的に分別することは容易でなかった。少なくとも二時期の流路の存在が推定されるが、近世（Ⅱ層）の流路を平面的に検出することは困難であった。

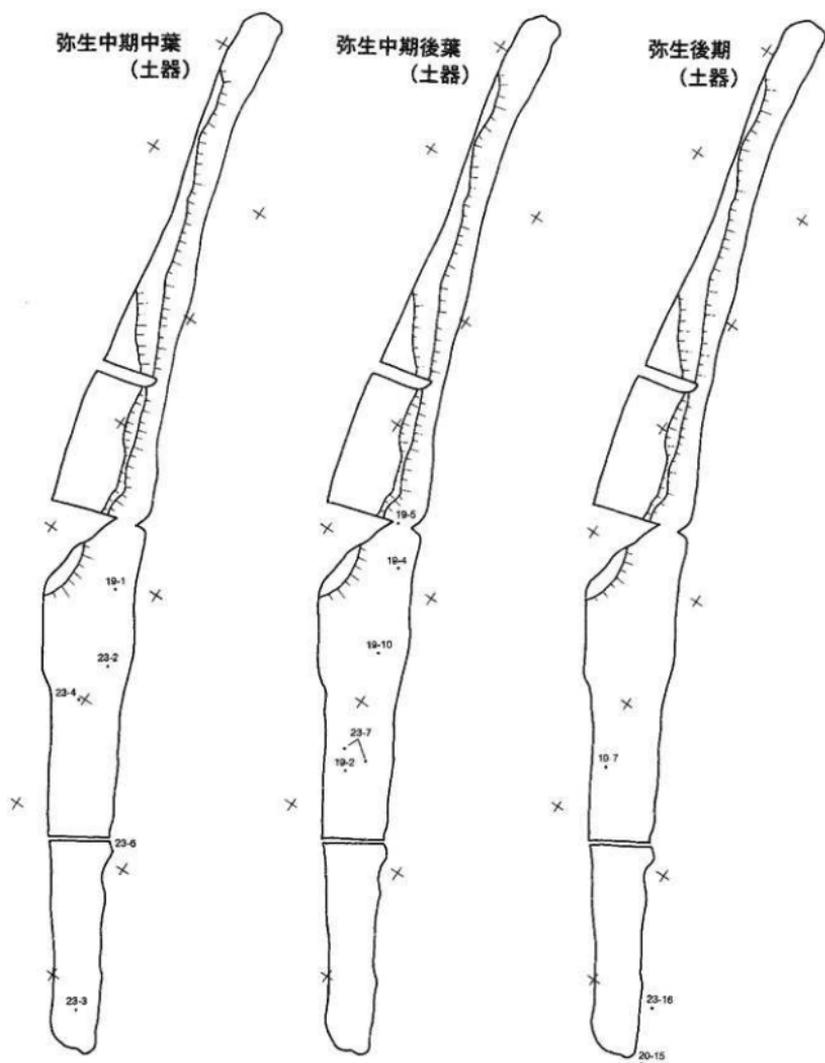
2区西平及び1区北端付近には微高地状の高まりが確認されたため、これを流路立ち上りの一部と考えた。従って遺物の大半は、河川堆積がより顕著な1区から出土している。この微高地状の起伏は、鶴喰遺跡（三島市：1984）に連続するものと考えられ、そこから出土している遺物とも時期的な連続はきたしていない。なお、1区出土の弥生中期の深鉢と下流の中手乱遺跡2区（後述）の深鉢が接合したことから、両者は一連の流路である可能性が高い。

##### 杭列

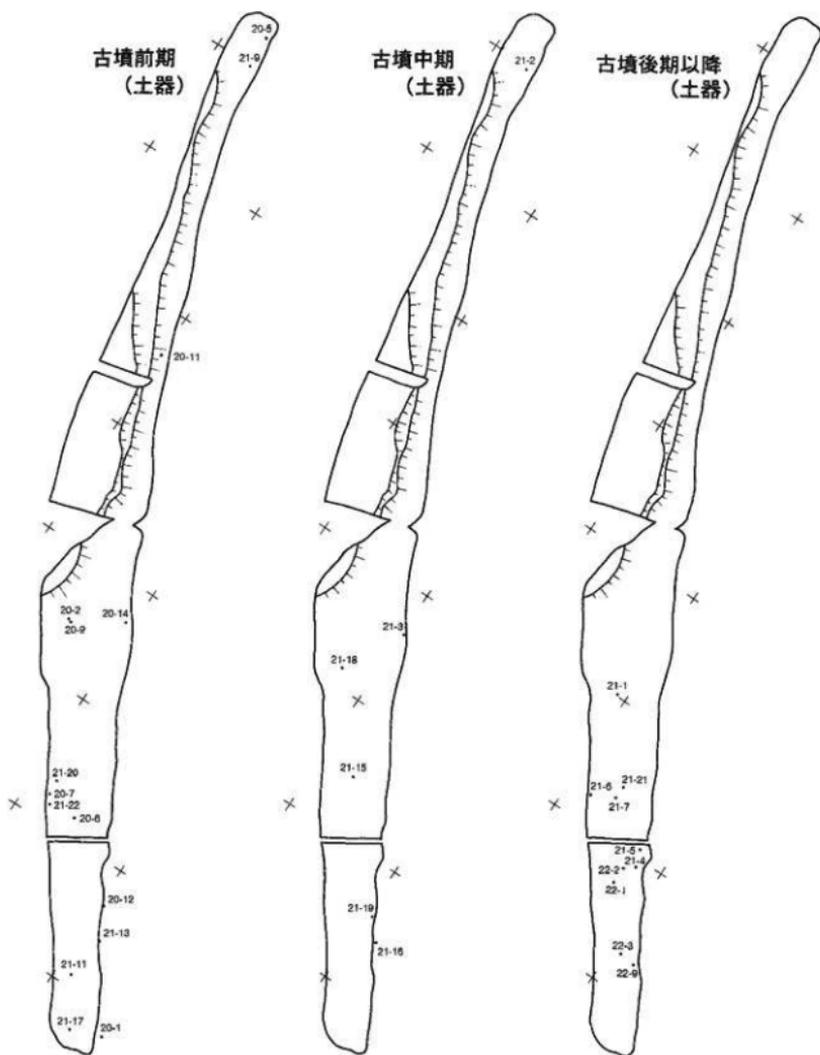
第9～11図には杭列の断面及び見通し図を示している。杭列は、後世の擾乱によって上端を欠損したものが多く、また、流路の堆積状況や遺物の散布状況からその時期を特定することも根拠に乏しいことから、杭先端の到達層位によって杭列の形成・使用された時期の上限を確定し、時期決定の一理解としたい。すなわち、杭の先端がⅣ層に到達しているものをⅢ層堆積中（弥生～古墳時代）の所産、杭の先端がⅢ層中にとどまるものをⅡ層堆積中（中近世以降）の所産と判断しておく。これによれば、杭列の形成が中世以前（弥生～古墳時代か）に遡る可能性がある杭列として杭列D・F・G～Kが、中近世以降に形成された杭列として杭列A・B・C・Eがあげられる。杭は、いずれも丸太材の先端部を工具によって尖らせたもので、転用材は認められなかった。なお、図示はしていないが、全形をとどめない木片の中に板状の一方を矢板状に加工したと考えられるものが認められたことを付言しておく。



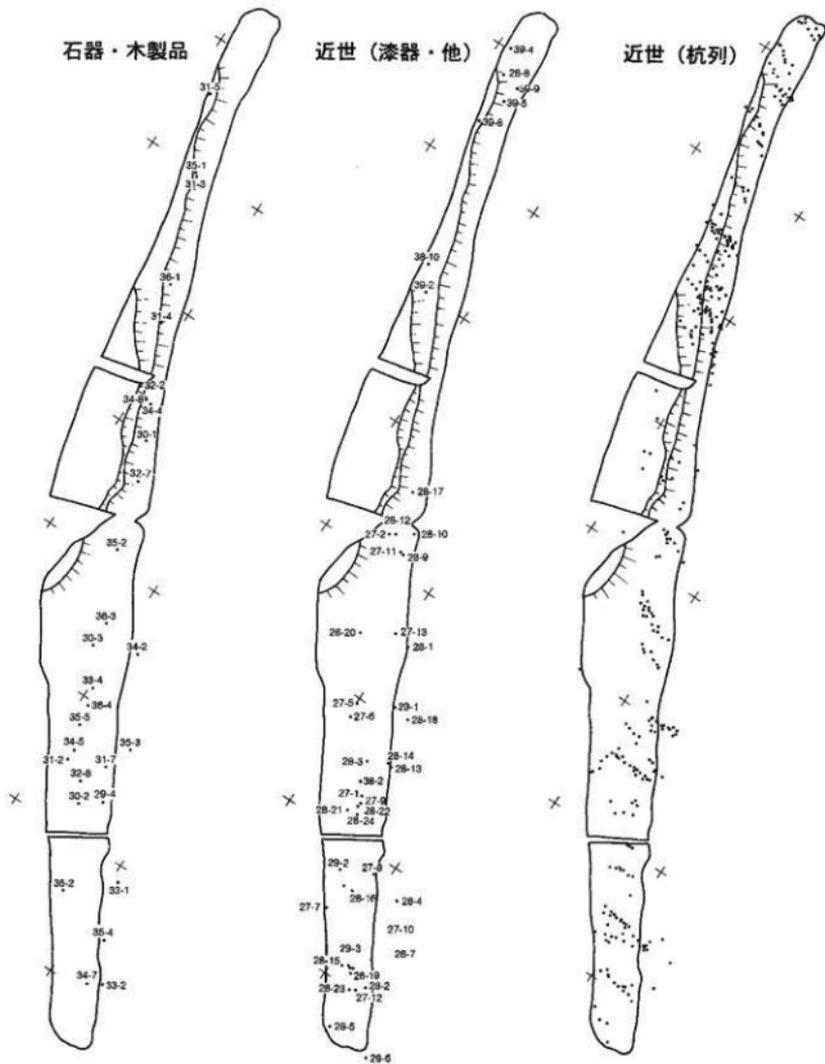
第5図 鶴喰広田1・2区平・断面図



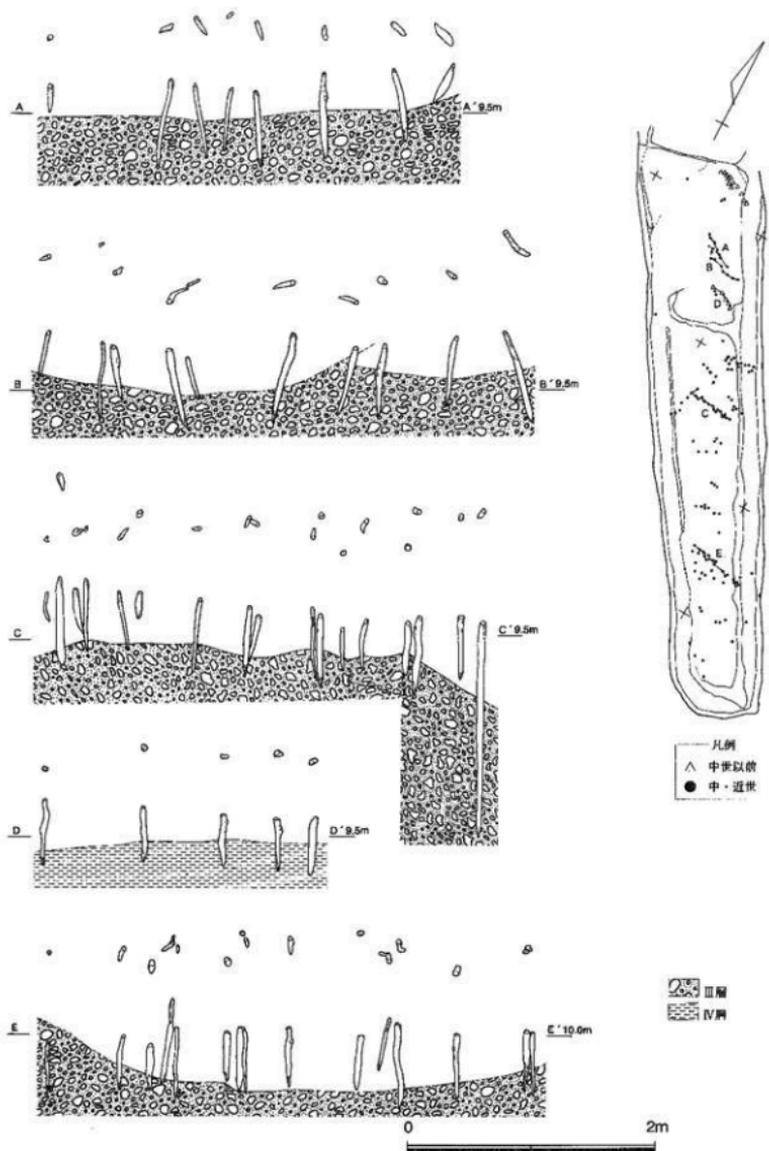
第6図 鶴喰広田1・2区遺物散布図 (弥生時代)



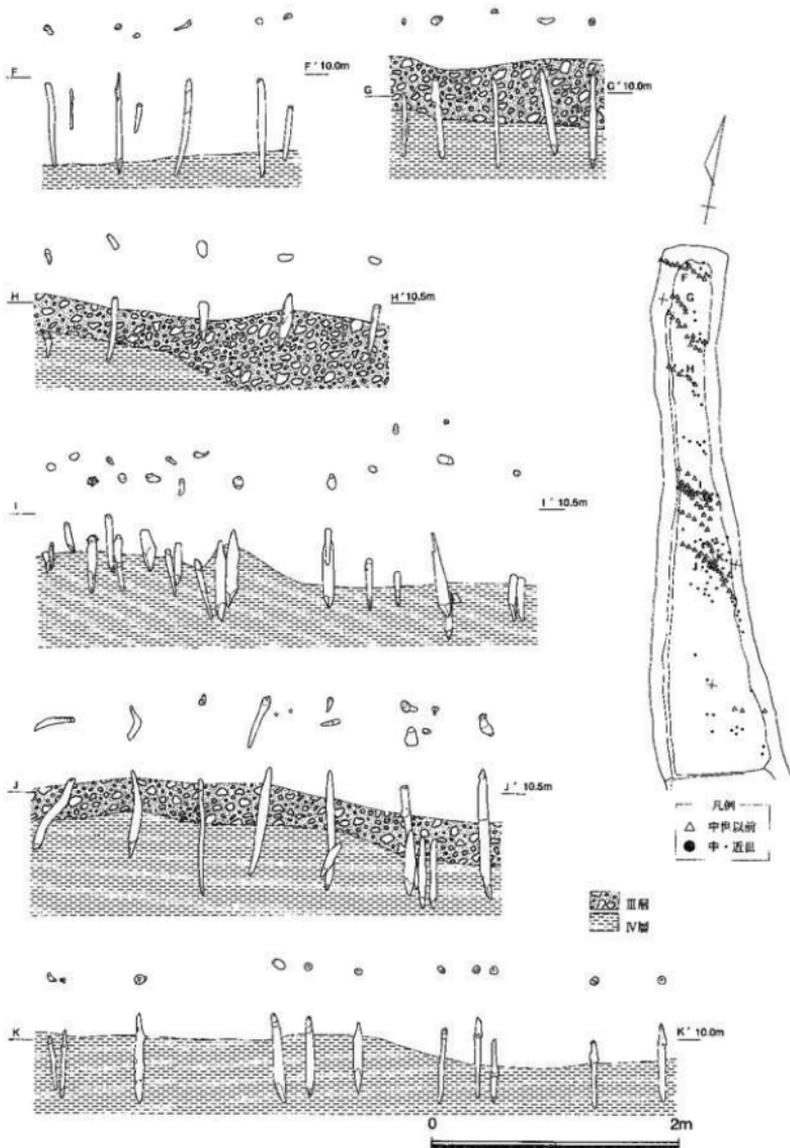
第7図 鶴喰広田1・2区遺物散布区 (古墳時代)



第8図 鶴喰広田1・2区遺物散布図 (近世)



第9図 鶴喰広田1区杭列平・断面図（見通し図一部合成）



第10図 鶴喰広田2区杭列平・断面図（見通し図一部合成）

## 鶴喰広田3区 (第11図)

### 旧河道

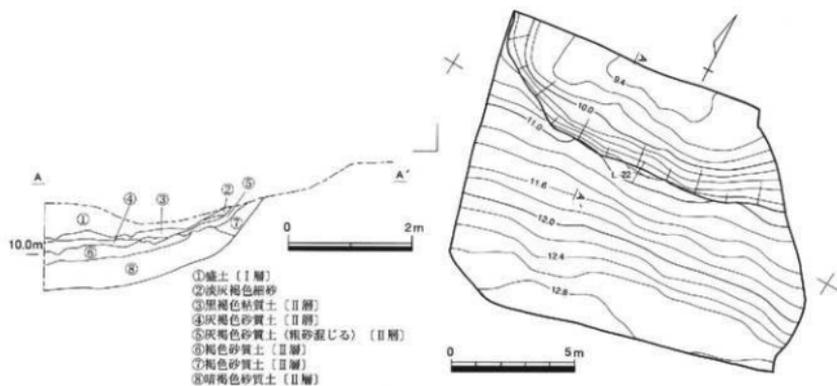
3区では西から東に流れる流路を検出した。流路南側は、基盤層(Ⅳ層)が急激に立ち上がる状態であることから流路はここで東に大きく蛇行すると考えられる。このことは流路がコ字に大きく蛇行する明治時代の地図の状況ともうまく符号する。

1・2区では、Ⅱ層・Ⅲ層の堆積が顕著で、弥生時代中期から古墳時代、及び近世の遺物が出土したが、3区では、Ⅱ層のみ確認され、近世を主体とした遺物が出土している。散布図(第12図)をみても明らかのように、遺物は、流路の攻撃点に集中する。

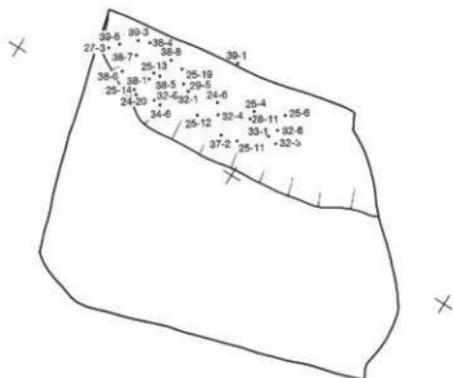
第13図は、3区から出土した竈である。出土時にはすでに黒色を呈していた。同遺物は、非常に脆弱であったため、ウレタン樹脂で周囲を補強した上で取り上げを行い、保存処理を継続中である。従って、本報告では出土状況図のみを图示している。



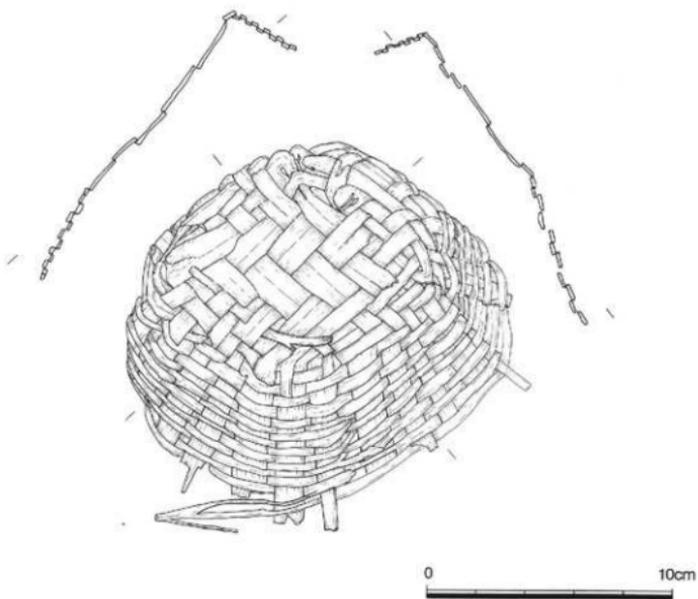
鶴喰広田3区調査風景



第11図 鶴喰広田3区平・断面図



第12図 鶴喰広田3区遺物散布図（近世）



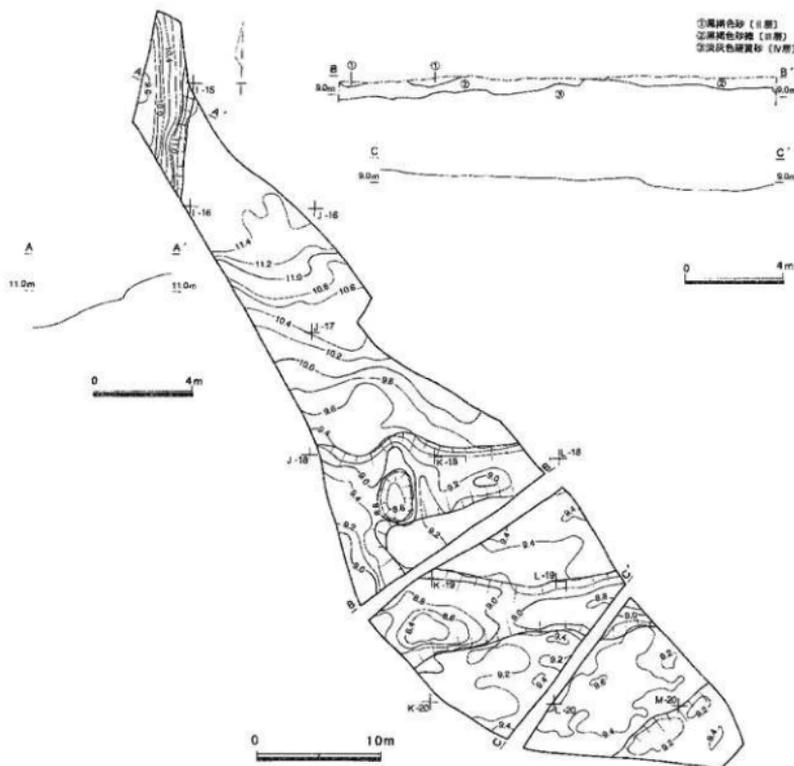
第13図 鶴喰広田3区籠出土状況図

## 2 中手乱遺跡

### 1～3区

本調査区では、3区に黄瀬川扇状地泥流堆積物（Ⅳ層）によって覆われた微高地が存在しており、その西から南西側を流路が流れている。3区の流路では、Ⅱ層の堆積が40～50cm程、Ⅲ層の堆積が北側で平均20cm、南側及び2区で約40cm程認められることから、Ⅲ層は、北側（上流）に向かうに従って薄い堆積となる。このことは、後述する等高線や1区の土層堆積状況によっても首肯される。1区では、2・3区で認められたⅡ層がごく一部に数cm認められるだけで、きわめて痕跡的となり、Ⅲ層が主要な土層となっている。

基盤層であるⅣ層を検出した時点で大きくは4条の流路を確認することができた。1区の南端に認められる流路を流路1、2区の中央に認められる流路を流路2、3区南端に認められる流路を流路3、3区北端に認められる流路を流路4とする。この流路は、出土遺物の散布からもわかるように、それぞれ独立した流路とは考えにくく、より大きな流路の起伏の一部を構成していたと考えられる。



第14図 中手乱1～3区平・断面図

## 旧河道

### 流路1

流路1は、周辺との比高差が20cm程度の僅かな凹地状となる。出土遺物から弥生時代後期から古墳時代後期の時期を中心とした流路と推測される。

### 流路2

流路2は、周辺との比高差が最大で約70cm認められ、明確に流路と判断することができた。出土遺物から弥生時代中期中葉から古墳時代後期にわたって流路を形成していたと推測される。

### 流路3

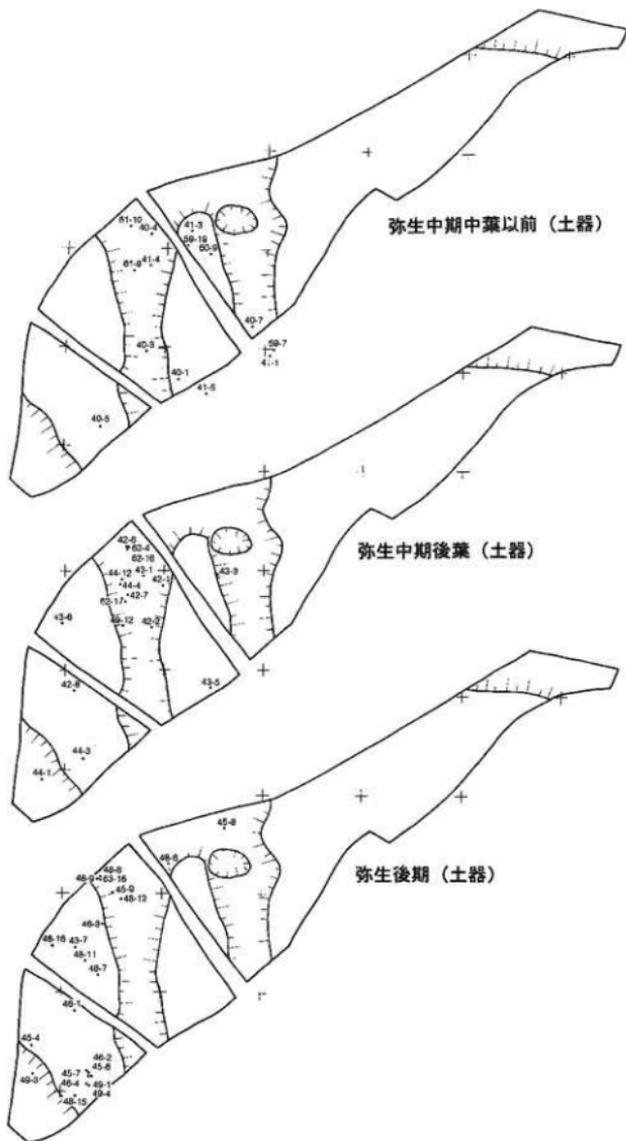
流路3は、流路2とほぼ並行するもので、周辺との比高差は約60cm認められる。出土遺物から弥生時代中期中葉から古墳時代後期にわたって流路を形成していたと推測される。

### 流路4

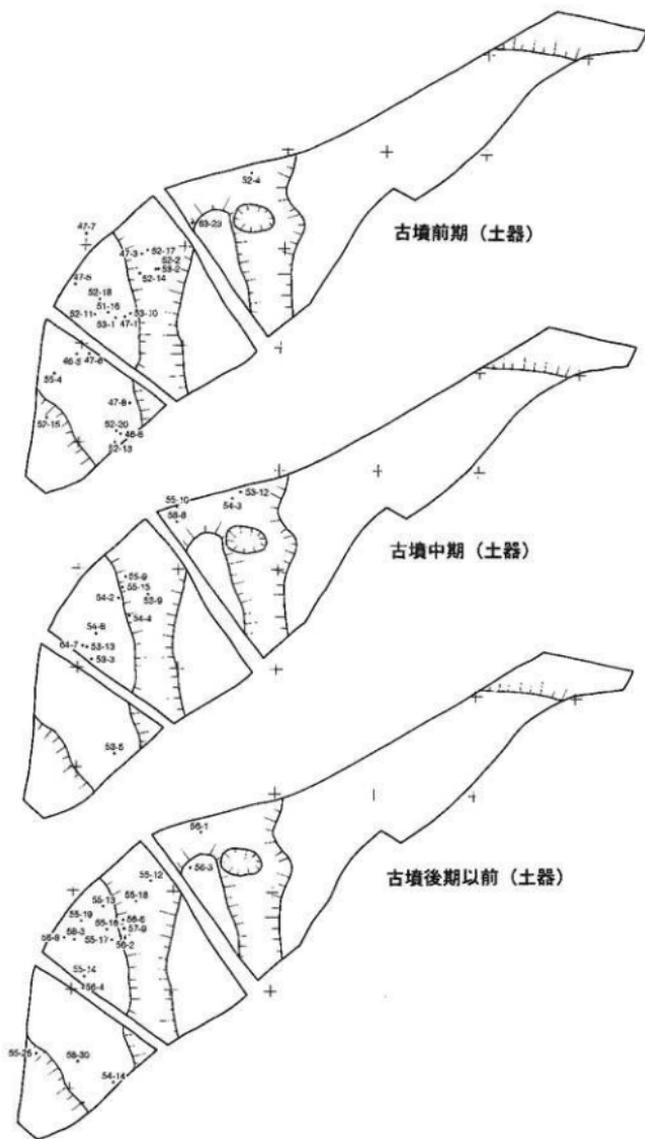
流路4は、3区の北端でそのわずか一部分だけが検出されたものである。等高線の取束状況からもわかるように、周辺地形から急激に落ち込んでいる状況が確認できた。流路の立ち上がり部分は、微高地を挟むような部分も認められたことから、流路が流れを変える攻撃点である可能性が高い。すなわち、北西方向から流れる流路4は、3区北端で流れを南方向に変えていることが推測される。出土遺物は、近世のもの以外は一切認められなかったことから、近世の流路と判断することができる。

## 杭列

杭は、後世の耕作等によって上半が欠損するものが大半で、残存長は、10～20cm程度のものであり、明確な遺構として把握することは困難であった。従って、杭の散布状況のみを図示することとした。杭の打ち込まれた先端は、1区のものを除くとその大半がⅢ層中であることから、杭の打ち込まれた時期は、Ⅲ層の堆積以降とすることができる。従って、杭の機能していた時期は、Ⅱ層の堆積以降（近世）であると推測できる。また、杭の分布が第Ⅲ章で確認したⅡ層の堆積範囲や漆碗等の近世の遺物とも重複する。



第15図 中手乱1~3区遺物散布図 (弥生時代)



第16図 中手乱1~3区遺物散布図 (古墳時代)



第17図 中手乱1~3区遺物散布図



第18図 中手乱1~3区遺物散布図 (石器・木製品)

## 第2節 出土遺物

### 1 鶴喰広田遺跡

河川跡から弥生時代中期中葉～近世の遺物が出上しているが、各時代の遺物の散布に差異は認めがたい。土器に関しては、煩雑を避けるため、出土位置よりも時代・時期を優先して報告することとし、主な遺物の出土位置は、散布図に、その他の遺物については挿表に記した。

#### 土器

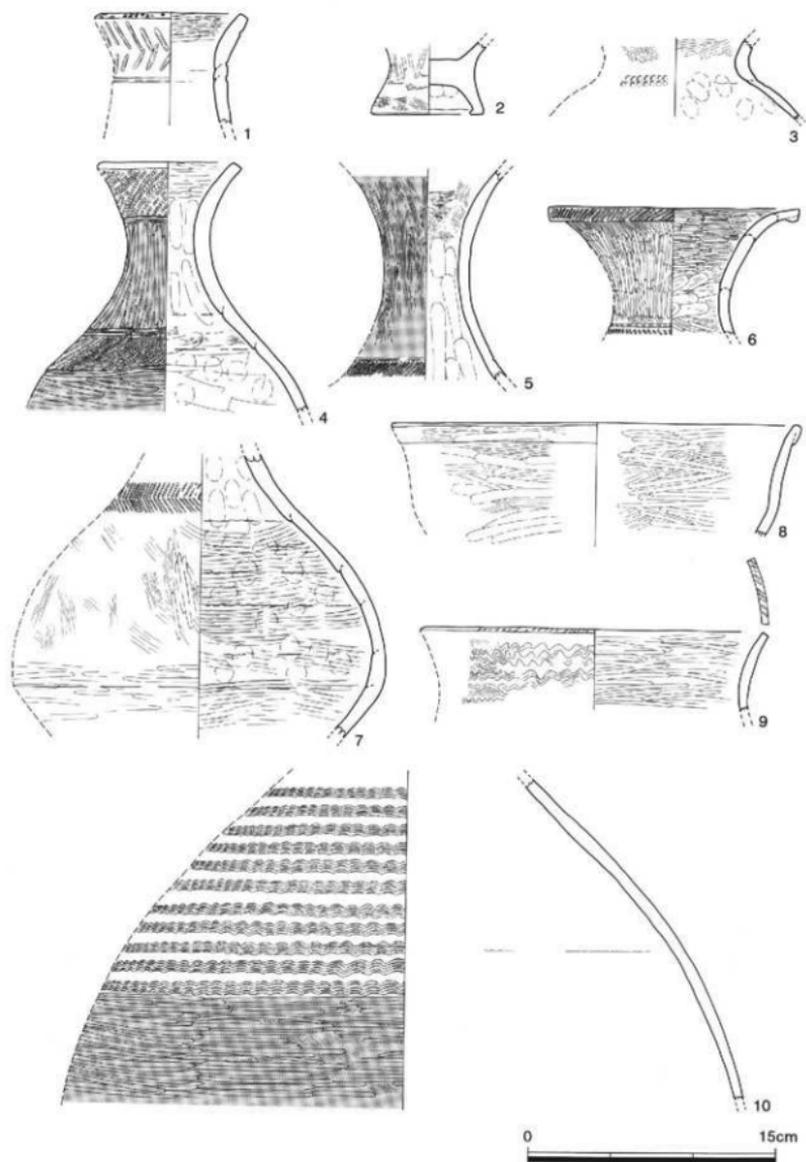
19-1、23-2・3は、縄文とヘラ描文を施す長頸壺である。19-1は、緩やかに外反する口縁部を有するもので、面取りした口唇部には縄文を、口縁部外面には下端を区画したヘラ描羽状文を施す。磨滅が著しく、頸部以下の文様構成は不明である。23-3は、長い頸部の破片で、縄文を2本1単位のヘラ描文で区画している。23-2は、丸みを帯びた胴部破片で縄文を地文としたヘラ描の意匠文を施す。23-4・5は、壺または、深鉢の胴部破片である。横位の条痕を施す。23-6は、緩やかに外反する口縁部を有する深鉢である。外面は、右下がりの条痕によって調整している。なお、中手乱遺跡2区出土深鉢と接合した。以上の土器は、弥生中期中葉に位置付けられよう。

19-4・5・10は、壺の口縁～胴部である。19-4・5は、細い頸部から緩やかに外反する口縁部を有するものである。19-4は、口唇部を面取りするもので、2本1単位のヘラ描文で区画した縄文帯を口縁部と肩部に施し、赤彩を加えている。19-5は一条のヘラ描文によって区画する縄文帯を肩部に施す。いずれも文様帯以外は、丁寧なミガキ調整を行う。19-10は、若干丸みを帯びた胴部上半に流麗な御播波状文を施す。文様帯以下は、丁寧なミガキ調整を行い、赤彩している。23-7・8・12は、壺の胴部から胴部の破片である。23-12は、ハケ調整後、横位のヘラ描文、23-8は、ハケ調整後上端をヘラ描文で区画した連弧文を施す。23-7は、胴部上半に斜線で充填した下向きのヘラ描刺突歯文を施すものである。文様帯以下は、丁寧にミガキ調整し、赤彩している。23-11は、胴部が若干張り、口縁部が大きく外反する深鉢の胴部であろう。外面に横位のヘラ描羽状文を3段以上施している。23-9は、桶形の鉢とみられ、口唇部及び口縁部外面に縄文を施す。文様帯以外は、内外面ともにミガキ調整し、赤彩している。19-2は、台付甕または高杯の台部である。厚い底部に低い台部を有し、内面には粘土のはみ出しが認められる。以上の土器は、弥生中期後葉に位置付けられよう。

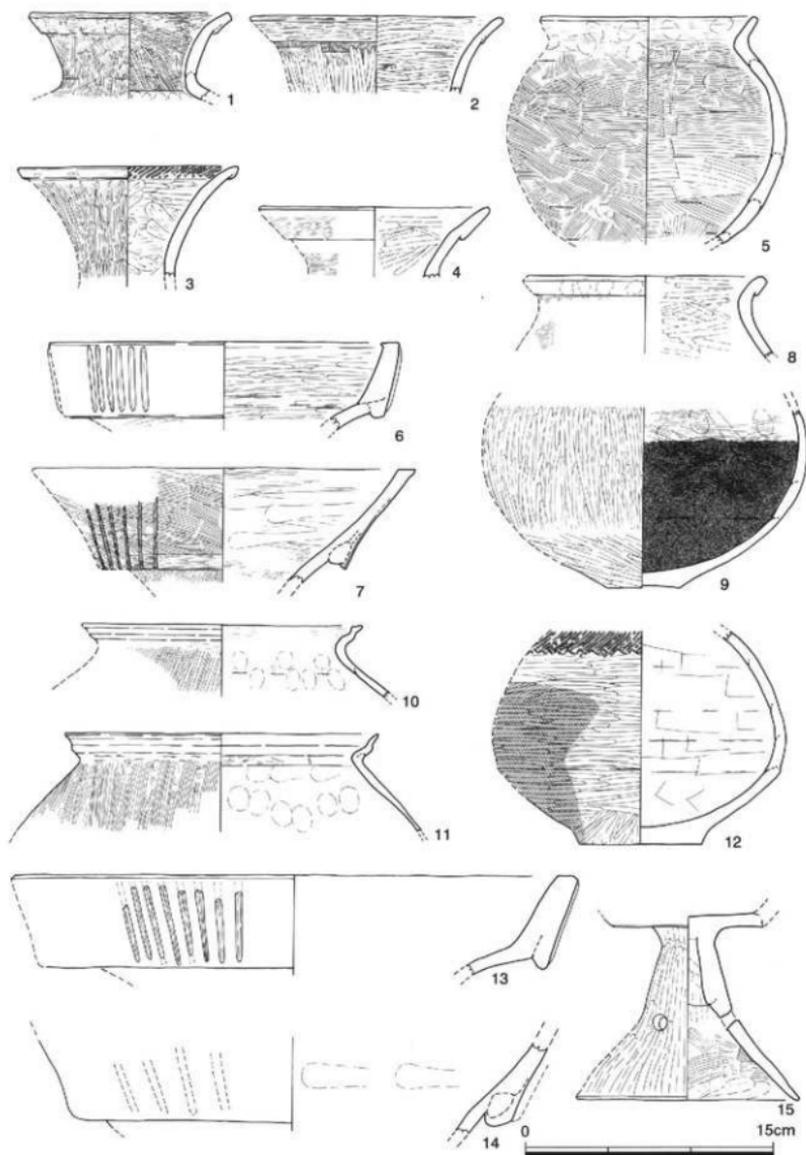
19-6は、大きく外反する折り返し口縁部を有する壺の口頸部である。口唇部及び肩部に縄文を施す。胴部の縄文は、上端をヘラ状の工具による押圧文によって区画している。頸部内面以外は、ハケ調整後丁寧なミガキによって調整している。19-7・23-13は、肩部に櫛刺突羽状文を施す壺で、県西部の菊川式を模倣したものである。19-7は、胴部最大径付近に稜を有するもので、胴部をハケ調整した後、部分的にタテミガキを加えている。胴部下半はミガキ調整する。23-13は、上端をヘラ押圧文で区画した櫛刺突羽状文を施すものである。櫛刺突羽状文は、数単位で刺突の向きを変えるもので、その変換部分に菱形→対向した2つの三角形→菱形・・・の無文帯が形成される。

19-3は、頸部が屈曲するもので、頸部に棒状の工具による刺突文を2条施す壺である。19-8は、下半に弱い稜を持ち、緩やかに外反する鉢である。薄い折り返し口縁を有し、ハケ調整後、外面はナデ、内面にはミガキを施す。19-9は、中部高地系の壺であろう。口縁部は、緩やかに外反し、口唇部は面取り後、縄文を、外面にはハケ後、3条の波状文、内面にはミガキを施す。以上の土器は、弥生後期に比定されよう。

20-1～4は、折り返し口縁部を有する壺である。折り返し部でさらに外反する2・4は、1のように屈折する頸部を有すると思われる。



第19図 鶴喰広田1・2区出土土器実測図



第20図 鶴喰広田1・2区出土土器実測図

20・6・7・13・14・23・10は、複合口縁を有する壺である。複合部が未発達な20・6と発達して大きく外傾する20・7・13・14、23・10に大別される。複合部外面に20・6・13・14、23・10は棒状浮文を、7は、ヘラ描文を施す。なお、23・10は、口縁部内面に断面が三角形に近い突帯を施す。20・8は、緩やかに外反する折り返し口縁を有する大頸壺である。20・9・12は、丁寧なミガキを施す壺の胴部である。12は、胴部下半に最大径を有し、肩部に結節縄文を施すもので、県西部の影響下に成立したものである。なお、胴部には赤彩の痕跡が認められる。20・5は、口唇部を丸く収め、ヨコナデ調整する台付壺である。胴部内外面はハケ調整する。20・10・11、23・11・14・15・17～19は、S字状口縁台付壺である。いずれも屈曲が弱く、直立気味の口縁部を有するもので、肩部外面のヨコハケを消失したものが大半であることから、在地で製作されたものであろう。なお、23・19は、ケズリ後、ハケを施していることが観察できた。21・9・10・11・14は、器台である。ミガキ調整する21・10・14と器壁が厚く、ハケ調整を残す9・11が認められる。10は、受部が屈折して外反し、内外面ともに丁寧なミガキを施す在地化した布留式系の器台で、21・14のような脚部を有すると考えられる。9は、器壁が厚く、11は、ハケを施すなど、愚鈍な印象を受ける。器台は、いずれも古墳時代前期に比定される。

21・15・17～20・22は、高坏である。脚部が緩やかに広がる15・17と、脚基部で屈折して大きく広がる18～20・22に大別できる。後者はさらに中空脚の18・19と柱実脚の20・22に細別できる。

18は、全形を復元できた唯一の資料である。口縁部外面及び脚部外面に放射状、口縁部内面に斜・横位、坏底部には非桁状の陪文を施す。また、脚部外面には、2本1組のヘラ描文を施している。

21・15・17は、古墳前期、21・18～20・22は、古墳前期末から古墳中期に比定されよう。21・13・16は、ミニチュア土器である。河川出土資料のため明確な時期は不明であるが、古墳前期以降のものであろう。

21・1・4・7は、須恵器坏蓋を模した模倣坏である。底部から微妙に屈曲して立ち上がる口縁部を有する21・1・4と丸みを帯びたやや深い底部から直線的に立ち上がる21・7の二者に大別できる。いずれも底部外面をケズリ、口縁部外面及び坏部内面は、ヨコナデとミガキによって調整する。前者は、6世紀後半、後者は、6世紀前半に比定される。

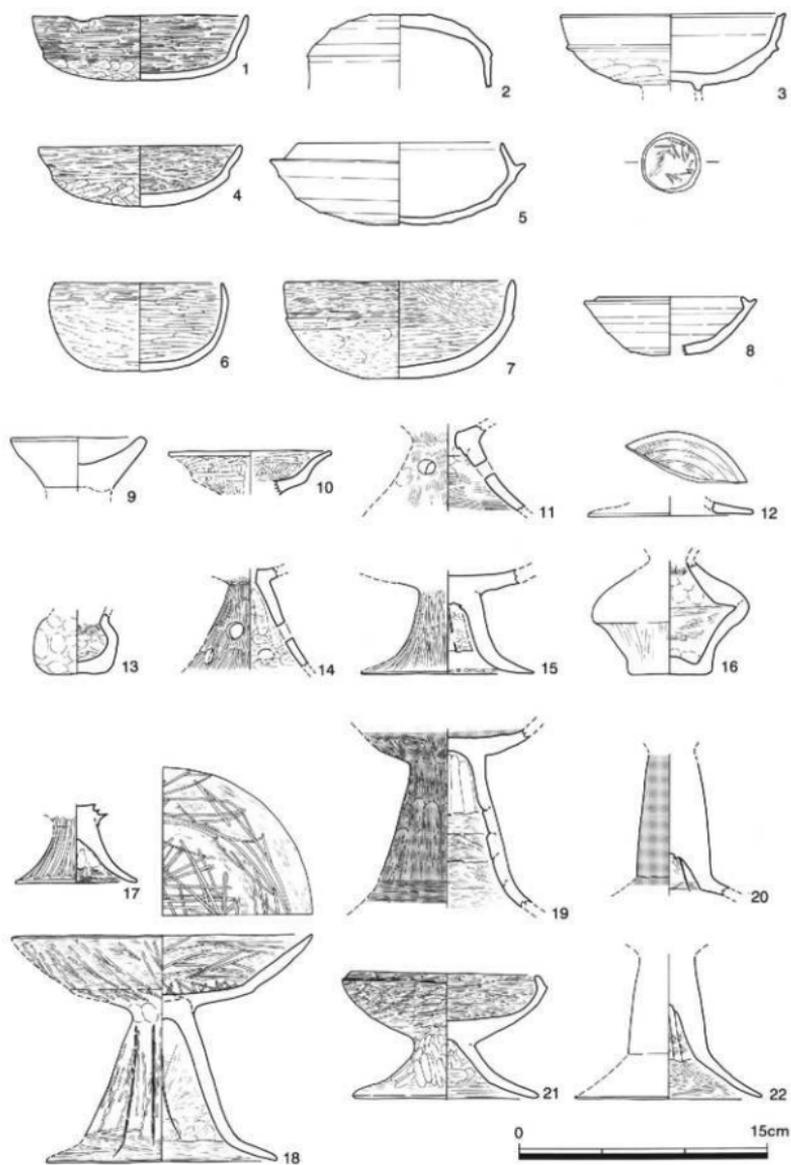
21・3は、須恵器無蓋高坏の坏部である。底部外面は、手持ちヘラケズリによって調整し、やや突出した稜線から開き気味の口縁部を有する。口唇部は鋭く収め内傾面を有する。なお、脚部の接合部にはヘラ状の工具による放射状の接合沈線を施し脚部の接合を強化している。放射状の接合沈線は、大阪府大庭寺遺跡出土須恵器をはじめとして、TK216以前に認められる手法とされている(菱田:1992)。色調は、暗灰色を呈し、破断面はセピア色を呈する。調整方法や接合沈線、色調・焼成からTK216型式以前に並行するものと推測される。

21・6は、半球形の胴部にやや内湾する口縁を有する椀である。坏深が坏に比べ深いことから椀と判断した。口唇部は丸く収め、内外面を丁寧なミガキ、口縁部内外面をヨコナデによって調整する。6世紀後半に比定される。

21・21は、模倣坏と同様の坏部を有する高坏である。坏部は、内傾する口縁部を有し、内面をミガキ、坏底部外面をケズリ調整する。脚部は、大きく開くものである。21・12は、これと同様の高坏になると考えられる。6世紀後半に比定されよう。

21・2は、須恵器坏蓋である。やや丸みを帯びた天井部は、その1/2以上をヘラケズリ調整する。口唇部を欠損するがTK23～TK47型式に並行するものであろう。

21・5・8は、須恵器坏身である。5は、やや丸みを帯びた底部から内傾する立ち上がり有し、端部は、内傾面を有する。坏底部の1/2程度をヘラケズリ調整する。8は、退化した短い立ち上がりを有するもので、底部は、ヘラ切り未調整である。5は、MT15型式、8は、TK209～TK217型式に並行するものであろう。



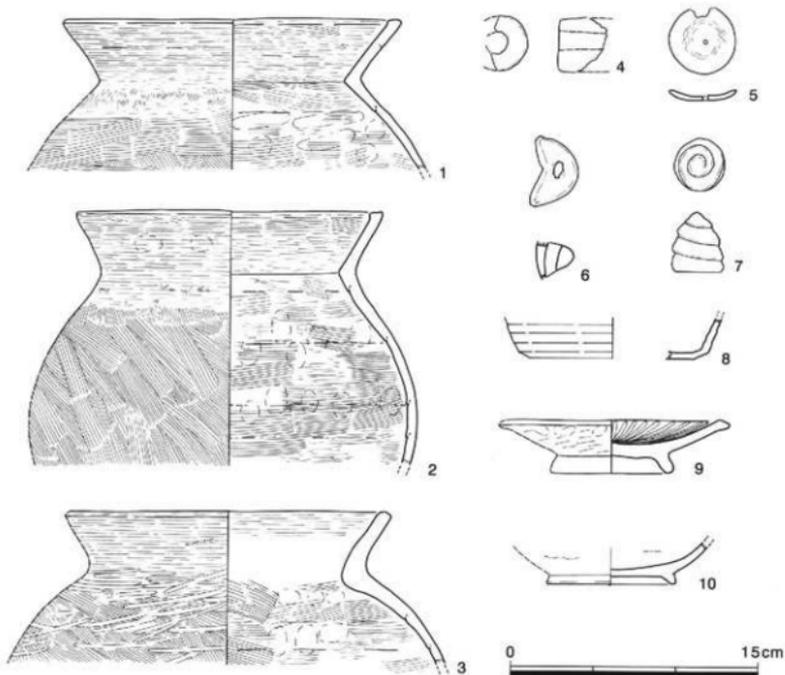
第21图 鹤喰広田1・2区出土土器実測図

22-1～3は、駿東型の甕である。1・2は、口唇部を肥厚するもの、3は、丸く収めるものである。いずれも内外面をハケ調整後口縁部をヨコナデ調整している。なお、3は、肩部外面にミガキを加えている。1・2は、7世紀前半、3は、7世紀後半から8世紀初頭に相当するものであろう。

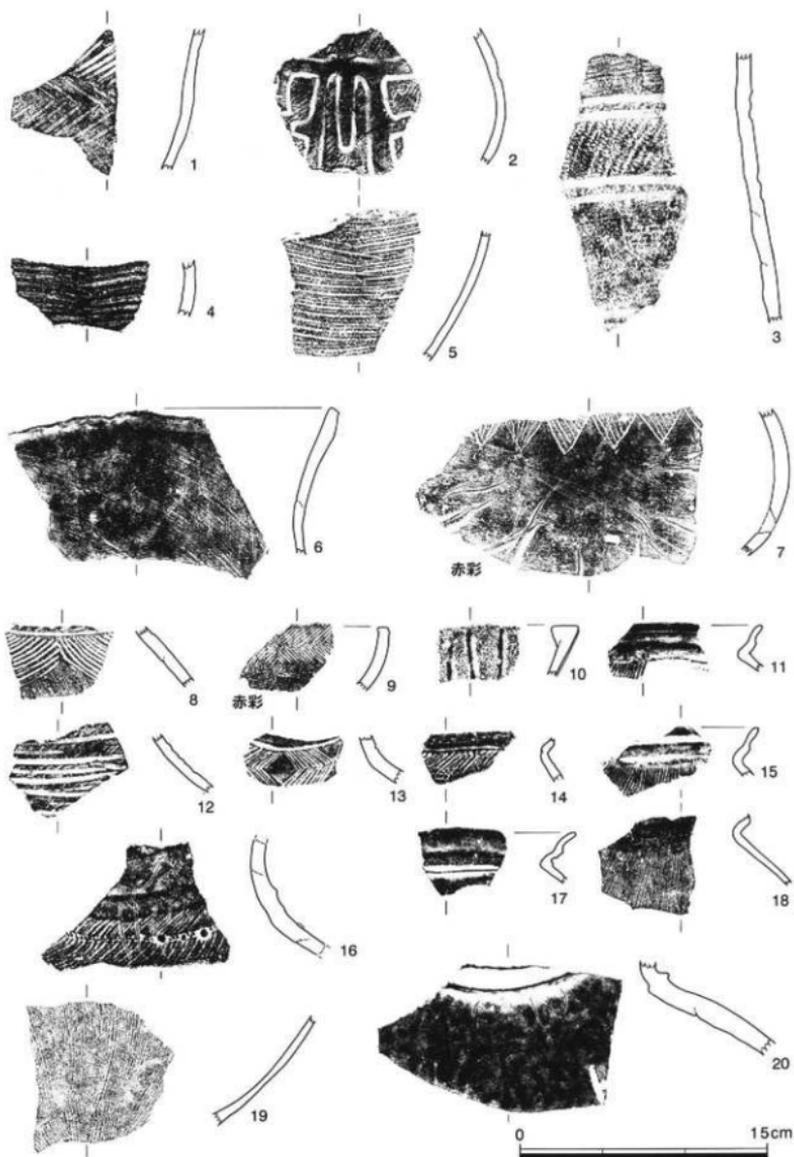
23-17は、古瀬戸長頸瓶の肩部破片である。頸部に断面三角形の突帯を有し、肩部にヘラ描文を施し、外面には灰釉を施す。13世紀前半に相当するものであろう。

### 土製品等

22-4は、直径は3.3cm、穿孔径1.3cmを測る管状土錘である。22-5は、直径4.0cmの皿状の土製品で、中心部に0.2cm程度の穿孔が認められる。22-6は、把手状の土製品である。凹部には剥離痕が認められることから、土器の把手の可能性ある。22-7は、螺旋状の用途不明の土製品である。



第22図 鶴喰広田1・2区出土土器実測図



第23图 鹤喰広田1・2区出土土器実測図

発掘年度	発見回数	区	グリップ	層位	器種	時期	備考
19-1	11	3	D-13N	Ⅱ	釜	弥生中層中葉	
19-2	11	3	F-14S	Ⅱ	台付椀	弥生中層後葉	
19-3	11	1	F-25	Ⅱ	釜	弥生後葉	
19-4	11	2	D-12S	Ⅱ	釜	弥生中層後葉	
19-5	11	2	D-12S	Ⅱ	釜	弥生中層後葉	漆器
19-6	11	表段			釜	弥生後葉	
19-7	11	1	E-14N	Ⅱ	釜	弥生後葉	
19-8	11	1	F-15	Ⅱ	鉢	弥生後葉	
19-9	11	1	D-13	Ⅱ~Ⅲ	釜	弥生後葉	飯沼系
19-10	11	1	D-13S	Ⅱ	釜	弥生中層後葉	漆器
20-1	12	1	F-16N	Ⅱ	釜	古墳前期	
20-2	12	1	F-15	Ⅱ	釜	古墳前期	
20-3	12	1	F-15	Ⅱ	釜	弥生後葉	
20-4	12	1	E-15	Ⅱ	釜	古墳前期	
20-5	12	2	C-8S	Ⅱ	竹付甕	古墳前期	
20-6	12	1	E-14S	Ⅱ	釜	古墳前期	
20-7	12	1	E-14S	Ⅱ	釜	古墳前期	
20-8	12	1	E-14	Ⅱ	排水溝	古墳前期	折返し口縁
20-9	12	1	D-13S	Ⅱ	釜	古墳前期	内面に炭化物付着
20-10	12	1	F-16	Ⅱ	S字甕	古墳前期	
20-11	12	2	C-11N	Ⅱ	S字甕	古墳前期	
20-12	12	1	F-15N	Ⅱ	釜	古墳前期	漆器
20-13	12	1	D-13	Ⅱ	釜	古墳前期	
20-14	12	1	D-13N	Ⅱ	釜	古墳前期	
20-15	12	1	F-16N	Ⅱ	高坏	弥生後葉	
21-1	12	1	D-13S	Ⅱ	高坏	古墳前期	
21-2	12	2	C-9-N	Ⅱ	須臾器坏	古墳中葉	
21-3	13	1	E-13N	Ⅱ	須臾器坏	古墳中葉	腰板跡面手跡ちへツケズリ
21-4	13	1	E-13N	Ⅱ	須臾器坏	古墳後葉	
21-5	13	1	E-14S	Ⅱ	須臾器坏	古墳後葉	
21-6	13	1	D-13	Ⅱ	坏	古墳後葉	半円形
21-7	13	1	F-14S	Ⅱ	腰板坏	古墳後葉	
21-8	13	1	F-15	Ⅱ	須臾器坏	古墳後葉	
21-9	13	2	C-9N	Ⅱ	須臾器	古墳前期	
21-10	13	1	F-16	Ⅱ	甕	古墳前期	
21-11	13	1	F-15S	Ⅱ	甕	古墳前期	観内系
21-12	13	1	E-13	Ⅱ	排水溝	古墳前期	
21-13	14	1	F-15S	Ⅱ	小形高坏、腰付 S字ツブツキ	古墳前期	
21-14	13	表段			甕	古墳前期	
21-15	14	1	E-14S	Ⅱ	高坏	古墳中葉	観内系
21-16	14	1	F-15S	Ⅱ	小形甕	古墳中葉	
21-17	14	1	F-16N	Ⅱ	高坏	古墳中葉	
21-18	14	1	D-13S	Ⅱ	高坏	古墳中葉	脚板にへツケ付き
21-19	14	1	F-15N	Ⅱ	高坏	古墳中葉	漆器
21-20	14	1	E-14S	Ⅱ	高坏	古墳前期	漆器
21-21	14	1	E-14S	Ⅱ	須臾器坏	古墳後葉	
21-22	15	1	E-14S	Ⅱ	高坏	古墳前期	
22-1	15	1	E-15N	Ⅱ	腰板甕	古墳後葉	
22-2	15	1	F-15N	Ⅱ	腰板甕	古墳後葉	
22-3	15	1	F-15S	Ⅱ	腰板甕	古墳後葉	
22-4	15	1	F-15	Ⅱ	土器	弥生	
22-5	15	2	D-11N	Ⅱ	不明土器片		
22-6	15	2	C-9N	Ⅱ	不明土器片		
22-7	15	2	D-12N	Ⅱ	不明土器片		
22-8	15	1	E-15	Ⅱ	須臾器坏		奈良
22-9	15	1	F-15S	Ⅱ	高台付甕	平安	内面に漆文
22-10	15	1	E-15	Ⅱ	須臾器坏	平安	
23-1	16	1	E-13	Ⅱ	排水溝	弥生中層後葉	
23-2	16	1	E-13S	Ⅱ	小形甕	弥生中層中葉	
23-3	16	1	F-16N	Ⅱ	甕	弥生中層中葉	
23-4	16	1	D-14N	Ⅱ	釜	弥生中層中葉	
23-5	16	1	D-13	Ⅱ~Ⅲ	須臾器	弥生中層中葉	
23-6	16	1	E-14N	Ⅱ	須臾器	弥生中層中葉	
23-7	16	1	E-14N	Ⅱ	釜	弥生中層後葉	漆器、割罫穿孔
23-8	16	1	E-13	Ⅱ	排水溝	弥生中層後葉	
23-9	16	表段			鉢	弥生中層後葉	
23-10	16	1	F-15	Ⅱ	排水溝	古墳前期	
23-11	16	1	F-16	Ⅱ	S字甕	古墳前期	
23-12	16	1	E-13	Ⅱ	排水溝	弥生中層後葉	
23-13	16	1	E-15	Ⅱ	甕	弥生後葉後半	瀬川式系
23-14	16	1	E-13	Ⅱ	排水溝	古墳前期	
23-15	16	1	F-16	Ⅱ	S字甕	古墳前期	
23-16	16	1	F-15S	Ⅱ	甕	弥生後葉後半	瀬川式系
23-17	16	1	F-15	Ⅱ	排水溝	古墳前期	
23-18	16	1	F-16	Ⅱ	S字甕	古墳前期	
23-19	16	表段			S字甕	古墳前期	
23-20	16	1	F-14	Ⅱ	高坏	中世	古鏡戸

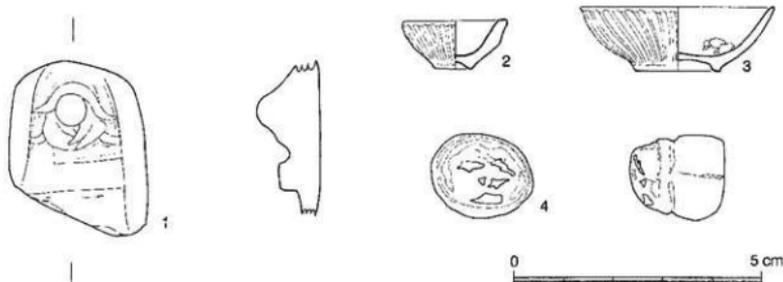
第3表 鶴崎広田出土土器一覧表

## 陶磁器

陶磁器については一覧表に推定される産地、器種、年代等の概要を示した(第4表)。17世紀後半から18世紀にわたる時期のものが主体で、その前後のものが少量含まれる。注目される遺物としては3区出土の中国陶磁の皿があげられる。また、実用品とは考えにくい極小型の皿や小口面に人物を刻んだ陶製品は、玩具の可能性が考えられる。

図版番号	写真図版	区	グリップ	単位	産地	器種	時期	寸法	備考
24-1	10	2	C-10	Ⅱ～Ⅲ	肥前	土製品		最大長(3.0)cm 最大幅2.8cm	
24-2	16	2	C-8	Ⅱ～Ⅲ	肥前	皿	18c～19c	口径2.1cm 底径1.0cm 器高0.8cm	実用品ではない
24-3	16	2	C-10	Ⅲ	肥前伊万里	皿	18c	口径(4.0)cm 底径(1.7)cm 器高(1.3)cm	実用品ではない
24-4	16	2	C-8	Ⅱ～Ⅲ	肥前	土製品		器高2.0cm 最大幅2.1cm	玩具
25-1	17	2	C-8	Ⅲ	肥前	小杯	17c後半	口径6.4cm 底径2.2cm 器高3.0cm	
26-2	17	2	T-4	Ⅰ～Ⅱ	瀬戸美濃	碗	18c末	口径6.2cm 底径3.0cm 器高4.2cm	
25-3	17	2	T-4	Ⅰ～Ⅱ	瀬戸美濃	香炉	18c末～19c	口径(8.0)cm 底径3.6cm 器高4.4cm	文化文庫蔵
26-4	17	2	T-4	-	肥前	御神酒樽	18c末～19c	底径4.4cm 器高(6.4)cm	
25-5	17	2	C-8	Ⅱ～Ⅲ	瀬戸美濃	土製品	19c前半	口径7.2cm 底径3.4cm 器高2.8cm	
26-6	17	2	C-10	Ⅲ	瀬戸美濃	皿	17c後半	口径(1.1)cm 底径6.4cm 器高2.2cm	
26-7	17	2	C-10	Ⅲ～Ⅳ	小鉢	皿	18c以降	底径4.6cm 器高(3.6)cm	摺り目未確認
26-8	17	2	C-8	Ⅲ	美濃	灯明皿	18c中～後	口径8.4cm 底径(9.0)cm 器高4.8cm	上平肉目向
25-9	17	2	T-4	-	志摩呂	碗	18c末～19c	底径5.8cm 器高(5.0)cm	
25-10	17	2	T-4	-	志摩呂	碗	18c	口径7.8cm 底径3.4cm 器高4.6cm	
26-11	-	2	C-10	Ⅲ	肥前	不別	18c	底径7.4cm 器高(5.0)cm	日本製白磁
26-12	-	2	T-4	-	肥前	蓋	19c前半	口径9.8cm 底径5.4cm 器高3.0cm	
26-13	18	2	D-11	Ⅲ	志戸部	皿	18c末～19c	口径(10.0)cm 底径5.4cm 器高(7.8)cm	
25-14	17	2	T-4	-	肥前	蓋	17c後半	底径4.8cm 器高(1.4)cm	山水繪型・京焼きか
26-18	18	2	C-11～D-11	Ⅲ～Ⅳ	瀬戸美濃	碗	18c前半	口径(9.4)cm 底径4.2cm 器高(5.2)cm	
26-16	18	2	C-10	Ⅲ	瀬戸美濃	仏飯	18c後半	口径8.2cm 底径5.6cm 器高5.2cm	
26-17	18	2	C-11～D-11	Ⅲ～Ⅳ	肥前	碗	18c中～後	口径9.8cm 底径4.0cm 器高5.2cm	
26-18	17	2	C-10	Ⅲ	肥前	碗	19c中～後	口径(9.2)cm 底径4.4cm 器高(2.8)cm	
26-19	18	2	C～10	Ⅲ～Ⅳ	瀬戸美濃	碗?		口径(9.0)cm 底径5.4cm 器高(5.2)cm	裏面に繪書
26-20	18	2	C-10	Ⅲ	瀬戸美濃	仏飯	18c後半	口径(9.0)cm 底径4.8cm 器高(5.2)cm	
26-21	18	2	C-9	Ⅲ～Ⅳ	志摩呂	香炉	18c中～後	口径8.6cm 底径5.0cm 器高4.2cm	
26-22	19	2	C-9	Ⅲ	瀬戸美濃	香炉	18c後半	口径11.4cm 底径5.0cm 器高7.0cm	
26-23	18	2	C-10	Ⅲ	志摩呂	香炉	19c	口径9.8cm 底径(6.0)cm 器高(6.0)cm	
26-24	19	2	T-4	-	瀬戸美濃	片口	18c	口径(16.0)cm 器高(7.0)cm	
26-26	18	2	C-8	Ⅲ～Ⅳ	肥前	碗	18c前半	口径10.6cm 底径4.0cm 器高6.0cm	
26-28	19	2	C-10	Ⅲ～Ⅳ	肥前	碗	18c中	口径11.0cm 底径4.0cm 器高6.4cm	
26-27	19	2	C-10	Ⅲ～Ⅳ	肥前	そば罎口	18c末～19c	口径(8.0)cm 底径6.0cm 器高6.4cm	
26-28	18	2	C-9	Ⅲ	香津	碗	18c前半	口径(9.2)cm 底径4.0cm 器高(5.5)cm	
26-1	19	2	C-9	Ⅲ～Ⅳ	肥前	飯茶碗	18c後半	口径7.4cm 底径3.4cm 器高5.8cm	
26-2	19	2	C-10	Ⅲ～Ⅳ	肥前	碗	18c中	口径9.8cm 底径4.4cm 器高5.2cm	
26-3	19	3	Ⅲ	肥前	小杯	19c	口径(7.0)cm 底径3.2cm 器高3.4cm	竈火	
26-4	20	3	Ⅲ	瀬戸美濃	碗	17c前半	口径11.8cm 底径5.4cm 器高7.2cm		
26-5	19	3	Ⅲ	肥前	飯茶碗	18c中～後	口径7.2cm 底径(5.6)cm 器高(5.0)cm		
26-6	20	3	Ⅲ	瀬戸美濃	飯碗	18c中後半	口径10.0cm 底径5.0cm 器高6.4cm		
26-7	19	3	Ⅲ	瀬戸美濃	碗	18c前半	口径10.0cm 底径4.6cm 器高5.8cm		
26-8	19	3	Ⅲ	瀬戸美濃	碗	18c前半	口径(10.0)cm 底径4.0cm 器高5.8cm		
26-9	20	3	Ⅲ	中国	皿	16c前半～後半	口径(10.3)cm 底径(5.2)cm 器高2.8cm	単花絵、菊菊文	
26-10	20	3	Ⅲ	志野	皿	16c末	口径13.2cm 底径6.8cm 器高3.4cm		
26-11	20	3	Ⅲ	志野	皿	17c前半	口径(10.0)cm 底径6.2cm 器高(2.0)cm		
26-12	20	3	Ⅲ	志野	皿	17c中	口径(12.0)cm 底径(8.0)cm 器高(2.2)cm		
26-13	20	3	Ⅲ	志野	皿	17c前半	口径11.0cm 底径7.0cm 器高2.2cm	灯明皿として使用	
26-14	20	3	Ⅲ	瀬戸美濃	皿	17c後半	口径13.4cm 底径6.0cm 器高3.4cm		
26-15	20	3	Ⅲ	瀬戸美濃	小皿	18c末	口径13.4cm 底径6.8cm 器高3.0cm	網線飾	
26-16	21	3	Ⅲ	瀬戸美濃	皿	18c前半	口径(15.0)cm 底径7.0cm 器高(2.4)cm	赤絵	
26-17	21	3	Ⅲ	瀬戸美濃	摺り鉢	18c	口径33.8cm 底径15.6cm 器高15.0cm		
26-18	20	3	Ⅲ	瀬戸美濃	片口	19c	口径(21.4)cm 底径5.0cm 器高(6.0)cm		
26-19	20	3	Ⅲ	志摩呂			口径(14.6)cm 底径13.0cm 器高(4.8)cm		

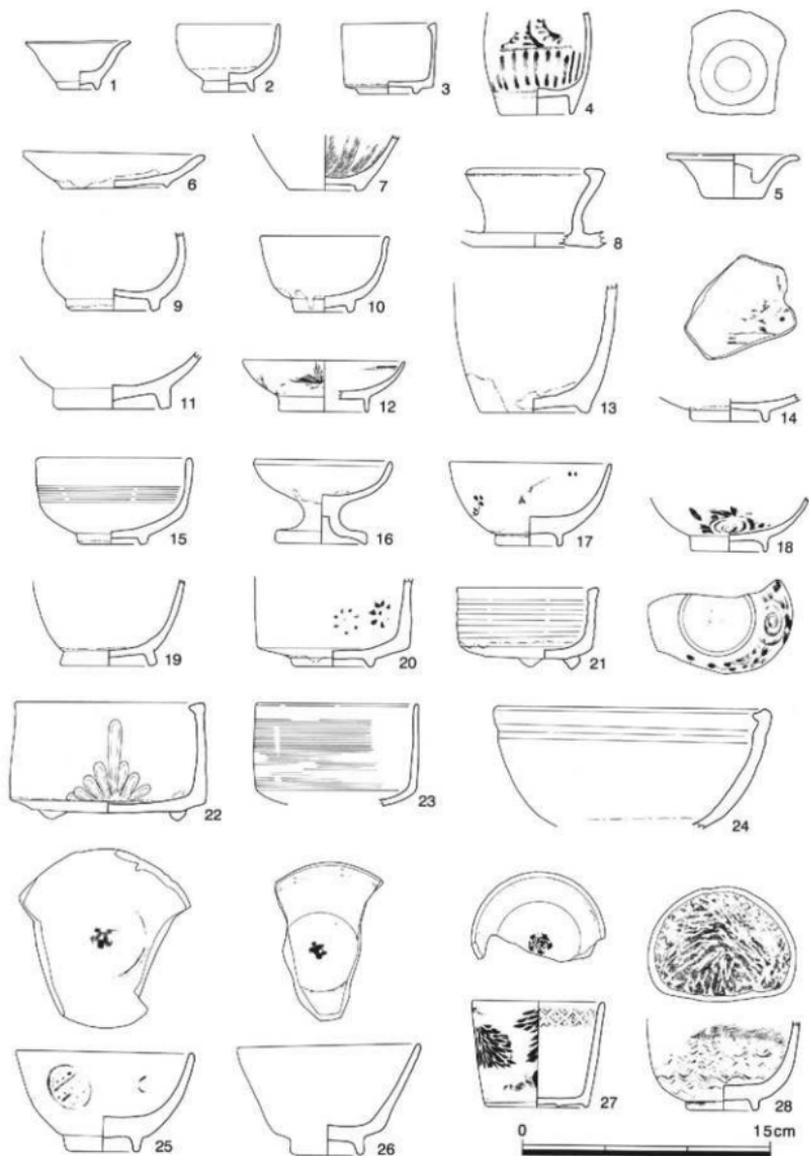
第4表 鶴喰広田出土陶磁器一覧表



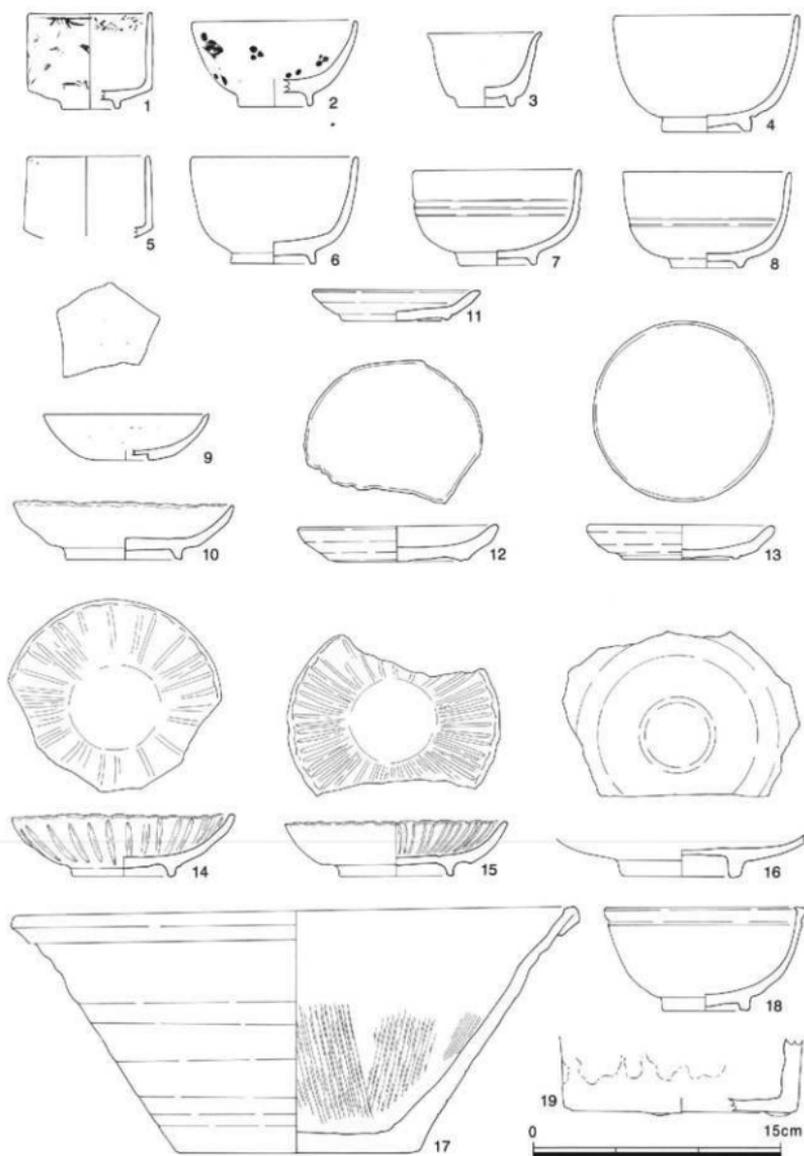
第24図 鶴喰広田2区出土陶磁製品実測図

図号	写真図版	区	グリッド	層位	器種	外面	内面	時期	法量	備考
27-1	21	2	F-14S	II	埴輪	赤	赤	近世	口径11.5cm 高台外径6.2cm 器高2.5cm	天卜降 赤/黒
27-2	21	3	D-12S	II	埴輪	黒	黒	近世	口径11.3cm 高台外径6.4cm 器高2.6cm	
27-3	21	3	K-20S	II	埴輪	金/黒	赤	近世	口径11.3cm 高台外径(5.2)cm 器高(2.9)cm	
27-4	21	3	K-20S	II	埴輪	金/黒	黒	近世	口径(12.2)cm 高台外径(4.6)cm 器高(3.2)cm	
27-5	23	1	E-14	II	埴	金/黒	赤	近世	口径(10.2)cm 底径5.1cm 器高(7.4)cm	
27-6	21	2	E-14N	II	埴	黒/赤	赤	近世	口径(11.8)cm 底径(5.5)cm 器高(3.4)cm	
27-7	21	2	E-15S	II	埴	黒/赤	赤	近世	口径(12.3)cm 底径5.4cm 器高(7.7)cm	
27-8	21	2	E-15N	II	埴	黒/赤	赤	近世	口径(10.6)cm 底径(5.2)cm 器高(4.0)cm	
27-9	21	2	E-14S	II	埴	黒/赤	赤	近世	口径(13.0)cm 底径6.8cm 器高(9.2)cm	
27-10	21	1	F-15S	II	埴	黒/赤	赤	近世	口径(11.4)cm 底径5.5cm 器高(3.7)cm	
27-11	21	1	D-12S	II	埴	黒	黒	近世	口径(12.0)cm 底径6.5cm 器高(4.2)cm	
27-12	22	2	F-15S	II	埴	黒/赤	赤	近世	口径(11.6)cm 底径(6.4)cm 器高(4.4)cm	
27-13	22	1	D-13N	II	埴	赤	赤	近世	口径(13.5)cm 底径(7.0)cm 器高(8.8)cm	
28-1	21	1	E-13N	II	埴	金/黒	赤	近世	口径(11.3)cm 底径(5.7)cm 器高(3.4)cm	
28-2	21	1	F-15S	II	埴	黒/赤	赤	近世	口径(11.4)cm 底径(5.4)cm 器高(3.6)cm	
28-3	22	2	E-14N	II	埴	金・黒/赤	赤	近世	口径(10.2)cm 底径(5.4)cm 器高(4.2)cm	
28-4	23	2	F-15N	II	埴	赤	赤	近世	口径(9.7)cm 底径(5.4)cm 器高(6.4)cm	
28-5	22	2	F-16	II	埴	金/黒	赤	近世	口径(11.0)cm 底径(5.7)cm 器高(3.5)cm	
28-6	22	2	F-16N	II	埴	黒/赤	赤	近世	口径(12.2)cm 底径(6.1)cm 器高(4.9)cm	
28-7	22	1	F-12S	II	埴	黒/赤	赤	近世	口径(10.5)cm 器高(3.6)cm	
28-8	22	2	C-9N	II	埴	黒	黒	近世	口径(10.5)cm 底径(5.7)cm 器高(3.8)cm	
28-9	23	1	D-12S	II	埴	赤/黒	赤	近世	口径(12.2)cm 底径(6.0)cm 器高(5.3)cm	
28-10	22	1	D-12S	II	埴	黒	黒	近世	口径(12.1)cm 底径(5.4)cm 器高(3.8)cm	
28-11	22	3	L-20S	II	埴	黒/赤	赤	近世	口径10.2cm 底径5.4cm 器高7.6cm	
28-12	23	1	D-12S	II	埴	黒	黒	近世	口径(9.6)cm 底径(5.0)cm 器高(7.0)cm	
28-13	23	2	E-14N	II	埴	黒	黒	近世	口径(10.3)cm 底径5.4cm 器高(6.4)cm	
28-14	23	2	E-14N	II	埴蓋	赤	赤	近世	口径11.6cm 高台外径4.0cm 器高3.5cm	
28-15	23	1	F-15S	II	埴蓋	黒	黒	近世	口径(11.0)cm 高台外径(4.8)cm 器高(2.2)cm	
28-16	23	1	E-15N	II	埴蓋	赤/黒	赤	近世	口径10.3cm 高台外径(5.0)cm 器高(2.8)cm	
28-17	23	1	D-12N	II	埴	赤・金/黒	赤	近世	口径(11.0)cm 底径5.4cm 器高(3.4)cm	
28-18	22	2	E-13S	II	埴	金/黒	赤	近世	口径(9.6)cm 底径(5.0)cm 器高(3.4)cm	
28-19	22	1	F-15S	II	埴	赤/黒	赤	近世	口径11.0cm 底径(5.8)cm 器高(3.2)cm	
28-20	22	1	D-13S	II	埴	黒	黒	近世	口径(12.0)cm 底径(6.3)cm 器高(3.0)cm	
28-21	23	2	E-14S	II	埴	黒/赤	赤	近世	口径(12.0)cm 底径(6.8)cm 器高(4.1)cm	
28-22	22	2	E-14S	II	埴	赤	赤	近世	口径(15.4)cm 底径11.8cm 器高(8.3)cm	
28-23	23	2	F-15S	II	用途不明	赤	赤	近世	縦23.5cm 横10.6cm	
28-24	22	1	E-14S	II	埴	黒	黒	近世	口径(20.0)cm 器高(8.4)cm	
29-1	24	1	E-13S	II	埴	赤	赤	近世	口径(13.6)cm 底径(6.8)cm 器高(6.6)cm	
29-2	16	2	E-15N	II	埴	赤	赤	近世	口径12.5cm 底径6.8cm 器高7.5cm	
29-3	16	2	F-15S	II	埴	黒/赤	赤	近世	口径(12.2)cm 底径6.3cm 器高(7.7)cm	

第5表 鶴喰広田出土陶磁器一覧表



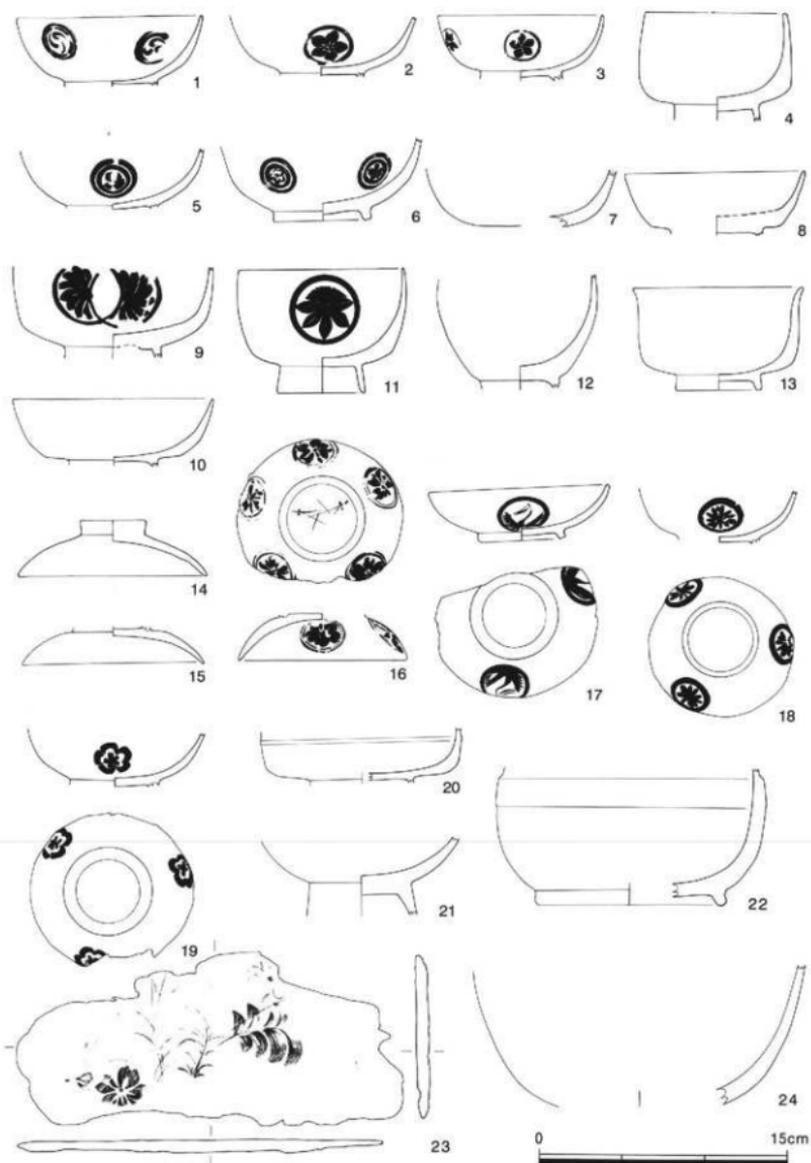
第25図 鶴喰広田出土陶磁器実測図



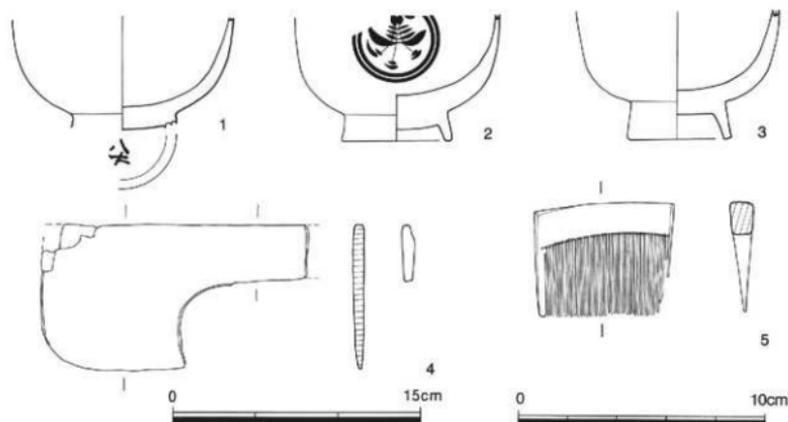
第26図 鶴喰広田出土陶磁器実測図



第27図 鶴喰広田出土漆器実測図



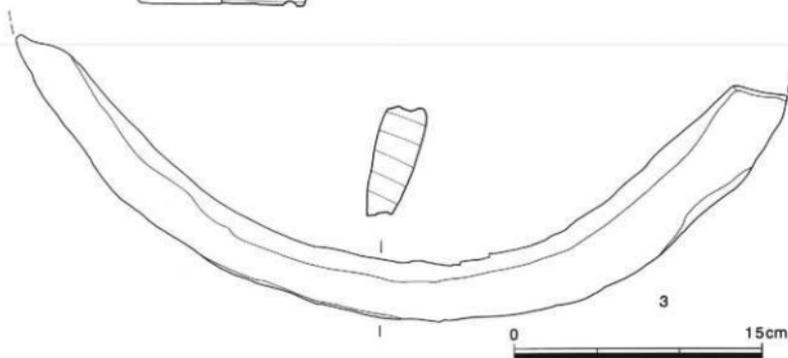
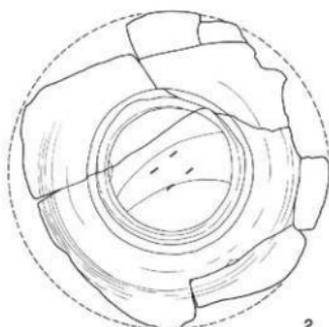
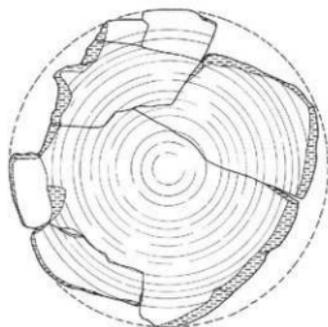
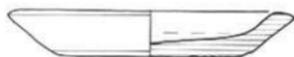
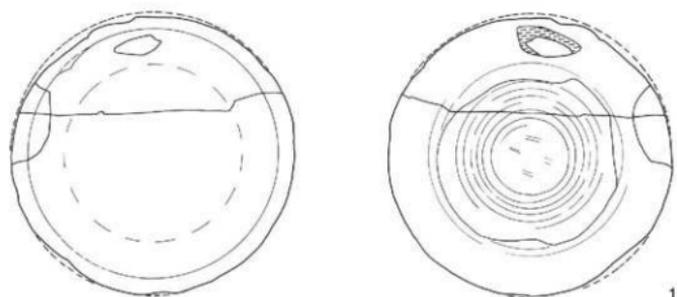
第28図 鶴嶺広田出土漆器実測図



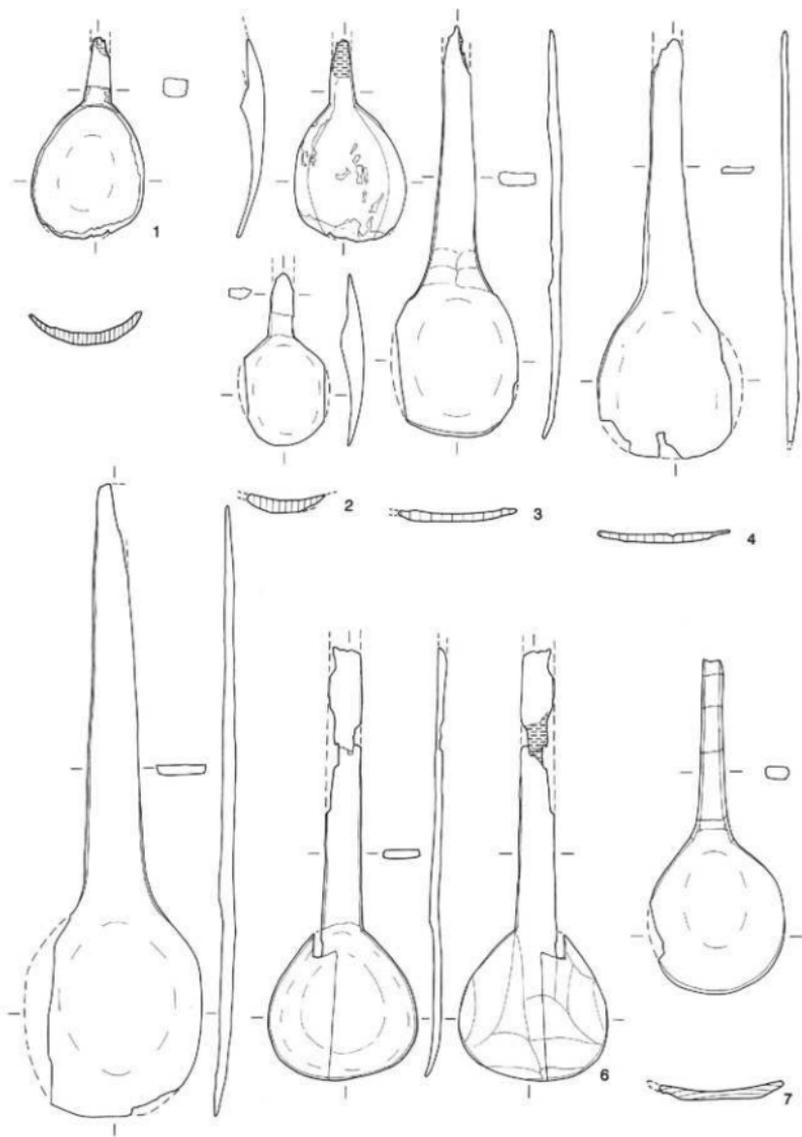
第29図 鶴喰広田出土漆器実測図

実測図数	写真図数	区	グリッド	層位	器種	時期	法量	備考
29-4	25	1	E-14S	II	依状木製品	近世	長さ16.1cm 幅8.9cm 厚さ0.7cm	
29-5		3			匙	近世	長さ(5.5) cm 幅4.6cm 厚さ0.9cm	
30-1	24	2	D-12N	II	漆物	近世	長さ17.3cm 幅11.2cm 厚さ2.8cm	
30-2	24	1	D-12S	II	漆物	近世	長さ19.4cm 外径10.0cm 厚さ4.2cm	
30-3	24	1	E-13S	II	朝物	近世	長さ46.7cm	
31-1	25	1	E-14S	II	杓子	近世	長さ(12.4) cm 幅6.8cm 厚さ2.0cm	
31-2	25	1	E-14S	II	杓子	近世	長さ(10.5) cm 幅(4.8) cm 厚さ1.3cm	
31-3	25	2	C-10N	II	杓子	近世	長さ24.9cm 幅(7.4) cm 厚さ1.1cm	
31-4	25	2	C-11N	II	杓子	近世	長さ(25.5) cm 幅8.2cm 厚さ0.9cm	
31-5	25	2	C-9N	II	杓子	近世	長さ38.6cm 幅(9.3) cm 厚さ1.2cm	
31-6	25	2	D-12N	II	杓子	近世	長さ(26.3) cm 幅9.1cm 厚さ1.0cm	
31-7	25	1	E-14N	II	杓子	近世	長さ20.4cm 幅(8.2) cm 厚さ1.2cm	
32-1	24	3	K-22S	II	柄杓	近世	総長9.2cm 厚さ7.6cm	
32-2	25	2	D-11S	II	凹板	近世	長さ10.2cm 幅10.1cm 厚さ0.8cm	中心に木釘
32-3	25	3	L-22S	II	椀	近世	長さ6.5cm 幅4.45cm 厚さ4.3cm	
32-4	24	3			柄杓	近世	長さ6.5cm 厚さ5.1cm (凹板厚さ0.3cm)	
32-5		2	D-12N	II	皿物	近世	総長14.1cm 厚さ7.2cm	
32-6		3			柄杓の柄	近世	長さ34.6cm 幅18.0cm 厚さ0.7cm	
32-7	25	2	D-11S	II	杓子	近世	長さ12.9cm 幅2.9cm 厚さ0.7cm	
32-8	25	1	E-14N	II	箸	近世	長さ24.4cm 幅6.5cm 厚さ0.5cm	
32-9	25	1	E-14S	II	箸	近世	長さ30.5cm 幅0.9cm 厚さ0.6cm	
32-10	25	1	F-15N	II	箸	近世	長さ25.4cm 幅0.8cm 厚さ0.4cm	
32-11	25	1	F-15N	II	箸	近世	長さ29.8cm 幅0.75cm 厚さ0.55cm	
33-1	25	3	K-22S	II	用途不明	近世	長さ5.6cm 幅20.6cm 厚さ0.5cm	凹孔と金具
33-2	25	1	F-13N	II	柄杓	近世	長さ7.9cm 幅2.95cm 厚さ2.0cm	
33-4	26	2	D-11S	II	唐傘轡輪	近世	長さ5.5cm 厚さ5.0cm	
33-5	26	1	E-14N	II	唐傘轡輪	近世	長さ6.2cm 幅6.85cm 厚さ4.65cm	竹製
33-6	26	3	K-22S	II	唐傘轡輪	近世	長さ(6.2) cm 幅(4.2) cm 厚さ4.6cm	
33-7	26	1	F-15S	II	唐傘轡輪	近世	長さ7.4cm 厚さ4.2cm	
33-8	26	2	D-11S	II	唐傘轡輪	近世	長さ6.6cm 厚さ4.4cm	
34-1	25	1	E-15N	II	碇	近世	長さ24.2cm 幅8.0cm 厚さ6.0cm	
34-2	24	1	F-15N	II	羽子坂	近世	長さ25cm 幅6.9cm 厚さ0.9cm	
34-3	25		藤水溝	II	林状木製品	近世	長さ11.9cm 幅1.2cm 厚さ0.75cm	10本の木釘
34-4	25	1	E-13S	II	縁取り具	近世	長さ9.4cm 幅2.45cm 厚さ1.9cm	
34-5		1	D-12S	II	下駄	近世	長さ21.2cm 幅7.7cm 厚さ1.9cm	
34-6		2	D-11S	II	下駄	近世	長さ21.4cm 幅5.9cm 厚さ2.55cm	
35-1	26	2	C-10N	II	下駄	近世	長さ21.1cm 幅5.8cm 厚さ1.8cm	
35-2	27	1	D-12S	II	下駄	近世	長さ20.4cm 幅9.3cm 厚さ3.5cm	
35-3	27	1	E-14N	II	下駄	近世	長さ(14.0) cm 幅7.1cm 厚さ(2.5) cm	
35-4	27	1	F-15S	II	下駄	近世	長さ20.8cm 幅9.4cm 厚さ9.2cm	
35-5	28	1	F-15S	II	下駄	近世	長さ20.8cm 幅9.4cm 厚さ9.2cm	
35-6	28	1	E-14N	II	下駄	近世	長さ20.9cm 幅8.9cm 厚さ4.8cm	

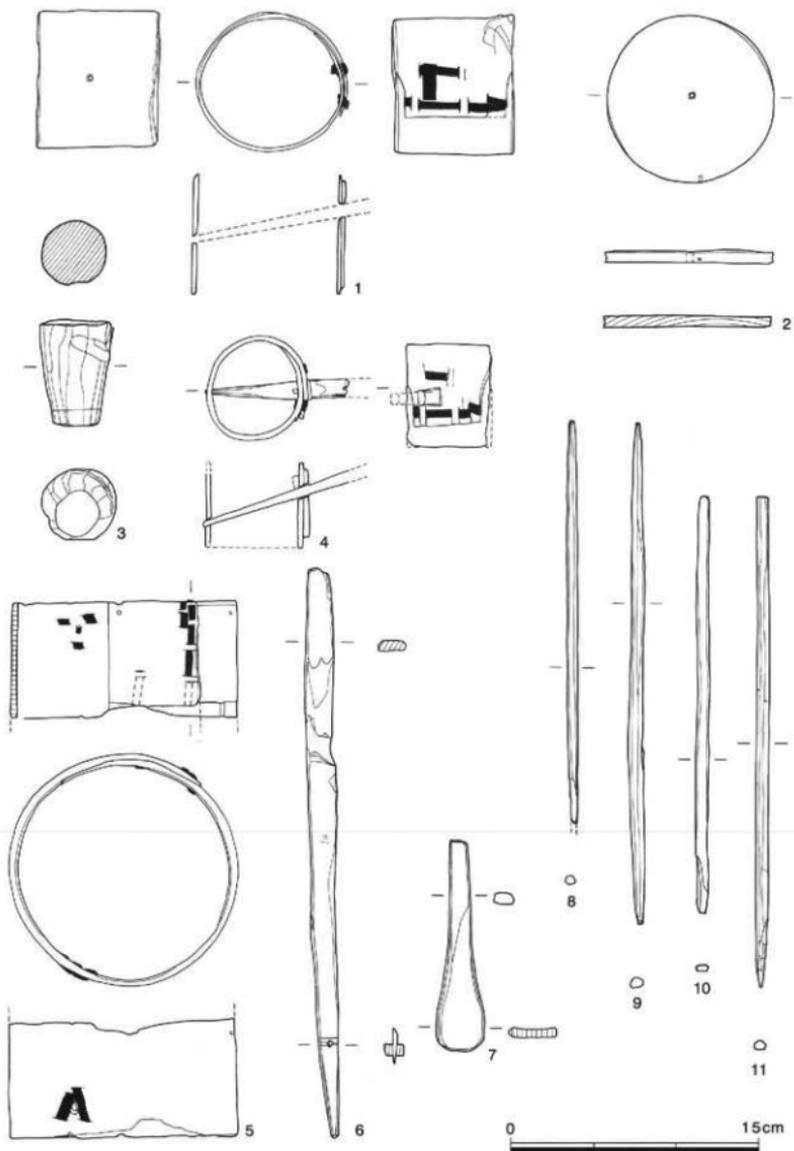
第6表 鶴喰広田出土木製品一覧表



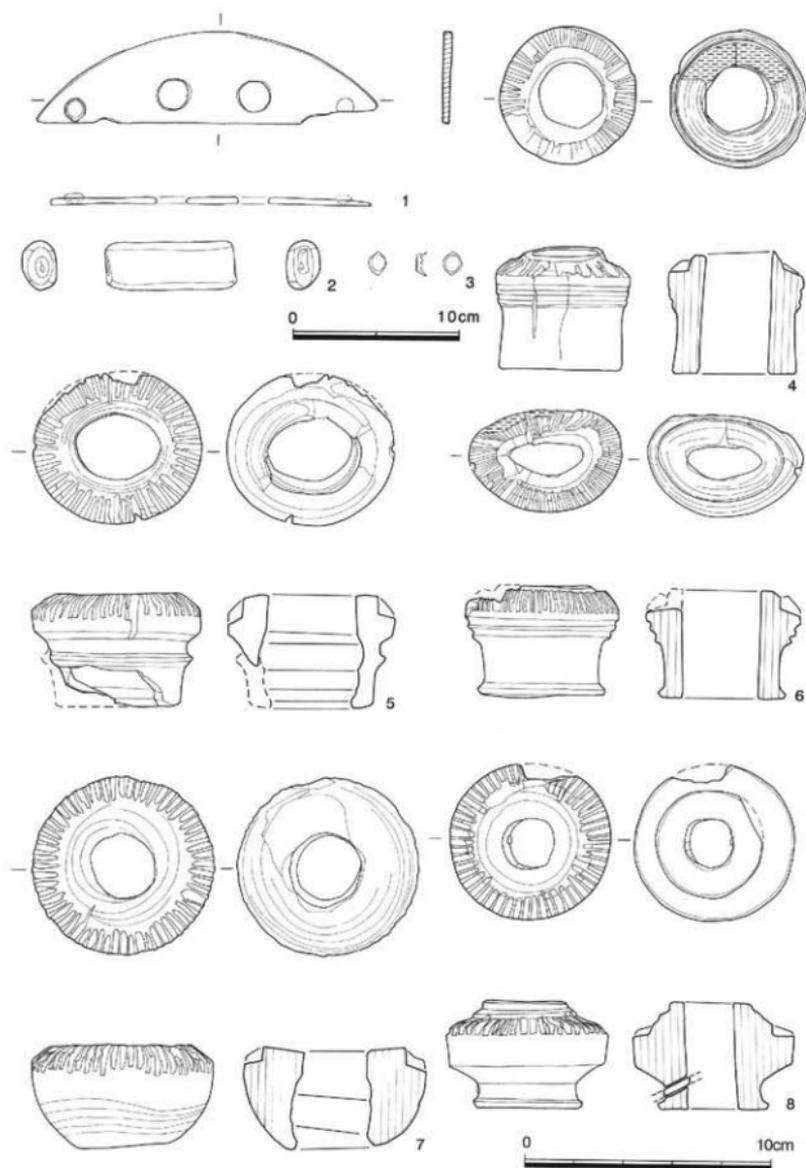
第30図 鶴喰広田出土木製品実測図



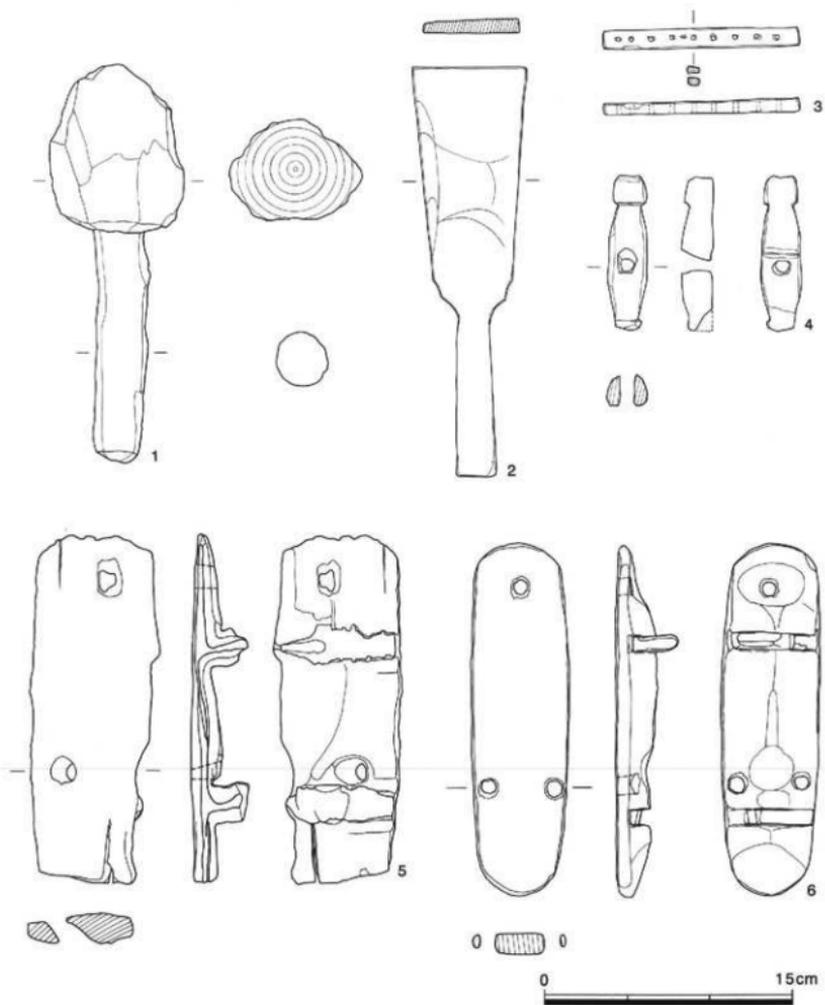
第31図 鶴喰広田出土木製品実測図



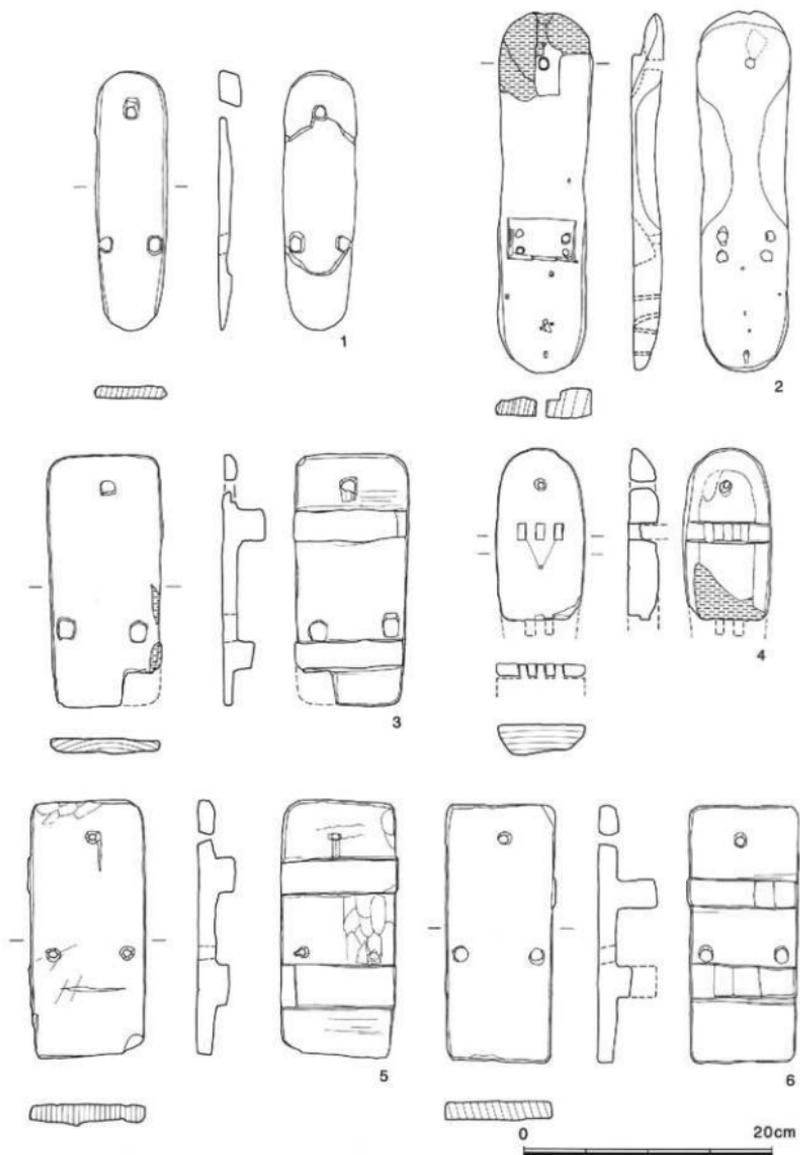
第32図 鶴喰広田出土木製品実測図



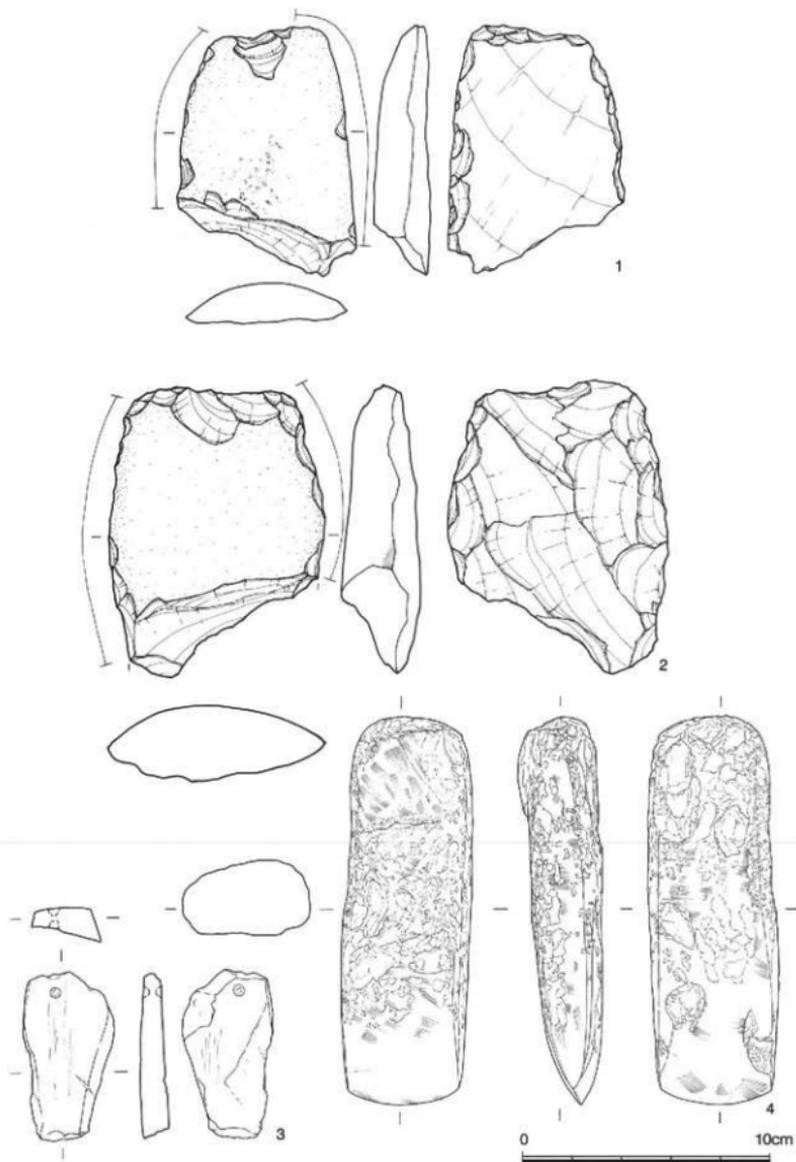
第33図 鶴喰広田出土木製品実測図



第34図 鶴喰広田出土木製品実測図



第35図 鶴喰広田出土木製品実測図



第36図 鶴喰広田出土石器実測図

## 石器

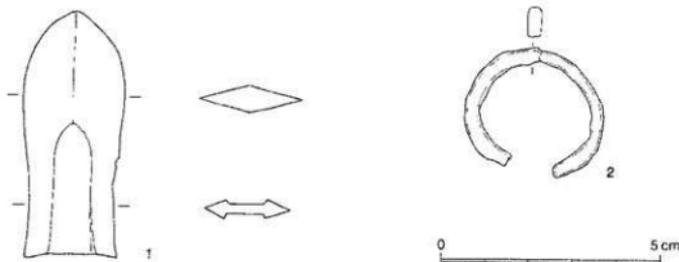
36-1は、長さ10.2cm、幅7.2cm、厚さ2.3cmを測る、石鉄の破片である。前面は丸く、後面は、石材の性質をいかして平坦に調整されている。石材は頁岩である。36-2は、長さ11.9cm、幅8.8cm、厚さ3.2cmを測る、石鉄の刃部破片である。36-1と同様に前面は丸くおさめている。石材は、頁岩である。36-3は長さ6.9cm、幅3.6cm、厚さ1.1cmを測る、撥型を呈する砥石である。表面及び両面に平滑な面を有する。一端には穿孔するための直径3mm程度の窪みが表面及び裏面に認められるが、貫通はしていない。石材は流紋岩である。36-4は太型蛤刈石斧の完型品である。石材は蛇紋岩である。

## 金属器

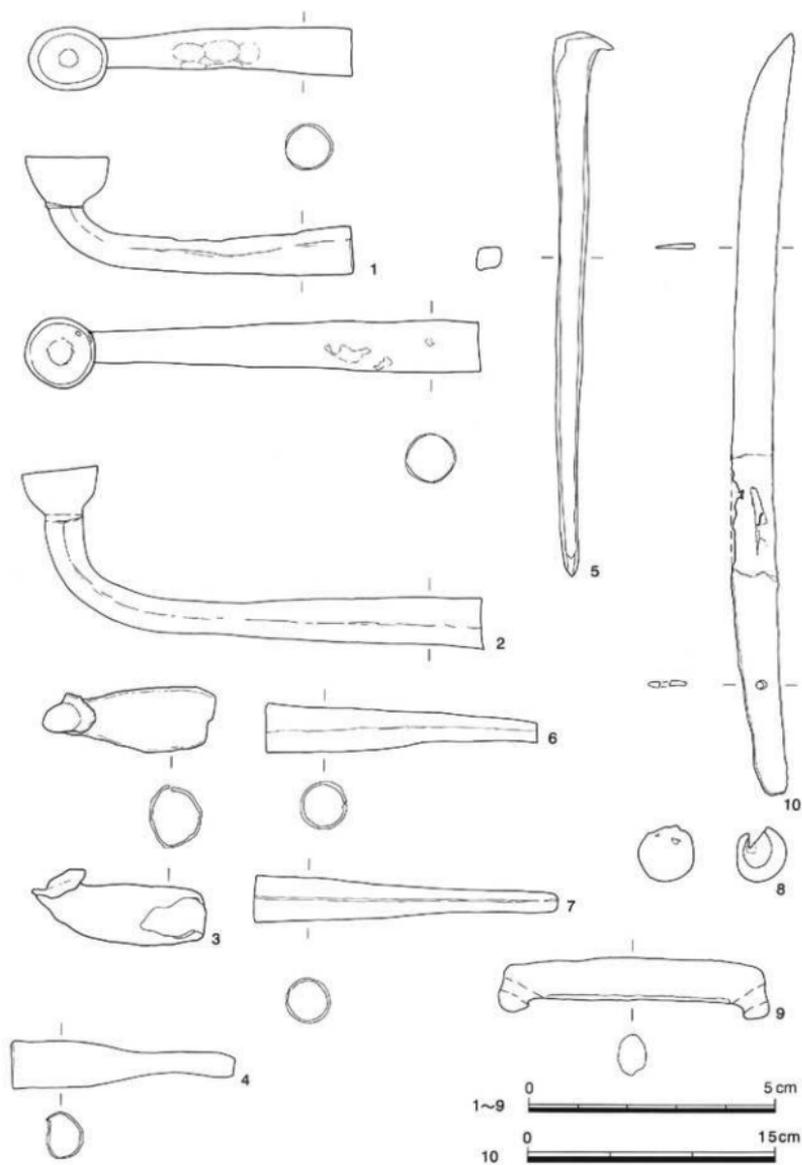
37-1は、銅鉄である。1区Ⅲ層から出土している。無茎式に分類されるものである。刃部外縁は、切先が明確に尖り、切先から基部まで、丹念に研ぎ出しが行われている。銅質は極めて良質で、一部には、鈍い金色を呈する部分さえ認められる。鉄身長5.6cm、鐵身幅2.3cm、厚さ0.5cm、重量は、現状で20.7gを計る。以上の形態から古墳前期（4世紀前半）に相当するものであろう。37-2は、鉄製の指輪と考えられる。断面は長方形に近い。表面は錆化が著しい。

38-1～3は、キセルの雁首である。いずれも真鍮製で、38-1・2には金メッキが確認できた。脂返しの湾曲の強弱によって2→1→3の順に変化すると考えられる（古泉：1985）。38-1の頭部上面には使用時の打痕とみられる窪みが数カ所認められた。38-4・6・7は、キセルの吸口である。いずれも真鍮製である。38-9には金メッキが附着していた。38-4・7の吸口端部は、内湾気味に収められている。38-5は、全長約11cmを計る釘である。頭部は、L字形に折り曲げている。横断面は、方形を早する。38-10は、鉄刀である。土圧によって出土時には中程で折れ曲がっていた。図上における刃部の若干の反りは、この折れに起因するものである。全長46.6cm、幅が刃部の平均で約2.5cmを計る。38-9は、両端に穿孔を持つ取手状の製品である。材質は、鉛とみられ、鑄造時の鑄型のズレが内側に認められる。重量23.8gを計る。38-8は、鉄砲の鉛玉である。表面は、腐食し白色を呈している。重量4.3gを計る。

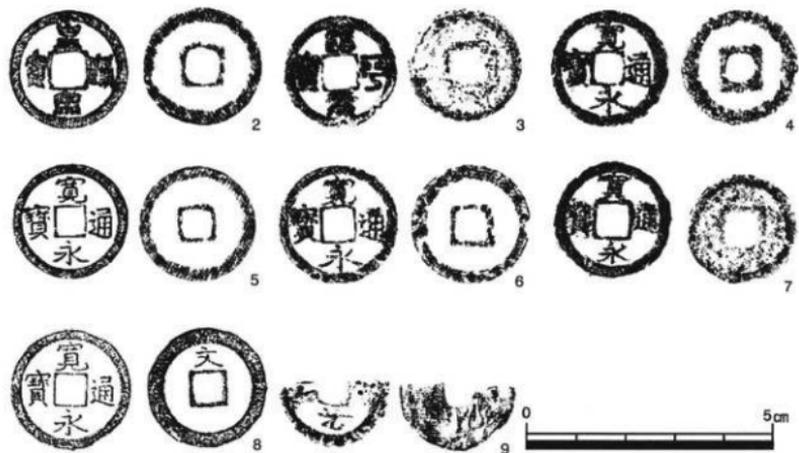
39-1は、いわゆる蓬莱鏡（ほうらいきょう）である。3区排水溝から出土している（図版5）。直径11.2cm、縁の高さ0.9cmを計る。鏡背文様は、鈕座の左向きの亀を中心に、右側に互にくちばしを合わせた2羽の鶴、上方に桐文、下方には不鮮明ながら「天ド」の銘が確認できる。鏡の先端が欠損する以外は完在し、材質の保存状態も良好である。鈕の破損部分には別の金属を溶接したような痕跡（修復跡か）が認められる。出土時には銀色で光沢を有していたが、現在では酸化が進み黒色を呈している。緑青が皆無であることから、材質は、白銅と考えられる。江戸時代に比定されよう。39-2は、皇宋通宝である。39-3～7は、寛永通宝である。3～5が古寛永、6・7が新寛永である。7は、裏面に「文」銘が認められる。



第37図 鶴喰広田出土金属器実測図



第38図 鶴喰広田出土金属器実測図



第39図 鶴喰広田出土金属器実測図

## 2 中手乱遺跡

鶴喰田遺跡と同様に出土位置よりも時代、時期を優先して報告し、出土位置は、散布図及び挿表に示した。なお、近世の陶磁器は、細片のため図示不可能であった。

### 土器

#### 縄文晩期

40-2は、洋線文系土器の浅鉢口縁部破片である。40-7は、胴部の屈折点から緩やかに外反する深鉢である。口縁部外面には1条の隆帯を有し、これに対応して内面に凹線を施す。胴部屈折点の外面に沈線間を押圧で7筋所区画する。屈折点以上はヨコミガキ、それ以下は、タテミガキ調整する。外面にはススが付着していた。御殿場市関塚塚遺跡に類似した土器が出土している。いずれも縄文晩期に比定される。

#### 弥生前期

40-3は、最大径を中位よりやや上に持ち、肩部に段を有する完形の広口壺である。口唇部にヘラ状の工具によるキザミを施し、胴部内外面をケズリ状の板ナデによって調整する。やや大きな底部には網代痕を有する。弥生前期に比定される。

#### 弥生中期前葉

41-5は、やや肩が張る長胴形態の条痕調整の広口壺である。口縁部は、若干外反し、口唇部にはやや間延びしたヘラ状工具による刻みを加えている。頸部を縦、肩部を横、肩部以下を右下がりの条痕によって調整し、底部付近を横位にケズリ調整する。なお、土器内には鹿角製短剣（第80図参照）が収納されていた。弥生中期前葉に比定される。

#### 弥生時代中期中葉

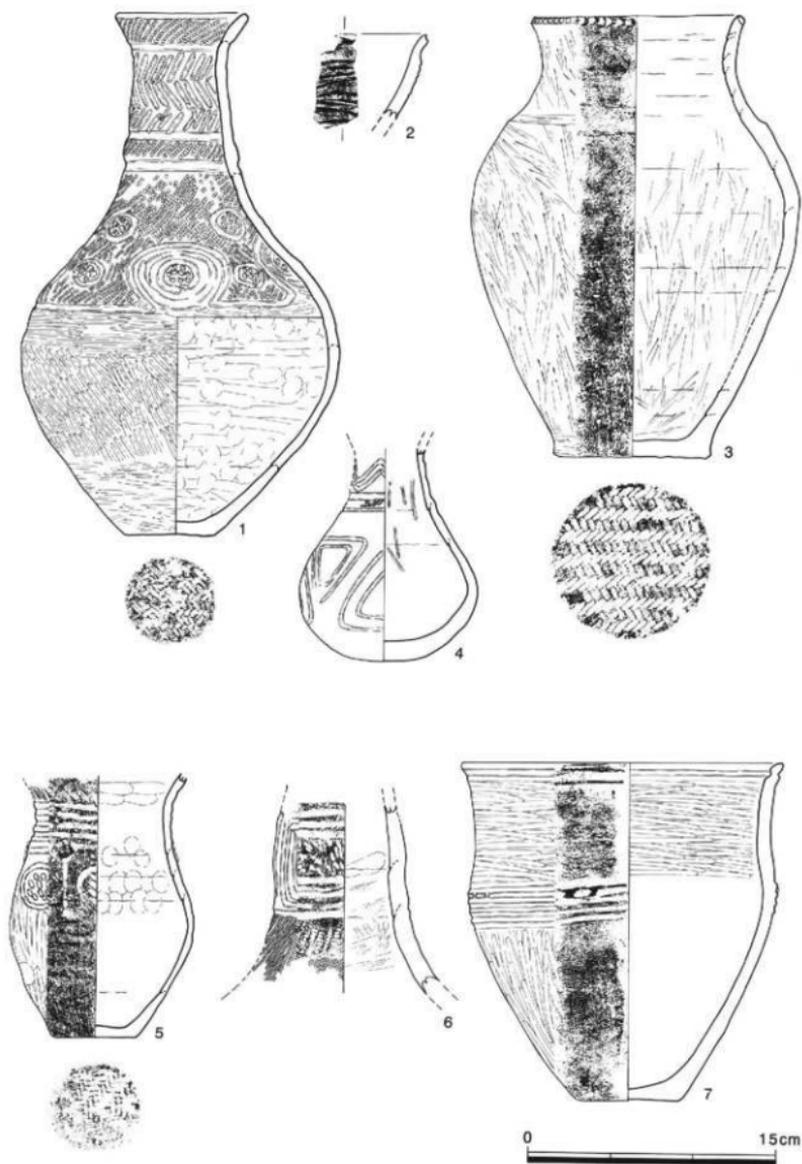
40-1は、胴部下平の一部を欠損する以外は、ほぼ完形の長頸壺である。胴部中位に最大径を有し、肩が張らず丸みを帯びた胴部にあまり外反しない細長い口頸部を付す。口縁部外面及び胴部上半には横位のヘラ描文で区画した縄文帯を有し、頸部にはヘラ描羽状文を、胴部上半には刺突で充填した大小のヘラ描円形文をめぐらす。胴部最大径付近を横方向、それ以下を右下がりの条痕によって調整した後、底部付近にケズリ状の調整を施す。底部には網代痕を有する。

40-4は、明確な底部を持たない小型の長頸壺である。頸部下位に横位のヘラ描文で区画した縄文帯を有し、頸部に2条の山形文、胴部に三角形を連続させた意匠文を施す。いずれも縄文を地文としていた可能性が高いが、磨滅が著しく判然としない。

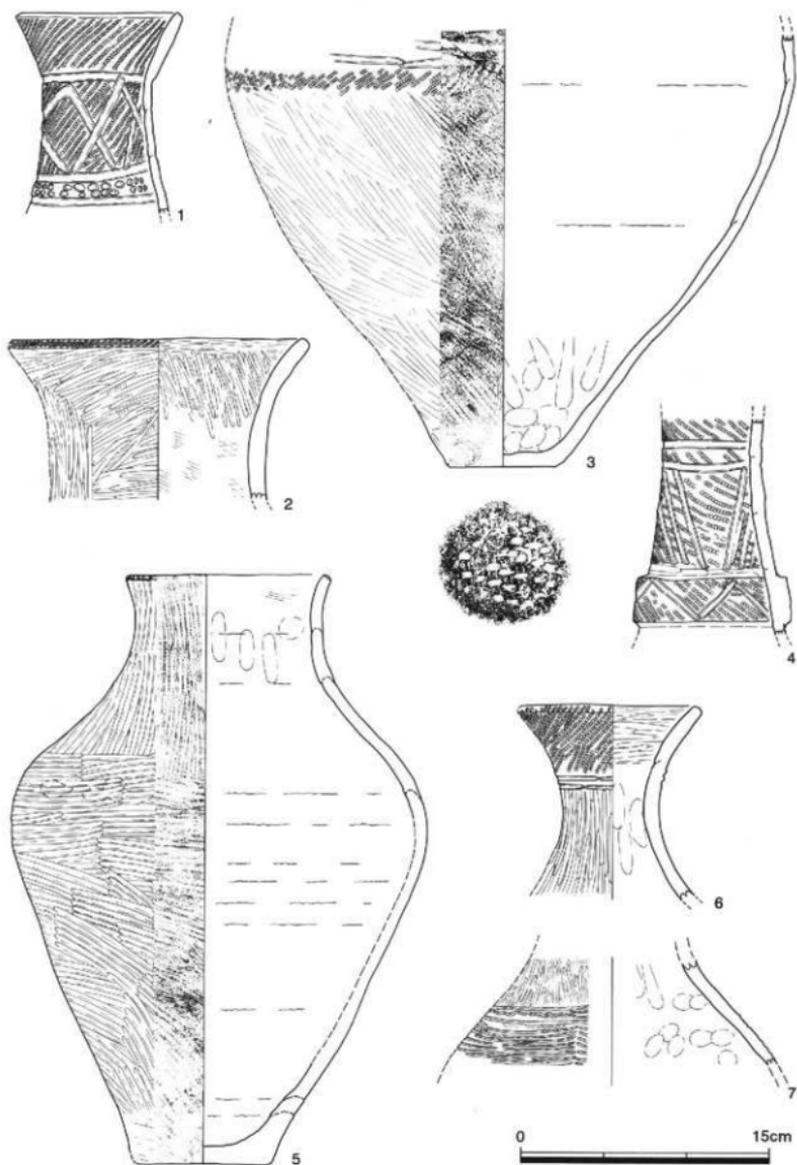
40-5は、胴部中位がやや張り、太い頸部を有する小型の広口壺である。頸部に5条のヘラ描文を施し、口縁部には縦ないし、斜めのヘラ描文を、下端には円形浮文を貼り付け、そこからヘラ描文を7筋所垂下させる。また垂下させたヘラ描の間に刺突で充填した円形文を加えている。胴部下平は、ミガキ調整し、部分的に指頭圧痕を施す。40-6は、頸部がわずかに膨らむ長頸壺の頸部である。肩部は縄文を施し、これを横位のヘラ描文で区画し、頸部には重四角文を施し、その中に刺突で充填している。

41-1・4は、縄文を地文として横位のヘラ描文で区画した中に文様を施す長頸壺の口頸部である。41-1は、緩やかに外反する肥厚気味の口縁部を有し、口唇部には弱い面を持つ。ヘラ描区画内は、菱形形の文様を施し、その下位には2段の刺突文で充填した文様帯を加えている。41-4は、頸部下位に断面長方形の粘土帯を貼り付けて文様帯としている。区画内は、V字状の文様を施している。41-3は、41-1・4のような口頸部を有する大型壺の下半部であろう。胴部最大径付近には不明瞭ながらヘラ描文と縄文が確認される。胴部下平は、右下がりの条痕によって調整した後、底部付近のみケズリを施している。

以上の土器は、弥生中期中葉に比定される。



第40图 中手乱出土土器実測図



第41图 中手乱出土土器实测图

## 弥生中期後葉

41-2は、太い頸部から緩やかに外反する口縁部を有する広口壺である。口縁部内外面は、丁寧なミガキによって調整し、やや弱い面を有する口唇部には縄文を施している。41-6は、細い頸部から緩やかに外反する口縁部を有する細頸壺である。口唇部及び口縁部外面に縄文を施し、これを頸部のくびれ部やや上位で2条のヘラ描文によって区画する。文様帯以下は、丁寧な縦位のミガキによって調整している。41-7は、肩部にヘラ描文を施す壺である。文様帯上端にはヘラ描文で区画した同波状文を施し、その下にヘラ描連弧文を施す。頸部には縦ミガキ調整を施す。

42-1は、胴部中位に最大径を持ち、やや突出した底部を有する細頸壺である。口縁部は弱く外傾し、肩部には2本1単位のヘラ描文で区画した縄文帯を持ち、その中に3~4条のヘラ描波状文を施す。42-2は、細頸長頸で、緩やかに外反する単純口縁部を有する細頸壺である。口唇部には弱い面を持ち、外面は縦位のミガキ、内面にはシボリ痕を残す。

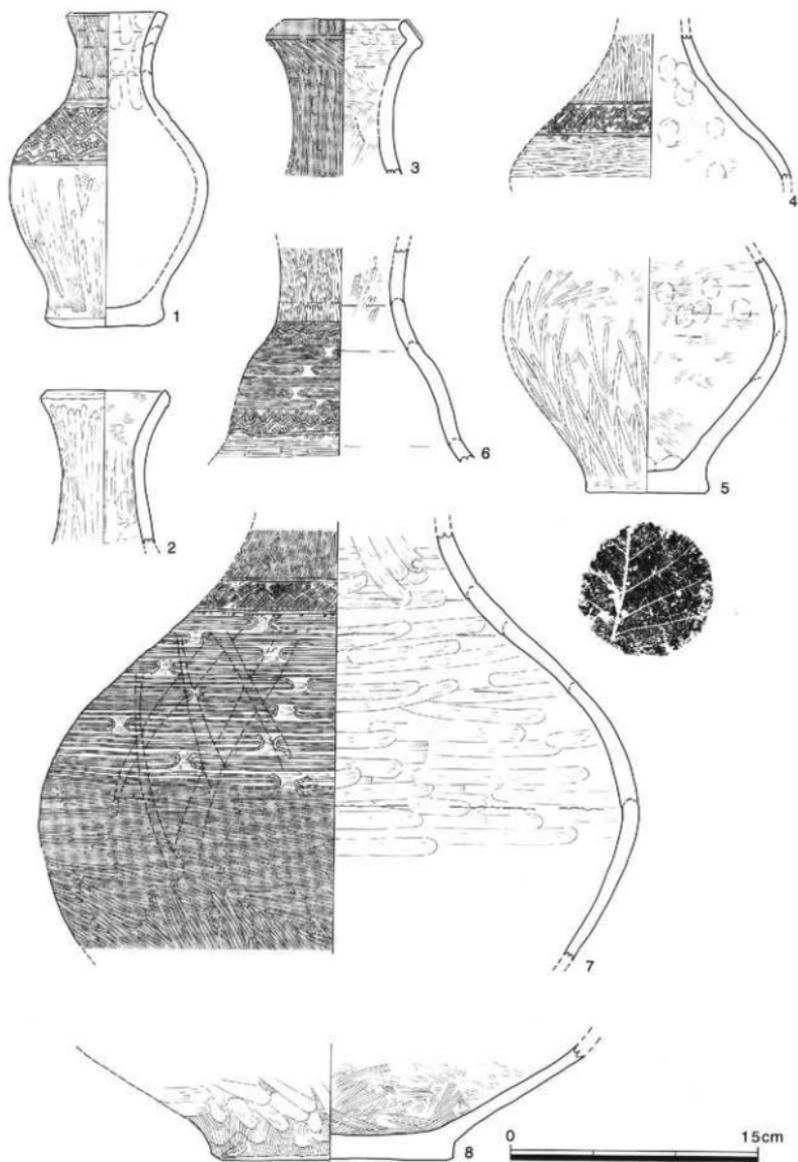
42-3は、細頸長頸の複合口縁壺である。短い複合部は、強く内傾するもので、外面には棒状浮文を施す。口唇部外面は、ミガキ後赤彩を加えている。42-4は、肩部にヘラ描文で区画した縄文帯を有し、区画内にヘラ描波状放を施すものである。胴部中位に最大径を有するもので、42-5のような底部を有すると推測される。外面は丁寧にミガキ調整する。

42-6は、頸部に明確な影を有するもので、くびれ部の上端からヘラ描波状文を加えた縄文帯、擬似流水文、縄文帯を施し、その下位に無文帯を形成し、胴部施文につながる。42-7は、胴部中位に最大径を有する大型壺である。42-6と胎土、色調、文様構成など類似点が多いが接合しなかった。肩部にはヘラ描文によって区画した縄文帯を有し、それ以下、胴部最大径付近までヘラ描きによる擬似流水文を施す。文様帯以外は丁寧にミガキ調整し、赤彩している。なお、胴部には、菱形に編み込まれた篋日痕が認められる。図示した篋日痕は、土器に残された圧痕ではなく、巻縮みの側面観を示している。42-8は、大型壺の底部である。内外面ともにハケ調整を施し、外面にのみナデを施す。

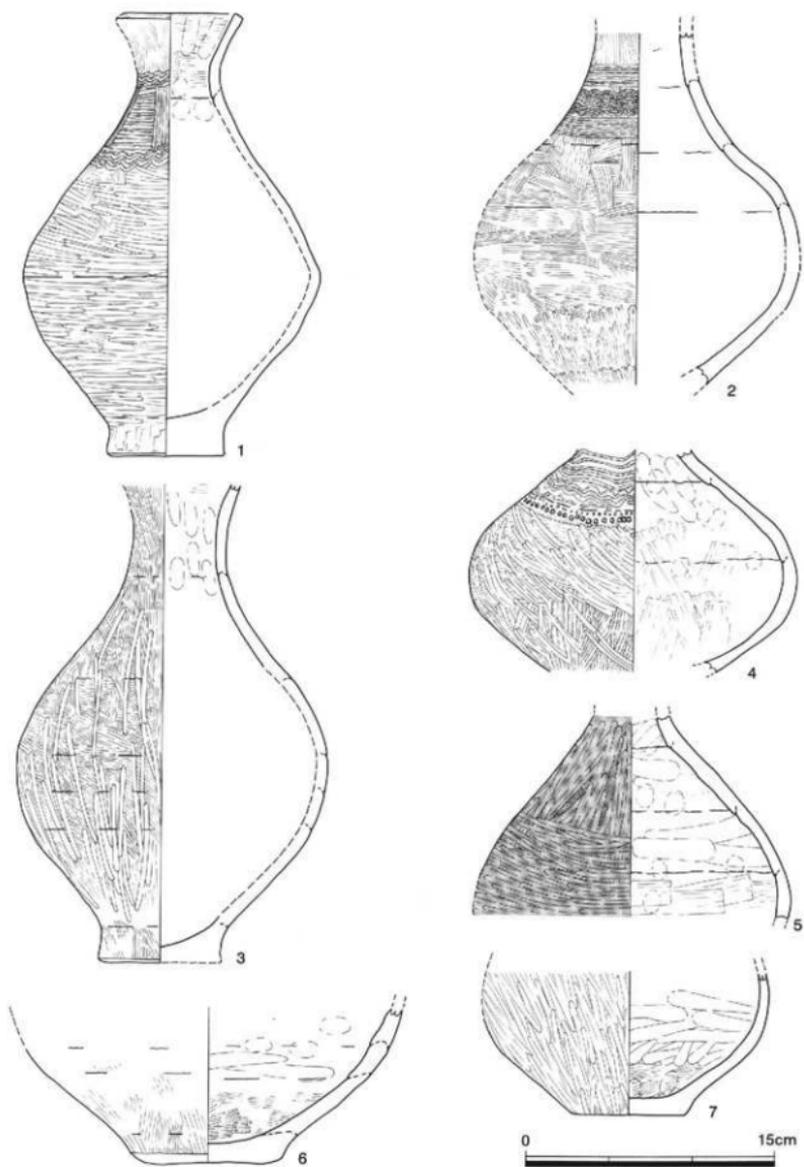
43-1は、直線的に弱く開く単純口縁部を有する細頸壺である。胴部中位で屈曲し、突出した底部を有する。肩部の文様構成は、上端を擬描波状文で区画した直線文を縦位の直線文で区画するものである。胴部は、丁寧なミガキによって調整する。

43-2は、丸みを帯びた胴部中位に最大径を有する壺である。頸部には擬描直線文と波状文を交互に施す。胴部下半にミガキを施す以外は、ハケ調整を残している。43-3は、丸みを帯びた胴部中位に最大径を持ち、突出した底部を有する無文の細頸壺である。外面はハケ後、縦位の粗いミガキ調整を施す。43-4は、胴部中位が強く張る壺胴部である。肩部にはやや太い原体による直線文と波状文、刺突文を施している。胴部は、粗いハケ後、斜めの粗いミガキ調整を加えている。43-5は、外面を丁寧なミガキによって調整し、赤彩を加える壺である。口縁部及び胴部下半を欠損するが、やや膨れした形態を有すると推測される。43-6・7は、壺の胴部下半である。いずれもほとんど突出しない底部を有するもので、43-6はハケ、43-7はミガキによって外面を調整している。

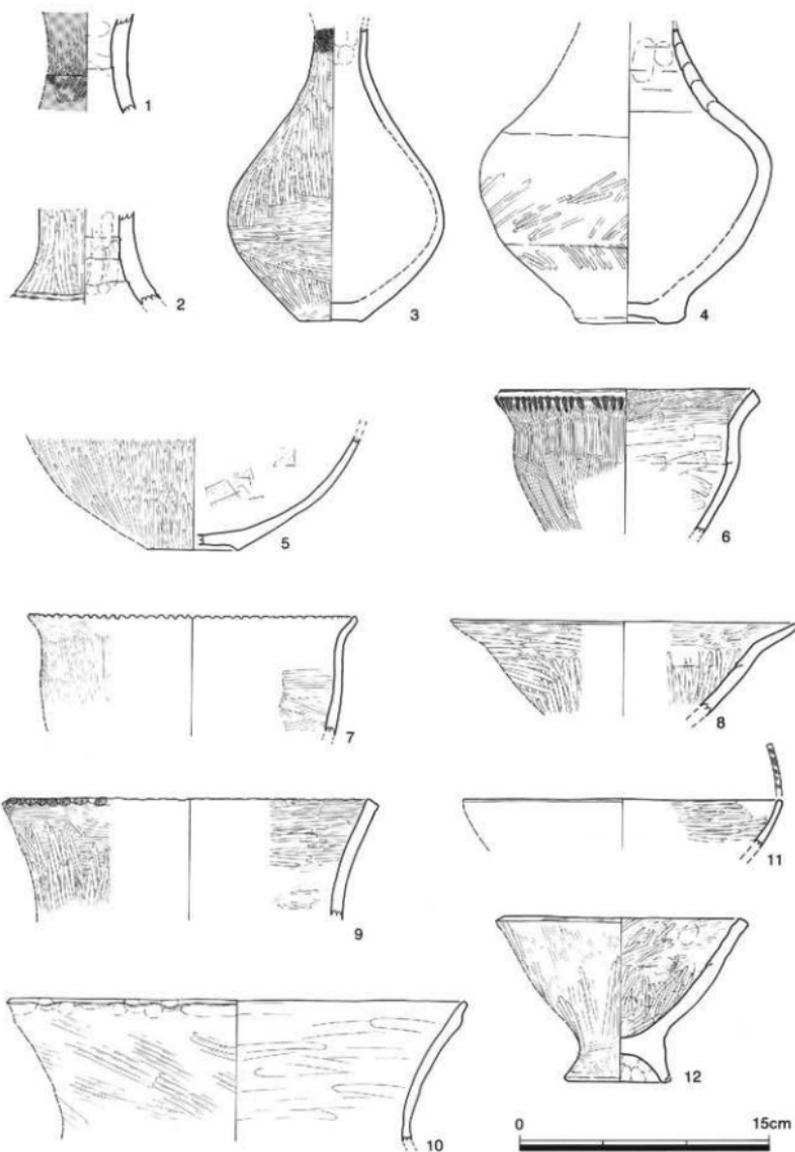
44-1は、頸部に小さな段を作り出し、縄文帯とする細頸壺の頸部である。無文部は、丁寧にミガキ調整し、外面全面に赤彩を加えている。44-2は、肩部に1条のヘラ描文が確認できる壺頸部である。外面は、丁寧にミガキ調整し、内面には、シボリ痕を残している。44-3は、口縁部を欠損する以外は関係の長頸壺である。胴部中位やや下位に最大径を有し、全く突出しない底部へとつながる。非常に細い頸部外面には縄文を施している。胴部外面は、ハケ後ミガキ調整するが、一部にハケを残している。44-4は、やや肩が張り、やや突出した上げ底状の底部を有する壺である。口縁部以外はほぼ完形である。胴部下半には、不明瞭ながらミガキ調整が観察できる。44-5は、胴部下半が丸みを帯びた壺である。底部は、上げ底状を呈し、底面及び胴部外面は丁寧にミガキ調整を施す。



第42图 中手乱出土土器实测图



第43图 中手乱出土土器实测图



第44図 中手乱出土土器実測図

44-6・7・9・10は、口径が胴部最大径を凌駕する深鉢である。44-10は、鶴喰広田1区出土深鉢（第23図6）と接合したため、反転復原し図化した。口唇部には弱い面を持ち、指頭圧痕を施す。外面は右下がりの条痕、内面は、ナデ調整する。44-6は、頸部でわずかにくびれ外反するもので、面を持つ口唇部下端にハケ状工具によるキザミを施す。外面は、タテハケ、内面は、胴部を板ナデ、口縁部をヨコハケ調整する。44-7は、直立気味の胴部からほとんどくびれることなく緩やかに外反するものである。口唇部にヘラ状工具によるキザミを施し、内外面ともにハケ調整を行う。44-9は、胴部から緩やかに外反する口縁部を有するもので、明瞭な面を有する口唇部にはハケ状工具によるキザミを施す。内外面ともにハケ後、粗いミガキを加えている。

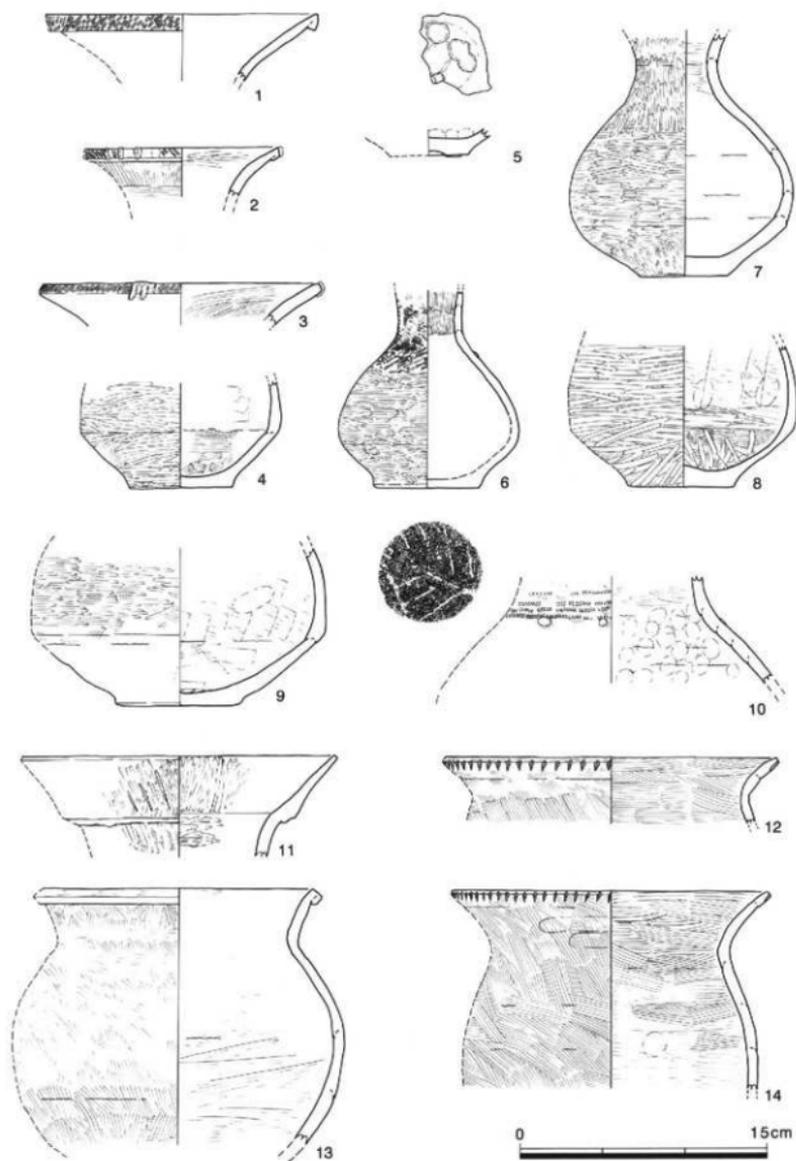
44-11は、鉢または、椀状の高環の口縁部である。口唇部に弱い面を有し、縄文を施す。磨減が著しいが、内面には、ミガキが確認できる。44-8・12は、高環である。44-8は、坏部に鋭く屈折した口縁部を付すもので、口唇部は丸く取める。内外面共にハケ後ミガキ調整している。44-12は、低い脚部にやや深い椀状の坏部が付される。口唇部を面取りし、内外面共にハケ後、粗いミガキ調整を行う。

### 弥生後期

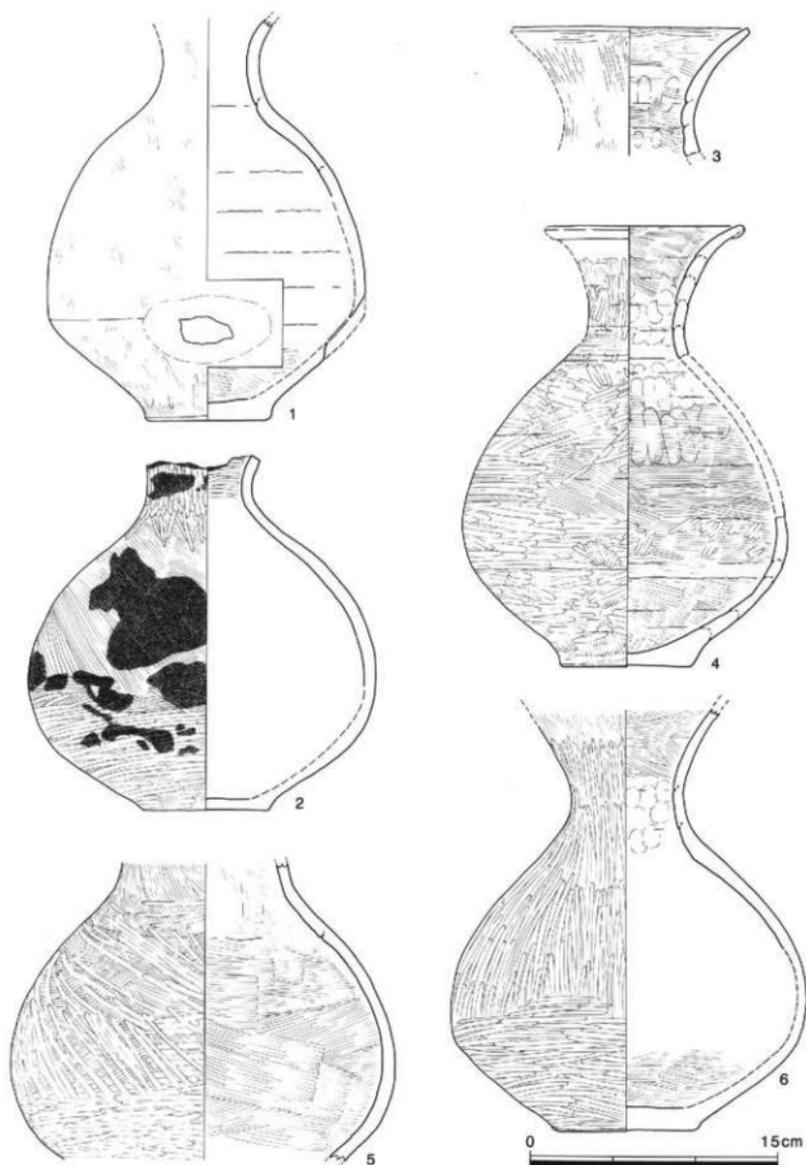
45-1・2は、薄い折返し口縁を有する壺である。口唇部に縄文を施すもので、45-2は、豆粒状浮文を数個施している。45-3は、ラッパ状に開く単純口縁壺である。口唇部には縄文施文後、豆粒状浮文を施している。45-11は、丁寧にミガキ調整する複合口縁壺である。複合部外面には3本程度のヘラ描文が認められる。45-4・6～9は、壺の頸～胴部下半である。いずれも胴部下半はヨコミガキ調整する。45-6は、頸～胴部にやや細かな縄文を施した後、3個1組の円形浮文を施すもので、45-7は、外面を全面ミガキ調整する無文のものである。45-5は、壺の上げ底状の底部である。接地面には円形浮文状の粘土が付着しているが、意図的なものか否かは判然としない。45-10は、肩部に竹管状工具による列点文を4条程度施す太頸の壺である。列点文の下端には円形浮文が認められる。このような文様構成は、県西部の菊川式の薄刺突直線文を模倣したものと考えられる。45-12・14は、口縁部外面に輪痕を残す壺である。いずれも口径と胴部最大径が等しいか口径がやや上回る形態と見られ、面取りした口唇部下端にハケ状工具によるキザミを施している。45-13は、折返し口縁を有する壺である。丸みを帯びた胴部に最大径を持つものである。

46-1・2・6は、口縁部を欠損する広口壺である。胴部下半に鈍い稜を持ち、若干突出する底部を有する46-1と下膨れの胴部にほとんど突出しない底部を有する46-2・6に大別できる。46-1はやや肩が張る形態を有するもので、外面はハケ後胴部下半にのみミガキを施している。胴部屈曲部付近には焼成後の穿孔が認められる。穿孔は、器面を削るような手法で行われており、穿孔部周囲は平坦に削られている（調査時の欠損ではない）。46-2は、頸部内外面及び胴部下半をミガキ調整し、胴部上半にはハケを残すものである。頸部が水平に打ち欠かれており、その破断面及び外面には炭化物が付着していることから、口縁部の欠損後も煮沸形態として使用していたことが確実である。46-6は、肩部がほとんど張らないもので、外面はハケ後ミガキ調整している。46-5は、46-2とほぼ同様の胴部形態を有するもので、外面はハケ後粗いミガキを施している。46-3は、大きく外反する単純口縁を有する壺である。内外面共にハケを残している。46-4は、やや丸みを帯びた胴部に直立気味の頸部を付し、大きく外反する折返し口縁を有する壺である。外面は、ハケ後、やや粗いミガキによって調整している。

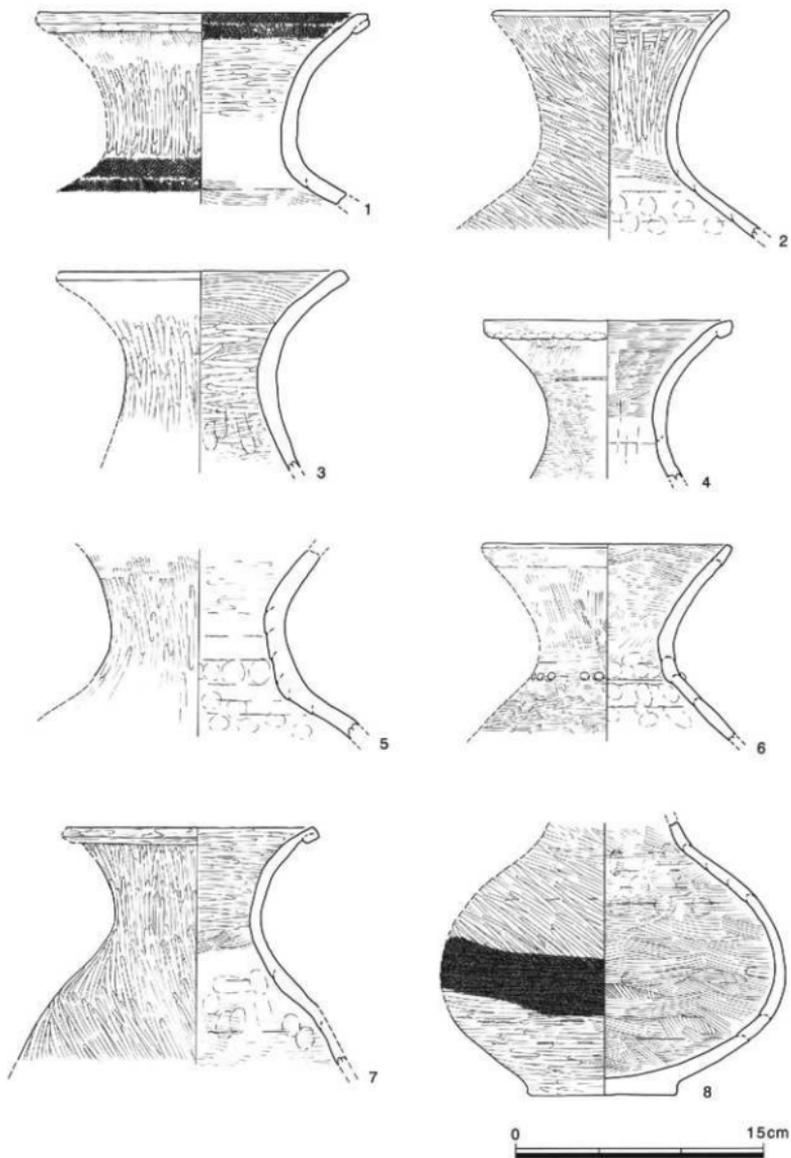
47-1は、太い頸部に大きく外反する折返し口縁を有する壺である。口縁部内面及び、肩部に羽状となる縄文を施し、2個1組と3個1組の円形浮文を加えている。47-2・3・6は、単純口縁を有する広口壺の口頸部である。47-2はあまり外反しない口縁部を有するもので、口頸部内面及び外面はミガキ調整する。47-3は、やや強く外反するもので、頸部内外面をミガキ調整する。47-6は、口縁部が外傾するもので、



第45图 中手乱出土土器实测图



第46图 中手乱出土土器实测图



第47图 中手乱出土土器实测图

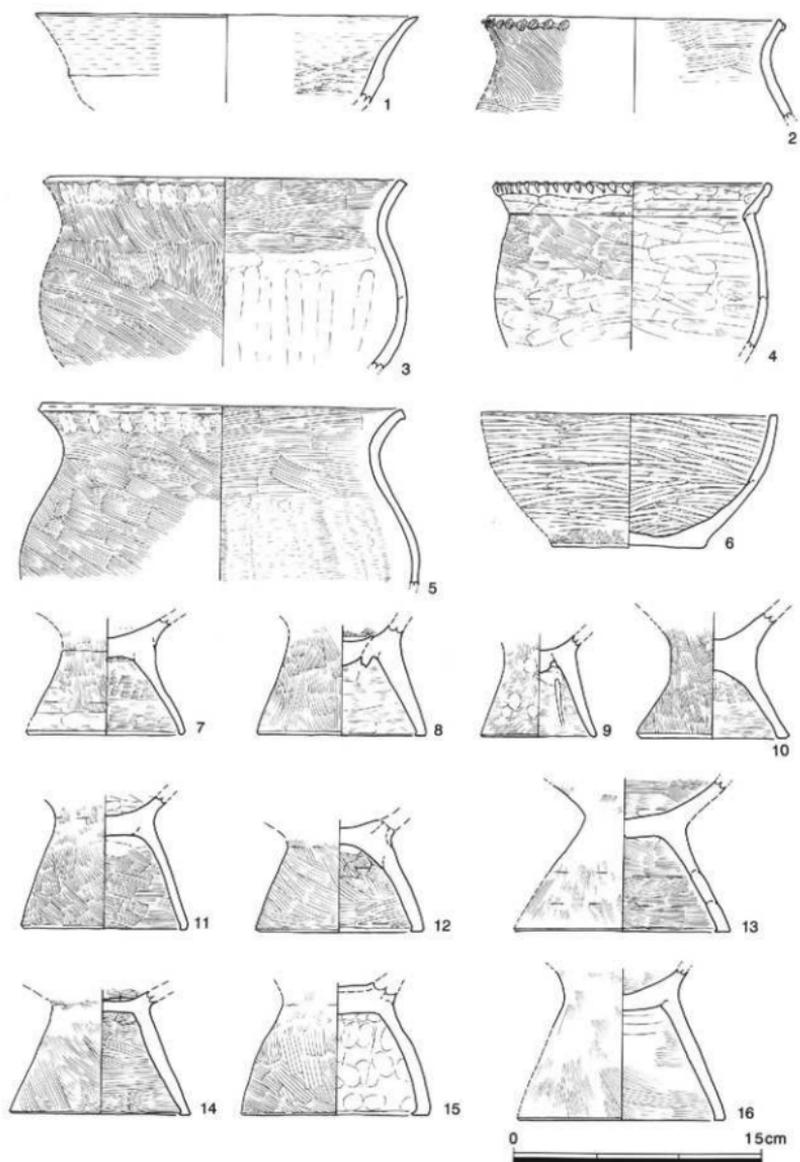
口頸部内外面にハケを残し、肩部のみミガキを施している。頸部には円形浮文を加える。47-1・7は、折返し口縁を有する広口壺である。47-4は、口縁部内面に弱い稜を有するもので、折返し部分の下端には指頭圧痕を顕著に残している。頸部外面は、ハケ後、強いヨコナデを施すためか一部沈線状となる部分がある。47-7は、外面及び口縁部内面に丁稜にミガキ調整する。47-5は、やや太い頸部を有する大型の甗、47-8は、偏球形の胴部にわずかに突出する大きな底部を有する壺である。いずれも口縁部形態は不明であるが、外面はハケ後ミガキを施している。

48-11は、弱く屈折し外反する口縁を有する高坏の坏部と考えられる。東海西部の山中式の高坏を模倣した可能性がある。やや深い坏部を有すると考えられ、内外面ともに丁寧なミガキを施し、口縁部付近にはヨコナデを加えている。48-2・4は、口唇部下端にキザミを施す台付甗の口縁部である。いずれも口径と胴部最大径がほぼ等しいか後者が上回るものである。48-2は、胴部外面に横斜位のハケを施す。48-4は、外面をハケ、内面をナデ調整した後、口縁部外面及び胴部内外面の一部をケズリによって整形している。48-3・5は緩やかに外反する口縁を有する台付甗である。口径と胴部最大径がほぼ等しいか後者が上回るもので、口唇部には明確な面を持つ。48-7~16は、台付甗の台部である。48-13・16のような大型品とそれ以外の中・小型品に大別できよう。内外面をハケ調整するものが多いが、調整方法や底部の成形方法に少しづつ違いが見られる。48-8・9は明らかに円整充填による成形である。特に48-8は、充填周囲の粘土がまくれあがった状態が確認できる。

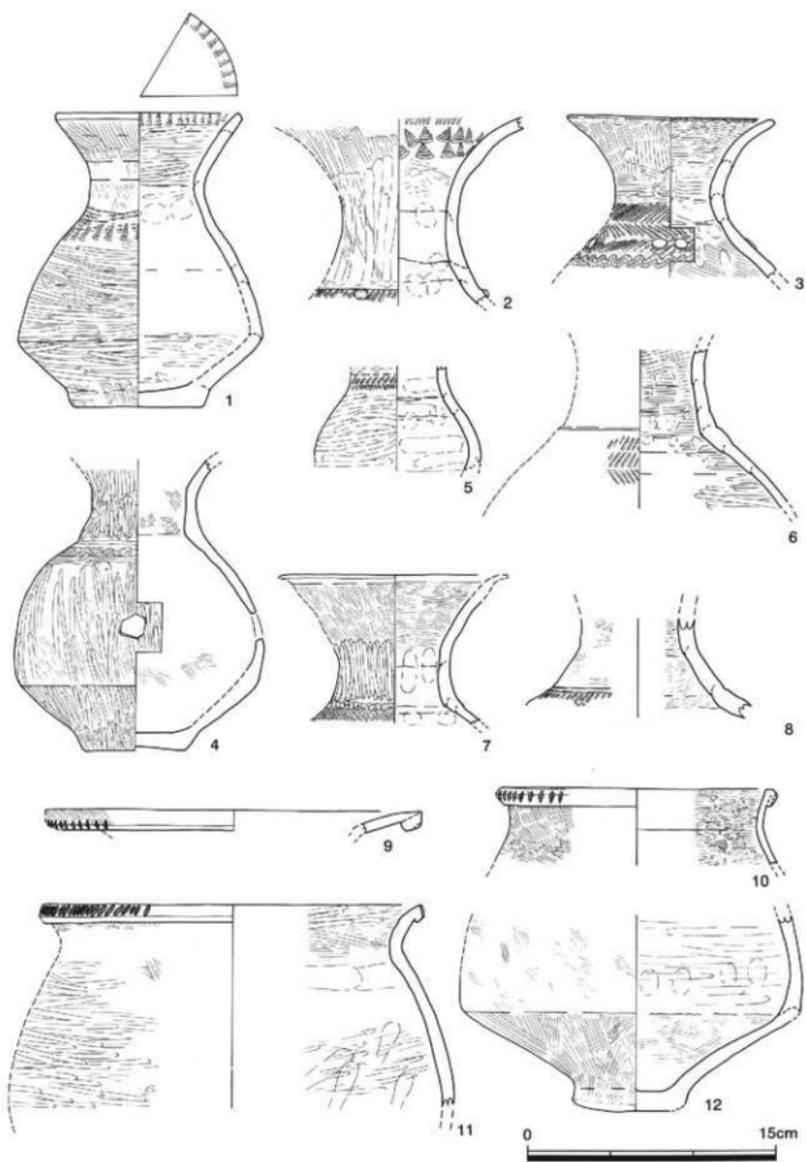
49-11は、肩がほとんど張らず胴部下半が屈折する胴部に、やや太めの頸部から外傾する口縁部を有する広口壺である。口縁部内面に扇形文、肩部には櫛描直線文と扇形文を施す。49-2・6~8は、肩部に有段羽状文を施す甗である。49-2・7は、頸部外面をハケ後ミガキ調整するもので、いずれも大きく外反する折返し口縁を有するものであろう。49-7の口縁部外面には折返し口縁部の刺痕が認められる。また、肩部の段はミガキによって潰れている。49-2は、口縁部内面に放射状の櫛描直線文と扇形文を施す。49-6・8は、櫛刺突文を2段以上施すものである。磨減が著しく判然としなが、49-8は、頸部外面をハケ後ヨコナデ調整している。49-3・5は、肩部に段を持たない櫛刺突文を施す壺である。49-3は、やや太い頸部から大きく外反する単純口縁を有する。肩部には櫛刺突羽状文を3段、その下に波状文を施し、2個1組の円形浮文を4箇所または5箇所に加えている。49-5は、小型壺の部類に入るもので、櫛刺突直線文と羽状文を頸部に施し、頸部は、ヨコナデ、胴部はミガキ調整している。49-4は、肩部に櫛描直線文と波状文を交互に施すものである。胴部下半で屈曲し、やや丸みを帯びた胴部を有する。外面は縦方向の丁寧なミガキによって調整している。なお、胴部中に焼成後の円孔を穿っている。49-9は、甗状に大きく外反する口縁部を有する高坏である。折返し口縁を有し、口唇部下端にはハケ状工具によるキザミを施している。49-10・11は、折返し口縁を有する平底の甗（鉢）と考えられる。胴部に最大径を有するもので、口縁部は、緩やかに外反する。49-10は口唇部下端に、49-11は、口唇部にハケ（櫛）状のキザミ（刺突）を施す。口縁部内外面ともに、ハケ後ミガキ調整している。49-12は、胴部下半が屈折し、底部がやや突出する壺胴部である。外面は、ハケ調整を残している。

#### 古墳時代前期

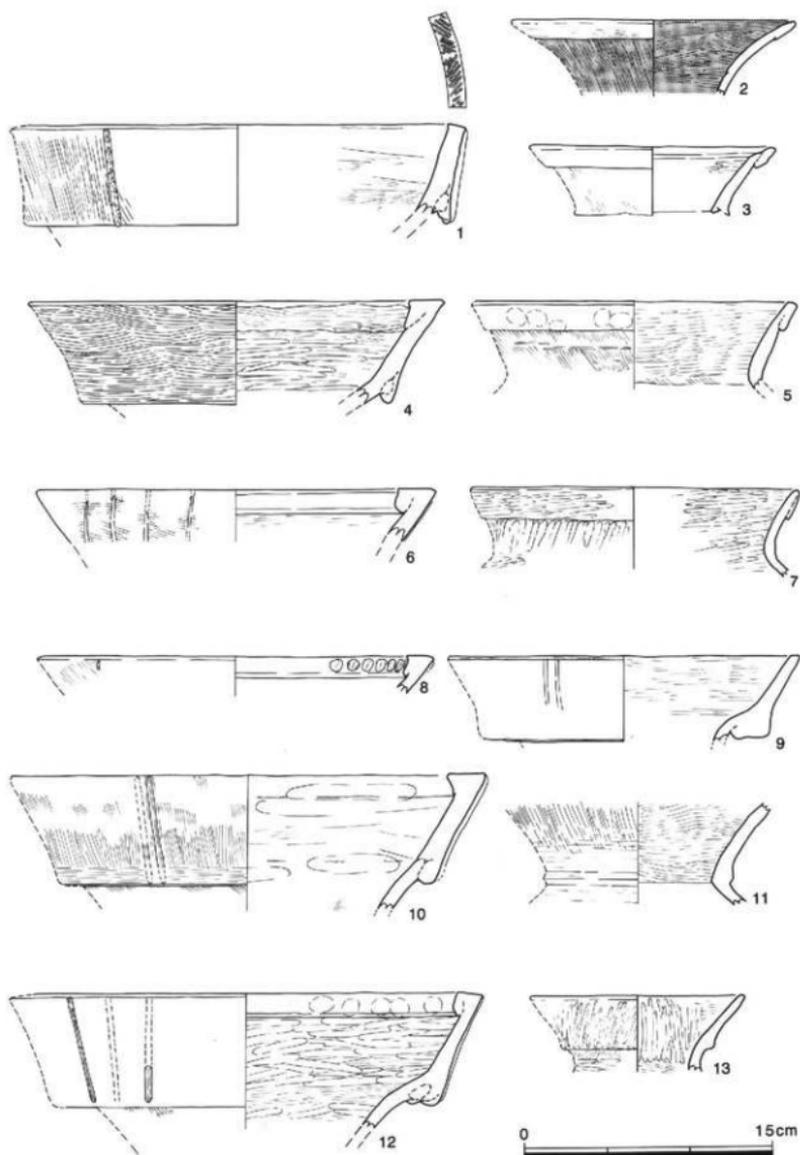
50-1・4・6・8~10・12は、大型の複合口縁壺である。50-11は、口縁部がほとんど外反しないもので、口唇部に強い面を持ち、縄文を施している。複合部外面には指頭または爪圧痕を残す棒状浮文が1本確認できた。50-4・10は、複合部がやや強く外傾し、口唇部内面に断面三角形に近い突帯を施すものである。複合部外面にハケを残し、50-10には単位は不明であるが、2本以上の棒状浮文を付加している。50-6・8・12は、複合部がやや強く外傾し、口唇部内面に断面四角形の突帯を施すものである。



第48图 中手乱出土土器实测图



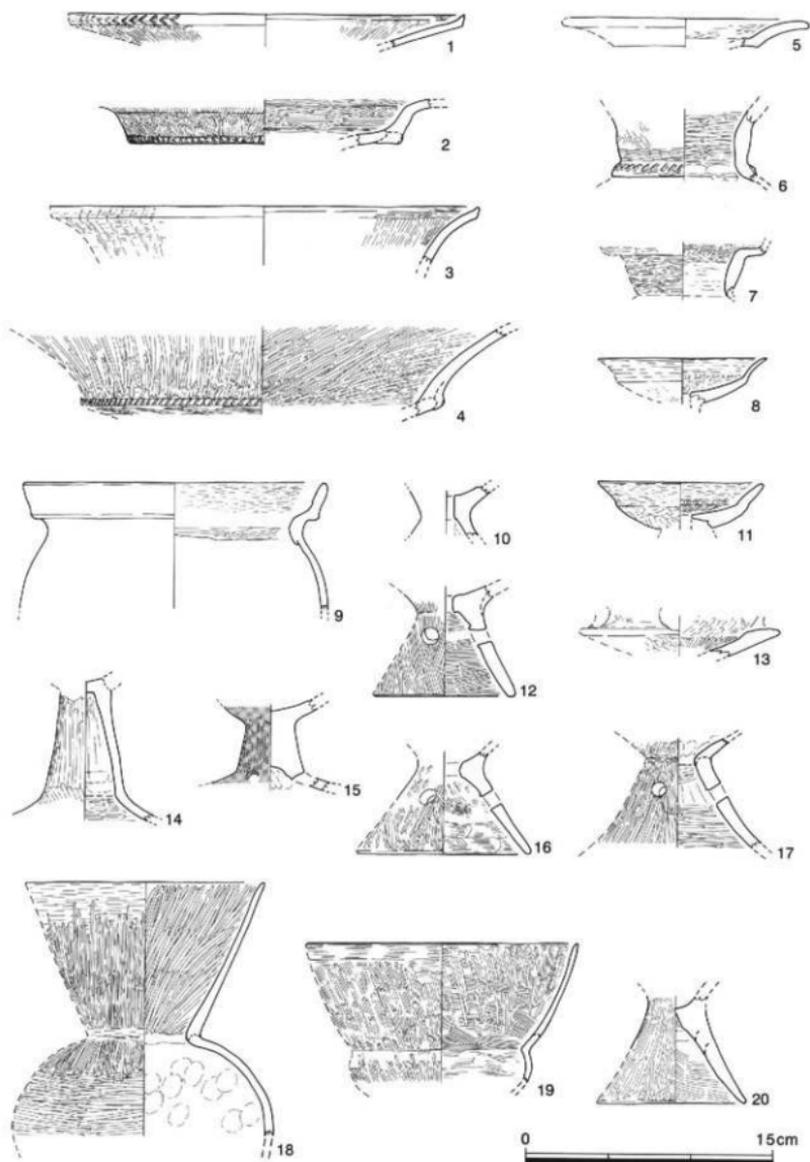
第49图 中手乱出土土器实测图



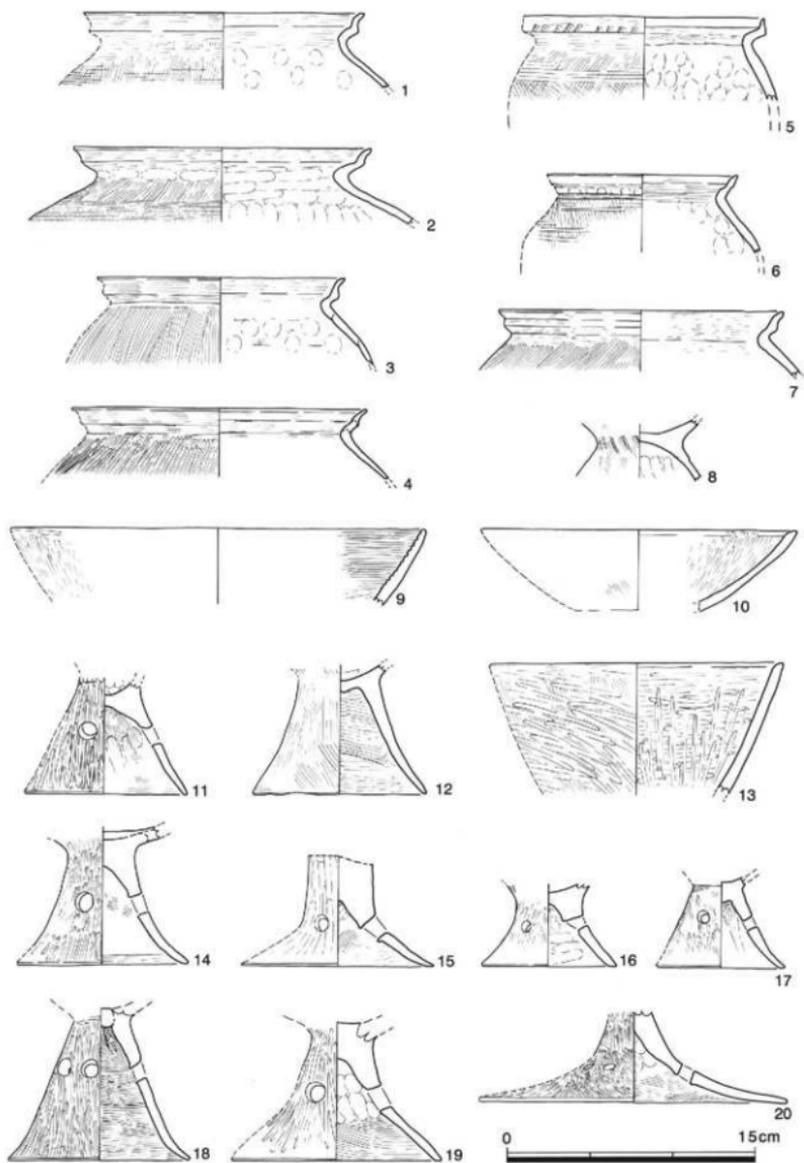
第50图 中手乱出土土器实测图

50-8は、突帯上に指頭及び爪痕による連続押圧文が施されている。50-2・3・5・7は、薄い折返し口縁を有する広口壺である。短い口頸部を持ち、頸部で強く屈折する形態を有する。50-3は、口縁部内面に折り返し部接合によって作り出された明瞭な段を有する。50-9・13は、大～小型の複合口縁壺である。50-9は、頸部が大きく外反するもので、複合部下端には粘土帯を厚く垂下させる。複合部外面には2本以上のヘラ描文を加えている。50-13は、小型の複合口縁壺で、内外面ともにハケ後、ミガキを施している。50-11は、強く屈折する頸部外面に断面三角形の低い突帯を付す大型壺である。

51-1～7は二重口縁壺の口頸部である。51-1・3は、口縁部が大きく外反し、口頸部を上方外に若干つまみあげるもので、口頸部外面に櫛またはヘラ状工具による刺突文を施している。内外面ともに丁寧なミガキ調整を施す。51-3は、口縁部外面に放射状の暗文を加える。51-4は、二重口縁接合部に櫛刺突文を施すもので、口頸部を欠損するが、51-1・3のような口頸部を有すると考えられる。51-6は、頸部が屈折して大きく外反するもので、屈折部には櫛刺突文を施した低い突帯を付す。突帯付近にヨコナデを施す以外は、内外面ともに丁寧なミガキ調整を施す。51-4・6は、接合しなかったが、色調、胎土が類似しており、同一個体の可能性が高い。51-5は口縁部が大きく外反するものである。口頸部は丸く収め、器壁はやや厚い。51-7は、頸部が筒状に外傾し、大きく屈折する口縁部を有する畿内系の小型二重口縁壺である。外面は、横位の細かいミガキを施している。精良な胎土を使用しており、他の土器とは明確に判別できるものであった。51-9は、複合口縁を有する北陸系の壺と考えられる。摩滅が著しく口縁部内面にヨコナデ、頸部内面にハケを確認できるだけであった。51-8・10～13・16・17・20は、器台である。51-8・11は、受部が二段に屈曲し、受部に貫通孔を穿つものである。いずれも受部外面は、ケズリ、内面は、放射状のミガキを施し、口縁部は、ヨコナデを施す。51-10・12・16・17は、直線的に開く脚部を持ち、受部に貫通孔を有するものである。脚部には3方向から透かしを穿つ。51-16・17は、ミガキを施すが、51-12は、ハケ調整である。51-20は、受部が大きく窪むことから器台と判断した。ほぼ直線的に開く脚部は、ミガキ調整を施す。透かしは持たないものである。51-13は、受部が斜め上方に突出し、その内側から口縁部が立ち上がる異形器台である。口縁部には円形の透かし孔を2箇所確認できた。内外面ともに丁寧なミガキを施す。51-14・15は、高坏の脚部である。51-14は、柱状の脚部が裾部で大きく屈折するもので、外面はミガキ調整、内面にはシボリ痕を残している。51-15は、口徑を脚部径が大きく変化する形態の高坏である。残存する坏部の立ち上がりから半球形の坏部を有するものと考えられる。51-18は直口壺、51-19は丸底鉢である。51-18は、球形に近い胴部を有し、細くくびれる屈折した頸部から直線的に開く長い口縁部を有するものである。胴部外面及び口縁部内外面は、丁寧なミガキを施す。51-19は、長く内湾気味に開く口縁部径が胴部径を凌駕するものである。内外面ともにハケ後、粗いミガキを施している。52-1～8は、S字状口縁付甕である。52-5は、直立気味の口縁部を有するもので、外面に押し引き文を施す。胴部外面は、羽状のハケ後、横位のハケを頸部のやや下がった位置に施す。口縁部外面の押し引き文は、S字変分類のA類(赤塚:1990)に認められる要素である。52-2は、頸部がやや強く屈折し、外傾が強い口縁部を有するものである。頸部内外面には指頭圧痕が顕著に認められる。強く張る肩部外面にはヨコハケが施される。口唇部に面を持たず、丸く収めること、口縁部の外傾が強いことなどから、S字変分類のC類(赤塚:1986)に近い形態を有する。52-3・4・6・7は、頸部の屈折が弱く、口縁部も直立気味となるものである。胴部形態をうかがえる資料は少ないが、52-2に比べいずれも肩部の張りが弱いものと考えられる。52-6は、頸部内面をハケ調整し、肩部外面のハケを頸部に密接して施すなど、調整方法は、S字変分類のB類に近いものである。52-8は、台接合部である。外面には強い当たりの不連続ナメハケが施される。52-9・10・13は、有段高坏の坏部と考えられる。52-13は、口唇部に内傾面を有し、深い坏部を有する点から古相の



第51图 中手乱出土土器实测图



第52图 中手乱出土土器实测图

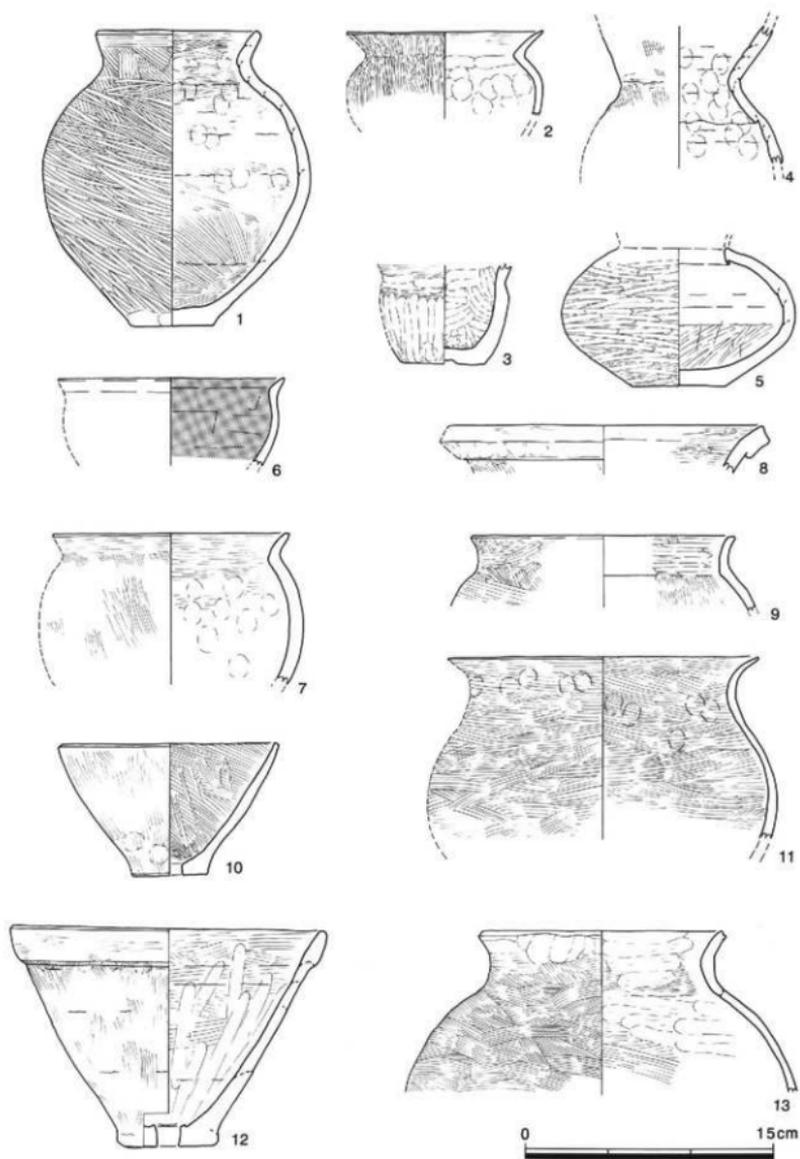
部類に入ろう。52-9・10は、口縁部の外傾が若干強いものである。52-9は、内面にヘラ描直線文を数条施している。52-11・12・14-20は、高坏または器台の脚部である。52-14・18・19は、裾部が大きく外反するものである。脚部中位またはやや上位に円形の透かしを穿つ。52-18は、2個1組の円形透かしを数カ所施すものである。52-11・16・17は、脚裾部があまり開かない低群のものである。脚中位に円形透かしを穿っている。52-20は、低脚で脚裾部径が坏部径を凌駕する高坏である。2個1組の透かしを数カ所に施す。52-12は、内外面をハケ調整するものであるが、裾部が若干開き気味となることから、高坏の脚部と判断した。透かしは認められない。52-15は、中実柱状になる部分から大きく開く脚部である。屈曲部付近に透かしを穿っている。

53-1は、頸部がくびれ、屈折して内湾する口縁部を有する東遼江系の壺である。肩部にはハケを残し、無文である。53-11は、倒卵形の胴部に短い口縁を有する短頸甕である。ハケ調整後、口縁部をヨコナデ、胴部をやや粗いミガキによって調整する。53-2は、やや肩の張った球形の胴部にく字に屈折する口頸部を有する鉢である。外面は、縦基調の丁寧なミガキで調整する。53-3は頸部がわずかにくびれるナデ調整の手づくね土器である。底部は、中央部が若干窪んでいる。53-5は、偏球形の胴部を有する直口甕の胴部である。平底を呈し、外面には横基調のミガキを施す。頸部内面には口頸部接合時の粘土のはみ出しが認められる。53-6は、頸部がほとんどくびれずに外傾する口縁を有する鉢である。口唇部は丸く収めている。53-9は、丸みを帯びた胴部に直立気味の口縁部を有する鉢である。外面及び口縁部内面は、ハケ後ミガキ調整している。53-8は、口縁部内面に弱い稜を有する大型の折り返し口縁壺である。内外面ともにミガキ調整を行い、折り返し部には指頭圧痕を顕著に残す。53-7・11は、口唇部を丸く尖り気味に収める台付甕である。53-11は、薄手で、内外面をハケ調整する。53-13は、口唇部に面を持つ甕(台付きか)である。胴部最大径が口径を大きく凌駕し、明確な肩部を形成している。53-10・12は、やや突出気味の底部を有し、円孔を穿つ有孔鉢または甕とされているものである。53-10は、単純口縁で、口唇部に明確な面を持つ。内外面ともにハケ調整を施す。53-12は、薄い折り返し口縁を有し、内外面ともにハケ後ナデを施す。

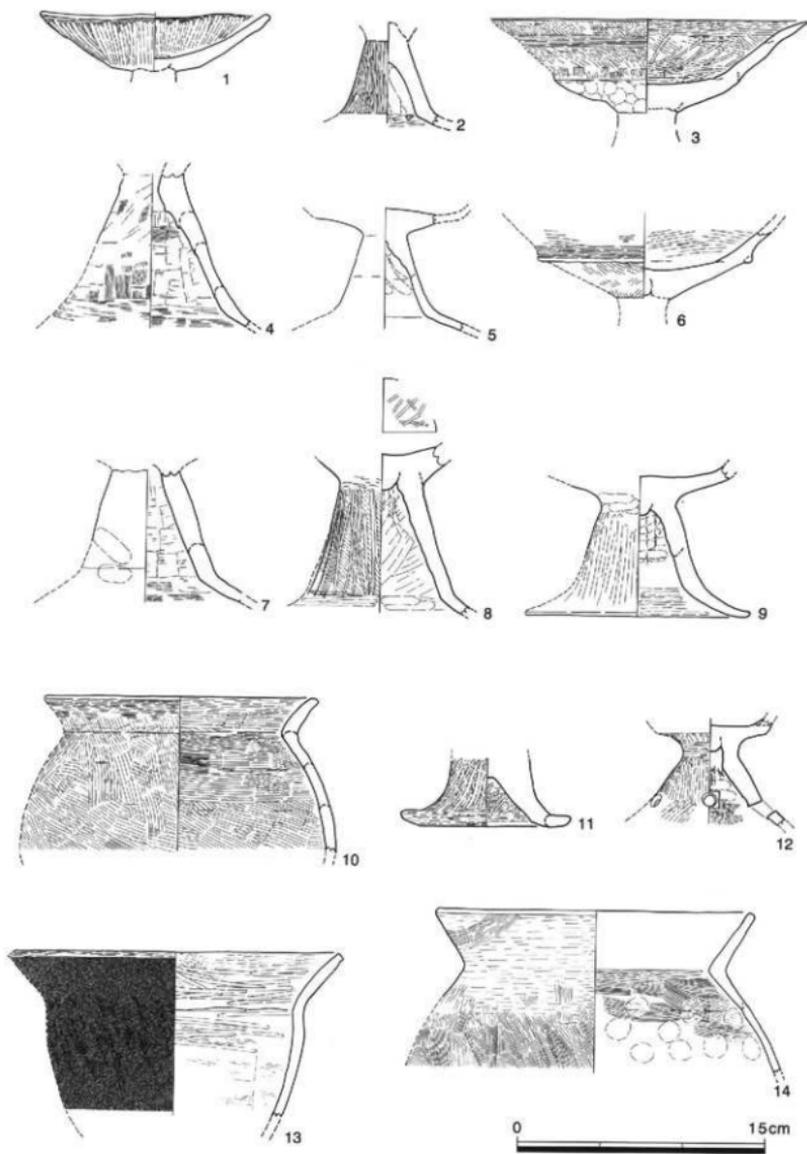
## 古墳時代中～後期

54-1・3・6は、高坏の坏部である。54-1は、浅く大きく外傾する口縁部を有するもので、内外面ともに縦基調のミガキを施す。54-3・6は、坏底部外面に鈍い隆帯を持ち、大きく外傾する口縁部を有するものである。ハケ後、部分的にヨコナデや暗文状のミガキを施している。54-2・4・5・7-9・11・12は、高坏の脚部である。54-12を除き透かしは持たない。54-2・5・8は、脚裾部が比較的明瞭に屈折するもので、54-2・5は、黄灰色を呈し、白色粒子を多量に含む特徴的な胎土を使用していた。54-8は、坏部内面及び脚部外面に暗文状のミガキを施す。54-4・7・9・12は、脚裾部が大きく開くものである。54-11は、中実柱状の脚部から裾部が大きく反り返って開くものである。54-10は、長胴の甕と考えられる。内外面をハケ調整し、口縁部のみヨコナデ調整を施す。54-13は、弱く、く字に外傾する口縁部を有する甕である。口唇部は、強い面取りを行い、胴部内外面には粗いミガキ状の調整を施している。54-14は、頸部がく字に屈折し、外傾する口縁部を有する甕である。口唇部は、ヨコナデによって内側にわずかに肥厚気味に丸く収める。若干薄手の胴部内外面は、ハケ調整を施す。

56-1・2・5-8は、いわゆる駿東甕である。56-1・8は、口唇部を肥厚させ、内傾面を有するもので、56-2・5・6・7は、口唇部を肥厚させ、水平または外傾する面を有するものである。54-3・4は、丸みを帯びた胴部に段を有して付く口縁を持つ鉢である。底部外面にはヘラケズリを施す。56-3は、内外面ともに黒色処理している。56-4は、脚付きの可能性もある。56-9は、甕である。口縁部にむかって緩やかに開く形態を有するもので、底部内外面にケズリを施す。



第53图 中手乱出土土器实测图



第54图 中手乱出土土器实测图

55-1・4・5は、椀状の坏部を有し、口縁部が若干反する鉢である。胴部外面をハケ、口縁部をヨコナデ調整するという共通性をもつ。55-2・3は、わずかに突出する底部から丸みを帯びた坏部を有する鉢である。55-3の内面には暗文状のミガキが認められる。55-6・9は、底部が上げ底を呈し、口唇部が上外方に引き出されたような鉢である。55-6の内面には放射状の暗文を施す。55-7・8は、口唇部が直立する坏である。外面をケズリ、内面をミガキ調整する。55-10は、木葉痕を有する平底の底部から内湾した口縁部を有する坏である。黄灰色を呈し、白色粒子を多く含む特徴的な胎土を使用していた。55-11・12・14・17は、口縁部が微妙に屈曲する坏である。55-13・16・19・20・22・24は、口縁部が直立気味となる坏である。55-15・18・21・23は、半球形の坏である。55-25は、脚付の坏である。

58-1・2は、ほぼ直立した口縁部にやや丸みを帯びた天井部を有する須恵器坏葺である。天井部の2分の1をヘラケズリ調整するもので、口唇部は水平または若干内傾する面を有する。TK23型式に並行するものであろう。58-3は、天井部と口縁部の稜が消滅した須恵器坏葺である。天井部の一部にのみヘラケズリを施し、口唇部を丸く収める。TK43型式以降のものであろう。58-9は、天井部と口縁部の稜が消滅し、著しく小型化した須恵器坏葺である。天井部の一部にはヘラケズリを施し、口唇部は、丸く収める。58-4~6は、須恵器坏葺である。口唇部に内傾気味の面を持つ58-4・6と丸く収める58-5が認められる。58-4・6は、TK23~47型式、58-5は、MT15型式以降のものであろう。

58-7は、外面にタタキを施す裏の胴部と考えられる。外面には自然釉が付着し、黒色を呈する。58-8は、無蓋高坏である。坏部はやや鈍い稜から若干開き気味に立ち上がる口縁部を有し、底部は、外面を手持ちヘラケズリ調整する。脚部は、裾部にやや鈍い突帯を一条有し、そこから若干角度を変えて広がる形態を有する。口唇部の垂取り、坏底部外面のヘラケズリを評価すればTK73~ON46型式に並行するものであろう。色調は灰色を呈し、破断面もほぼ同様の色調を呈する。

58-9は、丸みを帯びた天井部を有する小型化した須恵器坏葺である。口唇部を丸く収める。TK209型式以降の並行するものであろう。58-10は、強く内傾した立ち上がりをも有する須恵器坏葺である。立ち上がりの状態から坏葺の可能性もある。TK217型式以降に並行するものであろう。

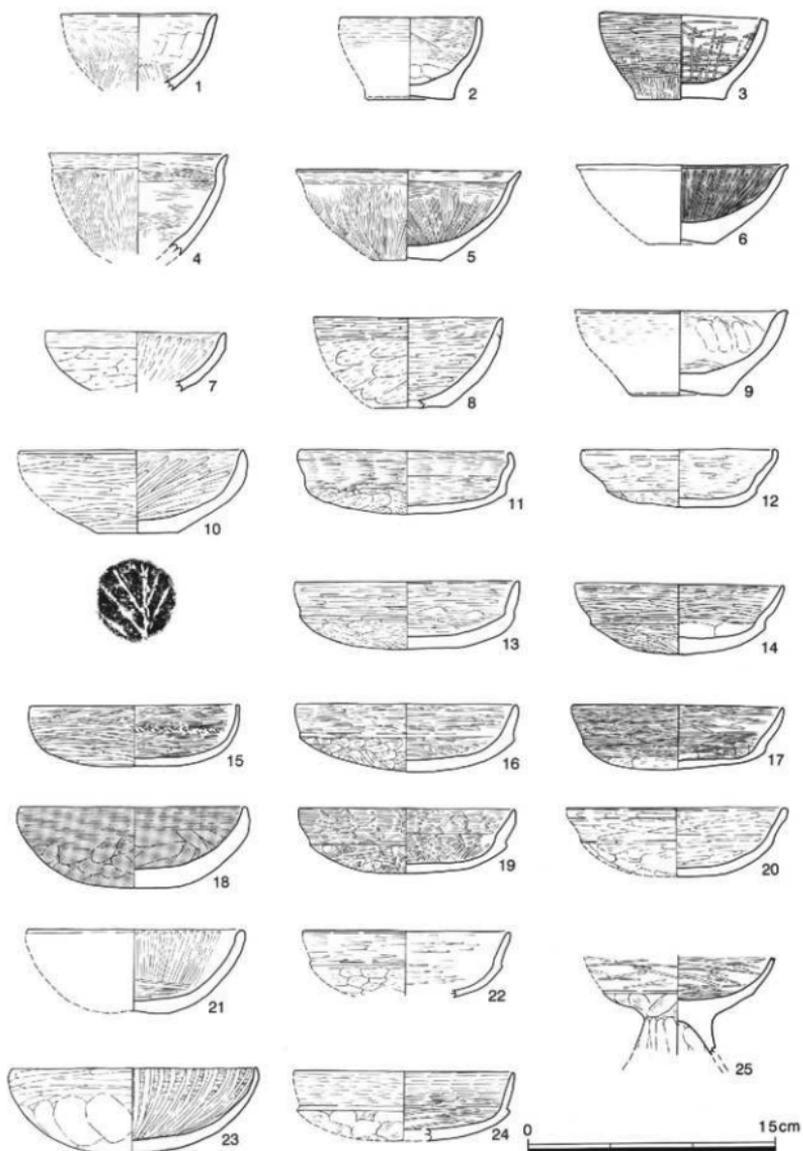
58-11は、器台の有段状の脚部と考えられる。裾部外面に放射状、端部外面に斜格子状のヘラ摺文を施す。ヘラ摺文を多用する施文は、初期須恵器に多いようである。58-12は、須恵器裏の口縁部である。口縁部外面に櫛刺突文を施している。58-13は、須恵器裏の口縁部である。

#### 奈良時代~平安時代

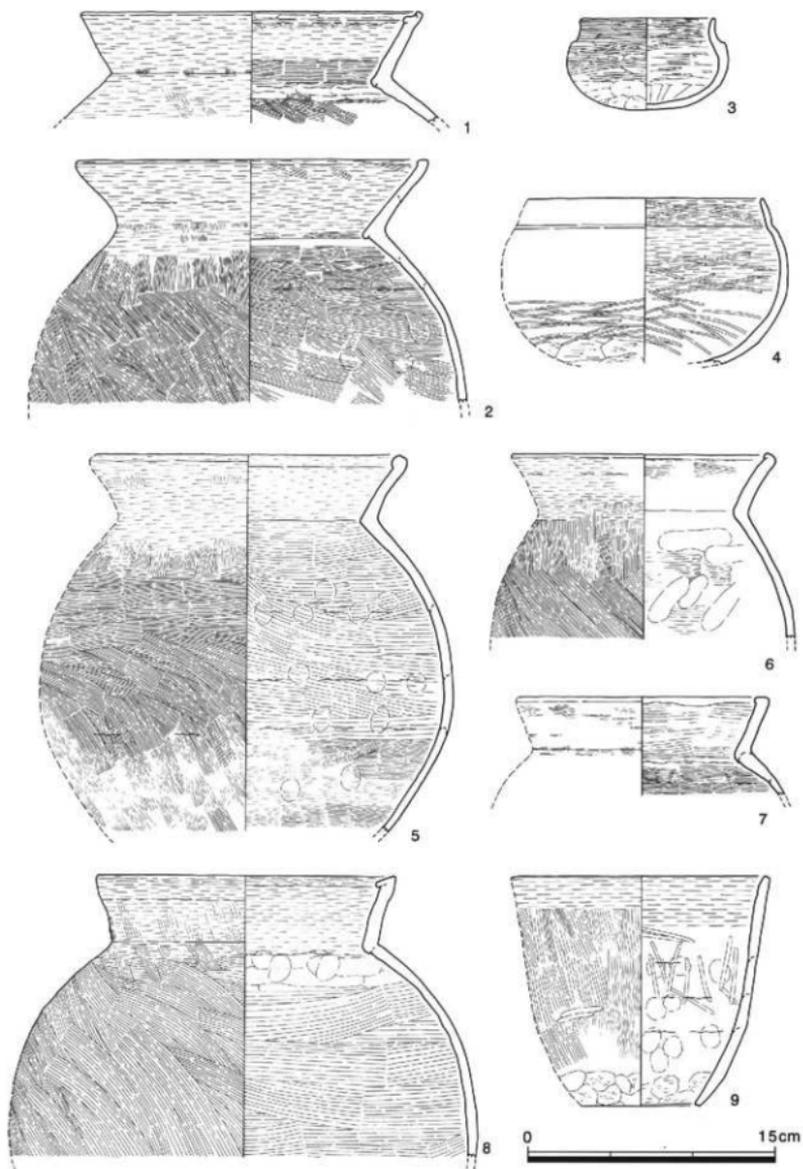
58-14~19は、天井部にツマミを付す須恵器坏葺である。口唇部が断面三角形状となる58-15・18と微妙に屈曲する58-16・17・19が認められる。58-14は、擬宝珠ツマミを付すものである。58-20~22は、高台を付す須恵器坏葺である。底部が高台よりも下方に突出する58-20・21と突出しない58-22に大別できる。

58-23は、外開きの高い高台を付す緑釉陶器碗である。K-14に並行する。58-24は、三日月高台を付す灰釉碗である。K-90に並行する。58-25は、灰釉碗である。O-53に並行するものであろう。

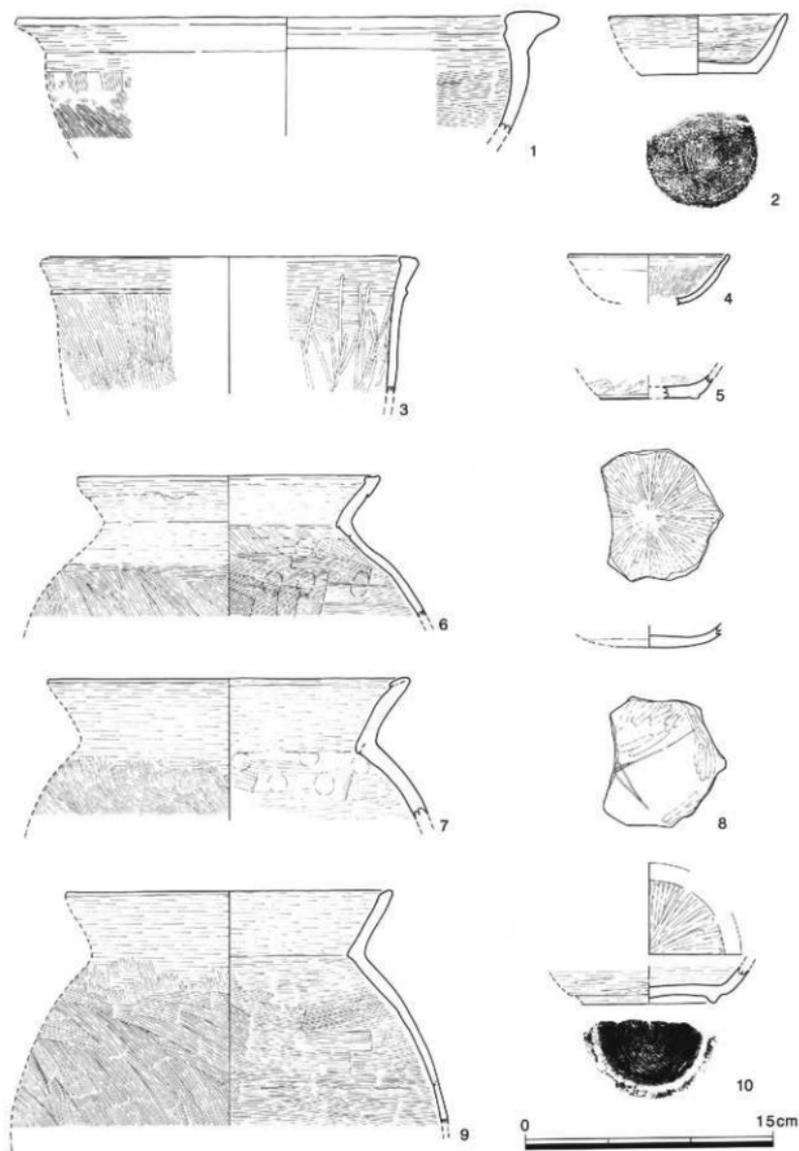
57-1は、いわゆる駿東型の端と呼ばれているものである。若干丸みを帯びた胴部から内湾した口縁部の外面に上端が平坦となる口縁帯が付される。内外面をハケ後、口縁部をヨコナデ調整する。57-3は、瓶と考えられる。筒状に開く口縁部は、内側に肥厚気味となる。57-6・7・9は、駿東甕である。57-10は、須恵器を模倣した土師器である。高台を付し、坏底部には放射状の暗文を施す。底部には糸切り痕が認められる。平安時代初頭に比定されよう。57-2は、57-10と同様に底部に糸切り痕を残す無高台の坏である。



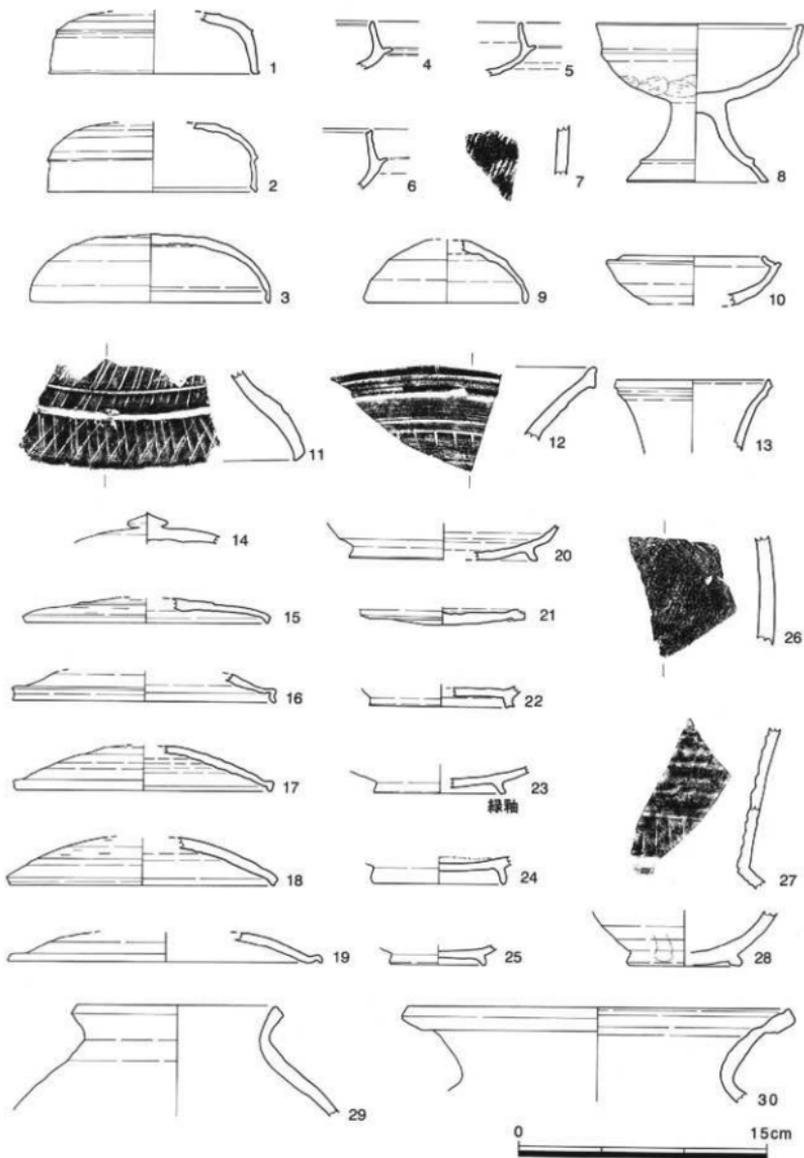
第55图 中手乱出土土器实测图



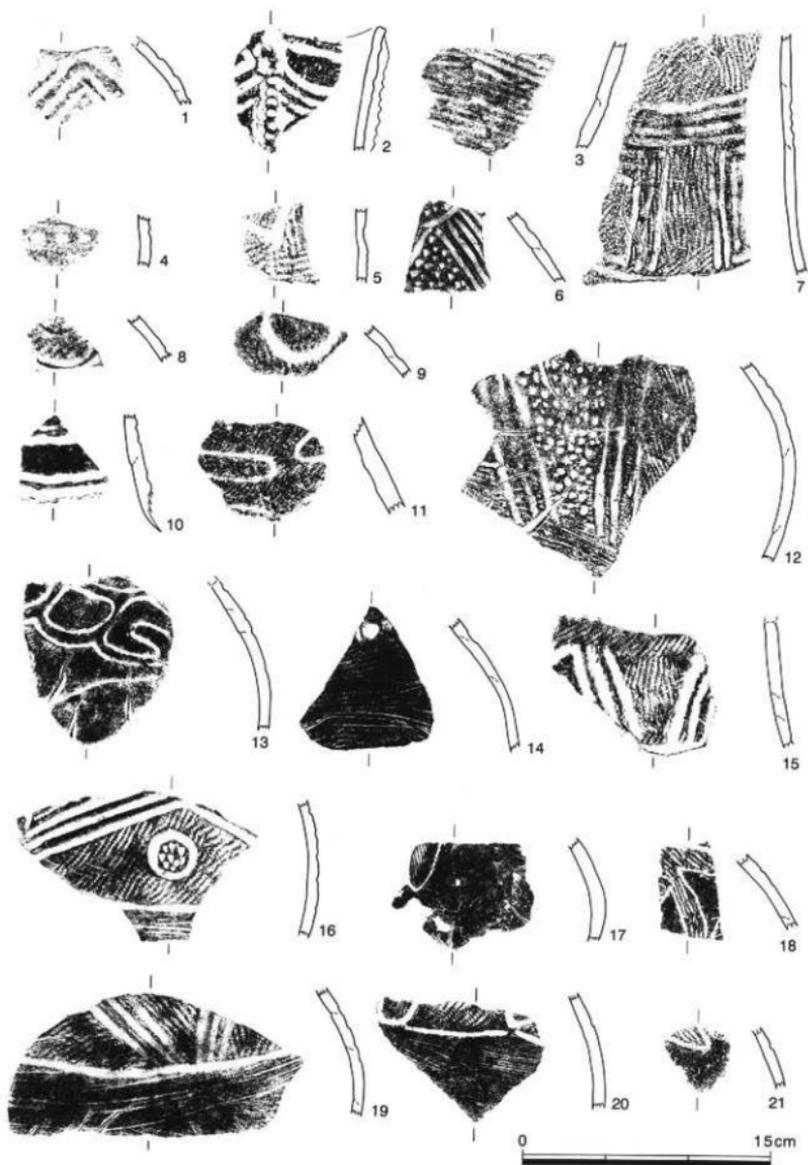
第56图 中手乱出土土器实测图



第57图 中手乱出土土器实测图



第58図 中手乱出土土器実測図



第59圖 中手乱出土土器実測圖

## 拓本

59-2・7は、長頸壺の口頸部破片である。59-2は、口縁部が弱い波状を呈しほとんど外反しないものである。外面にはキザミを加えた縦位の隆帯を貼り付け、これを中心に3本程度のヘラ描連弧文を施す。59-7は、細頸長頸の頸部破片である。縄文を地文として、横位のヘラ描文で区画した中に重四角文を施す。59-1・5・6・12・15・16・19は、3本前後のヘラ描文による幾何学文を有する壺胴部破片である。59-1・6・12は、区画内をヘラ刺突文で充填するものである。59-12・16・19は、下端に右条痕を施すことから、胴部最大径付近の破片であろう。59-12には拓影右端に刺突で充填した円形文が認められる。59-17・18・21は、同一個体と考えられる壺胴部破片である。59-18にみられるように結紐文を構成していると考えられる。59-3は、やや粗い右下がりの条痕を施すもので、他の条痕とは明らかに異なる原体を使用しているようである。59-4は、ヘラ刺突文、59-8・9は、ヘラ描凹形文、59-10は、横位のヘラ描文を施す壺胴部破片であるが、細片資料であり、文様構成は、不明である。59-11・13は、縄文を地文として意匠文を施す壺胴部破片である。59-14は、横位の条痕を施す壺胴部破片で、肩部付近に指頭押圧を施す。

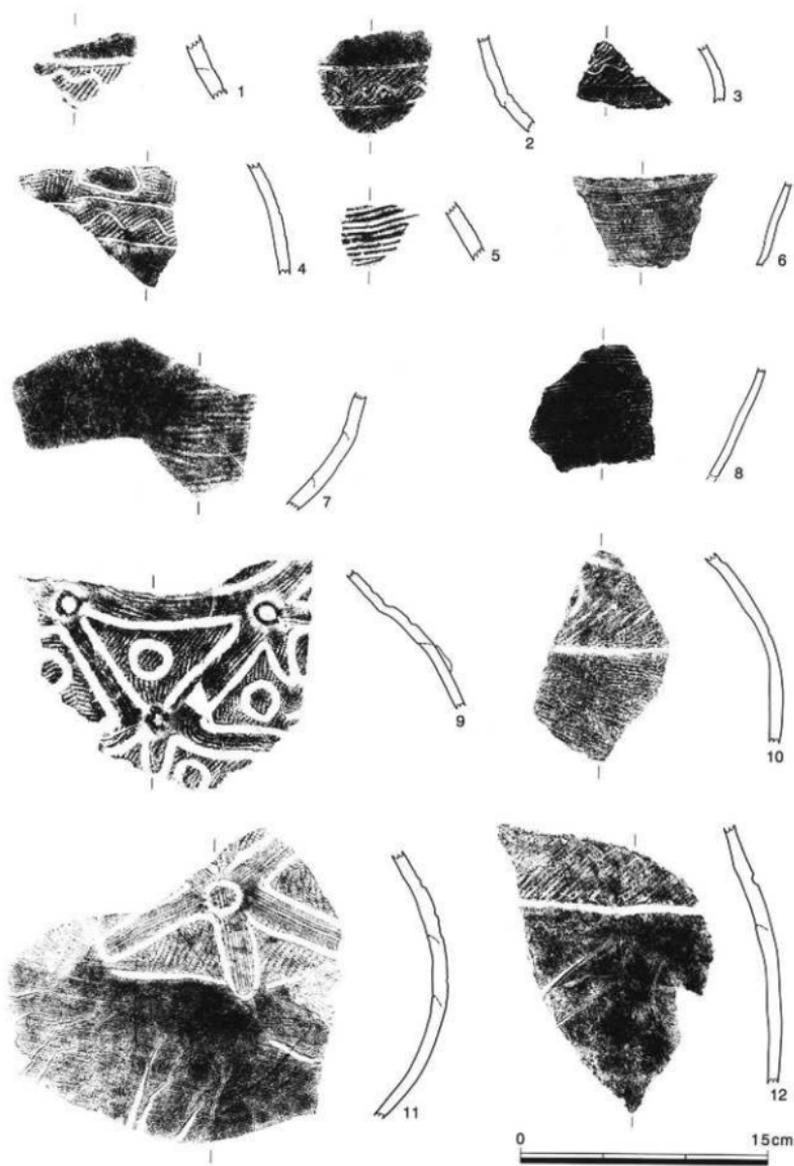
60-1~4は、ヘラ描文区画の縄文帯中にヘラ描波状文を施す壺頸部破片である。60-4は、胴部最大径付近の破片とみられ、上述の縄文帯の上位に意匠文が認められる。

60-5~8は、横位の条痕を施す壺または甕の胴部破片である。やや粗い原体の60-2・7と樽状工具による条痕の60-6・8に大別できる。後者は、前者に比べて器壁が薄い傾向が認められる。60-9・11は、意匠文を施す壺胴部の破片である。60-9は、縄文を地文として、幾何学的なヘラ描意匠文と円形文を組み合わせた文様を施す。なお、意匠文中の三角形の頂点に施される円形文は、円環状の貼り付けによるようである。60-11は、縄文を地文として櫛状工具による条線で充填した結紐文を施し、胴部下半は斜横位の条痕を施すものである。60-19は、60-11と同一個体と考えられる。いずれも縄文帯に対応する区画内には櫛描文によって充填されている。60-10・12は、ヘラ描文区画による縄文帯を有する壺胴部破片である。60-10は、縄文帯内にヘラ描文が加えられている。

61-1は、底部からほぼ直立して立ち上がり、外面に縄文を施すものである。縄文は、高さ2cm程の位置で横位のヘラ描文によって区画している。底部には網代痕を残す。管見による限り類例は皆無であるが、他の底部に網代痕を残す底部と比較してやや薄手であること、立ち上がりの角度も急であることから、小型壺の底部である可能性も考えられる。61-2は、壺または深鉢の胴部である。横位の条痕を施す。61-3・4は、深鉢の口縁部である。61-3は、口唇部下端にヘラ状工具によるキザミを施し、外面は縦位の条痕を施す。61-4は、口唇部に指頭押圧を施し、外面は、横位の条痕を施す。61-5~10は、底部に網代痕を残す壺または深鉢の底部である。底部からの立ち上がりで一旦くびれ気味となる61-6・8と、そのまま大きく開き胴部へとつながる61-5・7・9・10に大別できよう。調整方法が判明するものは底部下半に条痕を施す61-6・9・10が確認される。

62-1・2は、複合口縁壺の口縁部破片である。62-1は、大きく外反する口頸部に直立した短い複合部を有する。口頸部外面には、下端を横位に区画したヘラ描跳ね上げ文を、複合部外面にはいわゆるヘラ描三角逆落文を、その下端屈折部分にはキザミを施す。62-2は、複合部外面に横位のヘラ描文を施すもので、外面は赤彩している。

62-3は、壺の胴部最大径付近の破片である。上端にヘラ描連弧文を有し、それ以下をミガキ調整する。62-5は、ハケ後、指頭による磨消線文を3条以上施す壺または甕の胴部破片である。62-6は、ヘラ描文で区画した縄文帯の中にヘラ描連弧文を施す壺胴部破片である。62-7は、三角連繫文が崩れたようなヘラ描の幾何学文を施す壺胴部破片である。



第60图 中手乱出土土器实测图

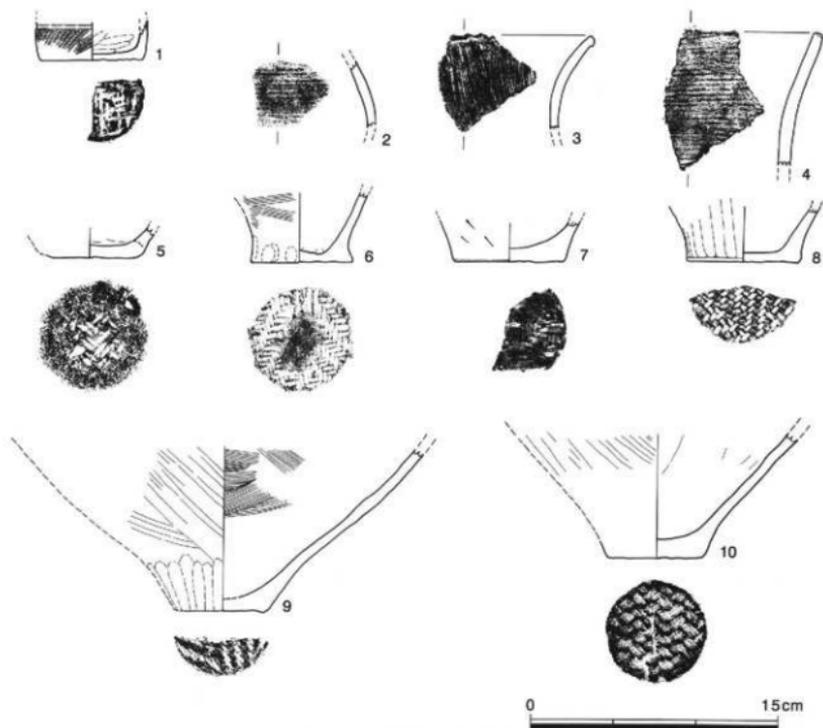
62-8~11は、櫛描直線文を施す壺胴部破片である。いずれも胴部下半に最大径を有するものである。62-9は、下端に2条の櫛描波状文、62-10は、円形文、62-11は、扇形文を加えている。

62-4は、下彫れの胴部の上半に櫛描斜格子文を施す東遠江の白岩式系の壺である。

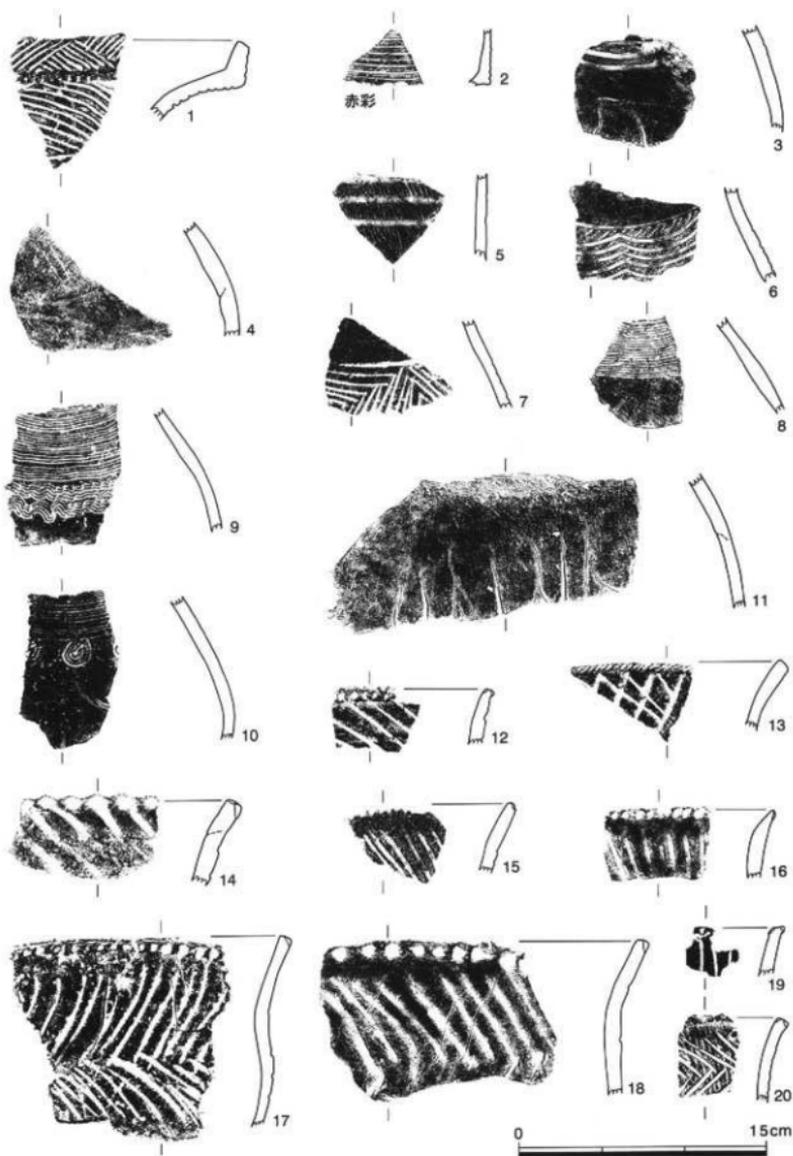
62-12~20は、外面にヘラ描羽状文（62-13は、斜格子子文）を施す甕である。いずれも緩やかに外反する口縁部が最大径となる形態を有するとみられ、口唇部上下端に指頭押圧を施す62-14、ヘラ状工具によるキザミを施す62-12・19・20、口唇部下端にのみヘラ状工具によるキザミを施す62-15~18、口唇部に縄文を施す62-13など口唇部形態は多様である。

63-1~3は、肩部に櫛描波状文と直線文を施す壺である。63-4~6・8は、折り返し口縁を有し、内面に施文する壺である。63-4・6・8は、縄文、63-5は櫛描波状文を施す。63-6・8は、口唇部に棒状浮文を施す。63-9は、単純口縁を有し、内面に縄文を施した後、端部付近に竹管文を施す。

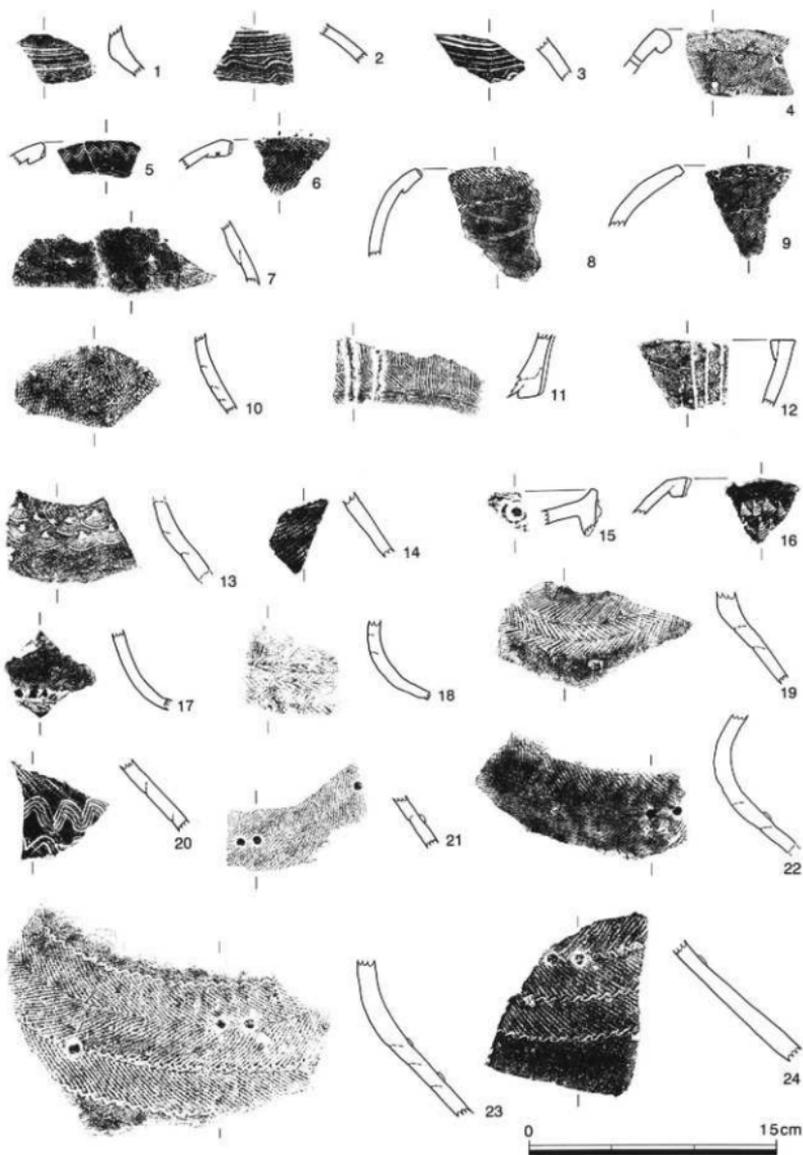
63-11・12は、いわゆる大廓型の壺と呼ばれている大型の複合口縁壺の口縁部破片である。63-12は、口縁端部内面に断面三角形の突帯を施す。複合部外面に63-11は、棒状浮文を、63-12は、ヘラ描文を施す。



第61図 中手乱出土土器実測図



第62图 中手乱出土土器实测图



第63图 中手乱出土土器实测图

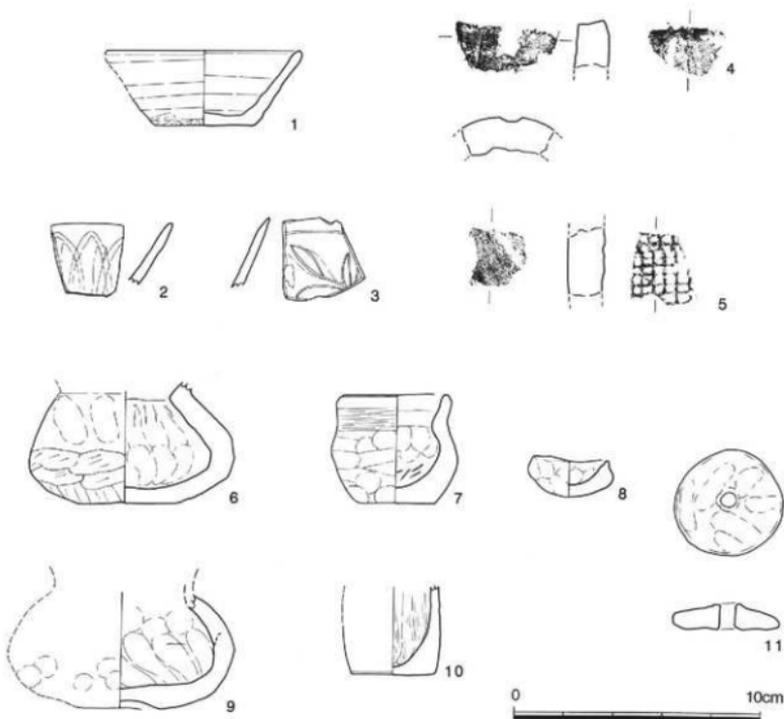
63-13・14・16～20は、櫛插扇形文や櫛刺突文を施すことから、県西部の菊川式または、それを模倣した壺と考えられるものである。63-16は、折り返し口縁内面に63-13は、肩部に扇形文を施す。63-14は、肩部から胴部上半に櫛刺突直線文で区画した縄文帯をもつものである。63-17～20は、肩部に櫛刺突羽状文を施すものである。63-20は、櫛刺突羽状文の下に櫛描波状文を2段施す。

63-15は、口唇部を上下に拡張する壺の口縁部破片である。口唇部には竹管文を施した円形浮文を施し、丁寧なミガキによって調整する。なお、全面に赤彩が認められる。

63-21～24は、肩部に結節縄文を施す壺の肩部破片である。63-22～24は、大型壺である。いずれも結節縄文の結節部分に間隔が開いた2個1組の円形浮文を施す。以上の土器は、古墳前期に比定されよう。

### 土製品等

64-1は、口縁部が直線的に外傾する土師器坏である。底部にはヘラケズリを施す。64-2・3は、青磁碗の口縁部破片である。64-4・5は、布目瓦である。64-4は、丸瓦の端部破片、64-5は、平瓦の破片で凸面にタキを施すものである。64-6～10は、手こね土器である。64-6・7・9は、明確な口頭部形態を有する。64-10は、筒状、64-8は、皿状となるものである。64-11は、土製紡錘車である。表面はナデによって調整し、中心に焼成前の円孔を穿っている。



第64図 中手乱出土土製品等実測図

実測図版	写真図版	区	グリッド	層位	器種	時期	備考
40-1	32	2	L-19S	Ⅲ	香	弥生中期中葉	
40-2		2	西側法面	Ⅲ	鉢	彌鮮前期	
40-3	32	2	L-20N	Ⅲ	香	弥生前期	愛宕倉の一形態
40-4	32	2	J-20N	Ⅲ	香	弥生中期中葉	
40-5	32	1	L-20S	Ⅲ	小型香	弥生中期中葉	
40-6	32	1	排水溝	Ⅲ	香	弥生中期中葉	
40-7	33	3	K-19N	Ⅲ	環鉢	弥生中期中葉	
41-1	33	3	L-18S	Ⅲ	香	弥生中期中葉	
41-2		1	排水溝	Ⅲ	香	弥生中期後葉	
41-3	33	3	J-19S	Ⅲ	大型香	弥生中期中葉	
41-4	33	2	K-20N	Ⅲ	香	弥生中期中葉	
41-5	33	2	L-19S	Ⅲ	香	弥生中期前期	
41-6	33	2	西側法面	Ⅲ	香	弥生中期後葉	
41-7	33	2	東側法面	Ⅲ	香	弥生中期後葉	
42-1	34	2	K-20N	Ⅲ	香	弥生中期後葉	
42-2		2	K-20N	Ⅲ	香	弥生中期後葉	
42-3		2	K-19N	Ⅲ	香	弥生中期後葉	水影
42-4	34	2		Ⅲ	香	弥生中期後葉	
42-5		2	K-20	Ⅲ	香	弥生中期後葉	
42-6	34	2	J-20N	Ⅲ	香	弥生中期後葉	
42-7	34	2	K-20N	Ⅲ	大型香	弥生中期後葉	水影、甕口土器
42-8		1	L-20N	Ⅲ	大型香	弥生中期後葉	
43-1	34	2	K-20N	Ⅲ	香	弥生中期後葉	
43-2	35	2		Ⅲ	香	弥生中期後葉	
43-3	34	3		Ⅲ	香	弥生中期後葉	
43-4	35	2	東側法面	Ⅲ	香	弥生中期後葉	
43-5	35	2	L-19S	Ⅲ	香	弥生中期後葉	水影
43-6		2	K-21	Ⅲ	香	弥生中期後葉	
43-7		2	K-20S	Ⅲ	香	弥生中期後葉	
44-1		1	M-21N	Ⅲ	香	弥生前期前半	水影
44-2		1		Ⅲ	香	弥生中期後葉	
44-3	35	1	L-20S	Ⅲ	香	弥生中期後葉	
44-4	35	2	K-20N	Ⅲ	香	弥生中期後葉	
44-5		1		Ⅲ	香	弥生中期後葉	
44-6	35			Ⅲ	環鉢	弥生中期後葉	
44-7		1		Ⅲ	環鉢	弥生中期後葉	
44-8		2	西側法面	Ⅲ	高坏	弥生中期後葉	
44-9		2	L-19S	Ⅲ	環鉢	弥生中期後葉	
44-10	35	2	K-20S	Ⅲ	環鉢	弥生中期中葉	
44-11		2	K-20S	Ⅲ	鉢	弥生中期後葉	
44-12	35	2	K-20N	Ⅲ	高坏	弥生中期後葉	
45-1		1	東側法面	Ⅲ	香	弥生後期前半	
45-2		1		Ⅲ	香	弥生後期前半	
45-3		1		Ⅲ	香	弥生後期前半	
45-4		1	L-21N	Ⅲ	香	弥生後期前半	
45-5	36	1		Ⅲ	香	弥生後期前半	底部に円形厚板状の粘土粒
45-6	36	1	L-20S	Ⅲ	香	弥生後期前半	
45-7	36	1	L-20S	Ⅲ	香	弥生後期前半	
45-8	36	3	J-19N	Ⅲ	香	弥生後期前半	
45-9		2	J-20N	Ⅲ	香	弥生後期前半	
45-10	36	2	西側法面	Ⅲ	香	弥生後期前半	
45-11		2		Ⅲ	香	弥生後期後半	
45-12	36	2	K-20	Ⅲ	甕	弥生後期前半	
45-13	36	1		Ⅲ	台付甕	弥生後期後半	
45-14		1		Ⅲ	甕	弥生後期前半	
46-1	37	1	L-20S	Ⅲ	香	弥生後期後半	胴部穿孔
46-2	37	1	L-20S	Ⅲ	香	弥生後期後半	外面炭化物付着
46-3		2	K-20S	Ⅲ	香	弥生後期後半	
46-4	37	1	L-20S	Ⅲ	香	弥生後期後半	
46-5	37	1	L-21N	Ⅲ	香	弥生後期前半	
46-6	37	1	L-20N	Ⅲ	香	古墳前期	
47-1	38	2	K-20S	Ⅲ	香	古墳前期	
47-2	38	1		Ⅲ	香	古墳前期	
47-3	38	2	K-20N	Ⅲ	香	古墳前期	
47-4	38	1		Ⅲ	香	弥生後期後半	
47-5	38	2	K-21N	Ⅲ	香	古墳前期	
47-6	38	1	L-20S	Ⅲ	香	古墳前期	
47-7	38	2	J-20S	Ⅲ	香	古墳前期	
47-8	37	1	L-20S	Ⅲ	香	古墳前期	外面炭化物付着
48-1	36	2		Ⅲ	高坏	弥生後期前半	山中式系
48-2		2		Ⅲ	甕	弥生後期後半	
48-3		1		Ⅲ	台付甕	弥生後期後半	
48-4		2	L-21N	Ⅲ	甕	弥生後期前半	
48-5		2		Ⅲ	甕	弥生後期後半	

第7表 中手乱出土土器他一覧表

発掘図版	写真図版	区	グリッド	層位	器種	時期	備考
48-6	38	3	J-17	Ⅱ	鉢	弥生後期後半	
48-7		2	K-20S	Ⅲ	台付甕	弥生後期	
48-8		2	J-20S	Ⅲ	台付甕	弥生後期	
48-9	39	2	J-20S	Ⅲ	台付甕	弥生後期	
48-10	39	2	K-20N	Ⅲ	台付甕	弥生後期	
48-11		2	K-20S	Ⅲ	台付甕	弥生後期	
48-12		2	K-20N	Ⅲ	台付甕	弥生後期	
48-13		1		Ⅲ	甕	弥生後期	
48-14	39	1		Ⅲ	台付甕	弥生後期	
48-15		1	M-20S	Ⅲ	台付甕	弥生後期	
48-16	39	2	K-21N	Ⅲ	台付甕	弥生後期	
49-1	40	1	L-20S	Ⅲ	甕	弥生後期前半	瀬川式系
49-2	40	1		Ⅲ	甕	弥生後期前半	瀬川式系
49-3	40	1	L-21N	Ⅲ	甕	弥生後期後半	瀬川式系
49-4	40	1	L-20S	Ⅲ	甕	弥生後期前半	瀬川式系
49-5	40	1		Ⅲ	甕	弥生後期後半	瀬川式系
49-6	39	1		Ⅲ	甕	弥生後期前半	瀬川式系
49-7	40	1		Ⅲ	甕	弥生後期後半	瀬川式系
49-8	39	1		Ⅲ	甕	弥生後期前半	瀬川式系
49-9	39	2	K-20S	Ⅲ	高坏	弥生後期後半	瀬川式系
49-10	39	1		Ⅲ	甕	弥生後期後半	瀬川式系
49-11	39	3	J-19	Ⅲ	甕	弥生後期前半	新選じ口線、瀬川式系
49-12	40	2	K-20S	Ⅲ	甕	弥生中期後半	瀬川式系
50-1		1	西側法面	Ⅲ	甕	古墳前期	
50-2		1		Ⅲ	甕	古墳前期	
50-3		1		Ⅲ	甕	古墳前期	内外面赤影
50-4		1		Ⅲ	大型甕	古墳前期	
50-5		2		Ⅲ	甕	古墳前期	
50-6		1	M-20	Ⅲ	大型甕	古墳前期	
50-7		1	東側法面	Ⅲ	甕	古墳前期	
50-8		1	東側法面	Ⅲ	甕	古墳前期	
50-9		1	西側法面	Ⅲ	甕	古墳前期	
50-10		4	I-15	Ⅲ	甕	古墳前期	
50-11		2		Ⅲ	甕	古墳前期	
50-12		3		Ⅲ	甕	古墳前期	
50-13		2		Ⅲ	甕	古墳前期	
51-1	42	1		Ⅲ	甕	古墳前期	
51-2		3	J-19	Ⅲ	甕	古墳前期	
51-3	42	2	K-20S	Ⅲ	甕	古墳前期	
51-4	42	1		Ⅲ	甕	古墳前期	
51-5	42	2	K-20	Ⅲ	甕	古墳前期	
51-6	42	2	K-20S	Ⅲ	甕	古墳前期	
51-7	41	2		Ⅲ	甕	古墳前期	
51-8		2	K-20	Ⅲ	器台	古墳前期	
51-9	42	2		Ⅲ	甕	古墳前期	
51-10		1		Ⅲ	器台	古墳前期	北陸系
51-11		41	2	Ⅲ	器台	古墳前期	
51-12	42	1	東側法面	Ⅲ	器台	古墳前期	
51-13	41	1	東側法面	Ⅲ	器台	古墳前期	具形器台
51-14	41	1		Ⅲ	高坏	古墳前期	
51-15		2	K-20	Ⅲ	高坏	古墳前期	
51-16	41	2	K-20S	Ⅲ	器台	古墳前期	赤影
51-17	42	2	J-20	Ⅲ	器台	古墳前期	
51-18	41	2		Ⅲ	甕	古墳前期	
51-19	41	2		Ⅲ	小型丸底鉢	古墳前期	
51-20	42	1		Ⅲ	器台	古墳前期	
52-1		3	J-19	Ⅲ	S字甕	古墳前期	
52-2		2	K-20N	Ⅲ	S字甕	古墳前期	
52-3		2	K-20N	Ⅲ	S字甕	古墳前期	
52-4		3	J-19N	Ⅲ	S字甕	古墳前期	
52-5	42	1	西側法面	Ⅲ	S字甕	弥生後期後半	
52-6		1		Ⅲ	S字甕	古墳前期	
52-7		1		Ⅲ	甕	古墳前期	
52-8		1		Ⅲ	S字甕	古墳前期	
52-9	42	1		Ⅲ	高坏	古墳前期	内面に赤影
52-10		1		Ⅲ	高坏	古墳前期	
52-11	43	2	K-20S	Ⅲ	器台	古墳前期	
52-12	42	2	西側法面	Ⅲ	甕	古墳前期	
52-13		1	M-20S	Ⅲ	高坏	古墳前期	
52-14	43	2	K-20N	Ⅲ	高坏	古墳前期	
52-15	43	1	L-21N	Ⅲ	高坏	古墳前期	
52-16	43	1	東側法面	Ⅲ	高坏	古墳前期	
52-17	43	2	K-20N	Ⅲ	高坏	古墳前期	
52-18	43	2	K-20S	Ⅲ	高坏	古墳前期	

第7表 中手乱出土土器他一覧表

実測図版	写真図版	区	グリッド	層位	器種	時期	備考
52-19	43	2	K-20S	Ⅲ	高坏	古墳前期	
52-20	43	1	L-20S	Ⅲ	高坏	古墳前期	
53-1	44	2	K-20S	Ⅲ	甕	古墳前期	
53-2		2		Ⅲ	鉢	古墳前期	
53-3		2	K-20S	Ⅲ	ミニチュア	古墳中期	
53-4	41	2	西側法面	Ⅲ	甕	古墳前期	東遠系
53-5	44	1	L-20S	Ⅲ	甕	古墳中期	
53-6		2		Ⅲ	鉢	古墳中期	内面赤彩
53-7		2	L-20S	Ⅲ	甕	古墳前期	
53-8		1	東側法面	Ⅲ	甕	古墳中期	
53-9		2	K-20N	Ⅲ	鉢	古墳中期	
53-10	44	2	K-20S	Ⅲ	甕	古墳前期	
53-11		2	西側法面	Ⅲ	甕	古墳前期	
53-12	44	3	J-19N	Ⅲ	甕	古墳中期	
53-13	44	2	K-20	Ⅲ	甕	古墳中期	
54-1		2	K-20S	Ⅲ	高坏	古墳中期	
54-2		2	K-20S	Ⅲ	高坏	古墳中期	
54-3	45	2	J-19N	Ⅲ	高坏	古墳中期	
54-4	44	2	K-20S	Ⅲ	高坏	古墳中期	
54-5	44	1		Ⅲ	高坏	古墳中期	
54-6		2	L-21N	Ⅲ	高坏	古墳中期	
54-7		1	東側法面	Ⅲ	高坏	古墳中期	
54-8	45	2	K-20S	Ⅲ	高坏	古墳中期	
54-9	45	2	K-20	Ⅲ	高坏	古墳中期	
54-10	44	1		Ⅲ	甕	古墳中期	
54-11	45	1		Ⅲ	高坏	古墳後期	
54-12	45	1		Ⅲ	高坏	古墳前期	
54-13		2		Ⅲ	甕	古墳中期	外面炭化動付著
54-14	45	1	L-20S	Ⅲ	藤原甕	古墳後期	
55-1		1		Ⅲ	鉢	古墳前期	
55-2	45	2		Ⅲ	鉢	古墳中期	
55-3	45	2	西側法面	Ⅲ	鉢	古墳中期	
55-4		3	J-19S	Ⅲ	鉢	古墳前期	
55-5	47	1		Ⅲ	鉢	古墳前期	
55-6	47	2	西側法面	Ⅲ	鉢	古墳中期	内面赤彩
55-7		1		Ⅲ	須恵器坏	古墳後期	
55-8	47	2	西側法面	Ⅲ	鉢	古墳後期	
55-9	47	2	K-20S	Ⅲ	鉢	古墳中期	
55-10	46	3	J-19N	Ⅲ	坏	古墳中期	
55-11	46	2		Ⅲ	模倣坏	古墳後期	
55-12	46	2	J-20N	Ⅲ	模倣坏	古墳後期	
55-13	46	2	K-21S	Ⅲ	模倣坏	古墳後期	
55-14	46	2	K-20S	Ⅲ	模倣坏	古墳後期	
55-15	46	2	K-20S	Ⅲ	坏	古墳中～後期	
55-16	46	2	K-20S	Ⅲ	模倣坏	古墳後期	
55-17	46	2	K-20S	Ⅲ	模倣坏	古墳後期	
55-18	46	2	K-20N	Ⅲ	坏	古墳後期	内外面赤彩
55-19	46	2	K-20S	Ⅲ	模倣坏	古墳後期	
55-20	46	2		Ⅲ	模倣坏	古墳後期	
55-21	47	1	東側法面	Ⅲ	坏	古墳後期	
55-22		2	K-19S	Ⅲ	模倣坏	古墳後期	
55-23	46	1		Ⅲ	坏	古墳後期	
55-24	47	2	K-20S	Ⅲ	模倣坏	古墳後期	
55-25	47	1	L-21N	Ⅲ	高坏	古墳前期	
56-1		3	J-19S	Ⅲ	甕	古墳前期	
56-2	47	2	K-20N	Ⅲ	藤原甕	古墳後期	
56-3	47	3	J-19S	Ⅲ	鉢	古墳後期	
56-4		1	K-20S	Ⅲ	高坏	古墳後期	
56-5		1		Ⅲ	藤原甕	古墳後期	
56-6		2	K-20N	Ⅲ	藤原甕	古墳後期	
56-7		1		Ⅲ	藤原甕	古墳後期	
56-8	47	2	K-20N	Ⅲ	藤原甕	古墳後期	
56-9	48	2	西側法面	Ⅲ	甕	古墳後期～奈良	
57-1		1		Ⅲ	埴	奈良	
57-2	48			Ⅲ	平安	平安	糸切り
57-3		3	西側法面	Ⅲ	甕	古墳後期	
57-4		1		Ⅲ	坏	平安	
57-5		1	西側法面	Ⅲ	坏	平安	削り出し高付
57-6		2	K-20	Ⅲ	藤原甕	古墳後期	
57-7		1	西側法面	Ⅲ	藤原甕	古墳後期	
57-8		1		Ⅲ	坏	平安	底部に×
57-9		2	K-20N	Ⅲ	藤原甕	古墳後期	
57-10		4		Ⅲ	坏	平安	糸切り
58-1	48			Ⅲ	須恵器坏等	古墳中期	

第7表 中手乱出土土器他一覧表

実測図版	写真図版	区	グリッド	層位	器種	時期	備考
58-2	48	1		Ⅲ	須原器環蓋	古墳中期	
58-3	46	2	K-21N	Ⅲ	須原器環蓋	古墳後期	
58-4		1		Ⅱ	須原器環身	古墳後期	
58-5	48	2		Ⅲ	須原器環身	古墳後期	
58-6	48	4		I	須原器環身	古墳中期	
58-7	48	2	K-20	Ⅲ	須原器環身	古墳中期	
58-8	48	3	J-20N	Ⅲ	須原器環身	古墳中期	初期須原器、平持ちハラケズリ
58-9		1		Ⅲ	須原器環蓋	古墳後期	
58-10		1		Ⅱ	須原器環身	古墳後期	
58-11	48	2	西側法面	Ⅲ	須原器器台	古墳中期	初期須原器
58-12		1		Ⅲ	須原器蓋	古墳後期	
58-13		1		Ⅲ	須原器蓋	古墳後期	
58-14		1		Ⅲ	須原器環蓋	奈良	
58-15		1		Ⅲ	須原器環蓋	奈良	
58-16		3		Ⅲ	須原器環蓋	奈良	
58-17		1		Ⅲ	須原器環蓋	奈良	
58-18		1		Ⅲ	須原器環蓋	奈良	
58-19		1		Ⅱ	須原器環蓋	奈良	
58-20		1		Ⅲ	須原器環身	奈良	
58-21		1		Ⅱ	須原器環身	奈良	
58-22		1		Ⅱ	須原器環身	奈良	
58-23	48	1	西側法面	I	埴輪網	平安	
58-24		1		Ⅲ	埴輪網	平安	
58-25		1		Ⅲ	埴輪・山形網	平安	
58-26		1		Ⅲ	須原器蓋	奈良	
58-27	48	1	M-20	Ⅲ	須原器	奈良	長頸壺
58-28		1		Ⅱ	壺	平安	
58-29		1		Ⅱ	壺	奈良	
58-30	48	1	L-20S	Ⅲ	須原器壺	古墳後期	
59-1		3	J-19S	Ⅱ	壺	弥生中期中葉	
59-2	49	1	M-20N	Ⅲ	壺	弥生中期中葉	袋状口縁
59-3	49	2	L-20	Ⅲ	壺?	弥生中期中葉	
59-4	49	3	J-19	Ⅲ	壺	弥生中期中葉	
59-5	49	3	K-19	Ⅲ	壺	弥生中期中葉	
59-6	49	2		Ⅲ	壺	弥生中期中葉	
59-7	49	2	L-18S	Ⅲ	壺	弥生中期中葉	
59-8		1	M-20	Ⅲ	壺	弥生中期中葉	
59-9		2	L-19S	Ⅲ	壺	弥生中期中葉	
59-10	49	2	K-20	Ⅲ	壺	弥生中期中葉	
59-11		2		Ⅲ	壺	弥生中期中葉	
59-12	49	2	西側法面	Ⅲ	壺	弥生中期中葉	
59-13	49	2	K-20N	Ⅲ	壺	弥生中期中葉	
59-14	49	1	M-20N	Ⅲ	壺	弥生中期中葉	肩部に折頸庄痕
59-15	49	2	L-18S	Ⅲ	壺	弥生中期中葉	
59-16	49	2	K-20S	Ⅲ	壺	弥生中期中葉	
59-17		1	M-20N	Ⅲ	壺	弥生中期中葉	
59-18	49	2	K-20S	Ⅲ	壺	弥生中期中葉	
59-19	49	3	J-19S	Ⅲ	壺	弥生中期中葉	
59-20	49	1		Ⅲ	壺	弥生中期中葉	
59-21		2	K-20S	Ⅲ	壺	弥生中期中葉	
60-1	50	2		Ⅲ	壺	弥生中期後葉	
60-2	50	1		Ⅱ	壺	弥生中期後葉	
60-3	50	2	K-20	Ⅲ	壺	弥生中期後葉	
60-4	50	2	J-20	Ⅲ	壺	弥生中期後葉	
60-5	50	2	J-20	Ⅲ	壺	弥生中期後葉	
60-6	50	2		Ⅲ	罎鉢	弥生中期中葉	
60-7		2		Ⅲ	壺	弥生中期中葉	
60-8	50	2	K-20S	Ⅲ	壺	弥生中期中葉	
60-9	50	3	J-19S	Ⅲ	壺	弥生中期中葉	
60-10	50	3	K-19	Ⅲ	壺	弥生中期中葉	
60-11	50	1		Ⅲ	壺	弥生中期中葉	
60-12	50	2	L-19	Ⅲ	壺	弥生中期中葉	
61-1	49	3	J-19	Ⅲ	壺	弥生中期中葉	
61-2		3	K-19	Ⅲ	壺	弥生中期中葉	
61-3		1		Ⅱ	罎鉢	弥生中期中葉	
61-4		3	J-19	Ⅲ	罎鉢	弥生中期中葉	
61-5		4	I-16	I	壺	弥生中期中葉	
61-6		2		Ⅲ	壺	弥生中期中葉	
61-7		1		Ⅲ	壺	弥生中期中葉	
61-8		2		Ⅲ	壺	弥生中期中葉	
61-9		2	K-20N	Ⅲ	壺	弥生中期中葉	
61-10		2	J-20N	Ⅲ	壺	弥生中期中葉	
62-1	51	3	K-19	Ⅱ	壺	弥生中期後葉	
62-2	51	4	I-15	表採	壺	弥生中期後葉	赤彩

第7表 中手乱出土土器他一覧表

実測図章	写真図章	区	グリッド	層位	器種	時期	備考
62-3	51	2	K-20N	Ⅲ	香	弥生中期後葉	
62-4	51	2	J-20N	Ⅲ	香	弥生中期後葉	
62-5	51	2	L-18S	Ⅲ	香	弥生中期後葉	
62-6	51	2	K-21S	Ⅲ	香	弥生中期後葉	
62-7	51	1		Ⅲ	香	弥生中期後葉	
62-8	51	3	J-19	Ⅲ	香	弥生中期後葉	
62-9	51	2		Ⅲ	香	弥生中期後葉	
62-10	51	1		Ⅲ	香	弥生中期後葉	
62-11	51	2	K-20	Ⅲ	香	弥生中期後葉	
62-12	51	2	K-20S	Ⅲ	香	弥生中期後葉	
62-13	51	2	J-20	Ⅲ	香	弥生中期後葉	
62-14	51	2		Ⅲ	香	弥生中期後葉	
62-15	51	1		Ⅲ	香	弥生中期後葉	
62-16	51	2	J-20N	Ⅲ	香	弥生中期後葉	
62-17	51	2	K-20N	Ⅲ	香	弥生中期後葉	
62-18	51	2		Ⅲ	香	弥生中期後葉	
62-19	51	2	L-18S	Ⅲ	香	弥生中期後葉	
62-20	51	2	L-19	Ⅲ	香	弥生中期後葉	
63-1	52	1		Ⅲ	香	弥生中期後葉	
63-2	52	1		Ⅲ	香	古墳前期	
63-3	52	2	K-20S	Ⅲ	香	弥生中期後葉	
63-4	52	1		Ⅲ	香	弥生後期	口縁部穿孔
63-5	52	2		Ⅲ	香	弥生後期	
63-6	52	1		Ⅲ	香	弥生後期	
63-7	52	1	M-20N	Ⅲ	香	弥生後期	植物片痕
63-8	52	1		Ⅲ	香	弥生後期	
63-9	52	1		Ⅲ	香	弥生後期	
63-10	52	2	K-20S	Ⅲ	香	弥生後期	植物片痕
63-11	52	2		Ⅲ	香	古墳前期	
63-12	52	1		Ⅲ	香	古墳前期	
63-13	52	2	J-20	Ⅲ	香	弥生後期	菊川式系
63-14	52	2	K-20S	Ⅲ	香	弥生後期	菊川式系
63-15	52	1		Ⅲ	香	古墳前期	畿内系
63-16	52	2	J-20S	Ⅲ	香	弥生後期	菊川式系
63-17	52	1		Ⅲ	香	弥生後期	菊川式系
63-18	52	1		I	豆	弥生後期	菊川式系
63-19	52	2	K-20	Ⅲ	香	弥生後期	菊川式系
63-20	52	2	K-20S	Ⅲ	香	弥生後期	菊川式系
63-21	52	1		Ⅲ	香	古墳前期	
63-22	52	1		Ⅲ	香	古墳前期	
63-23	52	3	J-19S	Ⅲ	香	古墳前期	
63-24	52	2	K-20	Ⅲ	香	古墳前期	
64-1	53	4	I-15	I	杯	弥生	
64-2	53	1		Ⅲ	青磁碗	中世	
64-3	53	1	西側土前	Ⅲ	青磁碗	中世	
64-4	53	1	M-20	Ⅲ	瓦葺	奈良～平安	
64-5	53	1		Ⅲ	瓦葺	奈良～平安	
64-6	53	2	西側土前	Ⅲ	ミニチュア	古墳中期	
64-7	53	2	K-20S	Ⅲ	ミニチュア	古墳中期	
64-8	53	2	M-21N	Ⅲ	ミニチュア	古墳後期	
64-9		2	K-20	Ⅲ	ミニチュア	古墳中期	
64-10	53	1		I	ミニチュア	古墳後期	
64-11		2		Ⅲ	土製銅線車		
79-1	62	1		Ⅲ	有孔円板	古墳中～後期	
79-2	62	1	L-20S	Ⅲ	有孔円板	古墳中～後期	
79-3	62	1	M-21N	Ⅲ	刀子?		
79-4	62	1	東側土前	Ⅲ	古銭	近世	寛永通寶
80-1	62	2	L-19S	Ⅲ	鏡外製短剣	弥生中期後葉	
80-2	62	1	M-20	Ⅲ	鏡外製品		洗濯器に加工痕

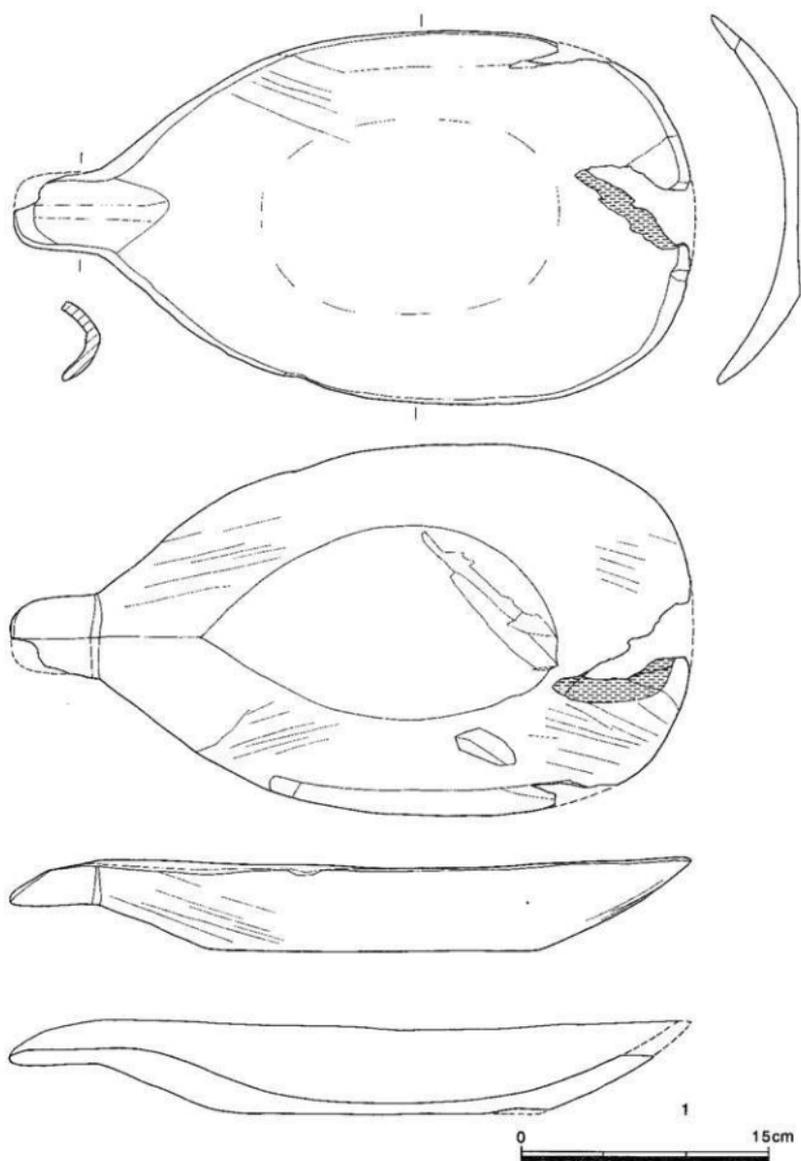
第7表 中手乱出土土器他一覧表

## 木製品

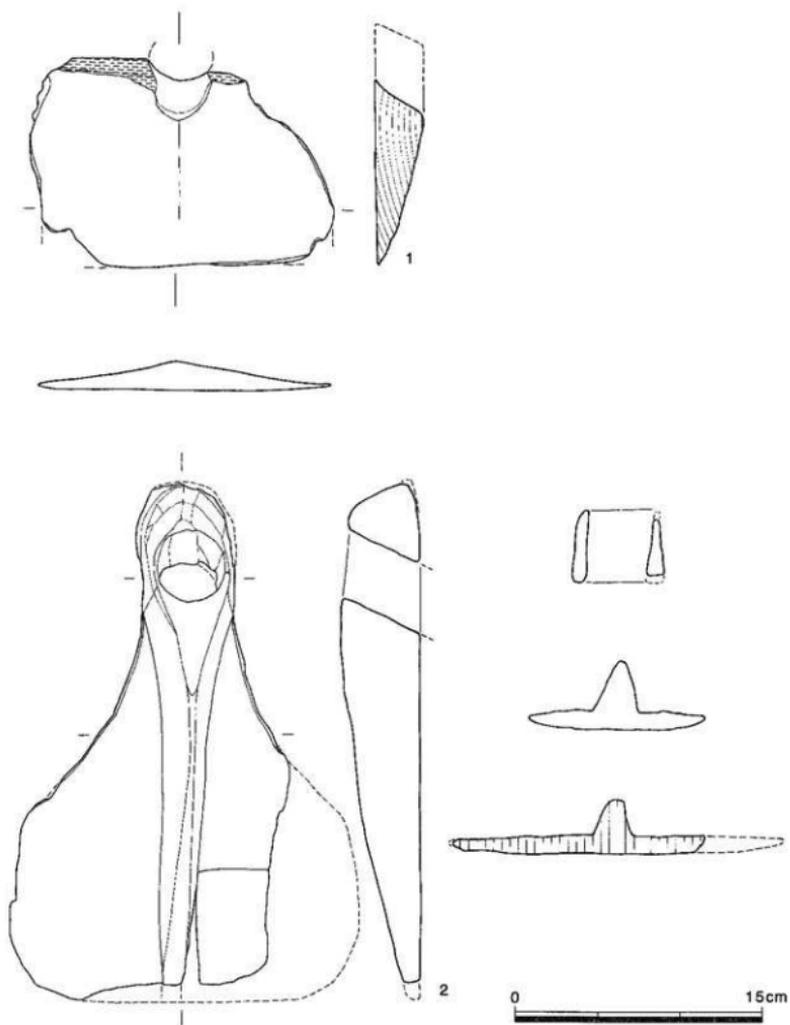
木製品は、一覧表によって概要を示した。

図版番号	写真図版	区	グリッド	層位	器種	時期	法量	備考
65-1	53	2	J-19N	Ⅱ	片口	弥生	長さ41.1cm 幅22.7cm 厚さ5.8cm	
66-1	53	2	L-19S	Ⅲ	飯	弥生	長さ(12.7)cm 幅(18.4)cm 厚さ2.9cm	
66-2	53	3	J-19	Ⅱ	飯	弥生	長さ31.3cm 幅17.0cm 厚さ4.9cm (1.2)cm	
67-1	54	1		Ⅱ	椀蓋	近世	口径10.8cm 器高(2.8)cm	
67-2	54	4	I-17	I	椀	近世	口径10.5cm 底径(3.4)cm 器高5.15cm	
67-3	54	2	西側法面	Ⅱ	椀	近世	口径(13.0)cm 底径6.2cm 器高(7.5)cm	
67-4	54	3	西側法面	Ⅱ	椀	近世	口径(1.38)cm 底径(7.8)cm 器高(7.0)cm	
67-5	54	4	I-15	I	椀蓋	近世	底径5.2cm 器高(2.5)cm	
67-6	54	3	西側法面	Ⅲ	椀	近世	底径7.2cm 器高(6.5)cm	
67-7	54	4	I-16	I	椀	近世	器高(4.9)cm	
67-8	54	2	東側法面	Ⅱ	椀	近世	器高(5.7)cm	
67-9	54	1	東側法面	Ⅱ	椀	近世	長さ26.4cm 幅8.9cm 厚さ5.5cm (除付)2.3cm	除付
67-10	54	2	西側法面	Ⅱ	椀	近世	口径20.5cm 底径11.1cm 器高9.4cm	
68-1	55	2	西側法面	Ⅱ	下駄	近世	口径23.4cm 底径7.8cm 器高1.9cm	
68-2	55	2	J-19	Ⅱ	下駄	近世	長さ20.2cm 幅4.8cm 厚さ1.8cm	
68-3	55	1	東側法面	I	下駄	近世	長さ21.8cm 幅8.3cm 厚さ3.8cm	
68-4	56	1	西側法面	Ⅱ	下駄	近世	長さ21.4cm 幅8.3cm 厚さ2.8cm	
69-1	56	2	西側法面	Ⅱ	下駄	近世	長さ20.8cm 幅7.4cm 厚さ2.6cm	
69-2	56	2	西側法面	Ⅱ	下駄	近世	長さ21.3cm 幅6.1cm 厚さ2.6cm	
69-3	57	3	西側法面	Ⅱ	下駄	近世	長さ23.3cm 幅7.1cm 厚さ1.55cm	
69-4	57	2	J-20	Ⅱ	下駄	近世	長さ21.2cm 幅8.5cm 厚さ1.3cm	
70-1	57	2	西側法面	Ⅱ	椀	近世	長さ(9.1)cm 幅3.9cm 厚さ1.2cm	
70-2	57	2	西側法面	Ⅱ	椀	近世	長さ(8.4)cm 幅3.3cm 厚さ1.3cm	

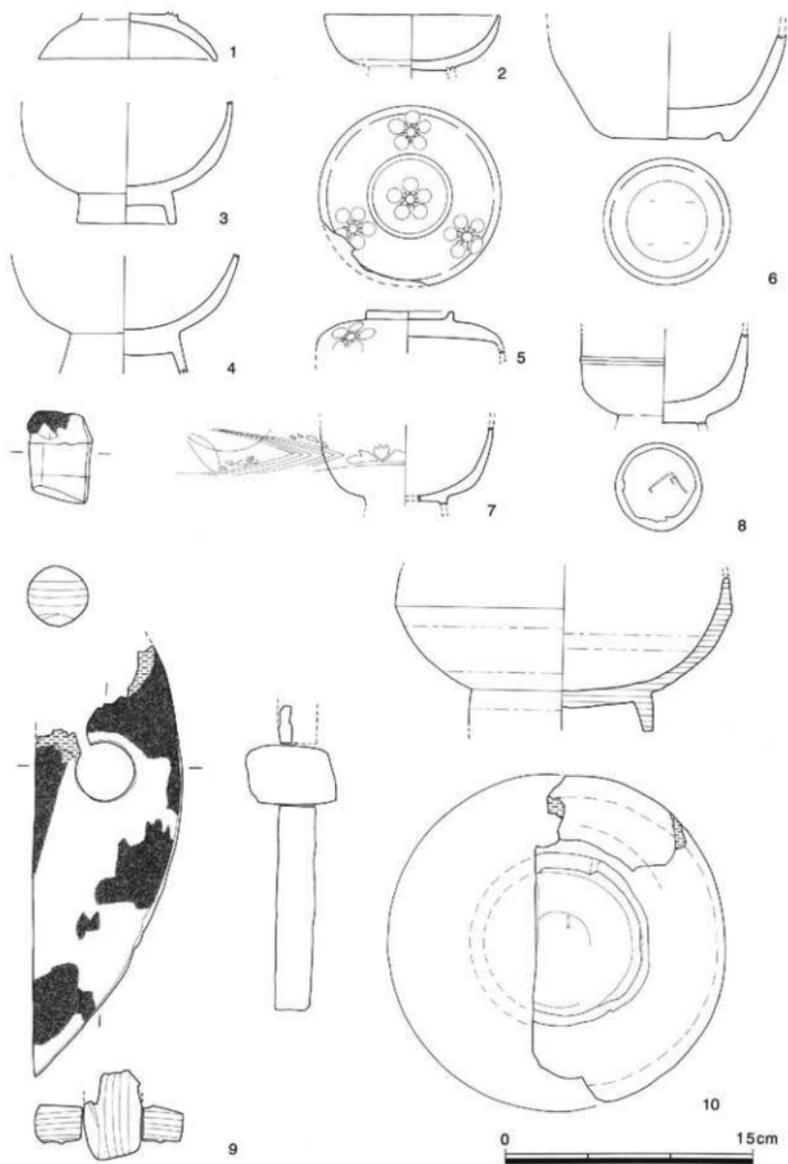
第8表 中手乱出土木製品一覧表



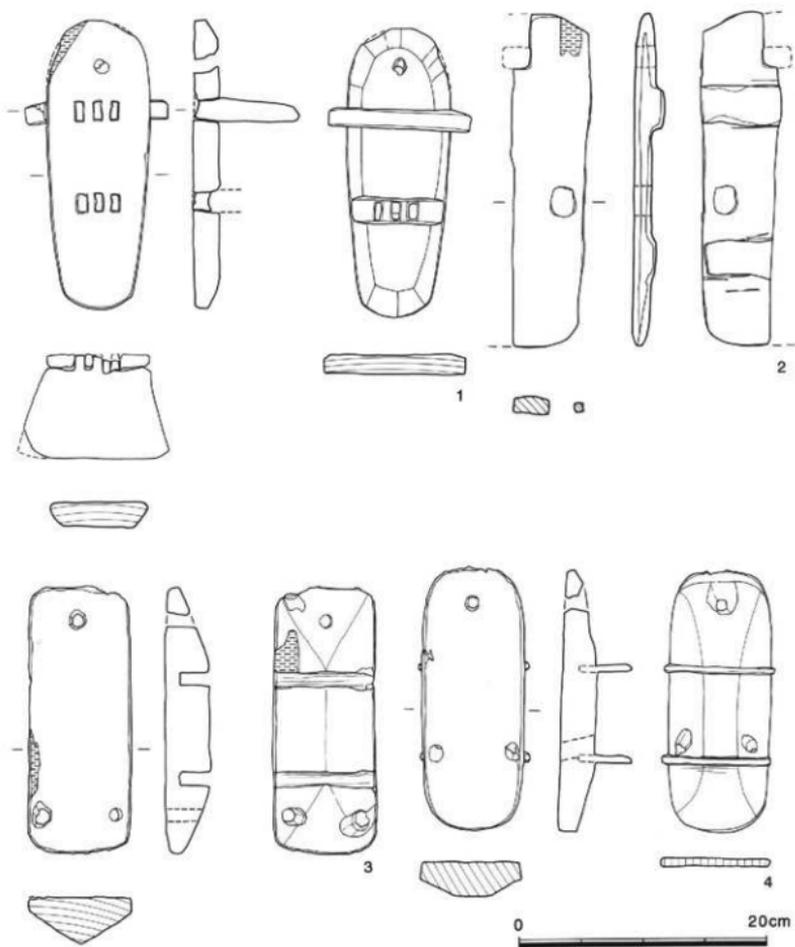
第65図 中手乱出土木製品実測図



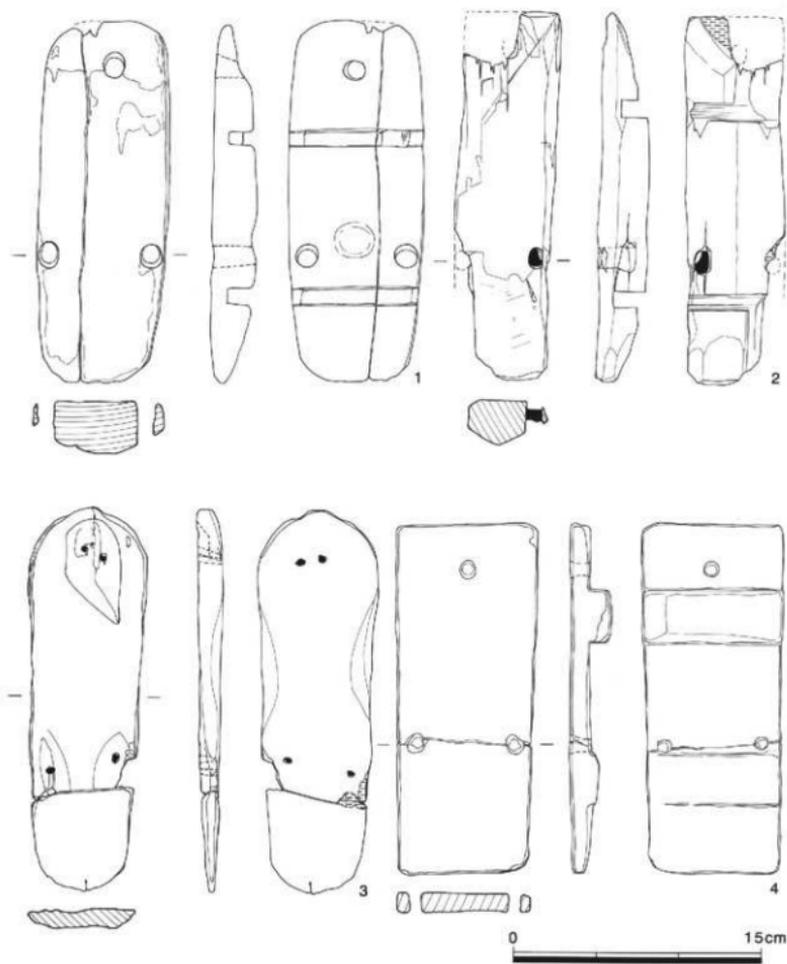
第66図 中手乱出土木製品実測図



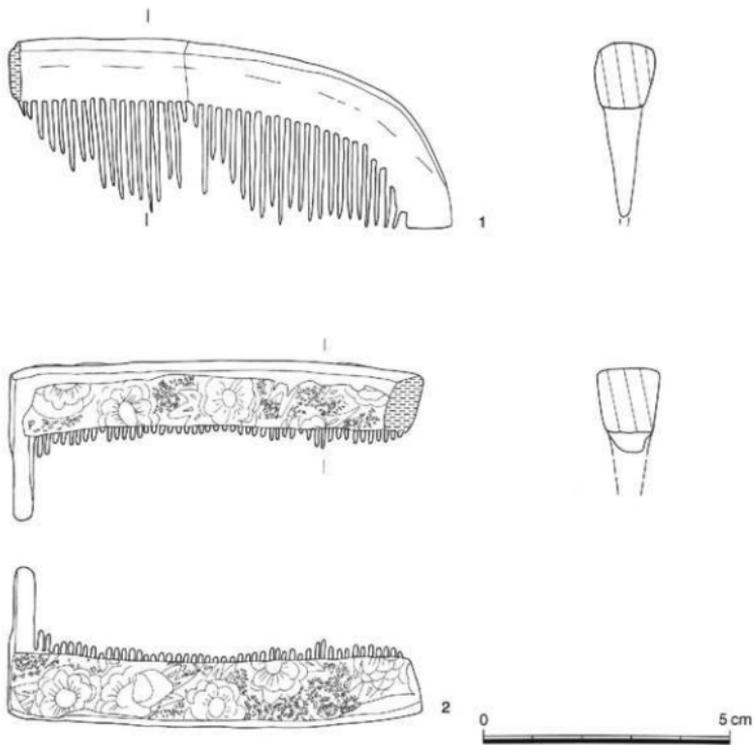
第67图 中手乱出土木製品実測図



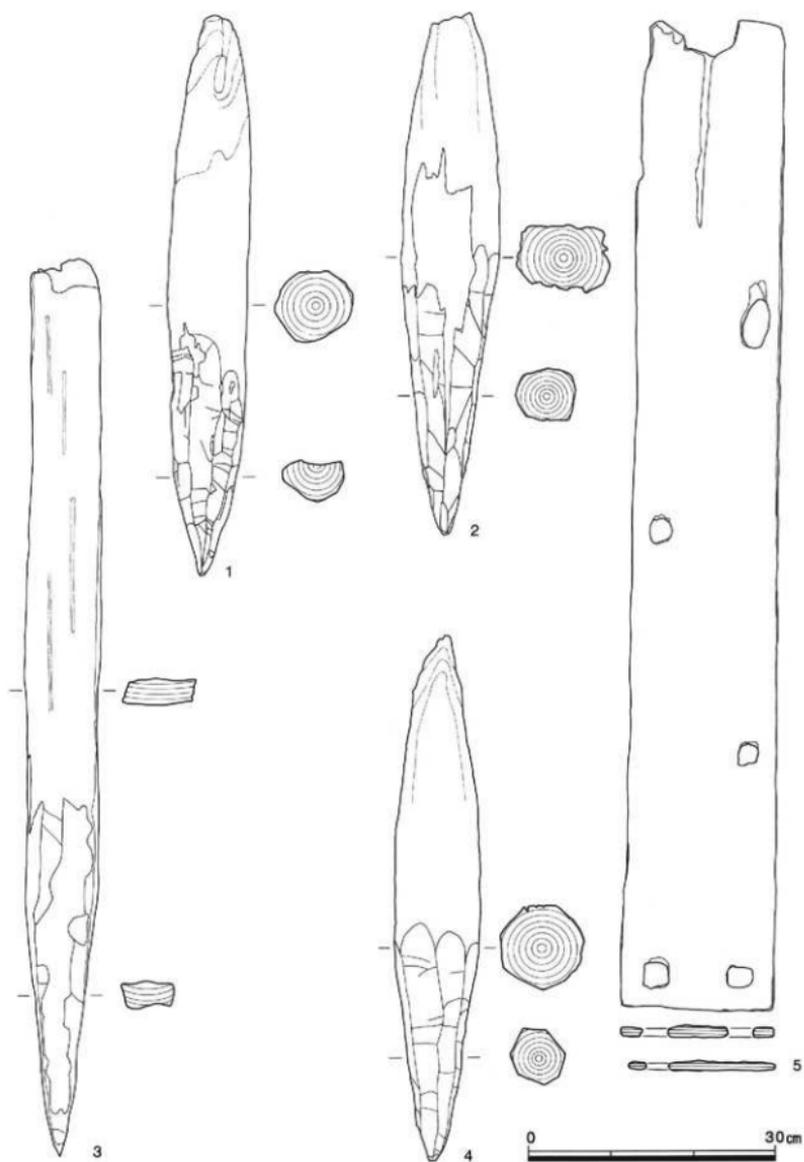
第68図 中手乱出土木製品実測図



第69図 中手乱出土木製品実測図



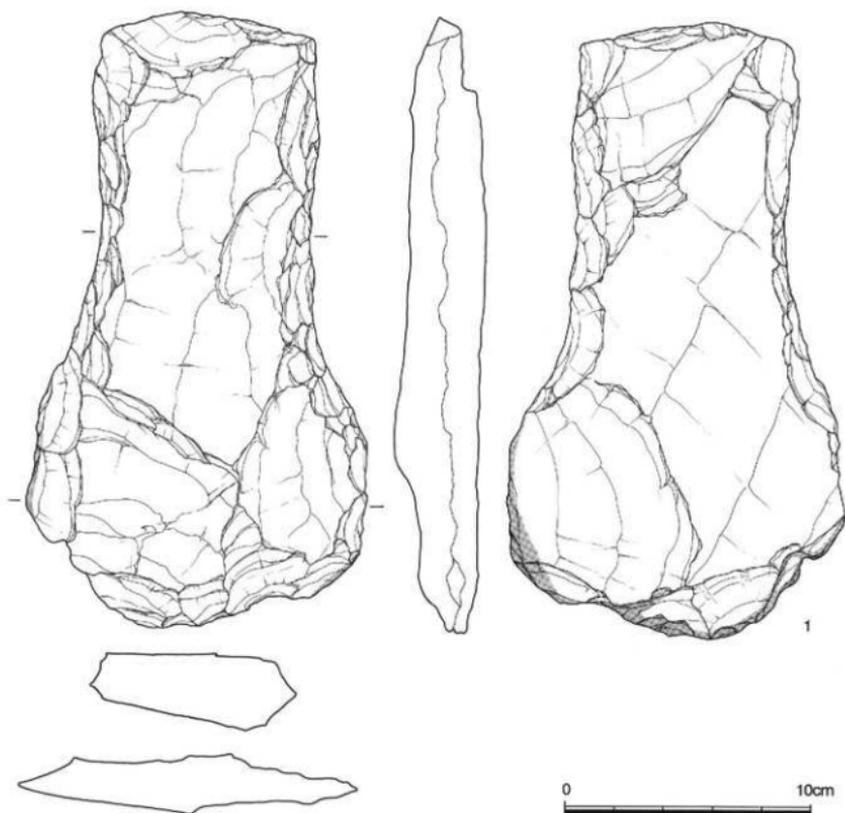
第70図 中手乱出土木製品実測図



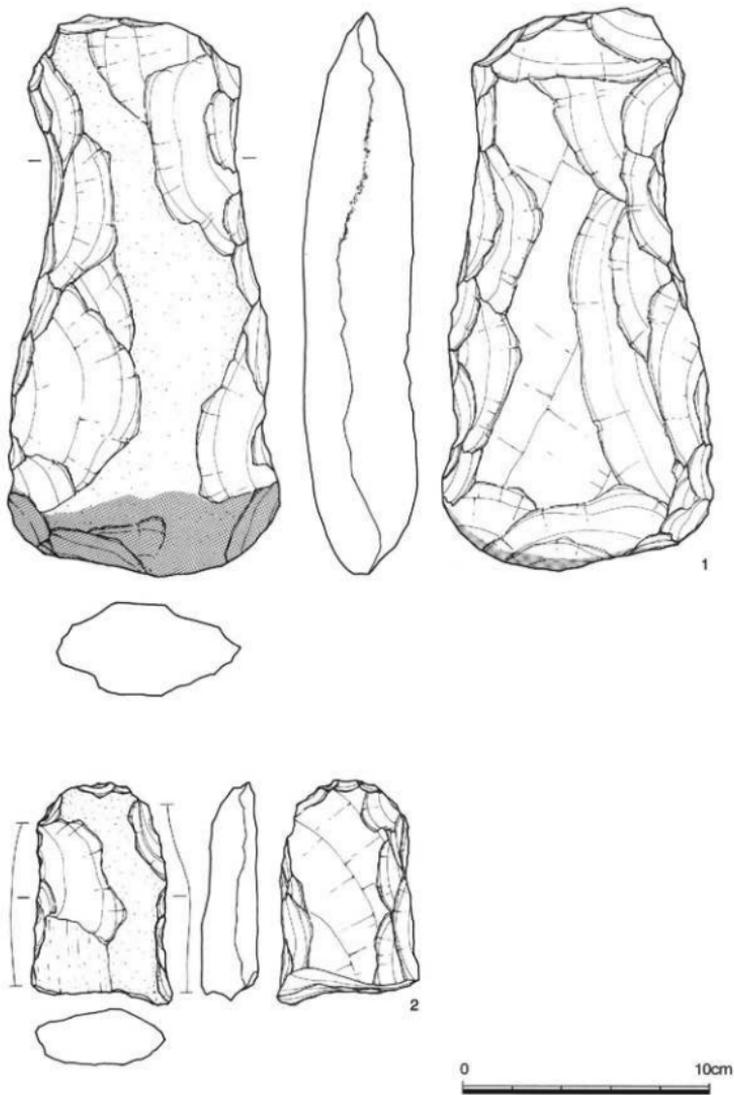
第71図 中手乱出土木製品実測図

## 石器

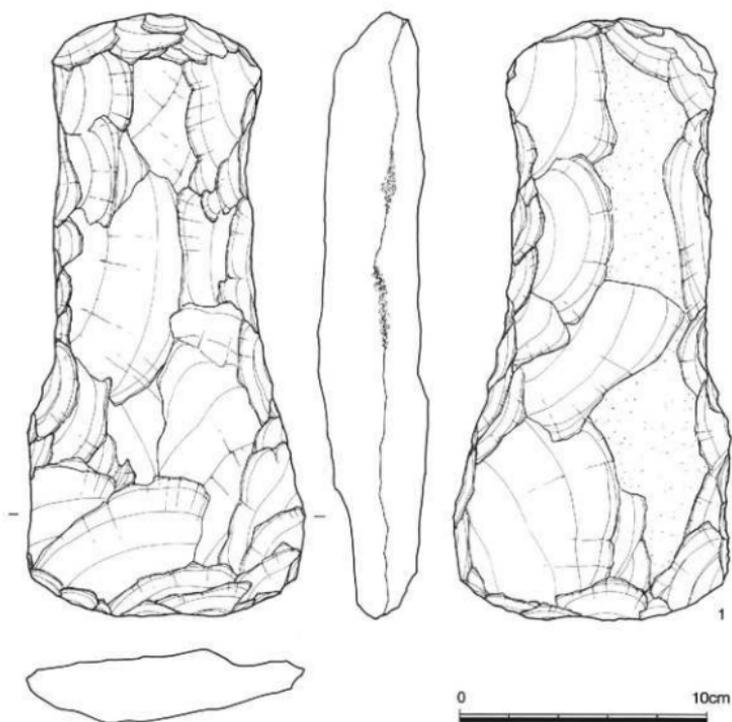
72-1は、長さ25.1cm、幅13.8cm、厚さ3.4cmを測る撥型を呈する大型の石鍬である。石材は細粒ハンレイ岩である。刃部には使用時、基部には着柄時に生じた使用痕が顕著に認められる。73-1は、長さ22.9cm、幅11.0cm、厚さ4.7cmを測る大型の石鍬である。刃部及び、基部には使用痕が顕著に認められる。石材は、砂質片岩である。74-1は、長さ24.6cm、幅11.2cm、厚さ4.4cmを測る73-1とほぼ同型を呈する石鍬である。刃部及び基部には使用痕が顕著に認められる。石材は、デイサイトである。73-2は、基部を丸く収める小型の石鍬破片である。長さ9.1cm、幅5.7cm、厚さ2.3cmを測る。石材は、輝石安山岩（無斑晶質）である。75-2は、73-2と同様に基部を丸く収める石鍬である。長さ10.4cm、幅7.9cm、厚さ2.2cmを測る。石材は、黒色頁岩である。75-1は、基部がやや尖り、刃部は、やや丸みを帯びる形態を有する大型の石鍬である。長さ24.1cm、幅7.7cm、厚さ3.7cmを測る。石材は、緑泥石片岩である。76-1は、75-1に類似した形態を有する大型の石鍬である。石材は、陽起石片岩である。



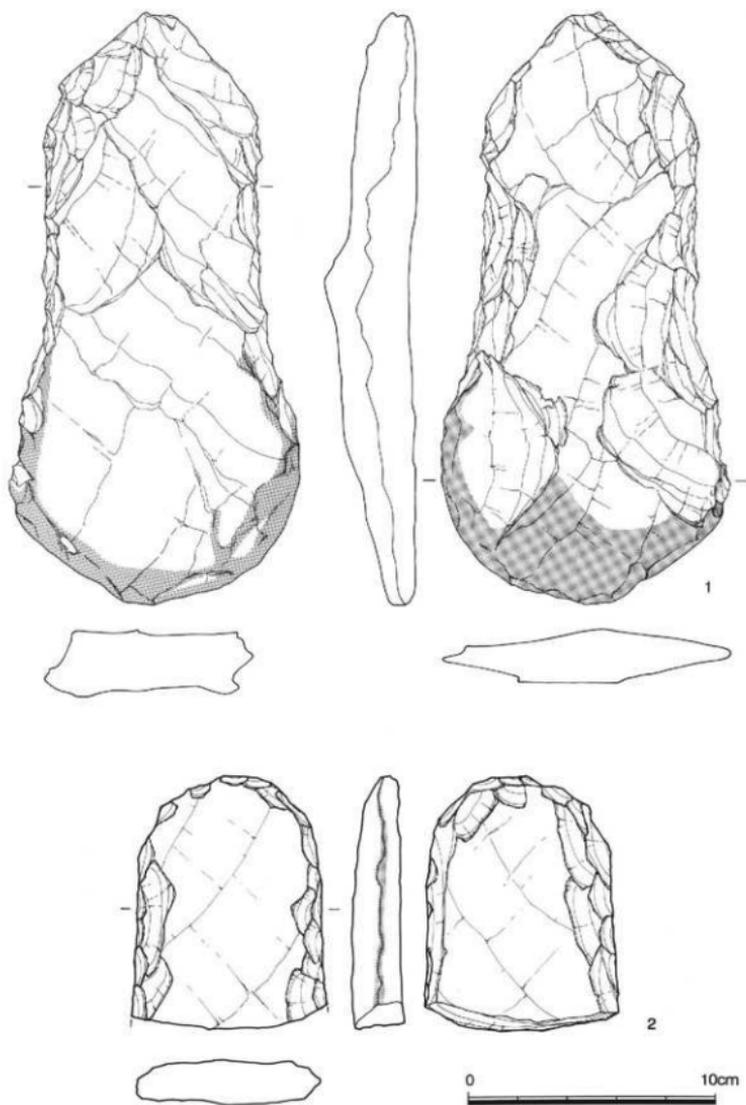
第72図 中手乱出土石器実測図



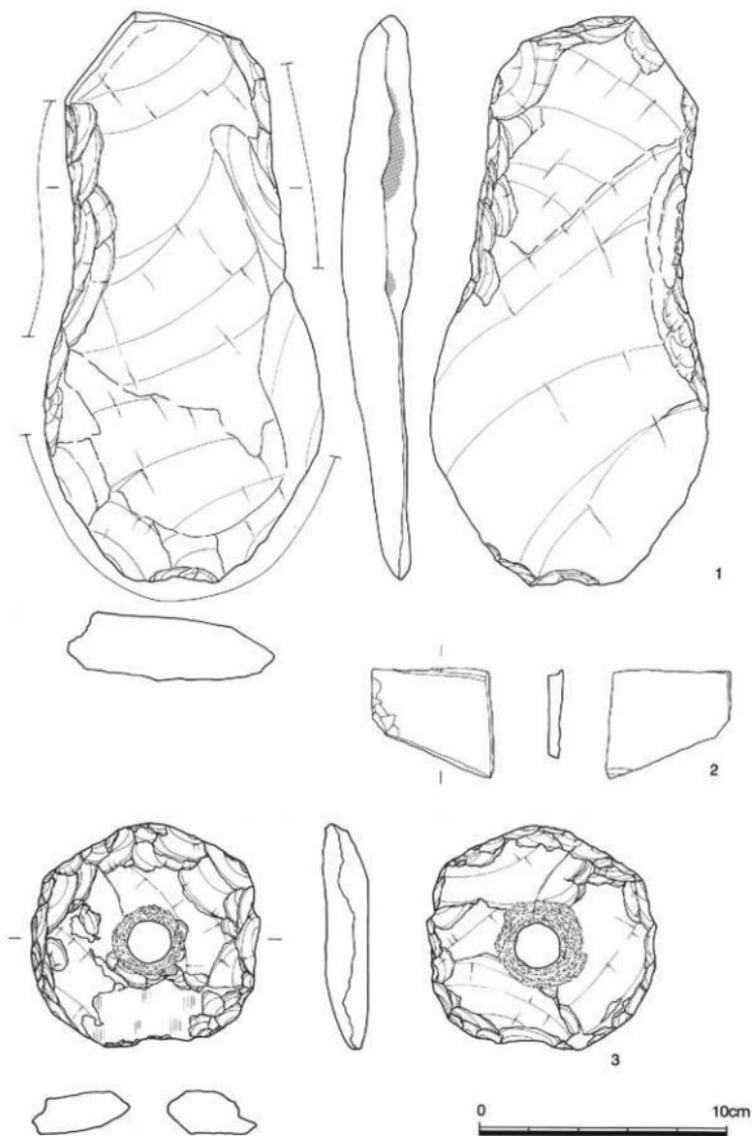
第73图 中手乱出土石器实测图



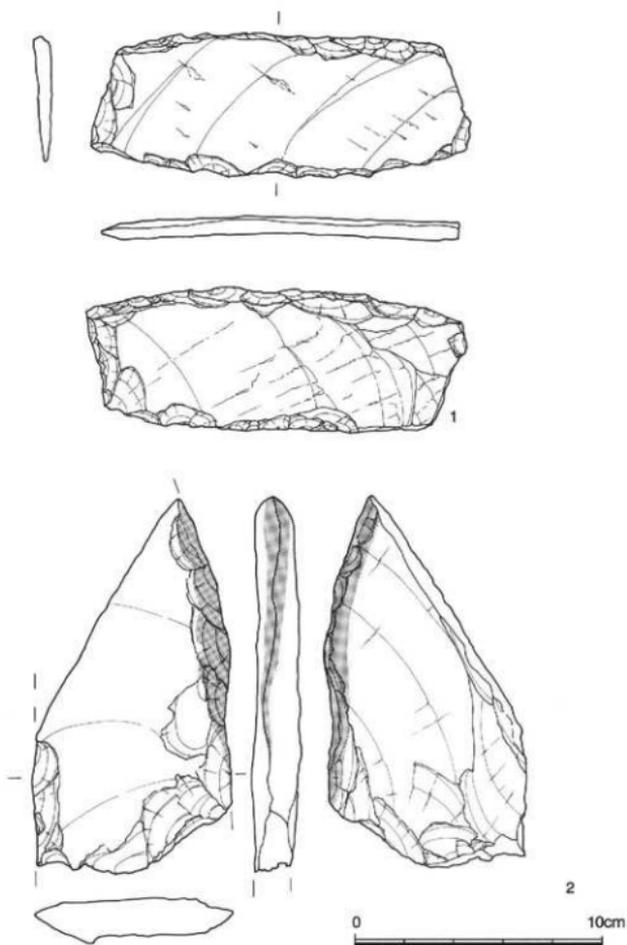
第74图 中手乱出土石器实测图



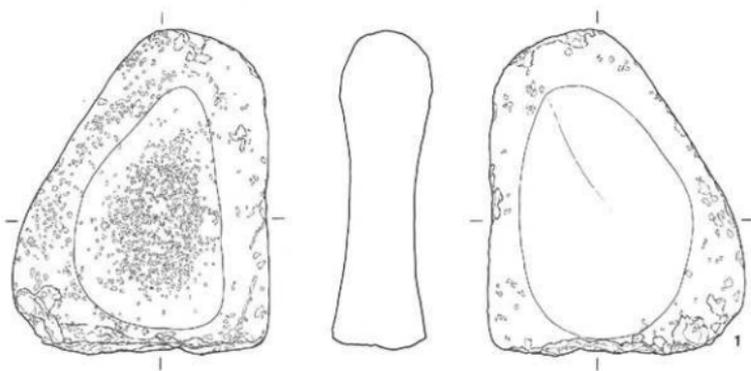
第75図 中手乱出土石器実測図



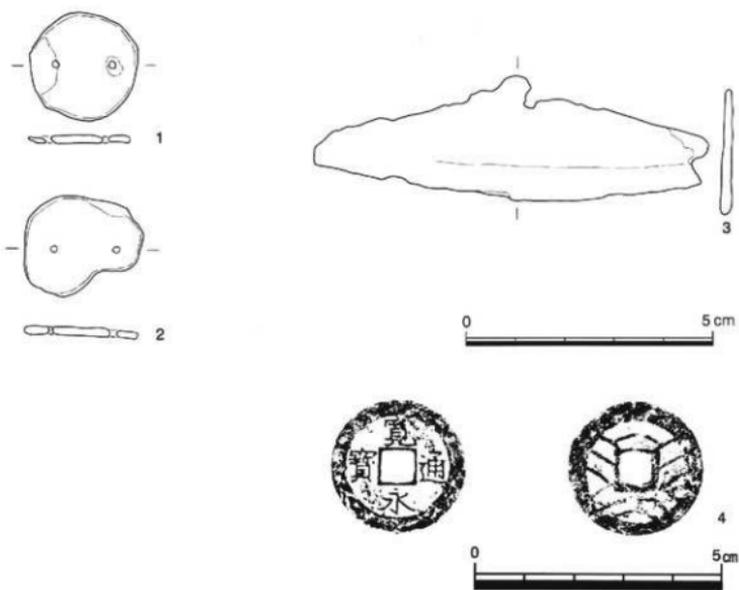
第76图 中手乱出土石器实测图



第77图 中手乱出土石器实测图



第78図 中手乱出土石器実測図



第79図 中手乱出土石製模造品・金属器実測図



第80図 中手乱出土鹿角製品実測図

76-2、77-1は、板状の石材を用いた剥片状の石器である。明確な使用痕は認められなかったが、石製穂積具と考えられているものに形態が類似する。76-2は、長さ4.5cm、幅5.0cm、厚さ0.6cm、77-1は、長さ15.3cm、幅6.0cm、厚さ0.8cmを測る。石材は、いずれも陽起石片岩である。76-3は、環状石斧である。直径約25.0cm、厚さ2.0cmを測り、中心部に直径約1.8cmの孔を有する。側縁には、剥離痕が認められる。石材は黒色頁岩である。77-2は、長さ15.1cm、幅7.9cm、厚さ2.1cmを測る石製の破片である。両端が欠損しており、全形は不明である。石材は陽起石片岩である。78-1は、石皿である。表面に凹面が認められる。なお、表面には敲打痕が認められる。石材は硬砂岩である。

#### 石製模造品・金属器・骨角器

78-1・2は有孔円板である。滑石製である。78-4は、寛永通宝である。80-1は、鹿角製棒状短剣（春成：1985）と呼ばれているものである。先端部を下方にして壺形土器（41-5）に収納されていた。シカの角幹部最先端を利用したもので、全長約25.4cmを計る。基部から約6.5cmの部分に隆帯を削り残し、基部との間を粗ケズリ調整する。先端部には主軸に並行するケズリ調整が認められる。かなり使い込まれたため先端部分は、現在でも光沢を有している。なお、基部は中空となっているが、これが人為的なものであるか否かは判断できなかった。基部は海綿状組織となっていることから、風化による欠損の可能性も否定できない。80-2は、鹿角製の用途不明品である。先端部から約4cm程の位置に主軸

に直交するキザミが認められる。短剣と同様基部は中空となっている。

## 自然遺物

### 動物遺体

動物遺体はともに旧水路から出土した。他遺物の出土状況からもわかるように、出土位置・層位から遺物の時期を推定することは困難である。ここでは一覧表によって客観的な記録を示すにとどめ、個々の時代、時期比定は行わないこととする。動物遺体の同定は、早稲田大学教育学部講師金子浩昌氏による。

GL: 最大径 SD: 作体最小径 Sp: 埋込深さ Bd: 埋込位置 単位cm

遺体名	遺体位置	写真別号	区	グリッド	層位	遺物	動物遺体種	骨種部位	方向	埋込位置	備考
中平瓦	80-1	82	1		Ⅲ	河川跡	弥生~古墳	ニホンゾウ	骨節部(骨先)		
中平瓦	80-2	82	1	M-20	Ⅲ	河川跡	弥生~古墳	ニホンゾウ	骨節	在	
縄文土器	81-1	88	3		Ⅲ	河川跡	近世	イシカズ	陶片		切取あり
縄文土器	81-2	88	3		Ⅲ	河川跡	近世	イシカズ	陶片		
縄文土器	81-3	84	2	C-9	Ⅲ	河川跡	弥生~近世	ヒツ	骨節部		
縄文土器	81-4	84	3		Ⅲ	河川跡	近世	イヌ	大腸骨	在	GL190, 中央志倉155, 中央志倉143
中平瓦	81-6	84	排水溝		Ⅲ	河川跡	弥生~古墳	ウシ	大腸骨	右	SD55 26×40.4
縄文土器	81-8	84	2	C-8-S	Ⅲ	河川跡	弥生~近世	ウシ	腕・尺骨	右	SD43
縄文土器	81-7	84	2	C-8	Ⅲ	河川跡	弥生~近世	ウシ	中趾骨	左	SD25.9
中平瓦	82-1	85	2	西谷跡田				ウマ	寛骨	右	
中平瓦	82-2	85	1		Ⅲ	河川跡	弥生~古墳	ウマ	寛骨	右	自然館54.5, 埋込体最小径5.7
縄文土器	82-3	85	1	F-15	Ⅲ	河川跡	弥生~近世	ウマ	寛骨片	右	
中平瓦	82-4	84	3		Ⅲ	河川跡	弥生~古墳	ウマ	切歯	右	
中平瓦	82-6	84	1		Ⅲ	河川跡	弥生~古墳	ウマ		在	エナメル14.16, 34.4×13.90 (表反りノコ)
中平瓦	82-6	84	1		Ⅲ	河川跡	弥生~古墳	ウマ	上顎臼歯	左	F2
中平瓦	82-7	84	1		Ⅲ	河川跡	弥生~古墳	ウマ	下顎歯	左	F3
縄文土器	82-8	84	3		Ⅲ	河川跡	近世	ウマ	下顎臼歯	左	F4
縄文土器	82-9	84	1	F-15	Ⅲ	河川跡	弥生~近世	ウマ	下顎骨	右	
中平瓦	83-1	86	2	K-30	Ⅲ	河川跡	弥生~古墳	イノシシ	上顎犬歯	右	
中平瓦	83-2	86	2		Ⅲ	河川跡	弥生~古墳	イノシシ	下顎骨片	左	歯冠長36.3, 歯冠幅16.25
縄文土器	83-3	86	1	E-14	Ⅲ	河川跡	弥生~近世	イノシシ	上顎骨	左	M3
縄文土器	83-4	86	2	C-9-N	Ⅲ	河川跡	弥生~近世	イヌ	下顎犬歯	右	
中平瓦	83-5	86	1	東谷跡田	Ⅲ	河川跡	弥生~古墳	ウマ	中平骨	右	B d 40.0
縄文土器	83-6	85	1	F-13	Ⅲ	河川跡	弥生~近世	ウマ	肩甲骨	右	
中平瓦	83-7	86	排水溝		Ⅲ	河川跡	弥生~古墳	ブタ	上頰骨	左	B d 45.18, S D 18.78
縄文土器	83-8	86	2	C-9	Ⅲ	河川跡	弥生~近世	ウマ	肩骨	左	S D 26.15
縄文土器	83-9	85	1	F-15-N	Ⅲ	河川跡	弥生~近世	ウマ	基節骨	左	GL 24.5
中平瓦	83-10	86	2	西谷跡田	Ⅲ	河川跡	弥生~古墳	ウマ	中平骨	左	埋込部26.9
中平瓦	83-11	86	2	西谷跡田	Ⅲ	河川跡	弥生~古墳	ブタ	大腸骨	右	B d 54.3
中平瓦	83-12	86	3	J-19	Ⅲ	河川跡	弥生~古墳	ブタ	下頰骨	左	歯冠長12.8, 歯冠幅7.4
中平瓦	83-13	86	3	J-19	Ⅲ	河川跡	弥生~古墳	ブタ	要部No7	左	内蔵部~埋込部61.6
中平瓦	84-1	85	2	K-30	Ⅲ	河川跡	弥生~古墳	シカ	下顎骨	左	M1・2
中平瓦	84-2	85	2	K-30	Ⅲ	河川跡	弥生~古墳	シカ	下頰骨	左	F2埋れ
縄文土器	84-3	85	1	E-14	Ⅲ	河川跡	弥生~近世	シカ	下顎骨	左	F2~M3
縄文土器	84-4	85	1	F-13	Ⅲ	河川跡	弥生~近世	シカ	寛骨	右	切取あり
縄文土器	84-5	85	1	D-13-S	Ⅲ	河川跡	弥生~近世	シカ	下顎骨	左	M1~M3

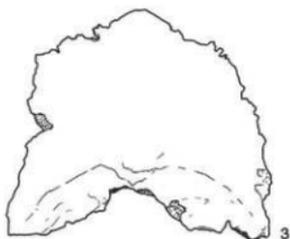
第9表 御殿川流域遺跡群出土動物遺体一覧表



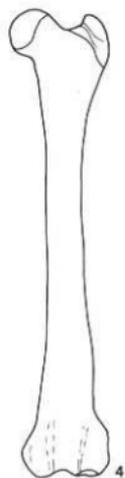
1



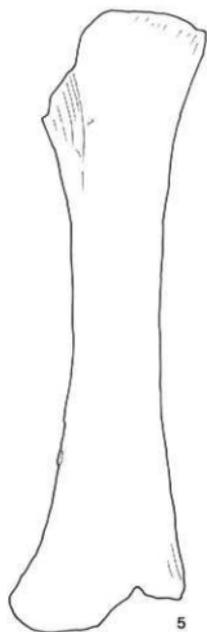
2



3



4



5



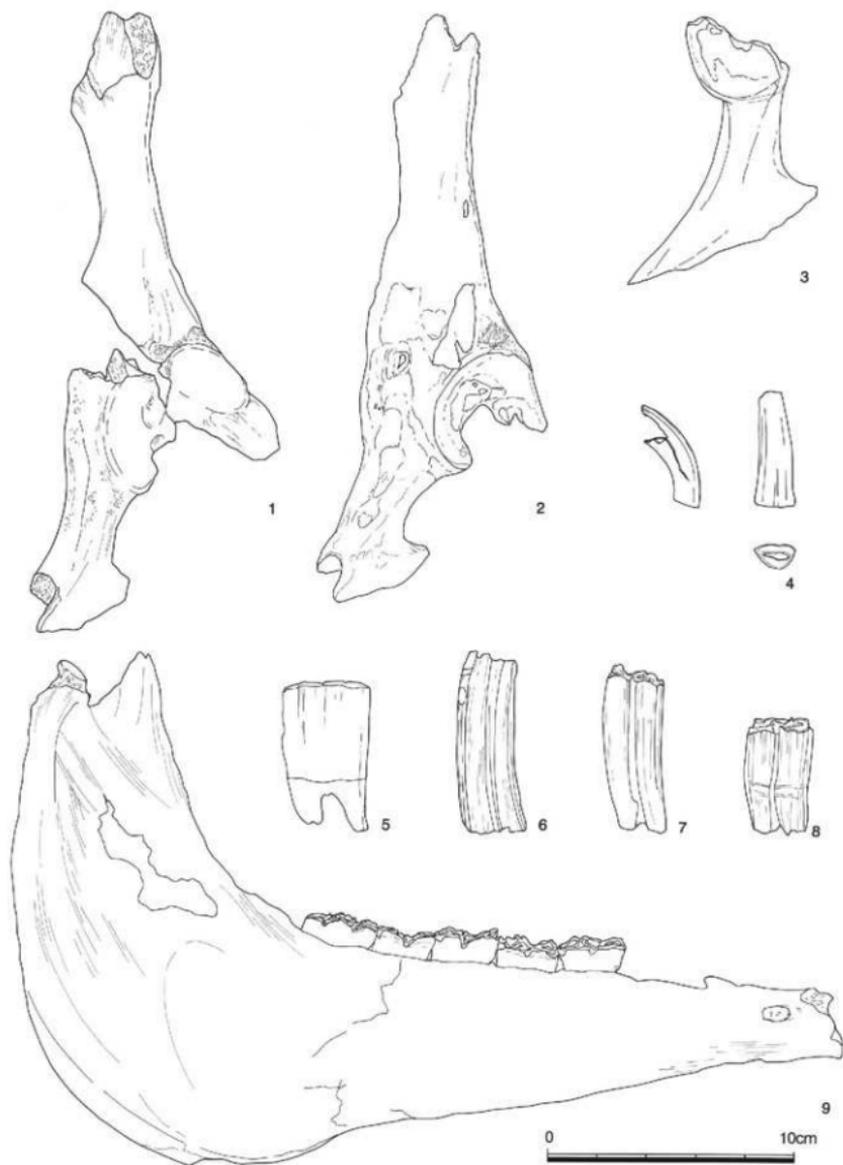
6



7



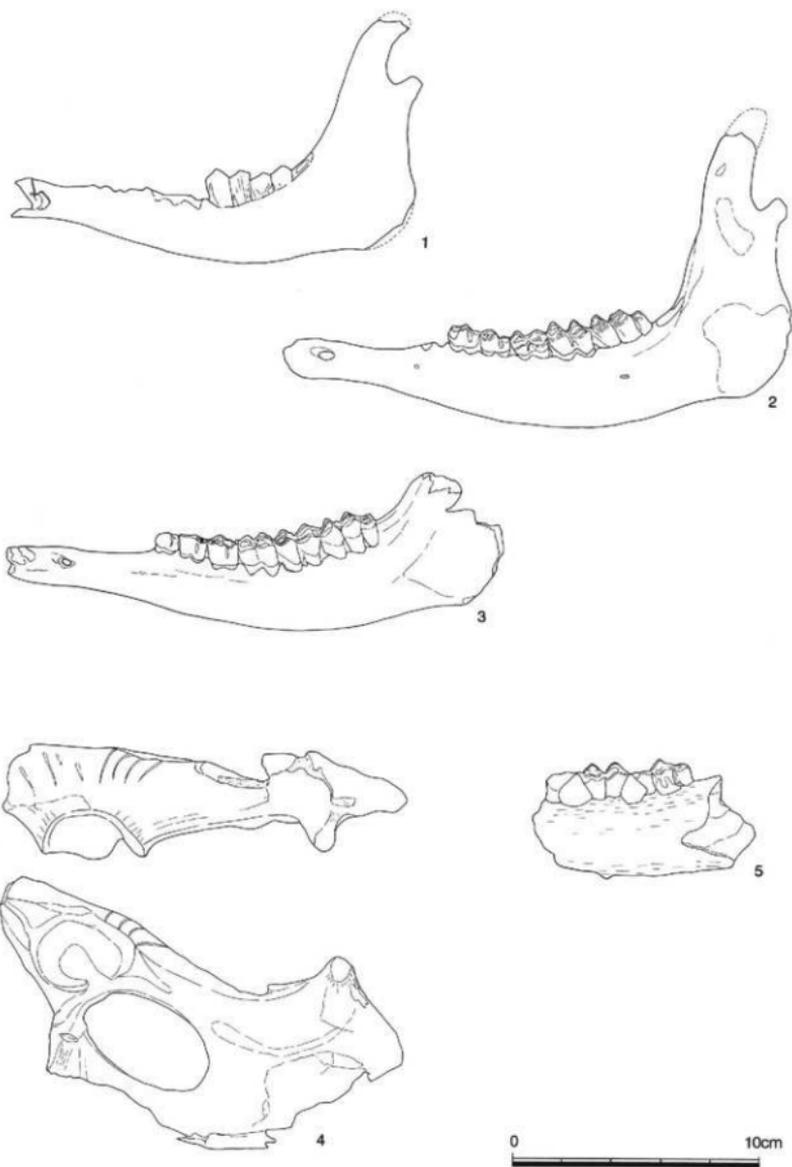
第81図 動物遺体実測図



第82図 動物遺体実測図



第83図 動物遺体実測図



第84図 動物遺体実測図

## 包含層、表採出土器

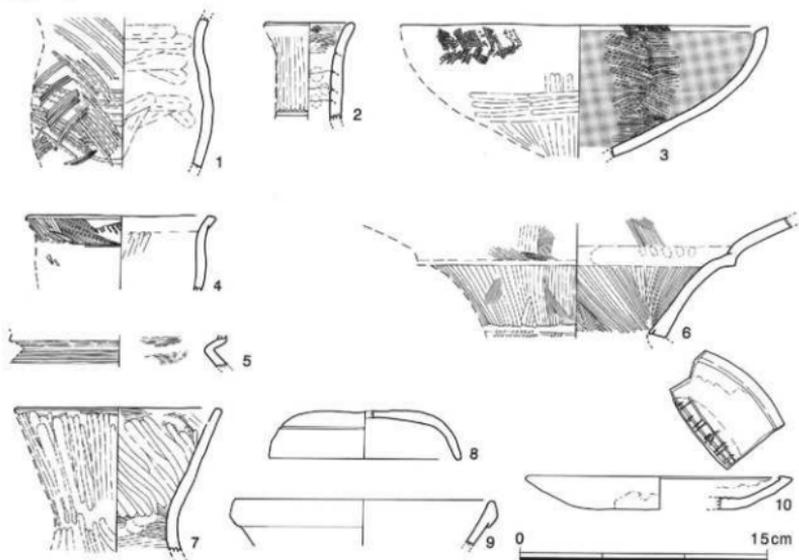
平成2年度から行われている本遺跡群の調査の中で未発表のものや、表採品のうち、遺跡の評価や存続時期を考える上で参考となる資料についてここで報告する。

85-1はやや膨らみを持つ胴部外面に縦位の羽状条痕を施す深鉢である。内面は強いナデによって調整する。弥生中期中葉以前に比定されよう。85-2は筒状の頸部からわずかに外反する口縁部を有する細頸壺の破片である。頸部下端にはヘラ描文を施す。外面を縦位のミガキ、内面は口縁部をハケ、頸部をナデ調整する。弥生中期後葉に比定されよう。

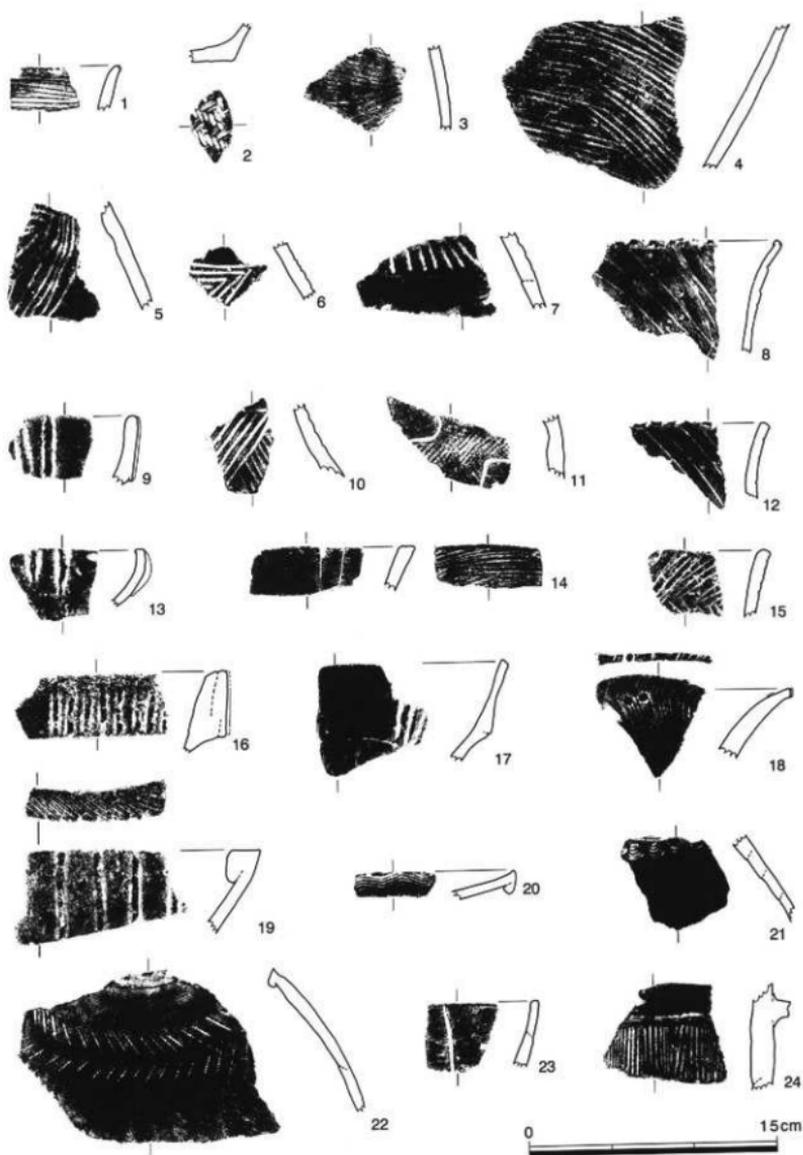
85-3は、椀状の胴部に内傾する口縁を有する鉢である。底部を欠損するため、台付の有無は不明である。口縁部外面及び口唇部に縄文を施し、坏部は、内外面ともに丁寧なミガキ調整を施し、内面は赤彩している。85-2・3は、弥生中期後葉に比定されよう。85-4は緩やかに外反する口縁を有する鉢である。内面をミガキ調整することから鉢と判断した。口縁部は粘土帯部分的に粘付けられており、折り返し口縁状となる部分がある。85-7は外反度が弱い単純口縁の壺である。内外面はミガキ調整する。

85-4・7は、弥生後期に比定されよう。

85-5はS字壺である。胴部外面のヨコハケは頸部に密接して施されている。頸部内面にはハケ調整が認められることから、S字壺のB類（赤塚：1990）に近い要素を持つ。古墳前期に比定される。85-6は二重口縁壺である。頸部から大きく外反する口縁部を有する。内外面ともに縦位を基調とした丁寧なミガキを施している。古墳前期に比定される。85-8は須恵器坏蓋である。天井部にはヘラ切り痕が認められることから、TK209以降に並行するものであろう。85-9は玉縁口縁を有する青白磁碗である。11世紀後半から12世紀前半に相当するものである。85-10は古瀬戸中期のおろし皿である。14世紀中頃に比定される。

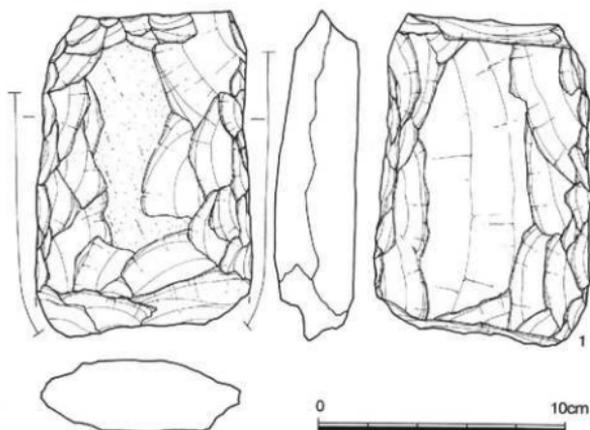


第85図 御殿川流域遺跡群包含層及び、表採土器実測図（平成2年～平成7年度調査分）



第86図 御殿川流域遺跡群包含層及び表採土器実測図（平成2年～7年度調査分）

86-1・3・4は外面に条痕を施す壺または深鉢の破片である。86-1は口唇部にヘラ状工具によるキザミを施す。86-2は底面に網代痕を有する底部破片である。86-5・6・7・10はヘラ描文を有する壺の胴部破片である。86-10は肩部に三角連繫文を施す。86-11は縄文を地文としてヘラ描で区画文を施す壺の胴部破片である。86-8・12・15は外面にヘラ描羽状文を施す深鉢である。86-15については磨減が著しく明らかではないが、86-8・12は口唇部にヘラ状工具によるキザミを施している。86-9・13・14・16・17・19・23は複合口縁部の口縁部破片である。複合部の直立が弱い86-13、複合部が発達するものは外面に棒状浮文を施す86-9・16・17、縦位のヘラ描沈線を施す86-14・23、口縁部内面に断面方形の突帯を施す86-19などが認められる。86-18・20・21・22は櫛描文を施す壺の破片である。86-18は口縁部内面に櫛刺突羽状文を施し2個1組の円形浮文を口唇部に棒状浮文を施す。86-20は口縁部を折り返し状に粘土を垂下させ、口唇部に山形に近い波状文を施す。内外面はミガキ調整する。86-21は肩部に相当する。櫛描直線文の下に扇形文を施し、円形浮文を加えている。86-22は丸みを帯びた胴部を有するもので、肩部に上から櫛描直線文、櫛刺突羽状文を施す。文様帯直上に剥離痕が認められることから屈曲が強い頸部が付くと推測される。県西部の欠山式に類例が認められる。86-24は円筒埴輪の破片である。外面には一次調整のタテハケが認められ断面方形の突帯を強いヨコナデによって貼り付けている。なお、黒斑は認められない。



第87図 御殿川流域遺跡群表採石器実測図（平成2年～7年度調査分）

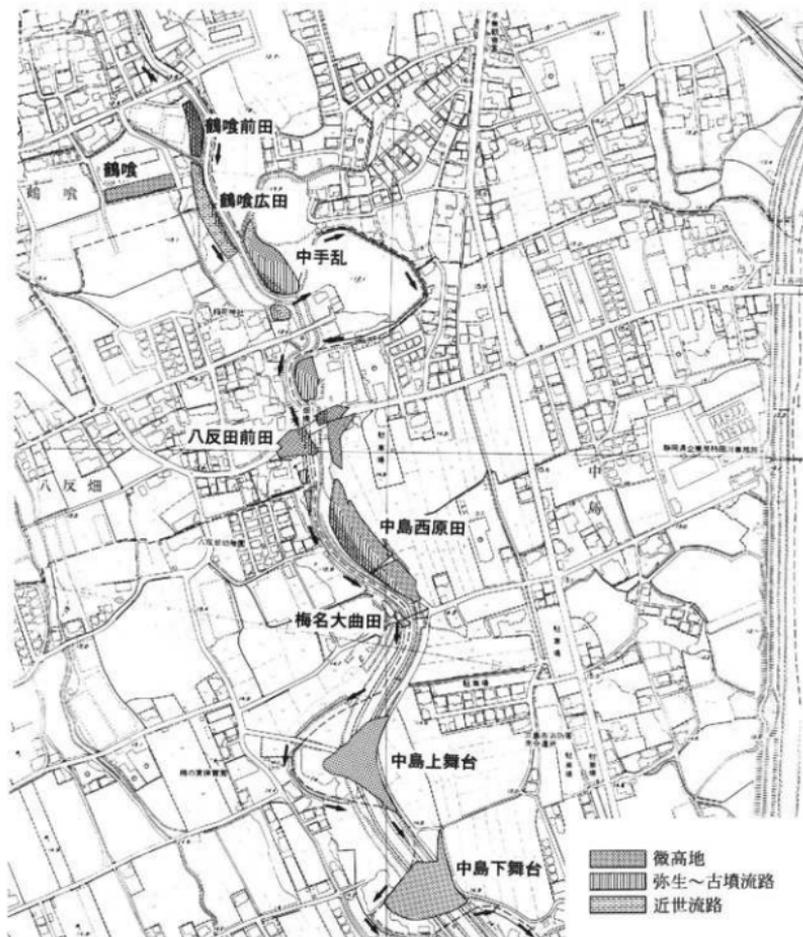
### 参考・引用文献

- 赤塚 次郎 1990 『廻間遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター
- 伊藤 淳史 1996 『太平洋沿岸における弥生文化の展開』 『YAY』 弥生土器を語る会
- 北川 恵一 1987 『『駿東梨の甕』の初現と終末について』 『沼津市博物館紀要 12』 沼津市歴史民俗資料館・沼津市明治資料館
- 古泉 弘 1985 『江戸の街の出土遺物』 『季刊考古学第13号 特集江戸時代を掘る』 雄山閣
- 春成 秀爾 1985 『鉤と雲 有鉤短剣の研究』 『国立歴史民俗博物館研究報告第7集』 国立歴史民俗博物館
- 樋上 昇 1996 『東海』 『古代の木製食器 第Ⅲ分冊』 埋蔵文化財研究会
- 菱田 哲朗 1992 『須恵器生産の拡散と工人の動向』 『考古学研究 第39巻 第3号』 考古学研究会
- 比田井克己 1993 『山中式・菊川式東進の意味すること』 『転機第4号』 転機同人会
- 松井 一明 1995 『弥生時代の石鉄について』 『弥生文化博物館研究報告第4集』 大阪府立弥生文化博物館
- 山本 恵一 1988 『静岡県東部の古墳時代の土師器について』 『沼津市博物館紀要 13』 沼津市歴史民俗資料館・沼津市明治資料館
- 山本 恵一 1995 『静岡県下の6-7Cの土師器 -駿河東部・伊豆北部の現状について-』 『東西土器研究 第4号』 東西土器研究会
- 静岡県 199 『静岡県史資料編3 考古3』 きょうせい
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1992 『長崎遺跡Ⅱ (遺構編)』
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1993 『御殿川流域遺跡群Ⅰ』
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1994 『御殿川流域遺跡群Ⅱ』
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1995 『御殿川流域遺跡群Ⅲ』
- 沼津市教育委員会 1990 『雌鹿塚遺跡発掘調査報告書』
- 三島市教育委員会 1983 『中島下舞台遺跡』
- 三島市教育委員会 1984 『鶴喰遺跡』
- 三島市教育委員会 1993 『金沢遺跡』
- 三島市教育委員会 1996 『西大久保・奈良橋向遺跡』

## 第V章 まとめ

### 第1節 遺物の出土傾向から見た流路の変遷

三島市鶴喰から中島にわたる御殿川周辺は、現在の流路に沿ってほぼ全域を網羅する形で発掘調査が行われている。ここでは、この区間を対象に今までの調査によって得られた成果（遺物の散布状況）をもとに、御殿川流域の景観復元を行う。



第88図 御殿川流域遺跡群周辺における流路の変遷

第88図は、流路・遺物の出土傾向に現地形の状況を若干加味し、各時代の流路の変遷を推定したものである。これにより、非常に雑駁な区分ではあるが流路は、弥生～古墳時代と近世の2時期に大別できる。各時期の流路は、現在の流路にほぼ重複する範囲に形成されているが、以下上流部から順によって地形及び流路の変遷（案）を示す。

#### 金沢～中手乱遺跡周辺

金沢遺跡では住居跡（古墳時代）、鶴喰遺跡では方形周溝墓（弥生時代）が検出されている。特に鶴喰遺跡で検出された微高地の縁辺部とみられる落ち込みが鶴喰広田遺跡2区で検出されたことにより、当地点での流路西端をとらえることができた。鶴喰前田・広田遺跡で確認された流路は、鶴喰広田3区南半部と中手乱遺跡（北東部）で確認された微高地の状態及び、現地形の状況から、中手乱遺跡南付近で大きく北東側に蛇行した後再び南流し、八反田前田遺跡方面へと続くと考えられる。なお、鶴喰広田遺跡1区及び中手乱遺跡2区から出土した弥生時代中期の深鉢土器片が接合したことから、両調査区で検出された流路は、一連のものであることが確実となった。

当遺跡周辺において弥生～古墳時代の流路は、やや東寄り、近世の流路は西寄りを流れていたことがわかる。

#### 八反田前田～中島下舞台遺跡

八反田前田遺跡では、現在の流路の両岸に設定された調査区の東西端で微高地が検出されている。この微高地の間隔は非常に狭く、流路との比高差もやや急である。

中島西原田遺跡では、調査区東側に微高地が検出された。当遺跡周辺でも弥生～古墳時代の流路は東寄りを、近世の流路は、西寄りを流れている。

中島上・下舞台遺跡では微高地が検出され、住居跡が確認されている現地形に残された痕跡によって流路を推測すると、両遺跡の微高地を縫うように西側を蛇行していた可能性が高い。

#### 今後の課題

調査の成果をもとに以上のような流路の変遷を考えた。当遺跡群の一般的な傾向として、弥生～古墳時代の流路は礫を主体とした覆土を持つものに対し、近世の流路は、粘質土及び砂質土を覆土に主体とするということが指摘できる。このことを直ちに当時の自然環境の動向に結びつけることは危険であろうが、今後このような視点で当遺跡群を検討して行くことが、当地域の歴史を考える上で重要である。

## 第2節 縄文晩期～弥生中期の土器について

中手乱遺跡の河道跡から出土した縄文晩期～弥生中期中葉の土器群は、良好な資料に恵まれない駿河において貴重な情報を提供することとなった。残念ながらいずれもが旧河道出土であるため、土器の共存関係は不明であるが、比較的残存状態が良好な資料について県内の類似例などからその編年的位置付けを行い(註1)、各時期の様相を概観することとした。

### 縄文晩期

89-5は、底部の形態や口縁部内外面及び肩部に施される文様帯が御殿場市間塚遺跡出土土器(89-1～3)に類似する深鉢である(静岡県:1992他)。中部山岳地方の縄文晩期(水式)の影響下に成立したものと考えられる。これまでの当遺跡群の調査の中でもほぼ同時期と考えられる土器は確認されていたが、いずれも細片であり、偶発的な流れ込みによる二次堆積との印象が強かったが、口縁部の一部を欠損する以外は完存する今回のような資料の出土は、周辺に該期の何らかの遺構が存在していた可能性を強く示唆するものとなった。

### 縄文晩期～弥生前期

89-6は、いわゆる変容壺と呼ばれる一群に含まれる壺である。形態が類似するものに長野県松本市石行遺跡などがあげられる。縄文晩期～弥生前期(樫王式)に併行すると考えられる。当該期の良好な資料として長泉町大平遺跡出土土器(89-4)がある(静岡県:1992他)。

### 弥生中期前葉

89-9は、条痕文系土器の壺である。口唇部の磨滅が著しい以外は、ほぼ完形であり、土器中に鹿角製短剣が納められていたものである。わずかに残存する口唇部にはやや間延びしたキザミを施していることから、弥生中期前葉に比定されるものであろう。底部外面周辺にはケズリ状の調整が認められる。同時期と考えられる資料として富士宮市渋沢遺跡出土土器(89-7・8)がある(富士宮市:1989)。

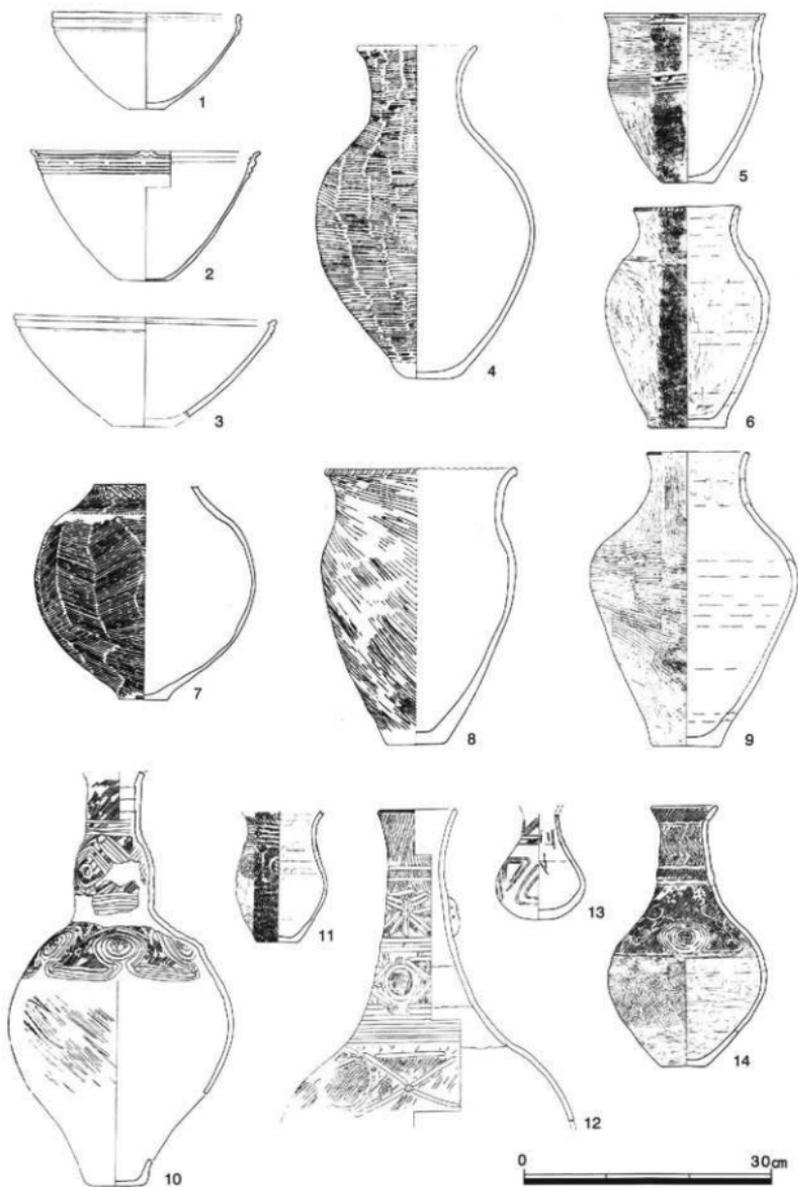
### 弥生中期中葉

89-14は、胴部の一部を欠損する以外は、ほぼ完形の長頸壺である。口唇部外面は若干肥厚する程度であり、いわゆる平沢型に典型的な頸部の条痕帯と縄文帯の交互施文が認められないこと、各々の文様帯が幅広化していることなどからやや後出的な要素が認められる。弥生中期中葉に比定されるものであろう。同資料と並行ないし、若干遅る可能性がある資料として静岡県瀬名遺跡出土土器(89-10)がある。両者の胴部の文様構成は類似する。なお、これらに若干後出すると考えられる資料(89-12)が当遺跡群(錦喰前山遺跡)から出土している(研究所:1995a)。

89-11・13は、小型の壺である。89-11は、胴部下半をミガキ調整するもので、円形浮文も施される。89-13は、頸部に波状のヘラ描文のような文様帯が横帯構成となる点で弥生中期中葉の新相または中期後葉に相当すると考えられる。底部が丸底であるという点は興味深い。89-11・13は、ほぼ同時期のものと考えられる。

### まとめにかえて

冒頭でも述べたように、当遺跡では駿河、伊豆において不足している当該期の土器資料が出土し、当地域における土器研究にとって貴重な資料を提供することとなった。ここでは縄文晩期から弥生中期中葉までの資料について触れたが、中期後葉の資料についても各段階のものが出土しており、若干の空白期は認められるものの、縄文晩期から弥生中期さらには弥生後期～古墳時代前期というように連続と各時期の資料が認められることが判明した。このことは、当遺跡群の性格、特徴を考える上で重要な視点であると言える。



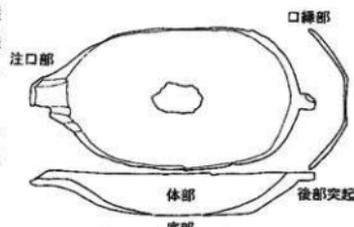
第89図 中手乱遺跡出土土器と類似例

### 第3節 木製片口について

はじめに

静岡県における弥生時代～古墳時代の木製品研究は、学史的にも有名な山木遺跡の調査以降、資料の蓄積もあまり見られず、やや停滞気味の印象が強い。それは、遺物の性質上、出土例が低湿地（流路など）に限られるため、必然的に共存関係の把握が容易でなく、層位論に基づく新旧関係の把握や様式論的な形式、型式の組成、出現、消長を検討することが困難なことも起因する。

中手乱遺跡では木製片口が出土したが、ここでその意義・評価を明らかにすることを目的として、弥生時代～古墳時代の木製片口に関する若干の検討を行う。



第90図 片口の部分名称

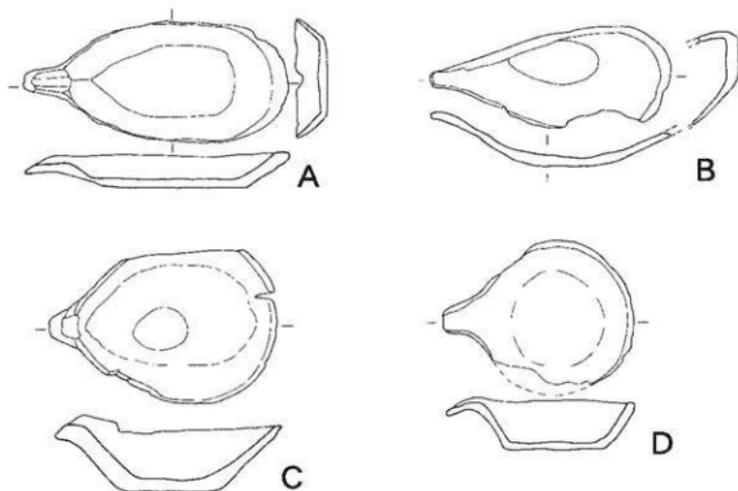
形態分類

木製片口（以下、片口とする。）は、注口部の存在から液体状の内容物を入れた容器と考えられる（註2）。管見に触れることのできた片口は、5府県11遺跡31例を数える（第10表）（註3）。ここでは注口部を持つものを中心に集めたが、注口部が欠損していても平面形や諸属性（後部突起を有する等）から片口と判断したものも一部含まれる。後藤守一氏は、韭山町山木、静岡市登呂西遺跡出土の片口を比較し、注口部の形態に若干の形態差が認められることを指摘している（日本考古学協会：1954）。

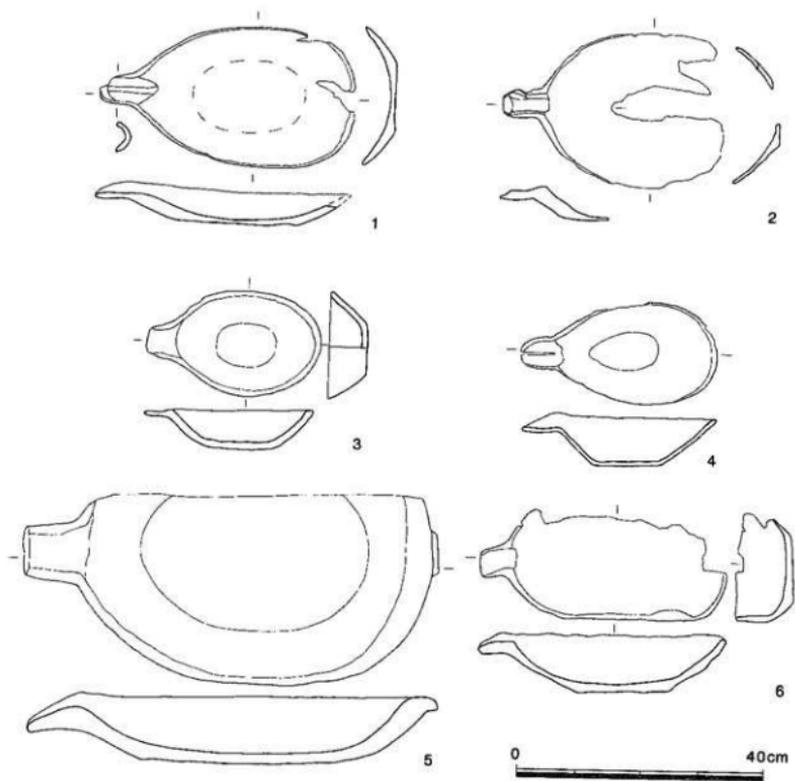
No.	所在地	遺跡名	遺構	時代	型式	全長	最大幅	器高	備考
92-1	静岡県三島市	御殿川流域遺跡群	流路	弥生後期～古墳前期	A	410	226	52	本報告
92-2	静岡県三島市	御殿川流域遺跡群	流路	弥生後期～古墳前期	A	-	252	74	内面赤彩
92-3	静岡県富士山町	山木遺跡	流路	弥生後期～古墳前期	A	283	170	64	
92-4	静岡県富士山町	山木遺跡	流路	弥生後期～古墳前期	A	317	165	77	口に類似
92-5	静岡県富士山町	山木遺跡	流路	弥生後期～古墳前期	A	670	-	110	後部突起
92-6	静岡県静岡市	川合遺跡	溝	弥生中期～古墳初期	A	480	-	92	
93-1	静岡県富士山町	山木遺跡	流路		A	-	-	89	
93-2	静岡県富士山町	山木遺跡		弥生後期～古墳前期	A	500	-	84	
93-3	静岡県富士山町	山木遺跡		弥生後期～古墳前期	A	893	-	112	内面赤彩、口縁状脚
94-1	静岡県沼津市	藤原塚遺跡	包含層	弥生後期	C	-	-	42	小型
94-2	静岡県静岡市	川合遺跡	溝	弥生中期～古墳初期	A	214	98	46	
94-3	静岡県静岡市	宮窪遺跡	包含層	古墳前期	A	390	-	66	
94-4	静岡県静岡市	川合遺跡	溝	弥生中期～古墳初期	B	324	90	-	
94-5	静岡県清水市	長崎遺跡	流路	弥生後期～古墳前期	B	295	124	56	
94-6	静岡県静岡市	宮窪遺跡	包含層	古墳前期	B	362	-	60	後部突起
94-7	静岡県静岡市	川合遺跡	流路		-	234	150	28	小型品
94-8	静岡県沼津市	藤原塚遺跡	包含層	弥生後期	A	-	-	-	後部突起
94-9	静岡県静岡市	川合遺跡	溝	弥生中期～古墳初期	A	712	324	90	
94-10	静岡県富士山町	山木遺跡	流路	弥生後期～古墳前期	A	-	-	-	
94-11	静岡県静岡市	川合遺跡	溝	弥生中期～古墳初期	C	-	-	-	
94-12	静岡県富士山町	山木遺跡			A	932	486	142	定形
95-1	静岡県清水市	長崎遺跡	畦畔	弥生後期	C	-	-	-	
95-2	静岡県静岡市	川合遺跡	溝	弥生中期～古墳初期	C	-	-	-	
95-3	静岡県沼津市	藤原塚遺跡	包含層	弥生後期	C	-	-	-	
95-4	静岡県沼津市	藤原塚遺跡	包含層	弥生後期	C	386	-	74	
95-5	静岡県沼津市	藤原塚遺跡	包含層	弥生後期	C	368	-	130	
95-6	静岡県三島市	御殿川流域遺跡群	流路	弥生後期～古墳前期	C	-	-	-	
95-7	静岡県静岡市	川合遺跡			D	233	174	56	
95-8	千葉県茂原市	園府岡遺跡		古墳前期	A	470	245	78	後部突起
95-9	奈良県橿原市	大塚遺跡	溝	弥生後期	A	513	-	120	
95-10	大阪府八尾市	公室寺遺跡			A	390	278	84	
95-11	滋賀県新旭町	針江川北遺跡	落ち込み	古墳前期	B	613	334	100	

第10表 木製片口集成表

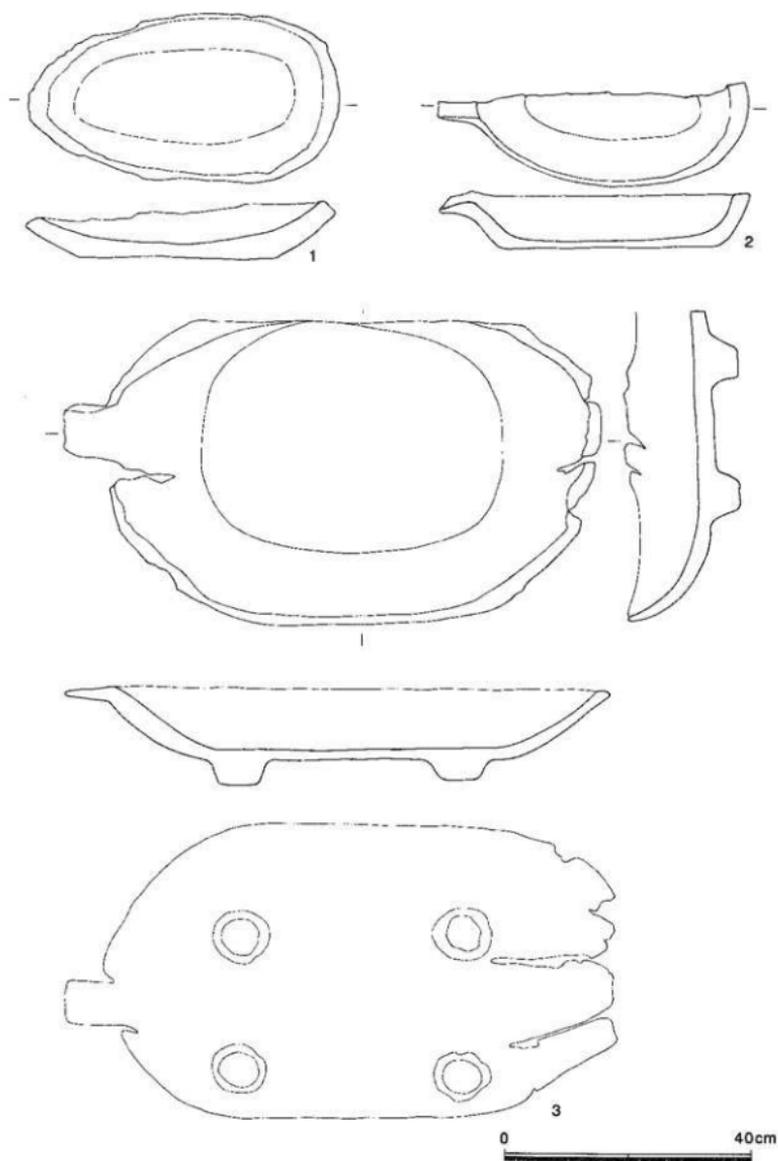
また、静岡県内の資料が大多数を占めていることから、地域の特徴として注目されたことがあるが（奈文研：1993、樋上：1996）、類例が乏しいこともあって形態分類にはいたっていない。先学の指摘や今回集成した結果から、平面形態をもとにA類・長円形を呈する大型のもの、B類・細長い水滴形を呈する小型のもの、C類・丸みを帯びた水滴形を呈するもの、D類・ほぼ円形を呈するものに大別され（第91図）、A類は、さらに、注口が滑らかに体部につながるものと注口が明確にくびれ突出気味となるものに細別可能で、後者は、静岡県東部に顕著である。この他の属性として、後部突起を付すもの、円柱状の短脚を持つものなどが認められるが、類例に乏しいことから、これは分類の基準とはせず補足的に扱うこととする。



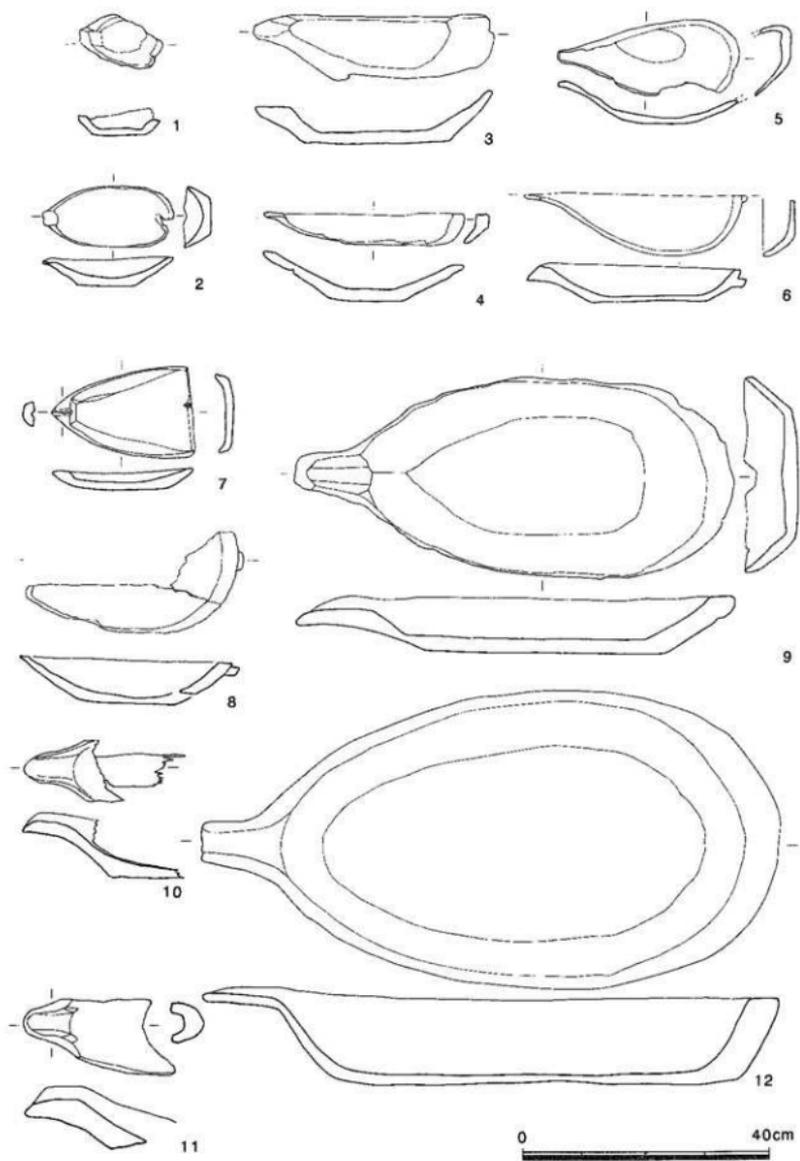
第91図 片口の形態分類図



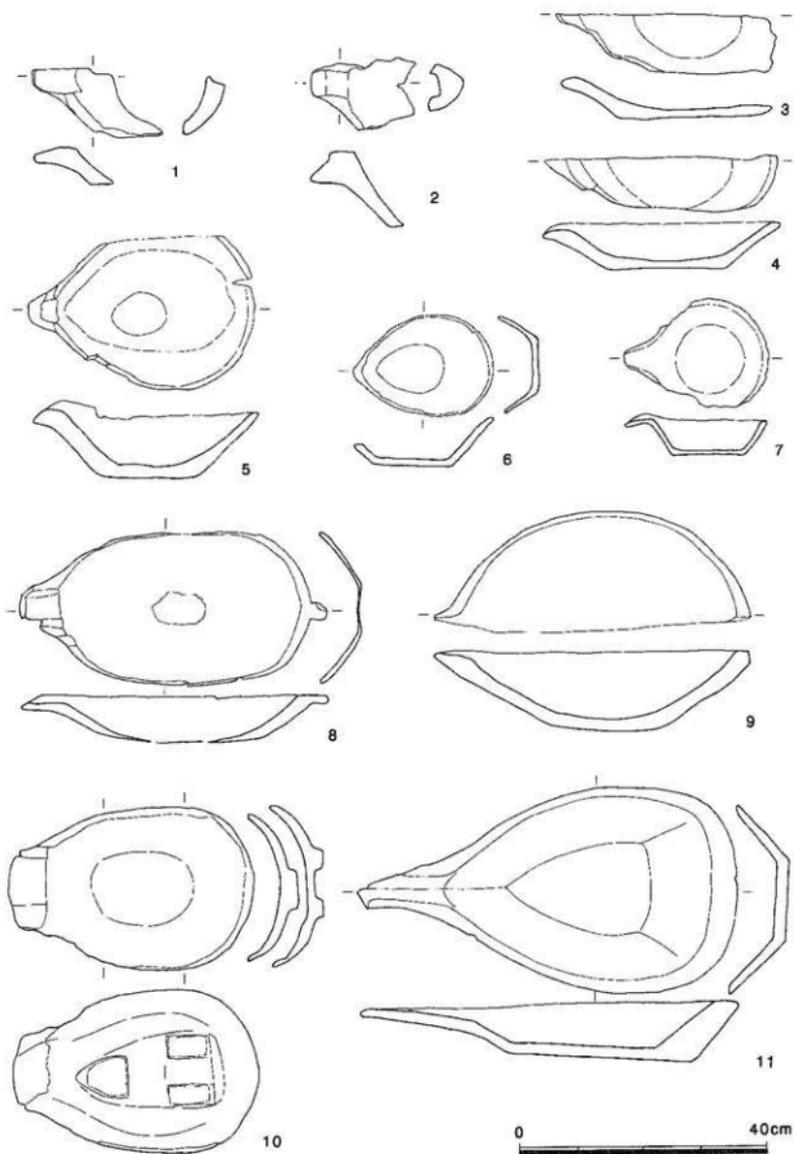
第92図 片口の実測図集成



第93図 片口の実測図集成



第94図 片口の実測図集成



第95図 片口の実測図集成

## 時期

前述したように、片口は、遺物の材質上出土が低湿地に限られ、必然的に他遺物との共存関係が不明瞭な出土状況を示すものが圧倒的に多い。したがって、時期決定は、やや曖昧なものとならざるを得ないが、弥生後期から古墳前期のものが大半を占めることから、ほぼ当該期に盛行する特徴的な遺物と考えられる(註4)。

## 分布

片口の分布は、静岡県内では大井川以東すなわち駿河・伊豆に分布が集中している(第96図)。調査例の地域的多寡も加味しなければならないが、この地域は、弥生後期に登呂・飯田式(中嶋:1991)と呼ばれる土器様式圏に該当しており、地域的特質を反映した分布を示している。登呂・飯田式は、基本的に「高坏形土器」を欠く土器様式であり、木製品がこれを補完していたとの意見もあり(註5)、甕、甕以外の機能形態がどのように補完されていたかが興味深いところである。現在のところ静岡～志太平野ではA類～D類が認められている一方、田方平野ではB類、D類は認められていない。また、A類のうち、注10部が明確にくびれるものは田方平野に卓越する傾向が認められる。



第96図 片口の分布



片口の大半が出上している駿河に隣接する東遠江及び関東地方では、片口形（鉢形）土器が存在する。形態は異なるものの、両地域は、巨視的に見た場合、片口を共通項として、特徴的な遺物を共有した地域とすることができる。駿河、東遠江は、大竜川以西の地域とは明確に区別される変換点として理解されているが、材質の違いこそあれ、機能を等しくする遺物の共有もまた、様式圏の特徴としてとらえられよう。

## 法量の比較

第11表及び第97図は、型式別の法量を比較したものである。現状では完形品が少なく、計測値だけでは比較が困難なことから、遺物の平面形態（一部推定も含む）も輪郭を重ね合わせて比較することとした。これによれば各型式は、一定の規格をもって製作されていたことが容易に推測できる。特に注目すべき点は、同一遺跡出土のものが同一規格を思わせることである。Aは、全長30～40cmの中型品から全長90cmを超えるような大型品まで、B・Cは、30～40cm程度の中型品を中心とするようである。Dは、登呂遺跡例の1例だけであるが、平面形が円形ということもあり全長は、20cm強というやや小型の部類に入る。

片口の製作が片口の未製品と報告されている浜松市角江遺跡出土の擬に連接した未製品のような製作方法を探ったと仮定すれば（研究所：1995b）、形態、規格に共通性を見いだすことも可能であり、型式の分布差がそのまま片口の流通範囲を示すことも考えられる。

弥生時代における木製品の生産体制については、製品と共に未製品を出土する遺跡と未製品を出土しない遺跡の二者が存在する事例をもとに、遺跡間において需給体制が整備されていたことを想定する研究がなされている。静岡県内では、低湿地集落遺跡の調査例が稀少で、仔細な検討は目下のところ困難であるが、今回の片口の集成、形態比較からみても、当時の木製品の生産が単純な自給自足にとどまらず、一定以上の規模、体制の下で行われていたであろうことは想像に難くない。

## まとめ

低湿地の調査例の増加に伴い、多くの木製品資料が蓄積されつつある。このような現状では、土器だけでなく木製容器も生活食器類の組成のひとつに含めた議論も活発化している。木製容器の組成比率の問題は今後の課題であるが、駿河において片口がその一端を担っていたことは想像に難くない。

先学の指摘の通り、木製片口は、駿河を中心に分布することが追認できた。本稿では、近年の調査例も含めて資料集成を行い、平面形態をもとに形態分類とその分布（地域性）、変遷、意義について検討を行った。その結果、形態変化については判然としなものの、駿河の東部と西部とは注目部の形態に若干の相違点を認めることができた。また、短絡的ながら、駿河、東遠江は、材質の違いこそあれ、片口を組成する分布圏であり、ここに地域的特性を見出した。本稿では木製容器のうち片口のみをとりあげたが、この他にも高坏、盤、槽など未検討の器種があることは言うまでもない。今後、これらを含めた研究が急務となるであろう。



## 第5節 鹿角製短剣について

### はじめに

手中乱遺跡から出土した鹿角製短剣（註7）は、口唇部の一部を欠損する以外はほぼ成形の壺形土器の中に取められた状態で出土した。その出土状況は言うまでもなく、ほぼ全形をとどめているという点で同遺物の形態、意義を考える上で貴重な発見となった。ここでは、当遺跡から出土した鹿角製短剣について、類似例との若干の比較を行なうこととする（註8）。

### 出土状況

鹿角製短剣（以下、短剣と略す場合がある）が取められていた広口壺は、調査区埋め戻し直前の補足調査中に2区東側法面から口を北東方向に向け倒れた状態で出土した。土器は、近接した調査区内の成果や土器周辺の覆土の状況から流路2と流路3の延長部分からの出土と考えられる（第IV章第1節を参照）。

土器内面には周辺の覆土と同様の砂礫が充填されており、それを除去したところ鹿角製短剣が出土した。短剣は、広口壺の中に切先を下方（土器底部側）に向け、基部が土器の頸部内面に接した状態で出土した（第98図）。このような出土状態から、短剣は、広口壺の中に取められた状態で、流路内において埋没したものと推測される。

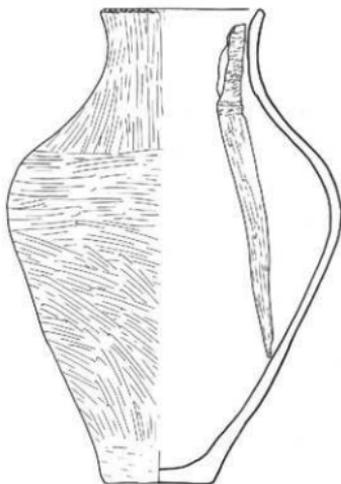
### 時期

土器は、胴部外面を条痕調整するいわゆる条痕文系土器の広口壺で、口唇部にヘラ状の工具によるキザミを施す等の特徴から、弥生時代中期前葉に比定される（註9）。したがって、鹿角製短剣も同時期の所産と判断されよう。

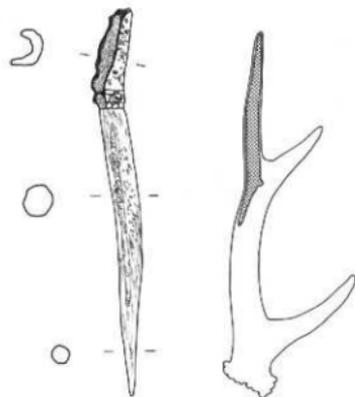
### 形態

短剣は、鹿角製棒状短剣に分類されるもので（春成：1985）、シカの角幹部最先端を用い（第99図）、先端部及び身部は工具によって平滑に削り、基部と身部の境及び基部部には突帯状の隆帯を浮き彫りにしている。なお、基部は海面部を残しているため、非常に脆い構造となっている。

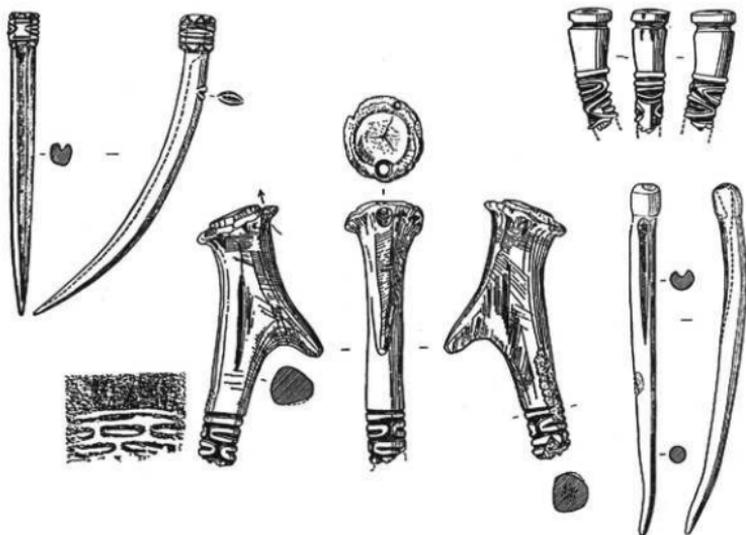
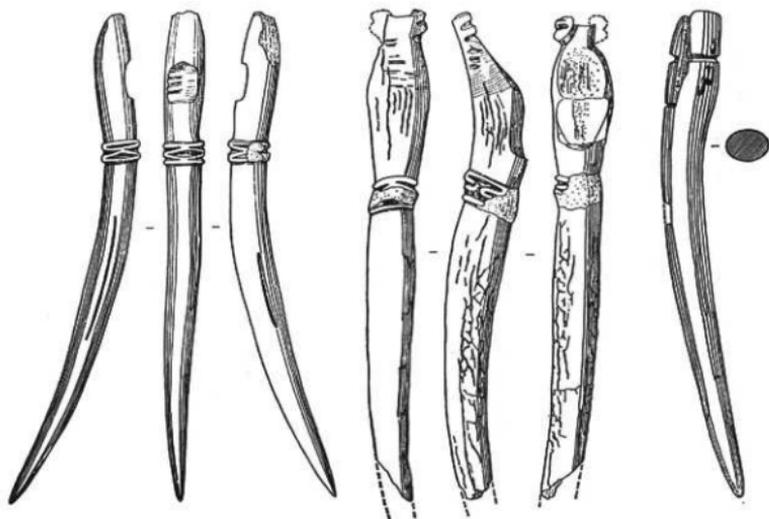
これに類似するものとして千葉県荒海遺跡出土資料などがあるが、縄文時代に相当するものは基部に浮線網状文を浮き彫りさせている。また、懸垂用の紐穴と考えられる穴を有するものが多いことも特徴としてあげられる（第100図）。このような点から、手中乱遺跡出土の鹿角製短剣は、基部の隆帯が痕跡



第98図 鹿角製短剣の収納状況（模式図）



第99図 短剣実測図及び鹿角利用部位（模式図）



第100図 鹿角製短剣の類例

的なことから、同種の鹿角製短剣としては、後出的な要素が強いとすることができよう。

## まとめ

鹿角製短剣は、類例の大半が縄文時代のものであり、いわば縄文時代的な儀器としての位置付けがなされている(春成:1985)。当遺跡の鹿角製短剣は、弥生中期前葉の所産であり、鹿角製短剣が消滅する時期に相当するものである。そのことは、基部の隆帯の造作にも端的に現れており、同遺物の消長を考える上で非常に興味深い。同遺物は、出土例が限られており、ここで見たような型式学的な検討が有効かは今後の課題であるが、土器との明確な共伴によって時期を特定できる貴重な例としてその重要性を強調しておく。

## 註

- (1) 土器の編年の位置付けについては、石川日出志氏、佐藤山紀男氏に御教示賜った。記して感謝申し上げる。
- (2) 垂山町山水遺跡及び、三島市御殿川流域遺跡群から出土した片口には体部内面に赤彩の痕跡が、千葉県国府間遺跡出土例には体部内面に黒色の塗膜が付着していたとの報告がある。
- (3) 掲載した実測図は、全て報告書等から遺物の向きや断面の位置を一部改変し再トレースを行ったものである。
- (4) 時期決定は、報告書及び「古代の木製食器」(埋蔵文化財研究会:1996)の記述を中心に行ったが、筆者が若干検討を加えたものもある。
- (5) 土器に対する木製高坏の出土例が圧倒的に少ないことから、駿河では東遠江以西で認められるような器種構成比率で木製高坏が土製高坏を補完していたとは考えにくい。
- (6) 遺物の同定に際しては、松井・明氏に御教示賜った。記して感謝申し上げる。
- (7) 春成氏が指摘するように、同遺物は、先端部が鋭く尖った形状を有しており、刺突を主な機能としている点において、厳密な意味では短剣という名称は適当でないことは言うまでもない。ここでは春成氏に従い、短剣と呼ぶこととする。
- (8) 遺物の同定に際しては春成秀爾氏に御教示を賜った。記して感謝申し上げる。また、現地調査時に、鹿角製短剣について、市原壽文氏と田辺昭三氏から貴重な教示を受けた。市原氏は、縄文時代からの系譜を引く性格のものとの指摘を、田辺氏からは、剣であるとの所見をいただいた。あわせて貴重な御教示に感謝申し上げます。
- (9) 土器の編年観については、石川日出志氏、佐藤山紀男氏に御教示を賜った。記して感謝申し上げます。

## 参考・引用文献

- 北川 恵 1987 「『駿東型の甕』の初現と終末について」 『沼津市博物館紀要 12』 沼津市歴史民俗資料館・沼津市明治資料館
- 鈴木 敏則 1991 「第5章 出土遺物と遺構の検討」 『梶子遺跡』 浜松市文化協会
- 鈴木敏則他 1996 「静岡」 『古代の木製食器 第三分冊』 埋蔵文化財研究会
- 樋上 昇 1996 「東海」 『古代の木製食器 第三分冊』 埋蔵文化財研究会
- 比田井克仁 1993 「山中式・菊川式東進の意味すること」 『転機第4号』 転機同人会
- 山本 忠一 1988 「静岡県東部の古墳時代の土師器について」 『沼津市博物館紀要 13』 沼津市歴史民俗資料館・沼津市明治資料館
- 山本 恵 1995 「静岡県下の6~7Cの土師器（駿河東部・伊豆北部の現状について）」 『東国土器研究 第4号』 東国土器研究会
- 静岡県 1992 「静岡県史資料編3 考古3」 きょうせい
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1993 「御殿川流域遺跡群Ⅰ」
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1994 「御殿川流域遺跡群Ⅱ」
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1995 a 「御殿川流域遺跡群Ⅲ」
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1995 b 「角江遺跡Ⅱ 木製品編」
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1996 「川合遺跡 遺物編3」
- 駿豆考古学会 1979 「駿豆地方の弥生土器集成」 駿豆考古学会
- 奈良国立文化財研究所 1993 「木製品集成図録（近畿原始編）」
- 日本考古学協会 1954 「登呂・本編」 毎日新聞社
- 韭山村 1962 「韭山村山木遺跡」
- 沼津市教育委員会 1981 「八兵衛洞遺跡発掘調査報告書」
- 沼津市教育委員会 1989 「雄鹿塚遺跡発掘調査報告書」
- 沼津市教育委員会 1990 「雌鹿塚遺跡発掘調査報告書」
- 三島市教育委員会 1996 「西大久保・奈良橋向遺跡」
- 三島市教育委員会 1983 「中島下舞台遺跡」
- 三島市教育委員会 1984 「鶴喰遺跡」
- 富士宮市教育委員会 1989 「洪沢遺跡」

本書の作成にかかわる資料整理については、次の方々に御協力を得た。末筆ながら記して感謝申し上げる（五十音順・敬称略）。

合田芳正、芦川忠利、池谷初恵、石川日出志、川江秀孝、佐藤市紀男、柴田 稔、白澤 崇、鈴木敏中、鈴木敏則、瀬川裕市郎、永井義博、橋口高武、町田勝則、松井一明、山本忠一

## 写真图版



鶴喰広田遺跡1区河道全景（南から）



鶴喰広田遺跡2区河道全景（北東から）



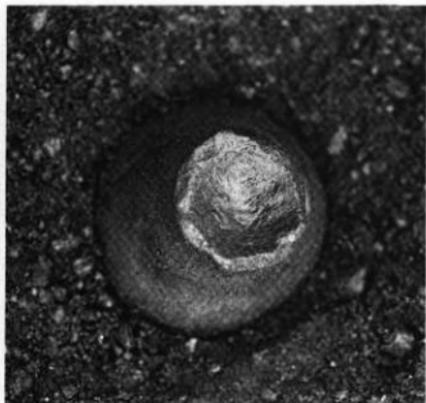
鶴喰広田遺跡1区木製品出土状況



鶴喰広田遺跡1区木製品出土状況



鶴喰広田遺跡1区弥生土器壺出土状況



鶴喰広田遺跡1区高坏出土状況



鶴喰広田遺跡1区弥生土器出土状況



鶴喰広田遺跡1区磨製石斧出土状況



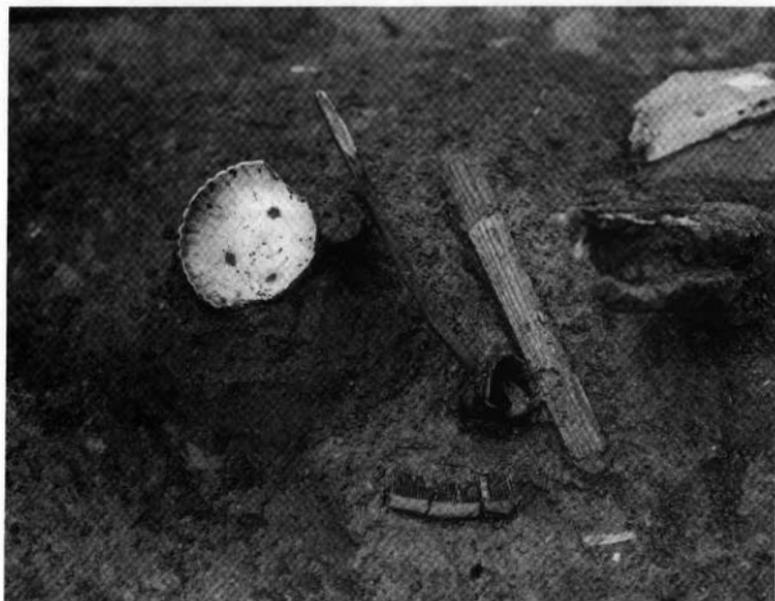
鶴喰広田遺跡1区銅鏃出土状況



鶴喰広田遺跡1区動物遺体出土状況



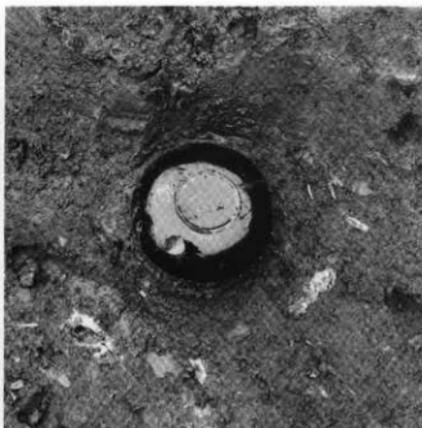
鹤喰広田遺跡3区杭列出土状況



鹤喰広田遺跡3区陶器・柄杓・櫛出土状況



鶴喰広田遺跡3区漆椀出土状況



鶴喰広田遺跡3区漆椀出土状況



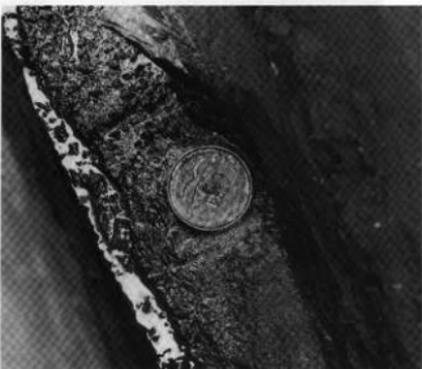
鶴喰広田3区用途不明木製品出土状況



鶴喰広田3区筥出土状況



鶴喰広田3区曲物出土状況



鶴喰広田遺跡3区銅鏡出土状況



中手乱遺跡河道全景（南から）



中手乱遺跡河道全景（北から）



中手乱遺跡1区土器集中地点出土状況



中手乱遺跡2区大型壺出土状況



中手乱3区深鉢出土状況



中手乱3区広口壺出土状況



中手乱2区法面広口壺出土状況



中手乱2区长頸壺出土状況



中手乱2区小型壺出土状況



中手乱2区高坏・動物遺体出土状況



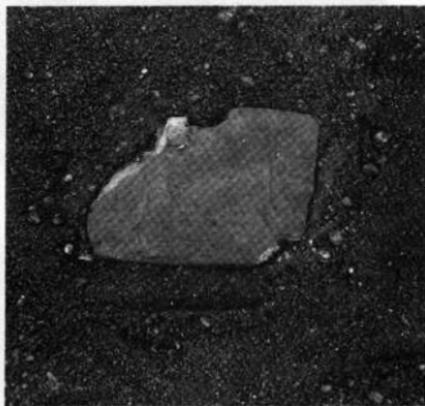
中手乱2区须惠器出土状况



中手乱2区坏出土状况



中手乱2区鉢出土状况



中手乱2区鍬先出土状况



中手乱1区石鍬出土状况



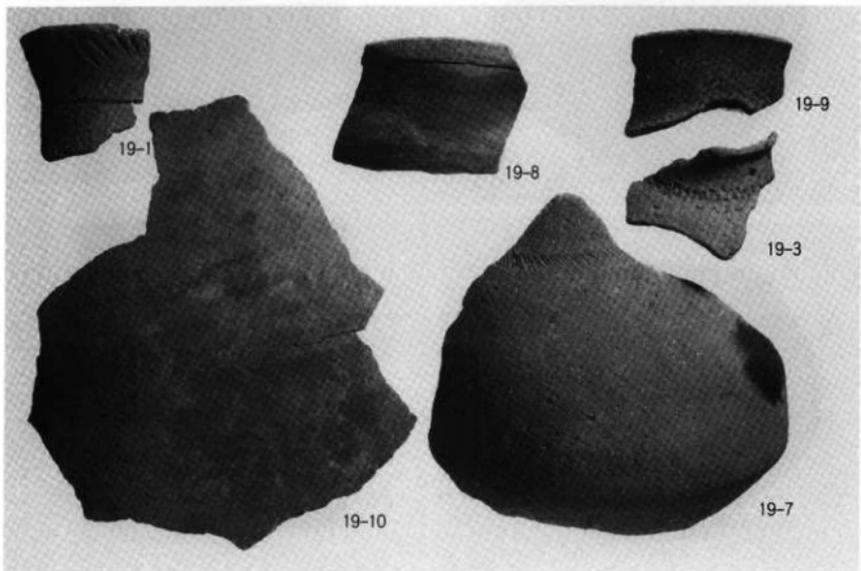
中手乱2区環状石斧出土状况



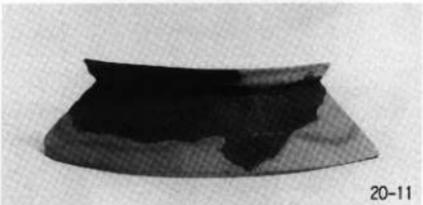
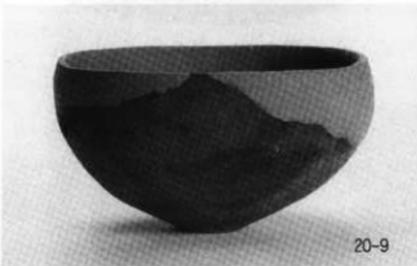
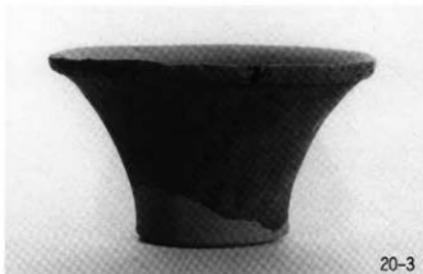
中手乱遺跡3区鋤先出土狀況



中手乱遺跡3区片口出土狀況



鶴喰広田遺跡出土土器





21-3



21-4



21-5



21-6



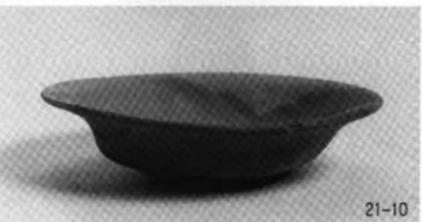
21-7



21-8



21-9



21-10



21-11



21-14



21-13



21-17



21-16



21-15



21-18



21-19



21-20



21-21



22-5



22-7



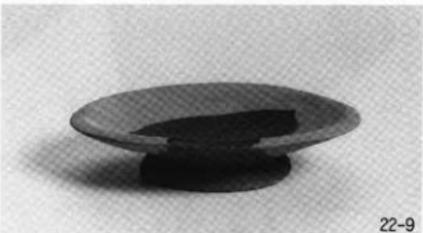
22-6



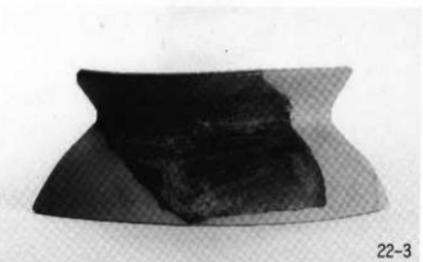
22-4



21-22



22-9



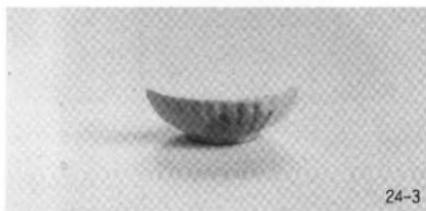
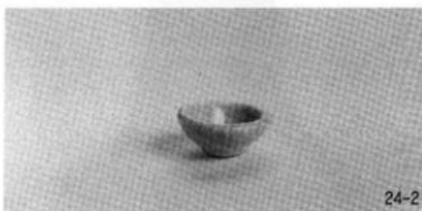
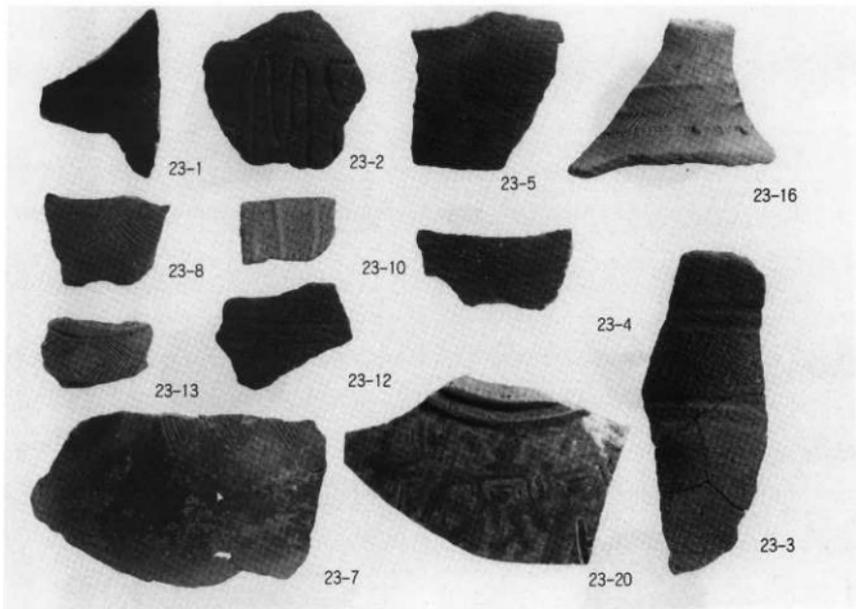
22-3

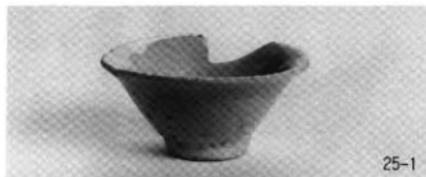


22-2

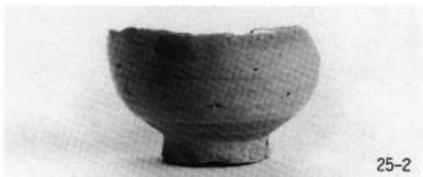


22-1





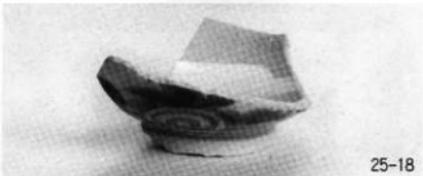
25-1



25-2



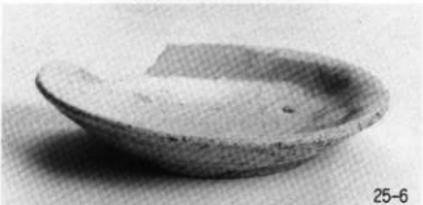
25-5



25-18



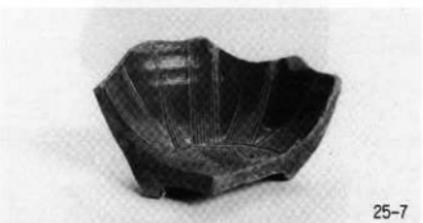
25-9



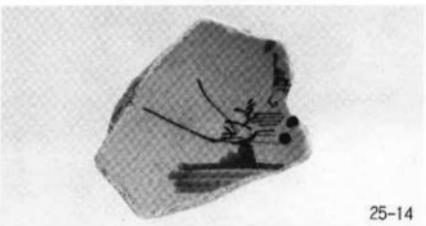
25-6



25-3



25-7



25-14



25-10



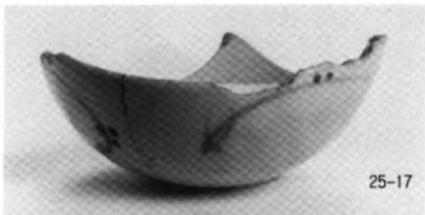
25-4



25-8



25-15



25-17



25-21



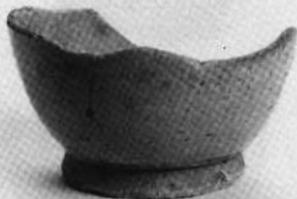
25-28



25-23



25-25



25-19



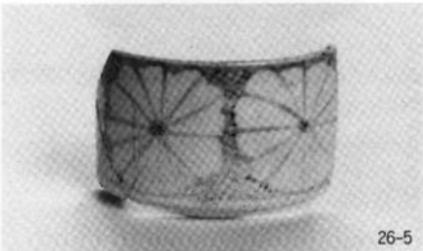
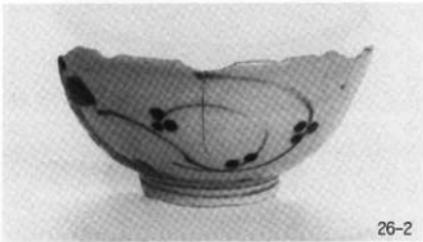
25-20

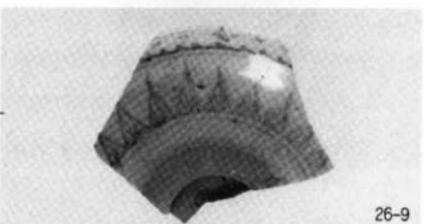
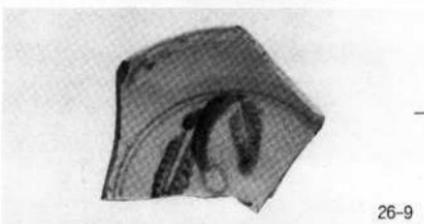
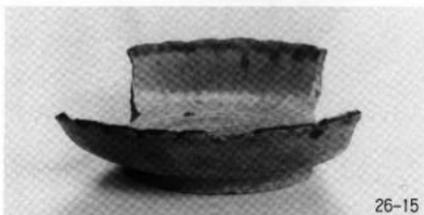
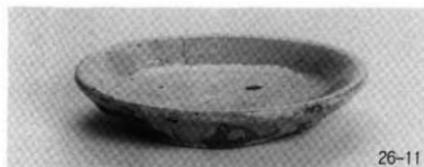


25-13



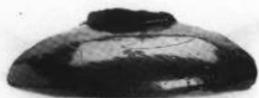
25-16







27-3



27-4



27-1



27-2



27-6



28-2



27-8



28-1



27-10



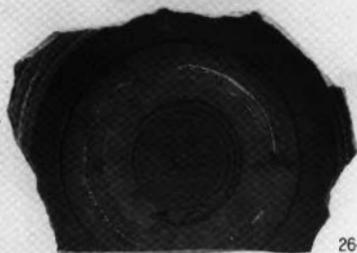
27-11



27-7



27-9



26-16



26-17



28-10



28-20



28-3



28-5



28-7



28-6



28-18



28-19



27-12



28-8



27-13



28-11



28-22



28-24



28-14



28-15



28-16



28-17



27-5



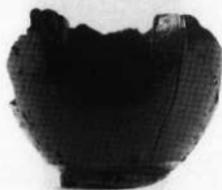
28-21



28-4



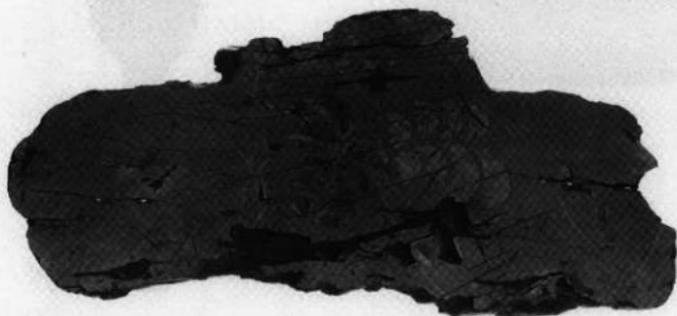
28-9



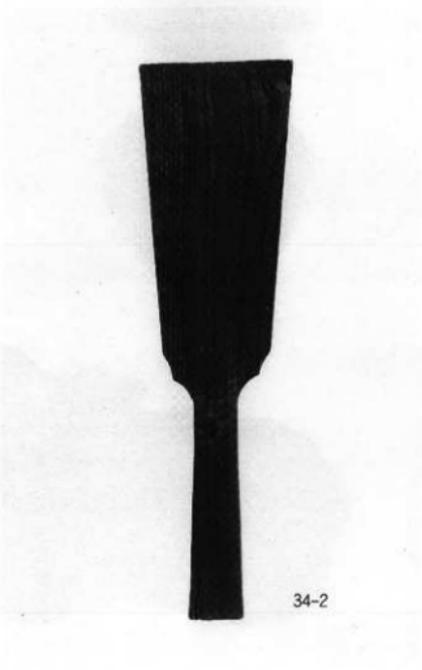
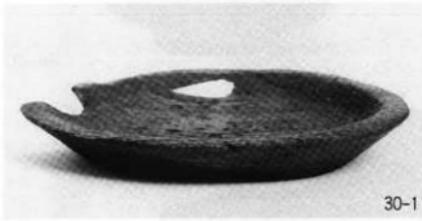
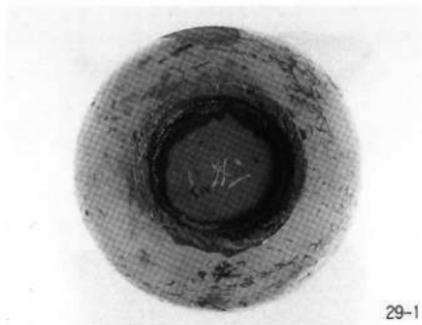
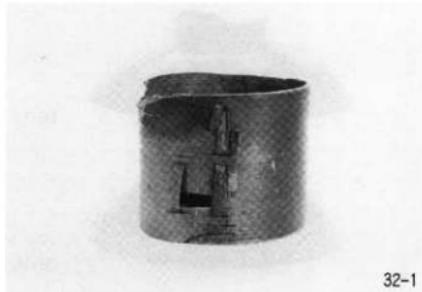
28-12

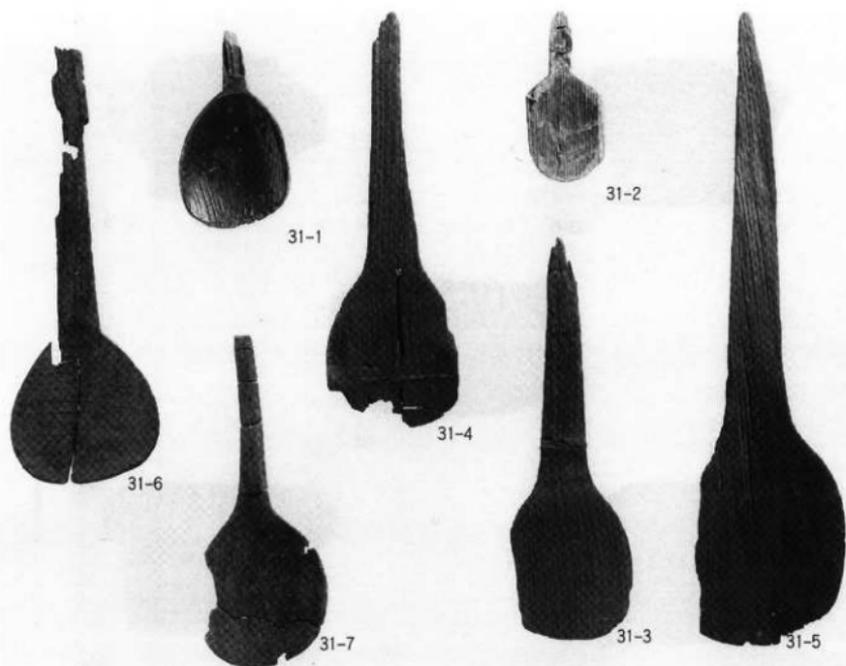


28-13



28-23





鶴喰広田遺跡出土木製品



33-6



33-8



33-7



33-4



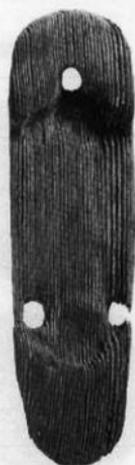
33-5



35-1



35-1



35-1



35-4



35-4



35-4



35-2



35-2



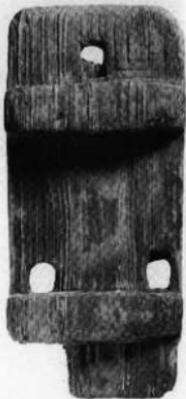
35-2



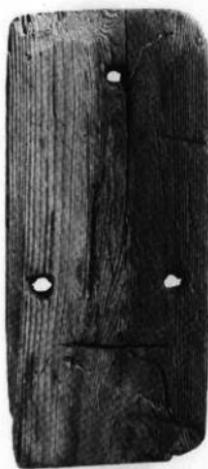
35-3



35-3



35-3



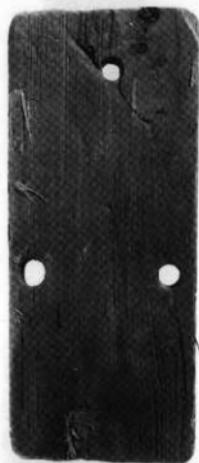
35-5



35-5



35-5



35-6

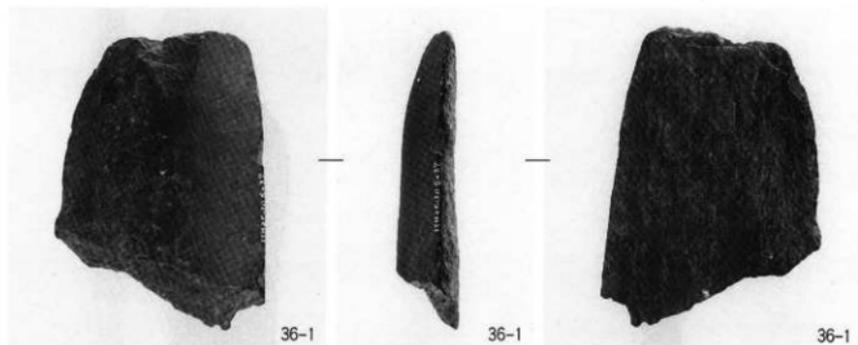


35-6



35-6

鶴喰広田遺跡出土木製品



36-1

36-1

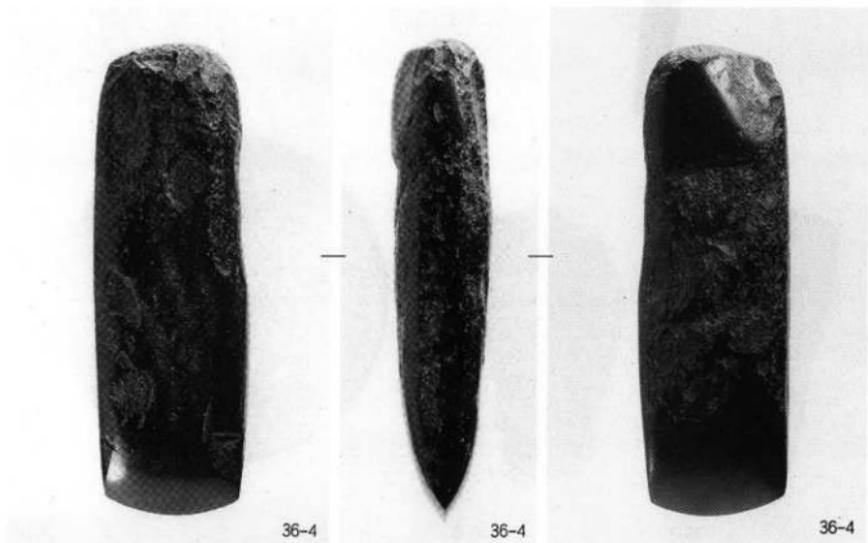
36-1



36-2

36-2

36-2

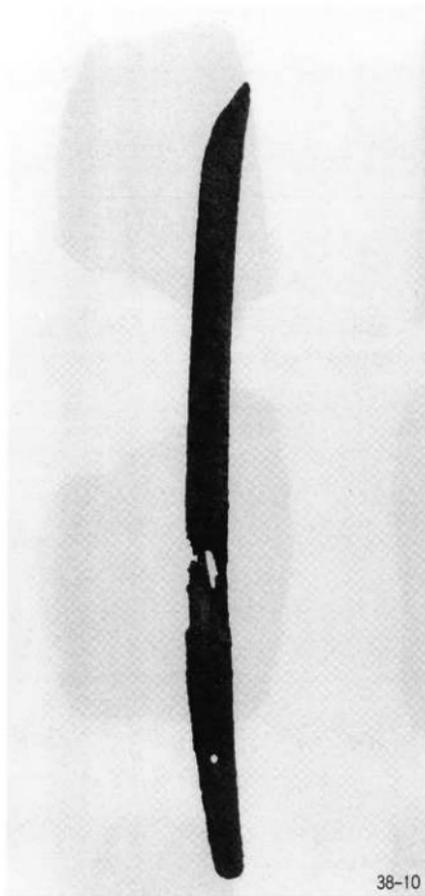


36-4

36-4

36-4

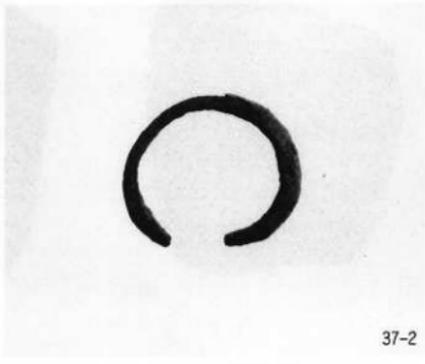
鶴喰広田遺跡出土石器



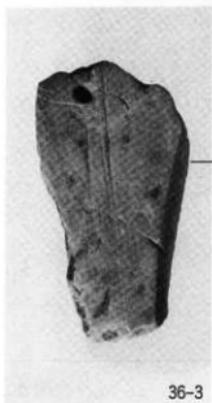
38-10



37-1



37-2



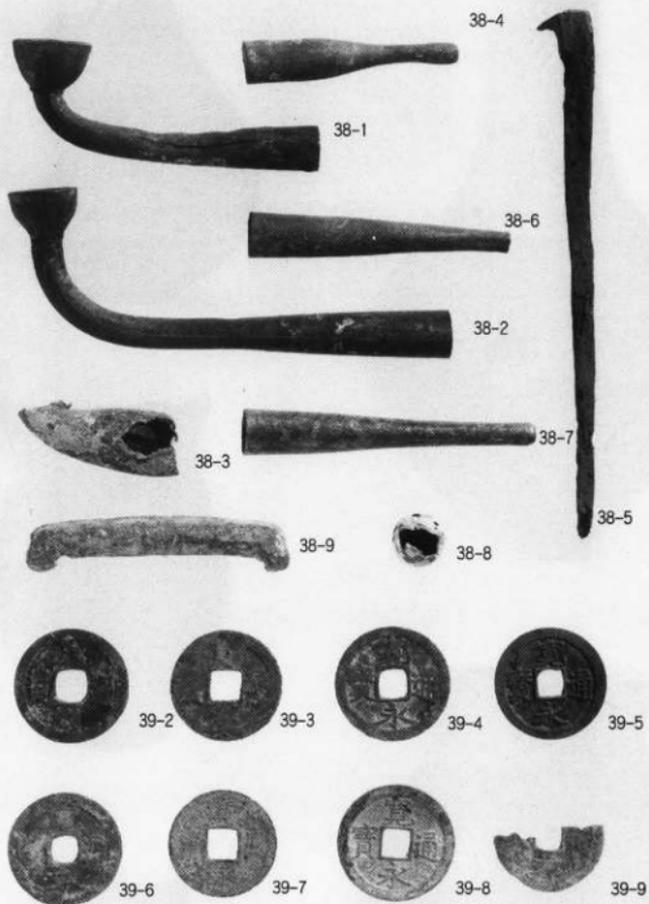
36-3



36-3



39-1



鶴喰広田遺跡出土金属器



40-1



40-4



40-5



40-3



40-6



41-1



41-4



41-3



41-6



40-7



41-5



42-4



42-6



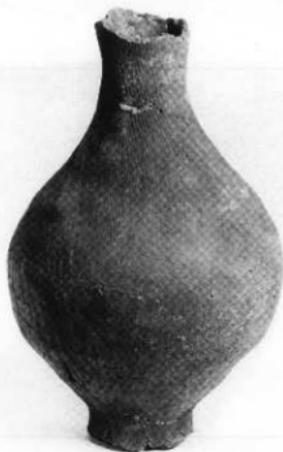
42-1



42-7



43-1



43-3



43-4



43-5



43-2



44-6



44-3



44-4



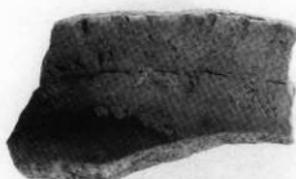
44-10



44-12



45-5



45-12



48-1



45-8



45-13



45-10



45-6



45-7



46-1



46-2



46-4



46-6

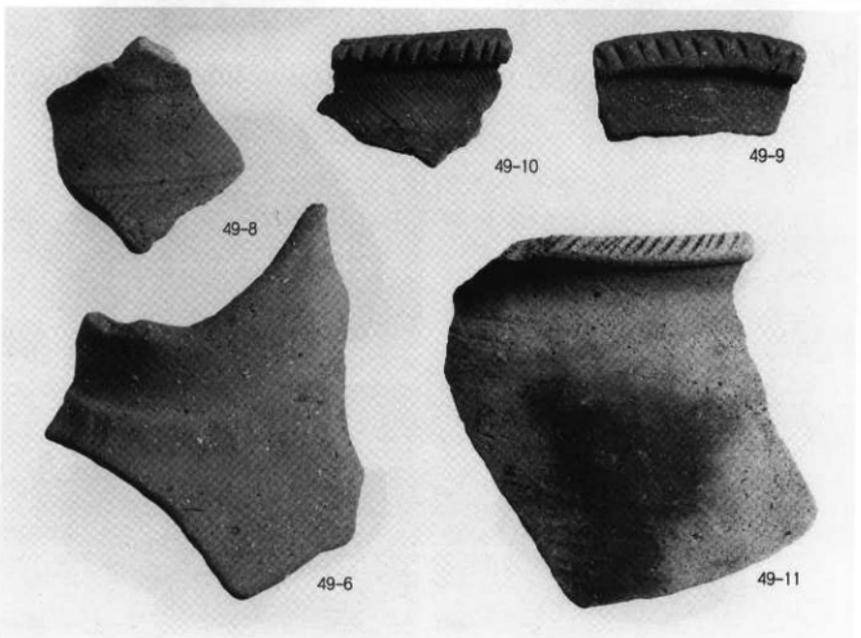


46-5



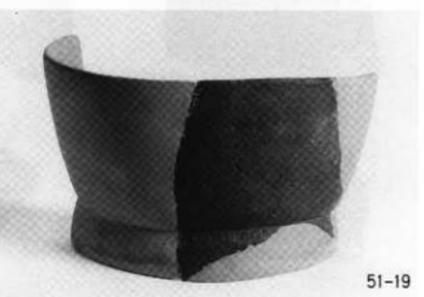
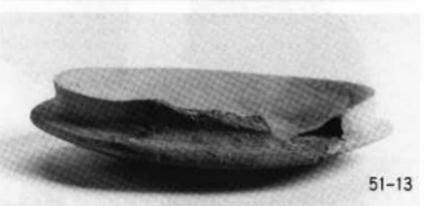
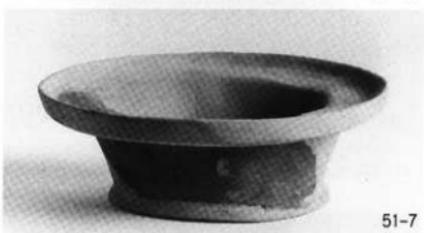
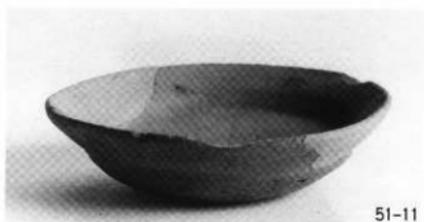
47-8





中手乱遺跡出土土器







51-17



51-20



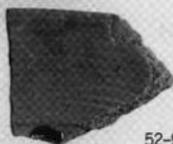
51-12



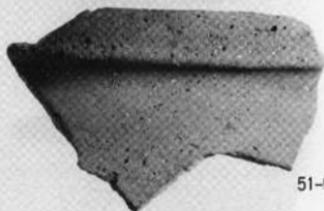
52-12



52-5



52-9



51-9



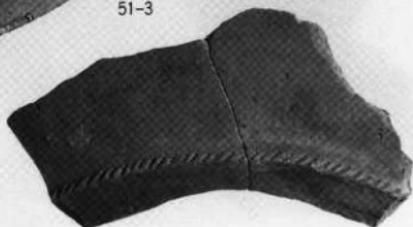
51-1



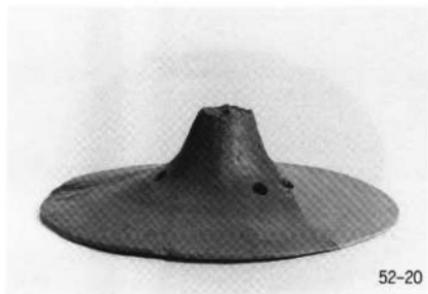
51-3

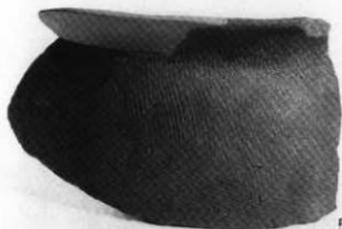


51-6



51-4





54-10



53-5



53-1



53-12



53-13



53-10

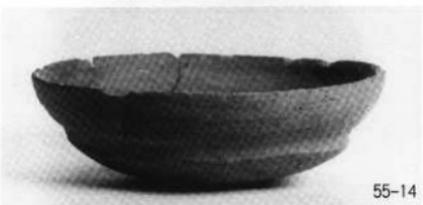
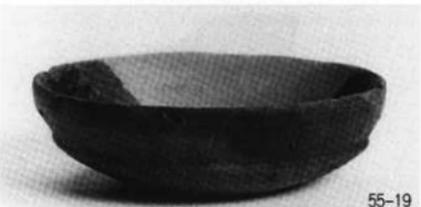
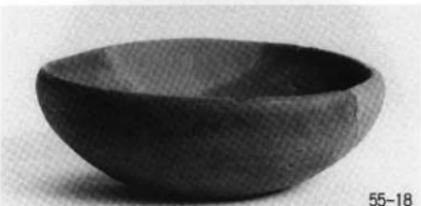


54-4



54-5







55-21



55-24



55-5



55-9



55-6



55-25



55-8



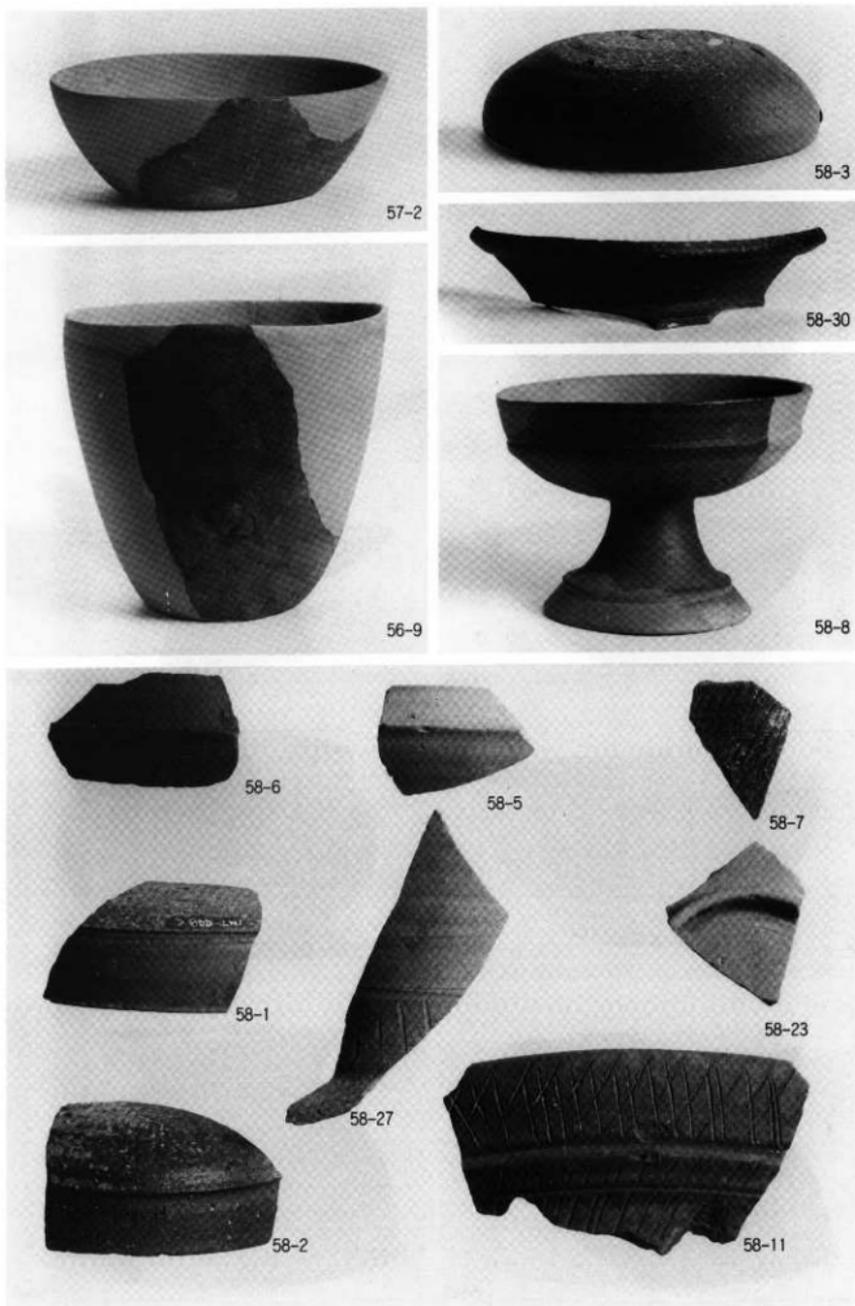
56-3



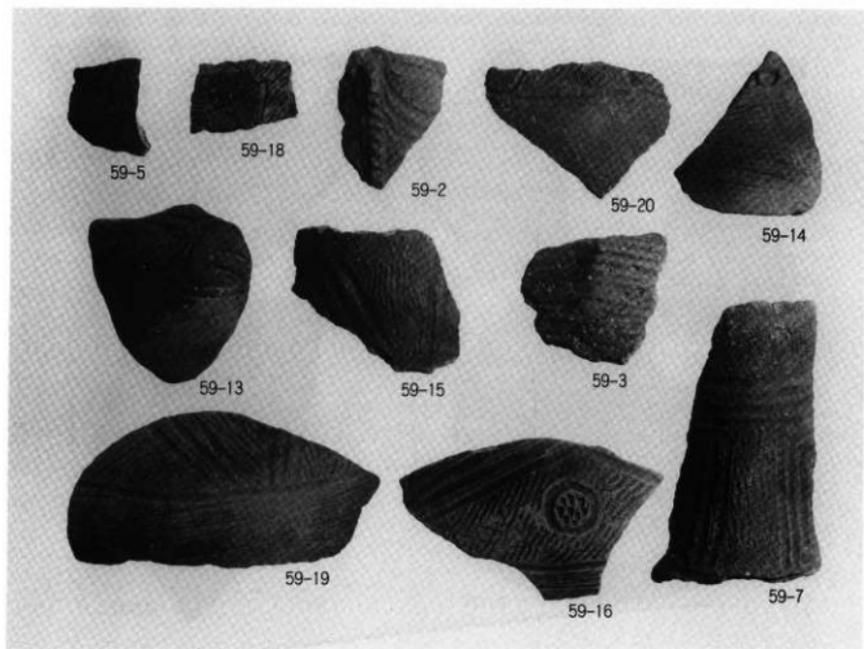
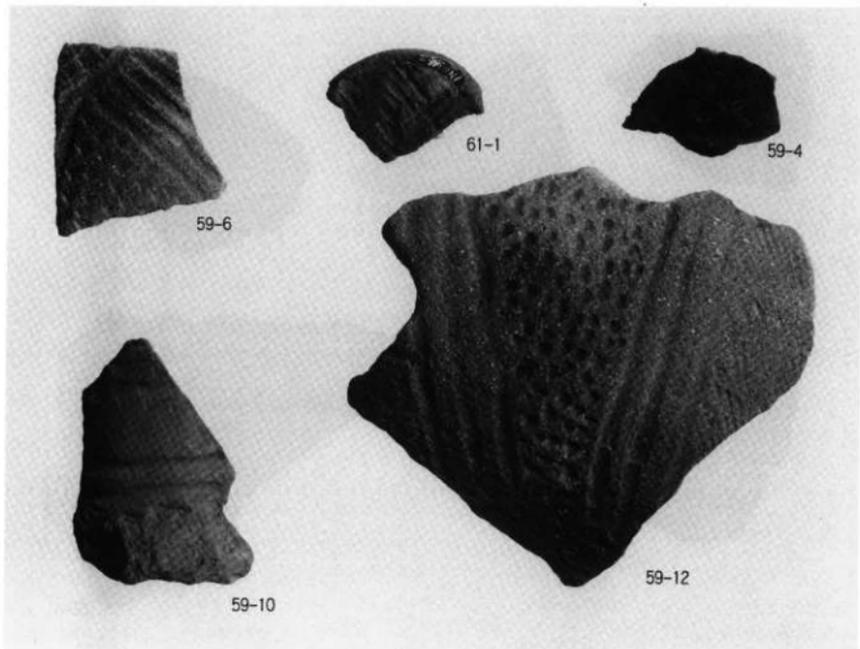
56-2



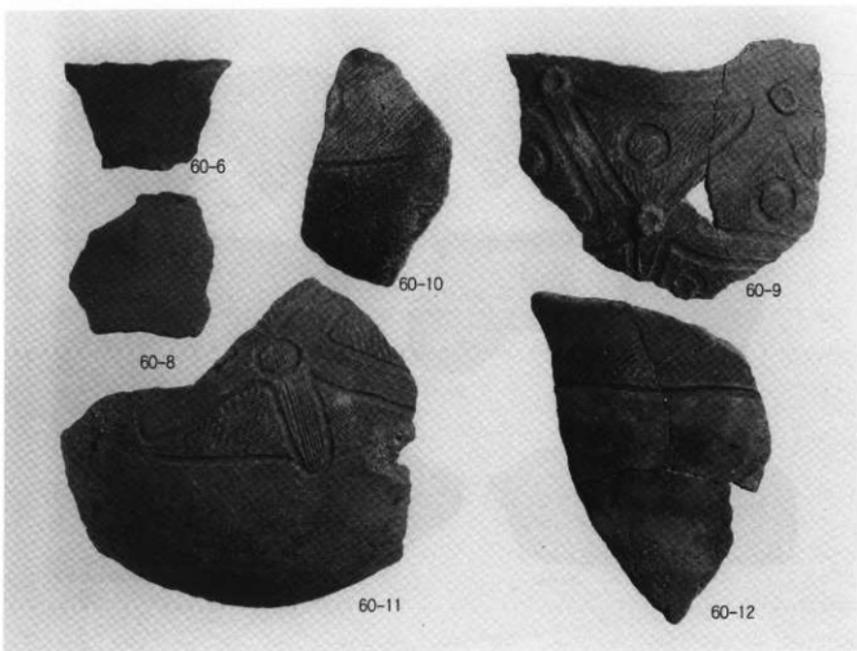
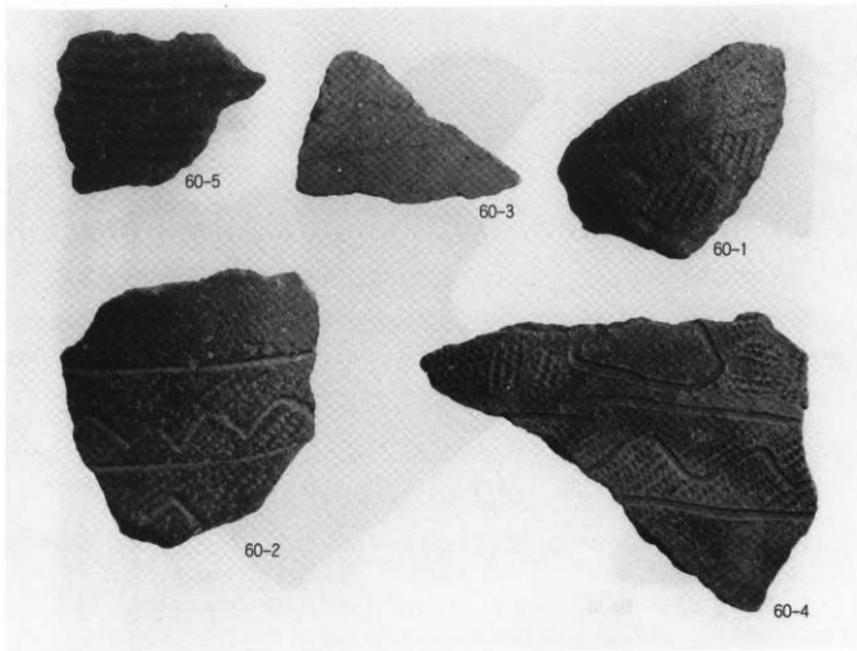
56-8



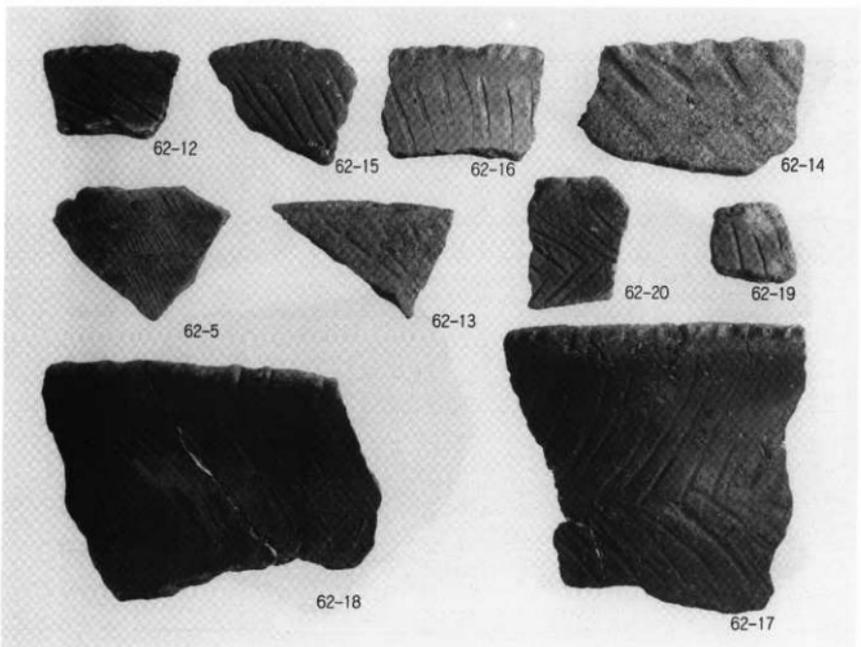
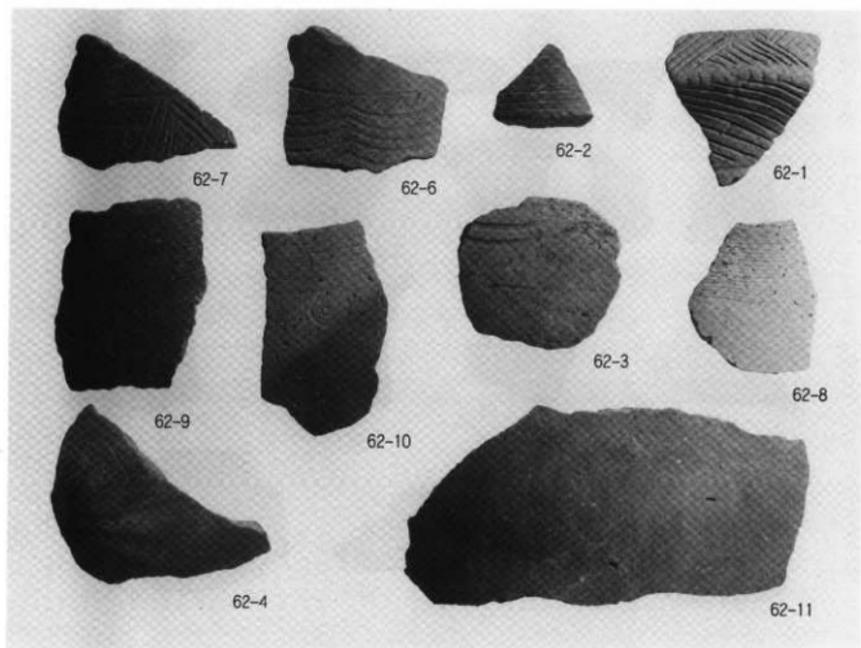
中手乱遺跡出土土器



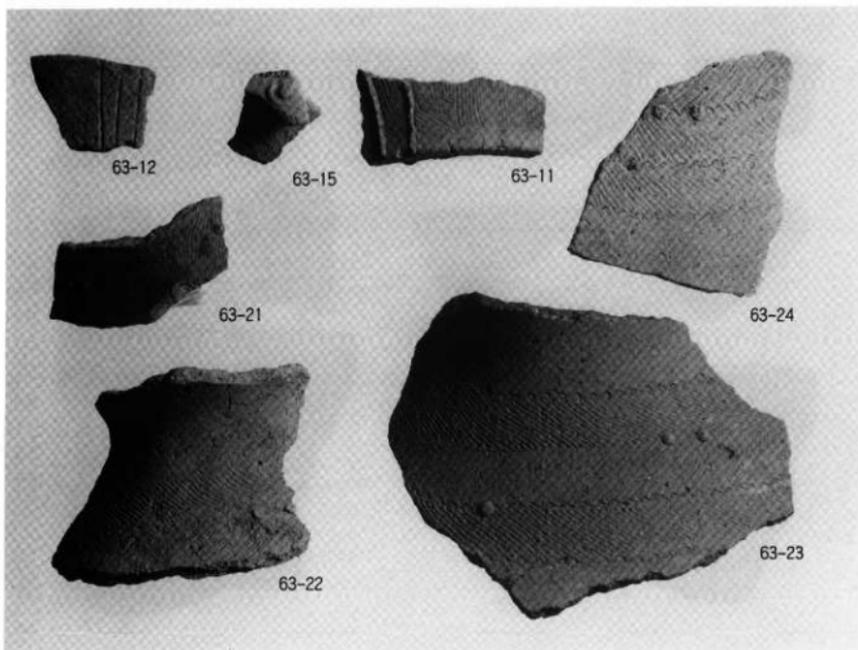
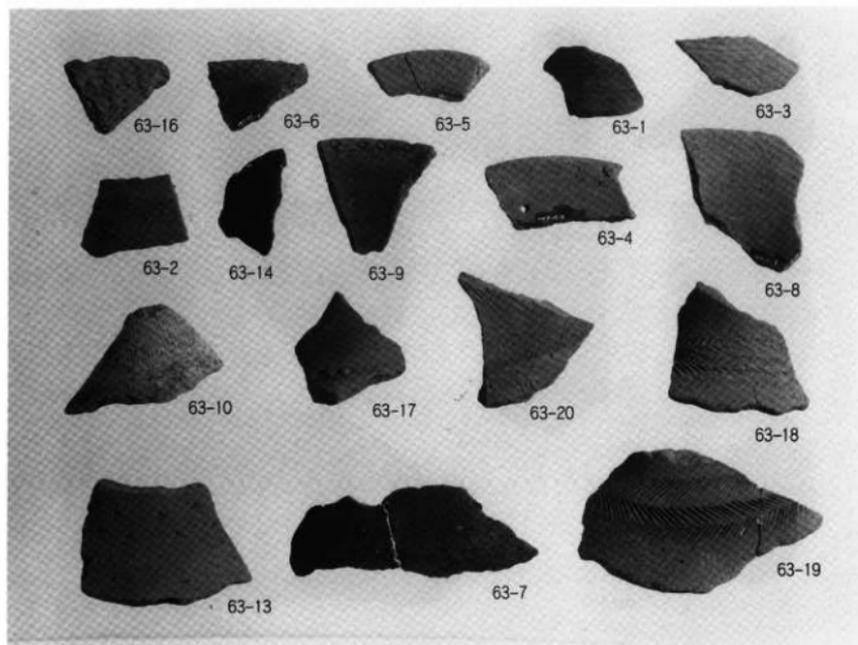
中手乱遭跡出土土器



中手乱遺跡出土土器



中手乱遺跡出土土器



中手乱遺跡出土土器



64-1



64-7



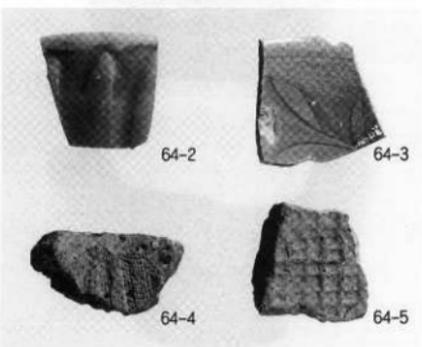
64-6



64-8



61-10

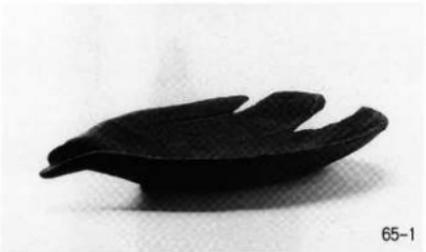


64-2

64-3

64-4

64-5



65-1



66-1



66-2



67-5



67-1



67-7



67-8



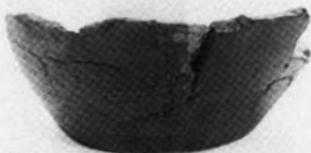
67-2



67-3



67-4



67-6



67-10



67-9



68-1



68-1



68-1



68-2



68-2



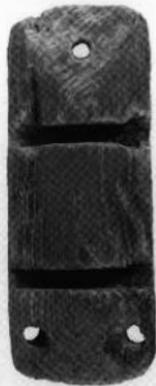
68-2



68-3

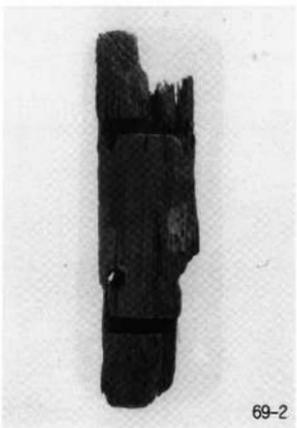
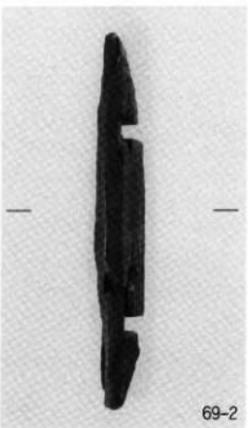
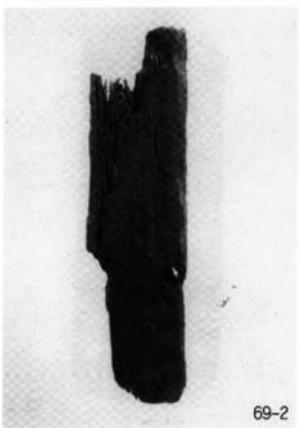
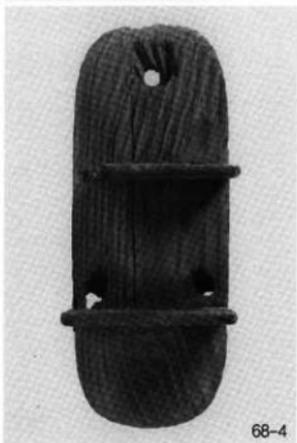
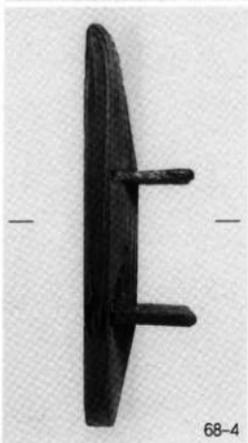
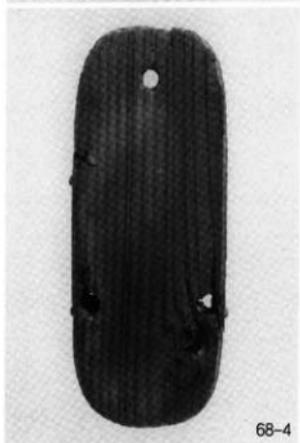
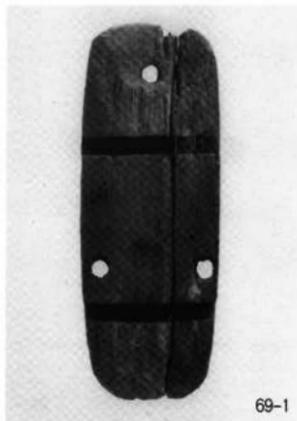
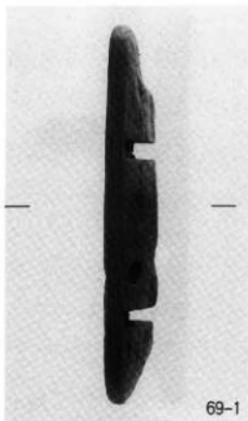
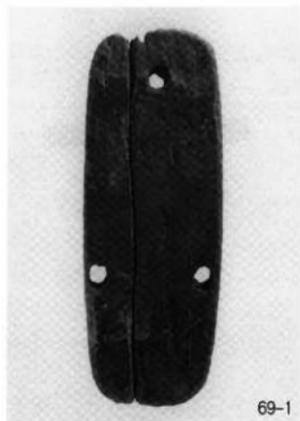


68-3

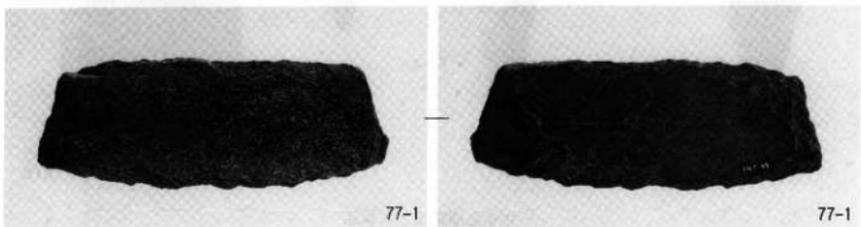
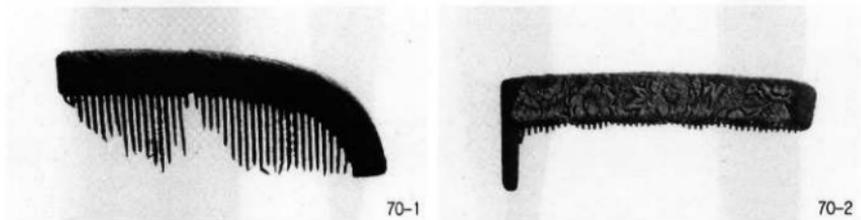
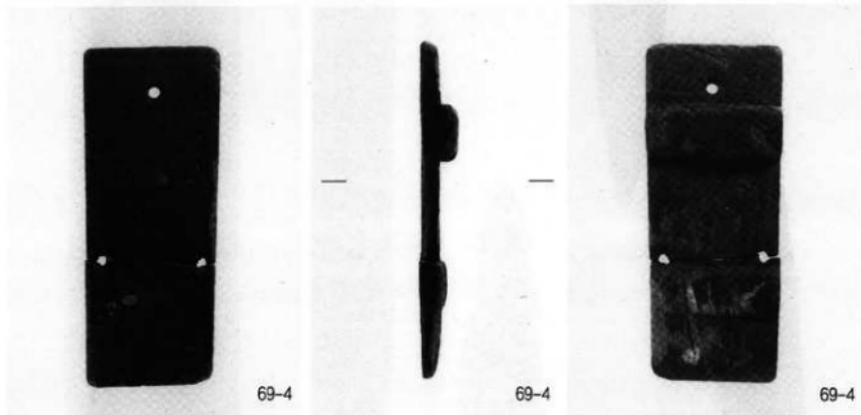
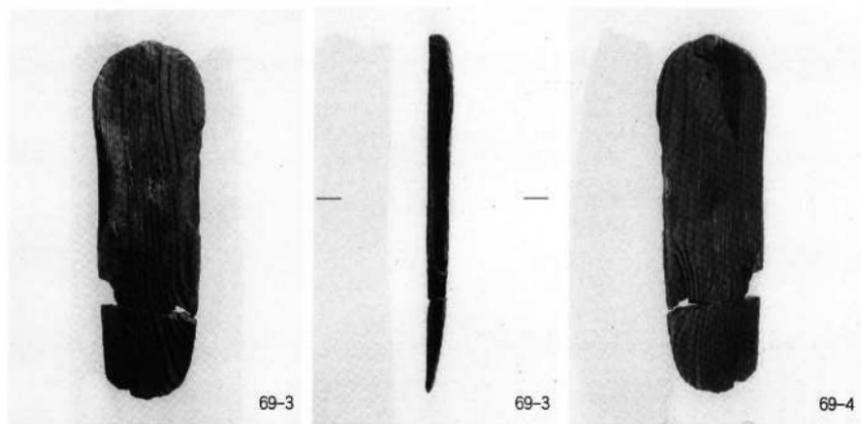


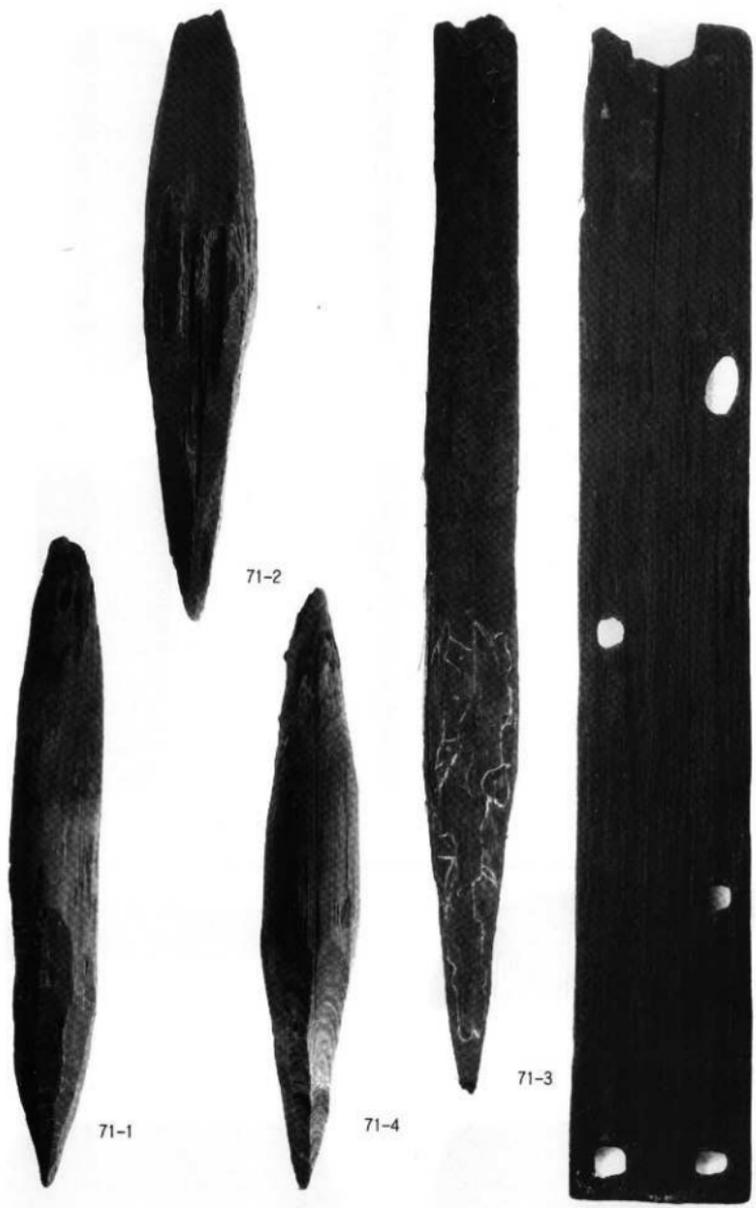
68-3

中手乱遺跡出土木製品



中手乱遺跡出土木製品





71-1

71-2

71-4

71-3

71-5

中手乱遺跡出土木製品



73-2



73-2



73-2



73-1



73-1



73-1



72-1



72-1



72-1

中手乱遺跡出土石器



75-2



75-2



75-2



75-1



75-1



75-1



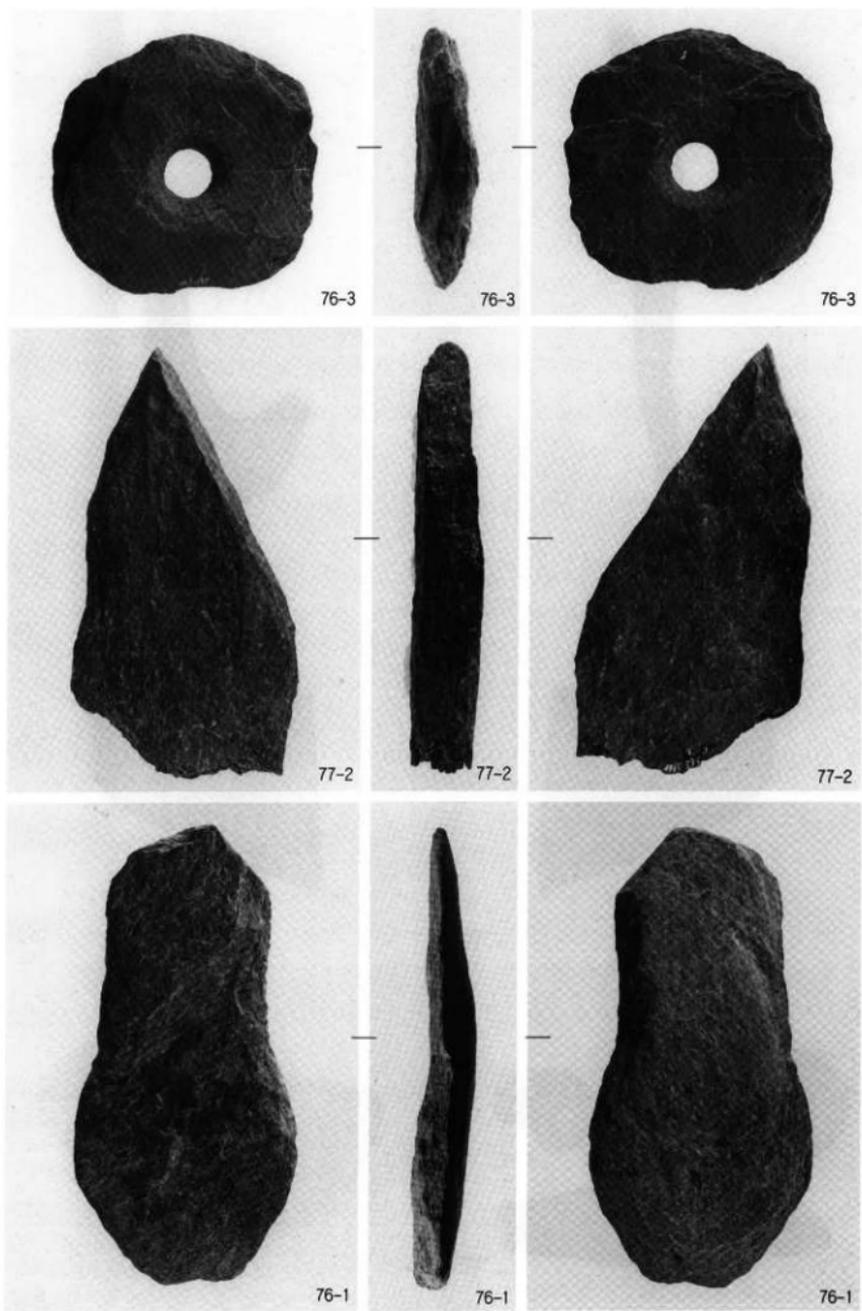
74-1



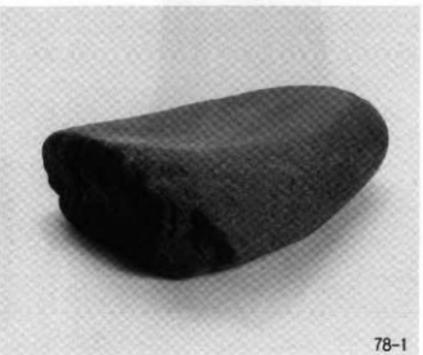
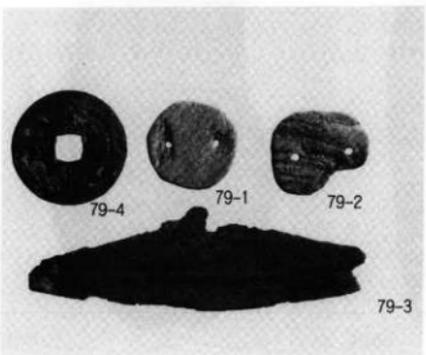
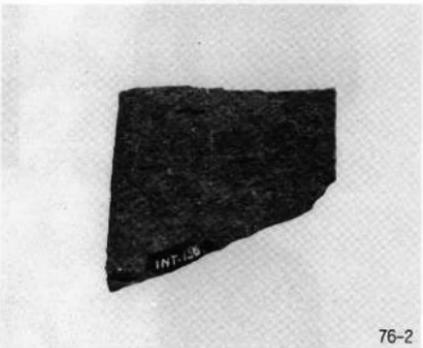
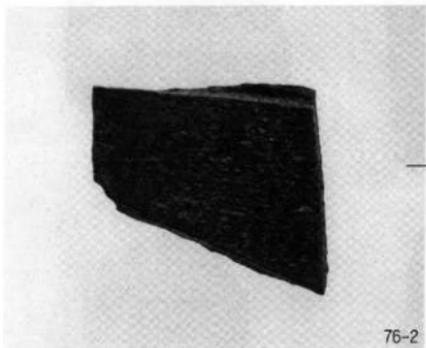
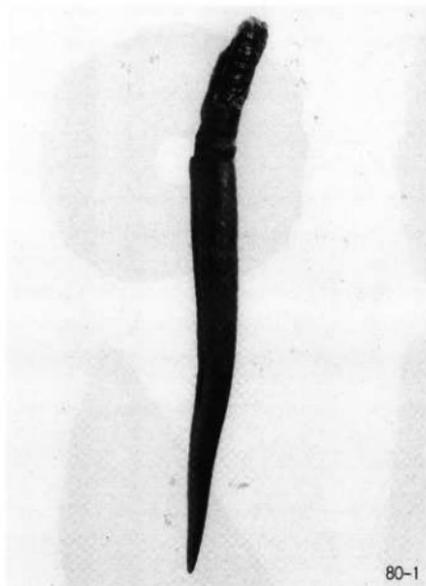
74-1

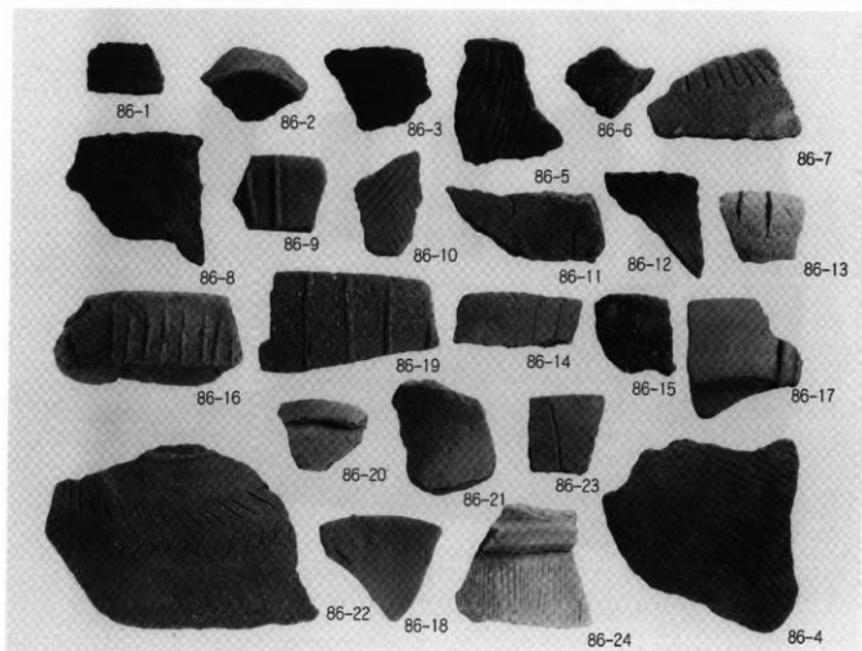
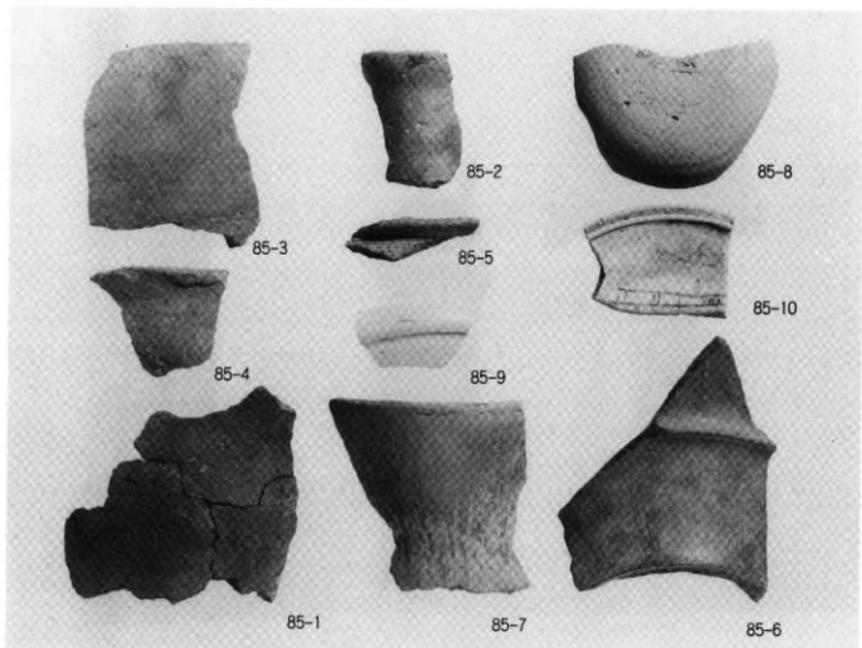


74-1

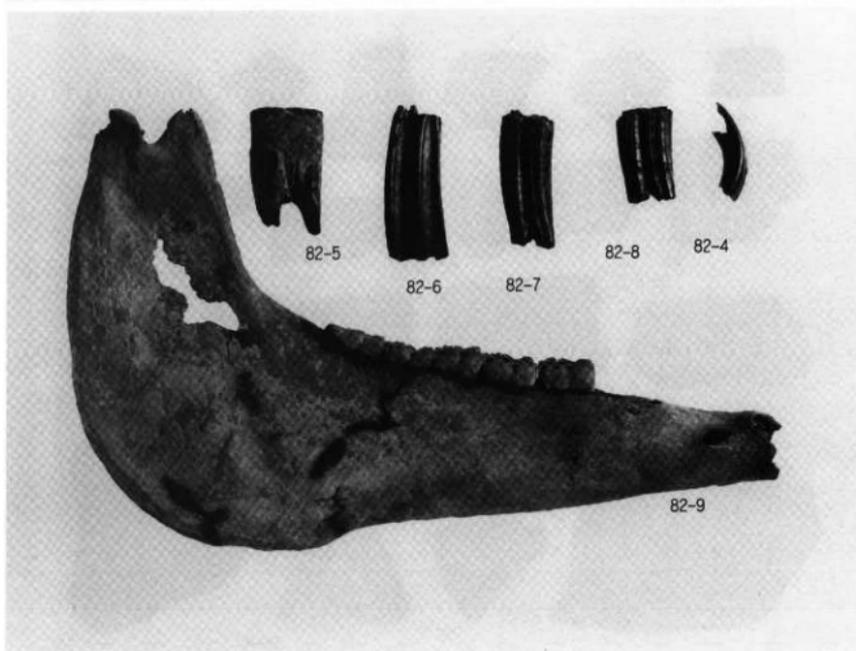
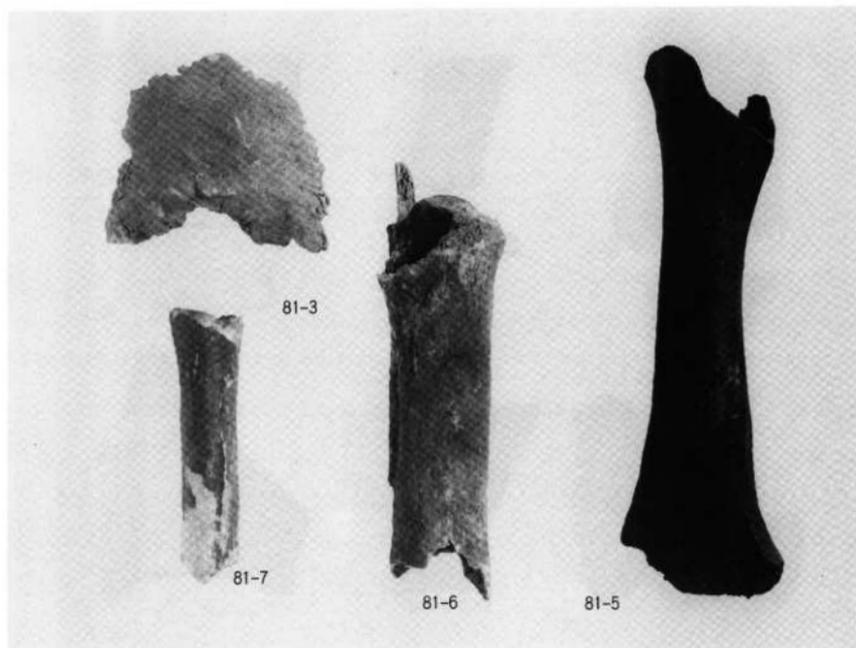


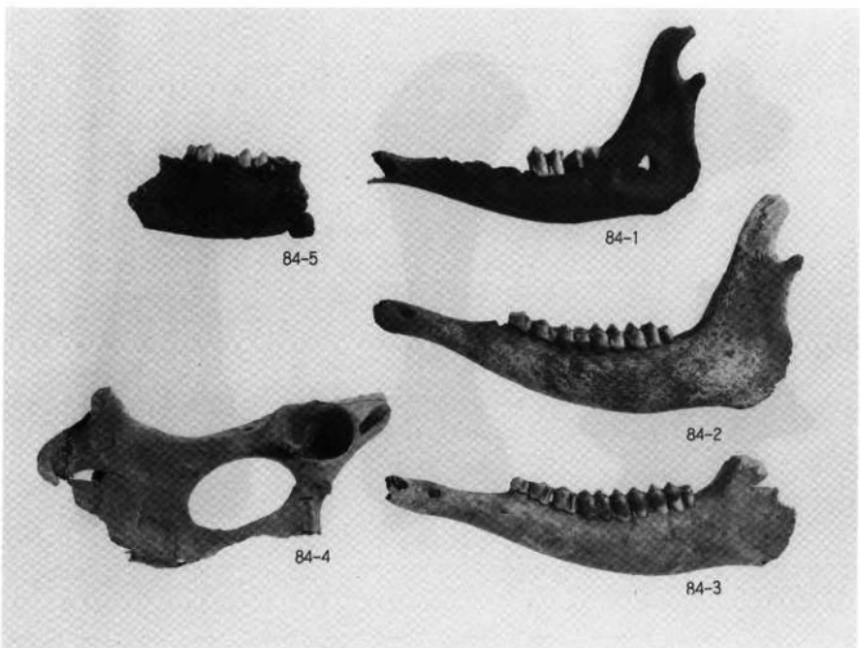
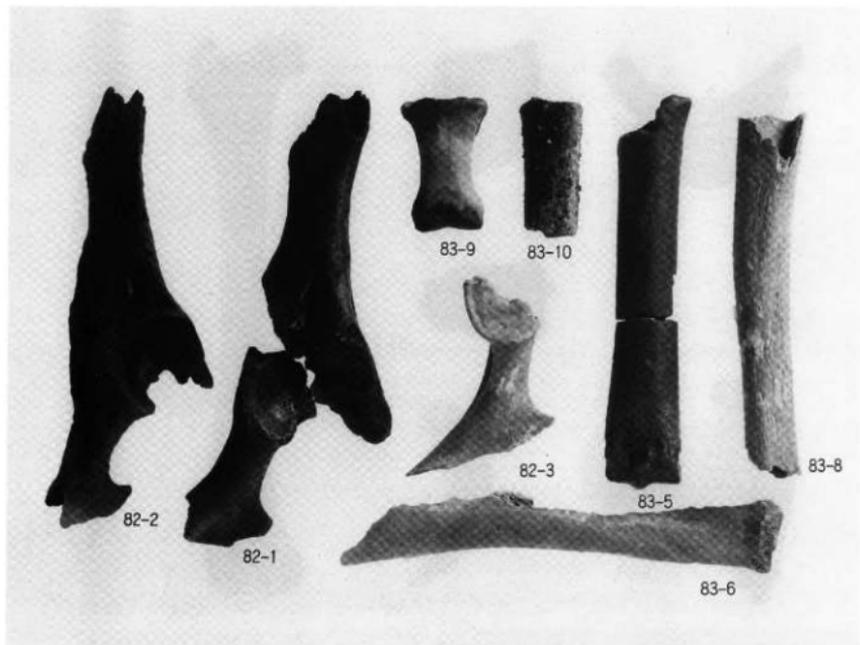
中手乱遺跡出土石器



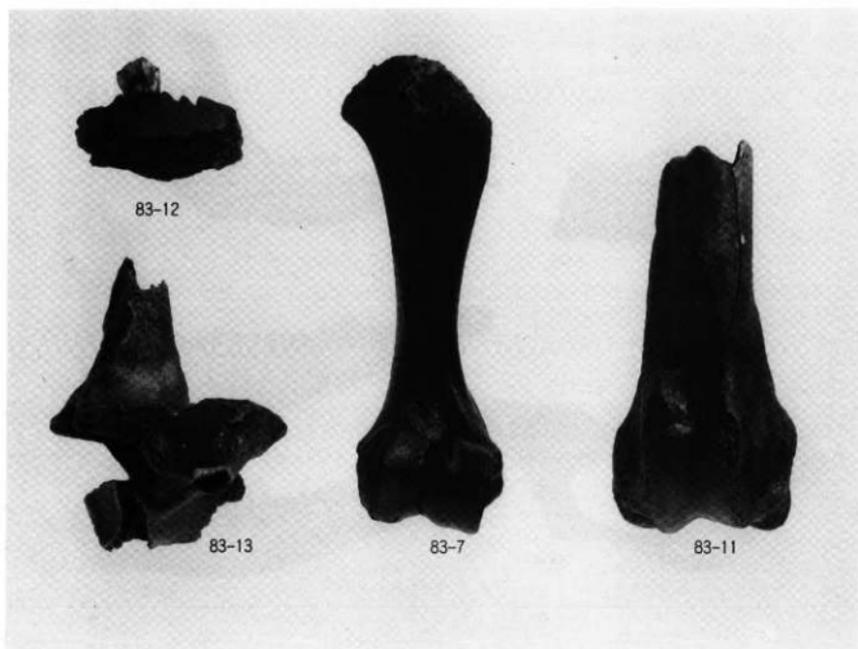
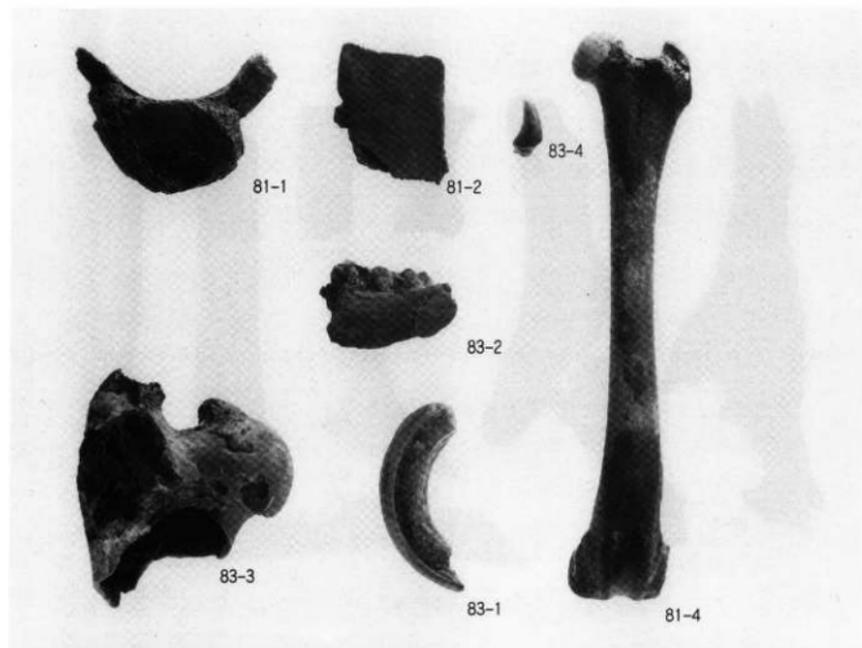


御殿川流域遺跡群包含層・表採出土器





御殿川流域遺跡群出土動物遺体



御殿川流域遺跡群（鶴喰広田・中手乱遺跡）

## 発掘調査・資料整理等関係者名簿

（平成7年度～平成9年度 敬称略 50音順）

### 普通作業員

金井徹、菊池茂、久保田親則、栗原計二、桑山隆光、小池秀俊、佐藤信弘、四條哲、鈴木秋夫、須田守男、瀬戸茂、芹沢操、高島敏孝、滝川弘、田村和夫、土屋福宣、土屋義春、福高孝、町田彦三郎、宮沢範雄、三輪建吾、山口尚、山口博規、山田隆造、渡辺喜久夫、渡辺武夫

### 軽作業員

稲葉澄枝、今井洋子、遠藤清子、岡林八重子、落合まつ子、落合ミツ、小野なつ、鬼沢幸江、黒瀬悦子、佐野美佐子、佐野ヤラ江、鈴木富士枝、芹沢志江、高木幸子、田口あや子、津々野詩織、利光真理、永坂松江、仲原エリカ、桒瀬うた子、姦妙洋子、福地幸子、松下千鶴子、溝口若菜、横島幸子、吉田こはる、渡辺三貴

### 整理作業員

井出香織、大川佳代子、金川純子、川口シゲ子、川渕由美子、柴田丰子、白井温子、杉村桂子、宅見寿美子、田村みどり、豊島智恵子、南條敏子、原田清子、平井豊子、峯松祥子、村川裕子、山下洋子、湯川由巳、和途美紀

ふりがな	ごてんがわりゅういさいせきぐん							
書名	御殿川流域遺跡群 IV							
副書名	一級河川御殿川河川改修に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告書							
シリーズ番号	第104集							
編著者名	佐野五十三・岩本 貴							
編集機関	静岡県埋蔵文化財調査研究所							
所在地	〒422-8002 静岡県静岡市谷田23-20				TEL. 054-262-4261 (代)			
発行年月日	西暦 1996年 3月 31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 °	東経 °	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
つるはみひろた 鶴喰広田遺跡	しずおかけん 静岡県 みしましつるはみ 三島市鶴喰及 なか び中地先	22206	—	35度	138度	19951001～ 19960630	2158㎡	一級河川御殿川 河川改修工事
				6分	55分	19961001～ 19970331		
なてみだれ 中手乱遺跡			—	2秒	52秒			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
鶴喰広田遺跡	河川跡	弥生 ～ 近世		弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、瓦 打製石斧（石鏃）磨製石斧、戴石、磨石 土師、土製品、漆椀、唐傘の柄 下駄、箸状木製品、櫛、曲物、柄杓、明物 杓子、杭 動物依存体（馬等） 種子（粒核等） 銅鏃、指輪、和鏡、燈管、錢貨（寛永通 宝）、鉄刀、釘、鉛玉 磨石、礫石			無冬御藏 和鏡（蓬萊鏡） 中国製皿 初階須恵器	
中手乱遺跡	河川跡	弥生 ～ 近世		縄紋土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦 陶磁器、打製石斧（石鏃、環状石斧） 漆器、 有孔円板  鹿角製品類動物依存体（馬、鹿他）			弥生時代中期鹿形 土器内に鹿角製短 剣を収納  完形に近い鹿 環状石斧 初階須恵器	

御殿川流域遺跡群Ⅳ

平成7・8年度一級河川御殿川小規模河川改修工事に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

平成10年3月31日

編集発行 財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

印刷所 図書印刷株式会社

住所 静岡市南町6-1 南町第一ビル

TEL 054-283-7611代